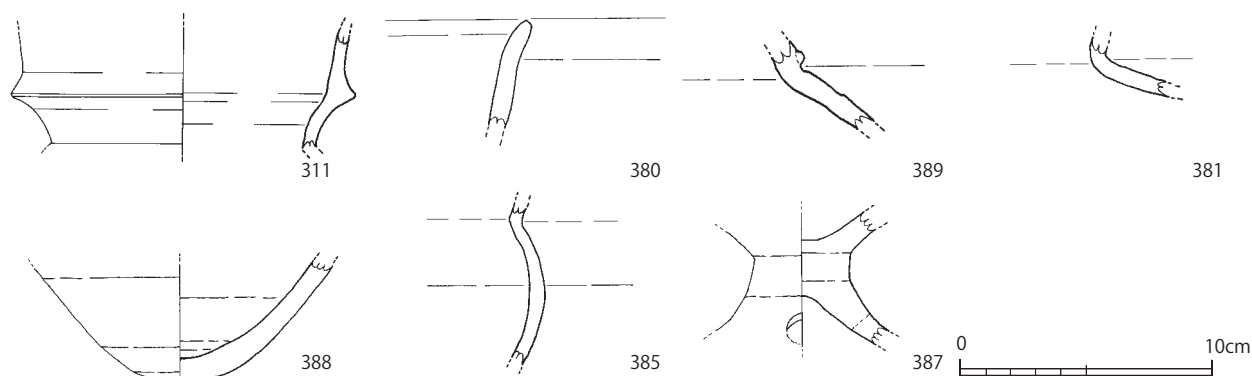


第 17 図 SD011 遺構・遺物実測図 (1/80・1/3)



第 18 図 包含層遺物実測図 (1/3)

第 3 節 小 結

第 2 地点は弥生時代の土坑 2 基、古代以前の掘立柱建物跡 2 棟以上、溝跡 1 条などを確認した。掘立柱建物跡に関しては、調査区東側にもまとまって検出している箇所があり、調査区外にかけて、掘立柱建物跡や柵跡などを構成する可能性がある。弥生時代に関しては、東 200 m 箇所に第 1 地点があり、ここで弥生時代の溝跡などが検出されている。当調査区検出の土坑と時期的に大差ないと考えられ、さらに周辺部に弥生時代後期～終末にかけての集落跡の存在を期待させる。また一方で、古代以前の掘立柱建物跡 2 棟以上が確認できた。時期の課題が残った。



第 2 地点表土剥ぎ風景

第5章 第4地点の調査

第1節 調査の内容

第4調査地点は、丹生川西岸に位置し、大字「丹川」字「福寿庵」にあたる。調査区は第2調査地点の70 m 西に位置している。調査面積は約 3000 m²である。調査地点の現況は水田である。丹生川の河岸段丘上に位置しており、調査区の後背地は丘陵で、前面は条里跡が残る水田が展開している。遺構検出レベルは 17 ～ 18 m で、丘陵が迫っている調査区西側から東側に向かって、緩やかに下がっている。また調査区の北には東西に延びる開析谷に近接しており、試掘調査の結果から、自然流路跡が広がっていることが推定されるため、遺構の広がりは北側には展開しない。検出した遺構と時代は、古墳・古代・中世・近世である。第 44 図に示すように中世の包含層・整地層が厚く堆積（灰色粘質土）しており、その層を除去すると古代・古墳時代の遺構が検出できた。ただし、調査区の南側にあたる 11 ～ 17 区に関しては、中世の包含層が厚く堆積していることから、中世以前の時代の遺構は保存が可能であり、調査対象から外した。遺跡は古代・中世が主体であり、遺構密度は高く、切り合い関係を持つ遺構が多い。近世は調査区東側に南北に延びる溝跡と石敷き遺構、また掘立柱建物跡が 1 棟確認できた。この調査区がある小字「福寿庵」は中世の時代、大恵寺の塔頭であった可能性が高い。大恵寺は大友氏 11 代当主であった大友親著の菩提寺であり、大恵寺本体は現存しないが、字名「大恵寺」が大字丹川の丹生川東岸に残っており、付近の住人から寺が存在したとされる伝承を聞き、小字「大恵寺」に大恵寺が存在した可能性はあろう。

第2節 遺構と遺物

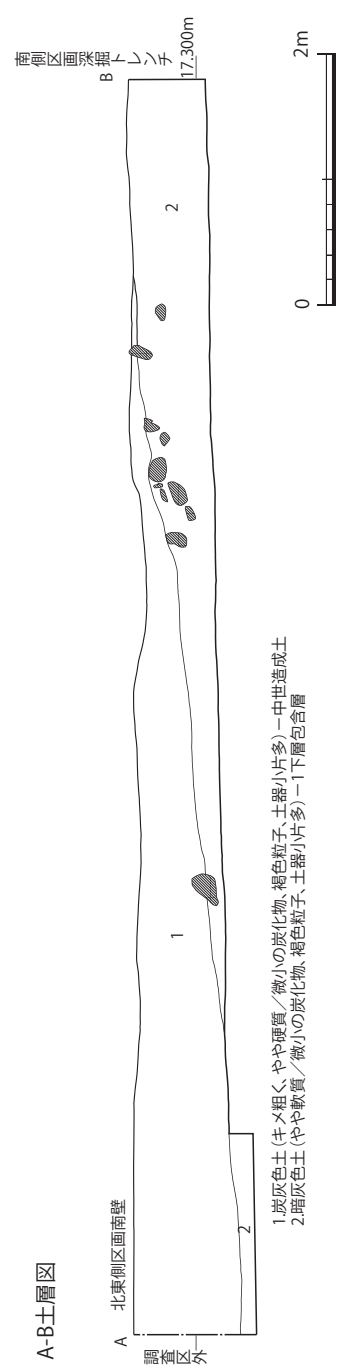
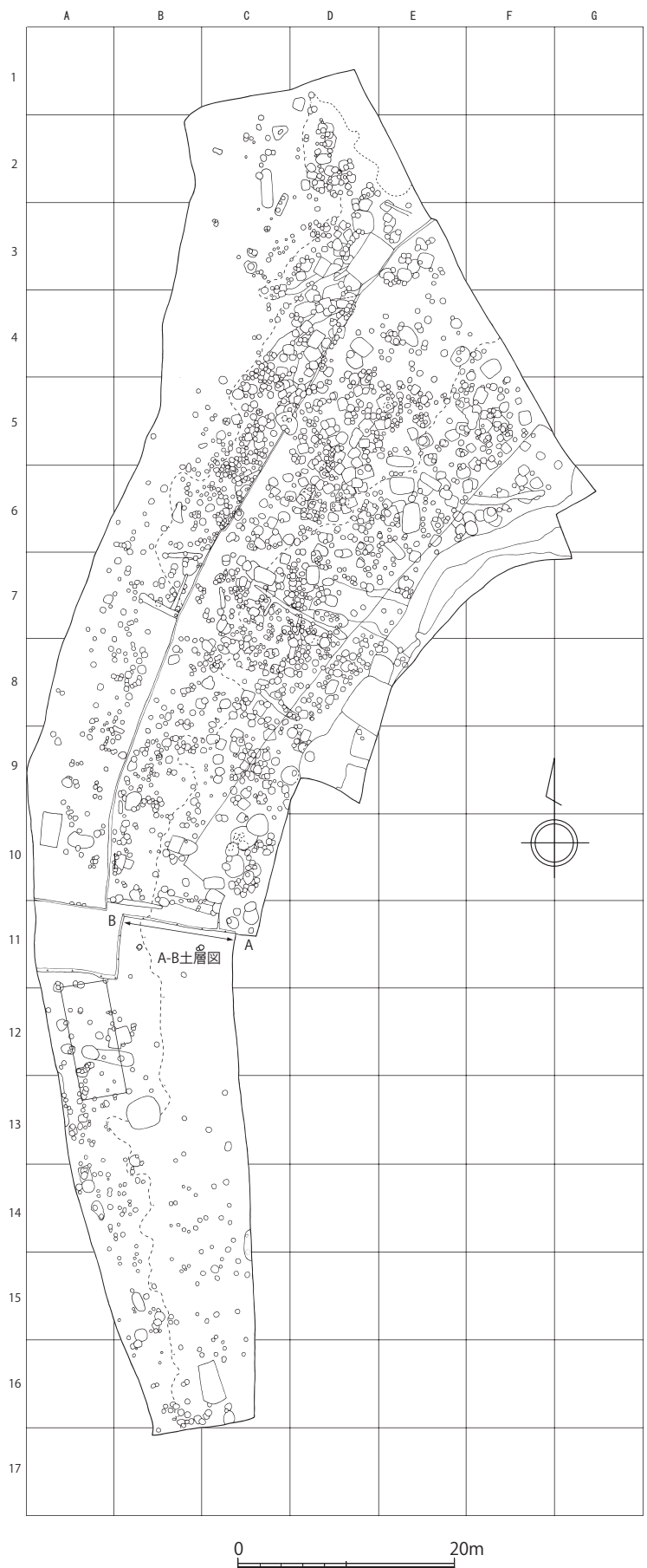
(1) 概 要

第4調査地点は、古墳時代の竪穴建物跡 2 基・ピット数基、古代の掘立柱建物跡 23 棟・柱穴列 3 列・土坑 5 基・ピット・溝跡、中世は掘立柱建物跡 29 棟・土坑 12 基・ピット・溝跡、近世は掘立柱建物跡 1 棟・溝跡・石敷き施設などを主体に検出した。基本層序（第 44 図）は主に 2 層で、最上層は水田耕作土、その下に中世の造成土、さらにその下部に数センチほどの古代の包含層が確認できた。中世の造成土は調査区の東側 2/3 ほどに展開している。中世造成土を除去すると古代の包含層および遺構が検出できた。

ここからは古墳時代の遺構から、古代、中世、近世の順番に詳細について述べていき、包含層出土遺物などは最後にまとめた。

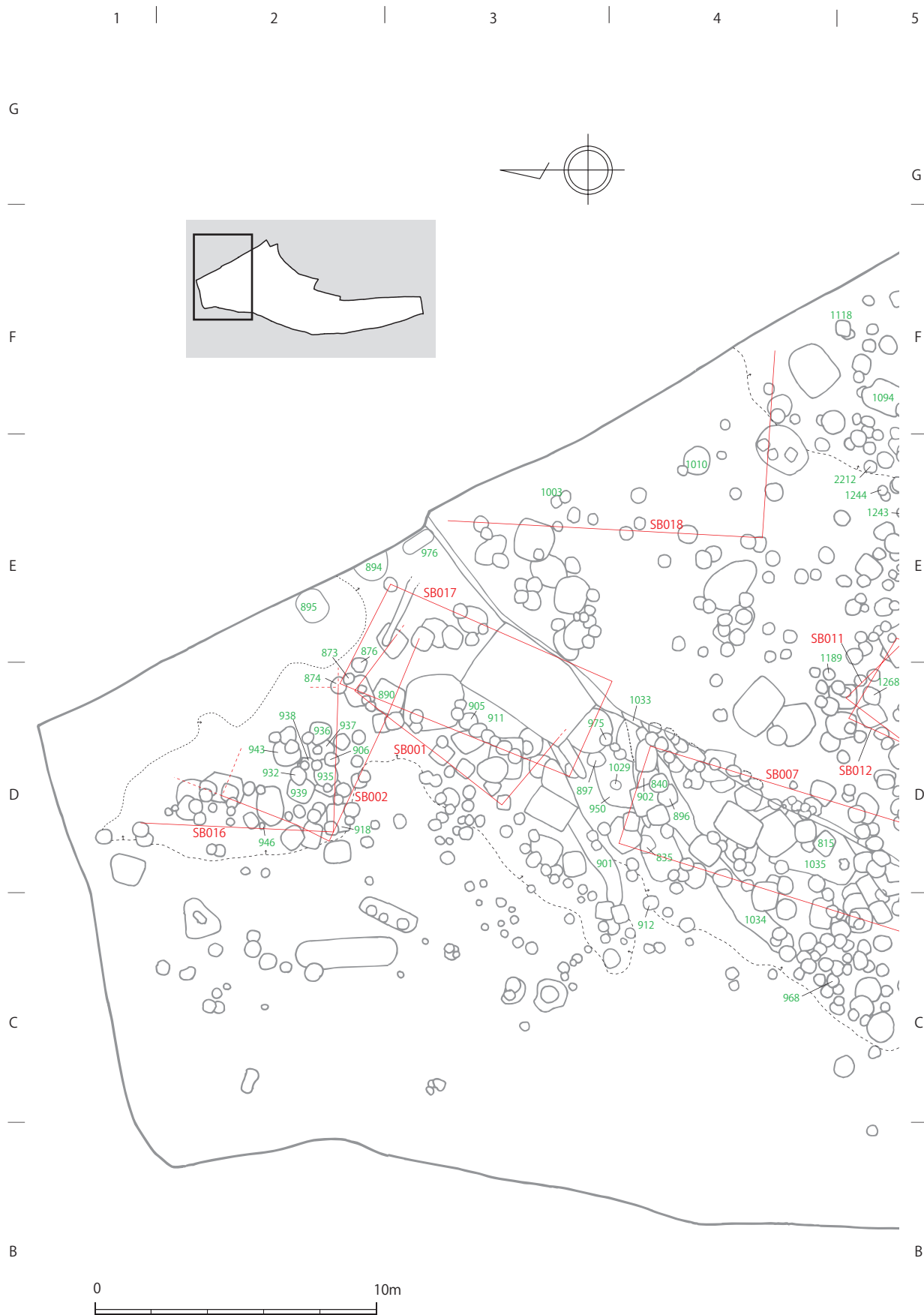


第 43 図 第4地点 (NSJ-4) 周辺図 (1/2500)

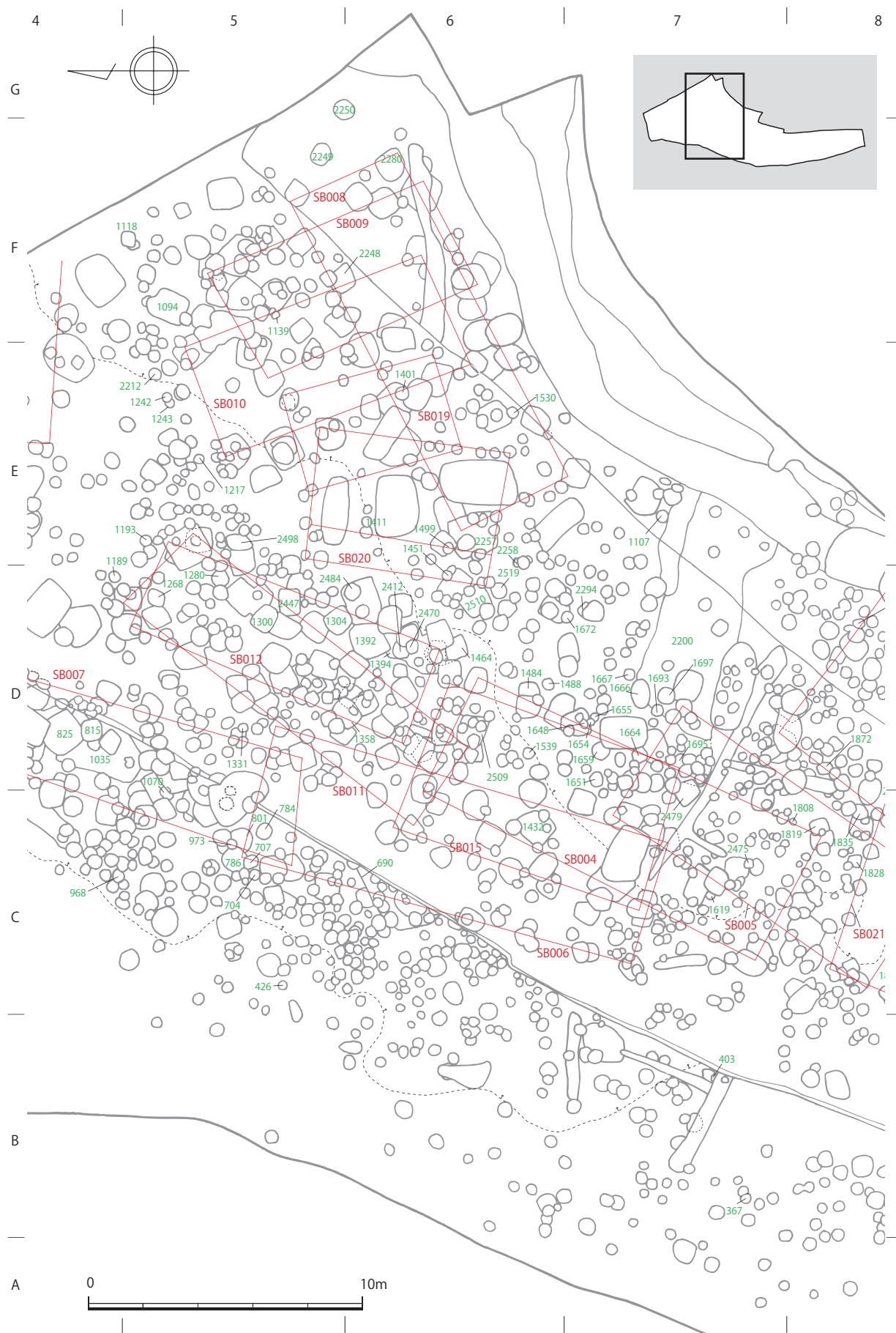


※図中の……波線から東側は
中世の造成土の範囲を示す。

第44図 第4地点 遺構配置図 (1/600) と基本層序 (1/60)



第45図 第4地点 古墳～古代遺構配置図① (1/200)



第 46 図 第 4 地点 古墳～古代遺構配置図② (1/200)

7

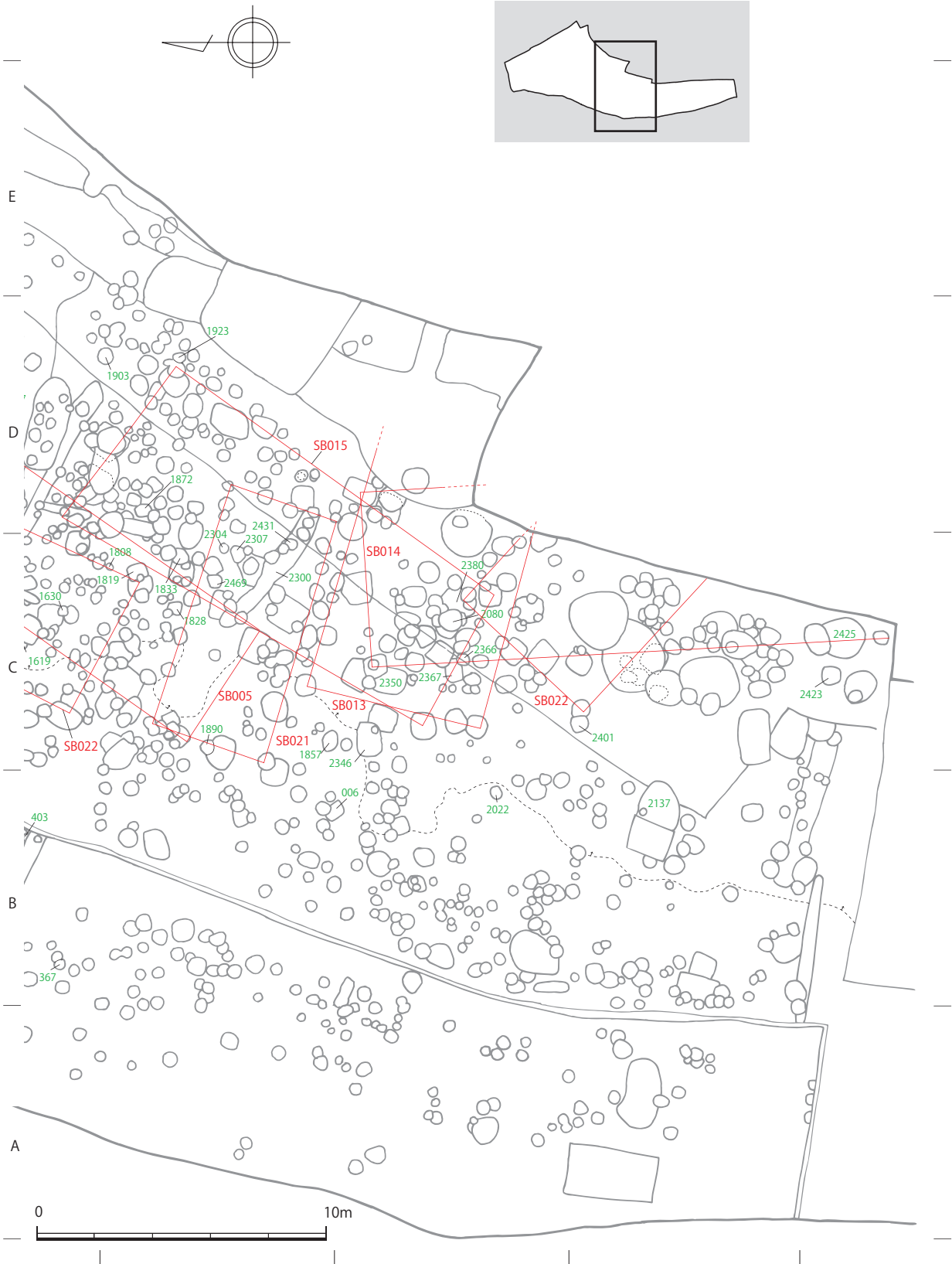
8

9

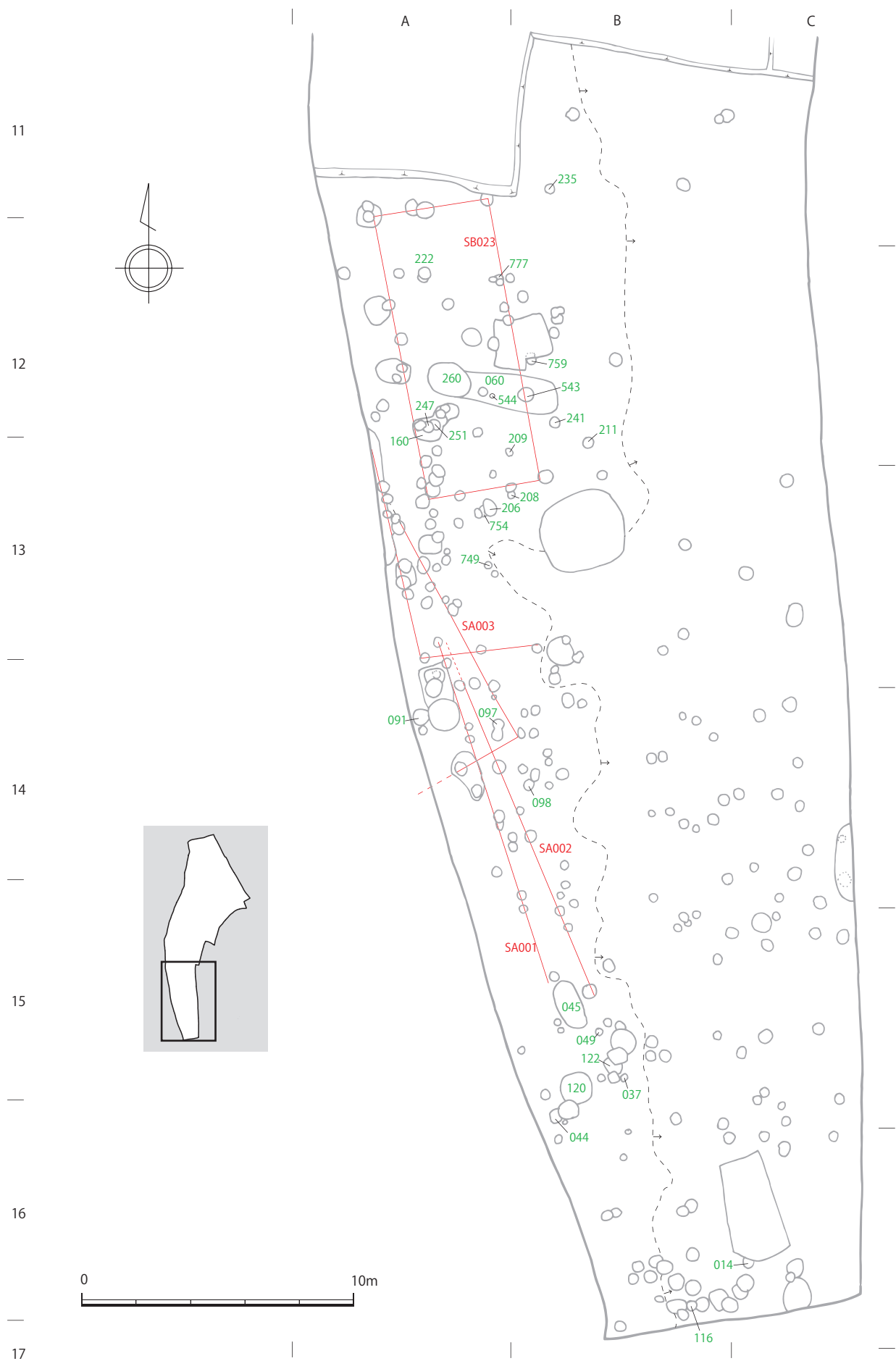
10

11

F



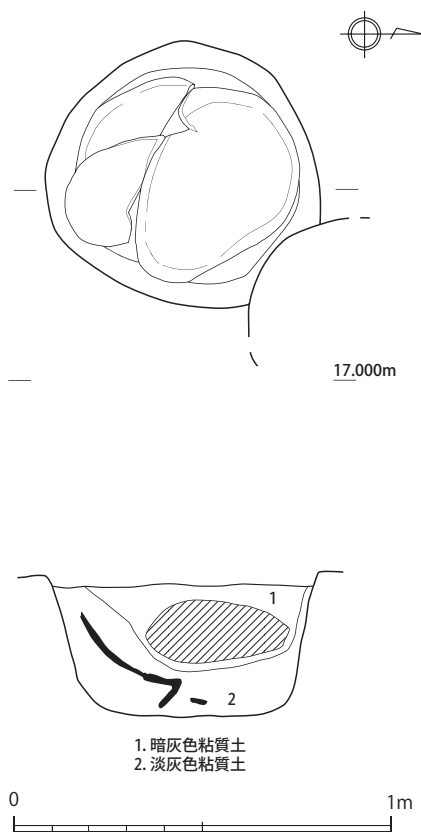
第 47 図 第 4 地点 古墳～古代遺構配置図③ (1/200)



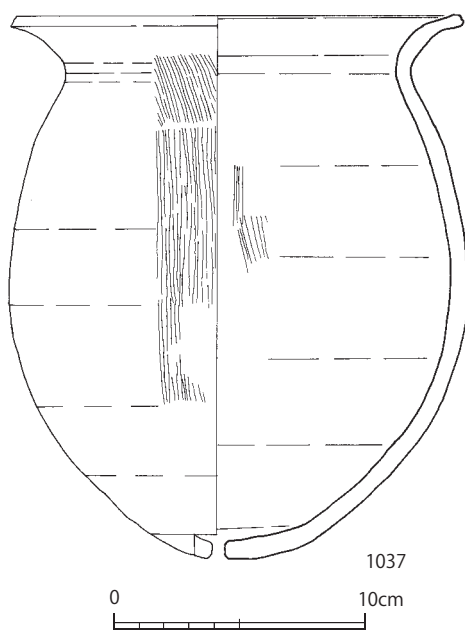
第 48 図 第 4 地点 古墳～古代遺構配置図④ (1/200)

(2) 古 墳 時 代

古墳時代はピット、土坑、竪穴建物跡2基を検出した。特に土坑では丹が詰まった埋め甕の遺構を検出している。古墳時代の遺構は古代・中世の検出遺構量からするとかなり少ないが、ピット単独の検出などを考えると周辺に竪穴建物跡などが展開していた可能性はあるだろう。古代・中世の土地改良で削られたことが考えられる。また古墳時代前期の遺構がほとんどであるため、当調査区の周辺に展開している野間古墳群との関連も興味深い。



第 49 図 SP2519 遺構実測図 (1/20)



第 50 図 SP2519 出土遺物実測図 (1/3)

イ. ピット (SP)

ピットは1基確認した。しかしながら、古墳時代の遺物しか出土しないピットも周辺に少し展開しているようで、古墳時代に帰属できるピットも中にはあると考える。

SP2519(第49図)

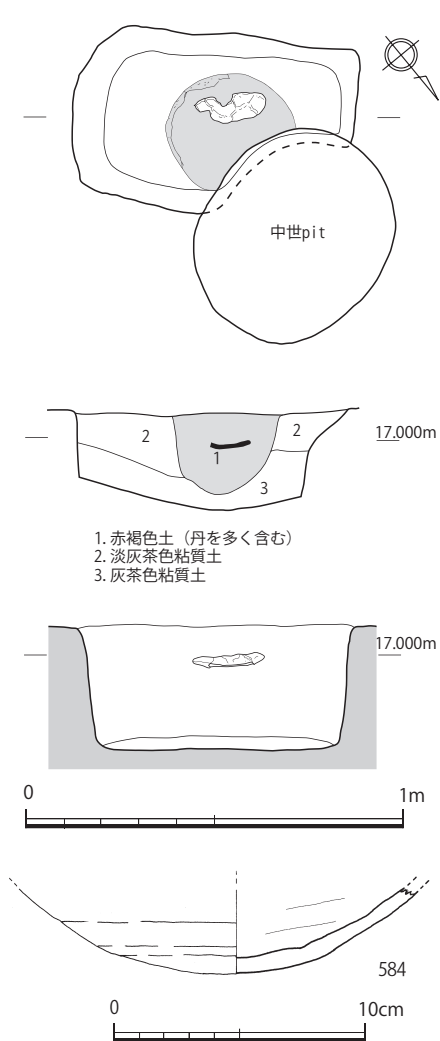
遺構はD-6区で検出した。切り合い関係はSP1469に切られる。平面プランは楕円形を呈し、規模は東西軸0.73m、南北軸0.7m、最大深0.4mを計る。埋土は、暗灰色粘質土、淡灰色粘質土である。出土状況は土師器甕をピットの最下部に置き、その上から人頭大の石が出土した。遺物(第50図)は土師器の甕1点出土した。1037は底部は丸みをもち、胴部は丸みを持ちながら、中央付近で最大径がくる。口縁部は頸部より大きく外反する。器面調整は外面は縦方向の刷毛目で調整し、内面はナデ及び若干の刷毛目調整をしている。さらに底部には1つ穿孔を確認している。この穿孔の存在と出土状況から、この遺構は何らかの祭祀を行った関連のあるものと推定される。

ロ. 土 坑 (SK)

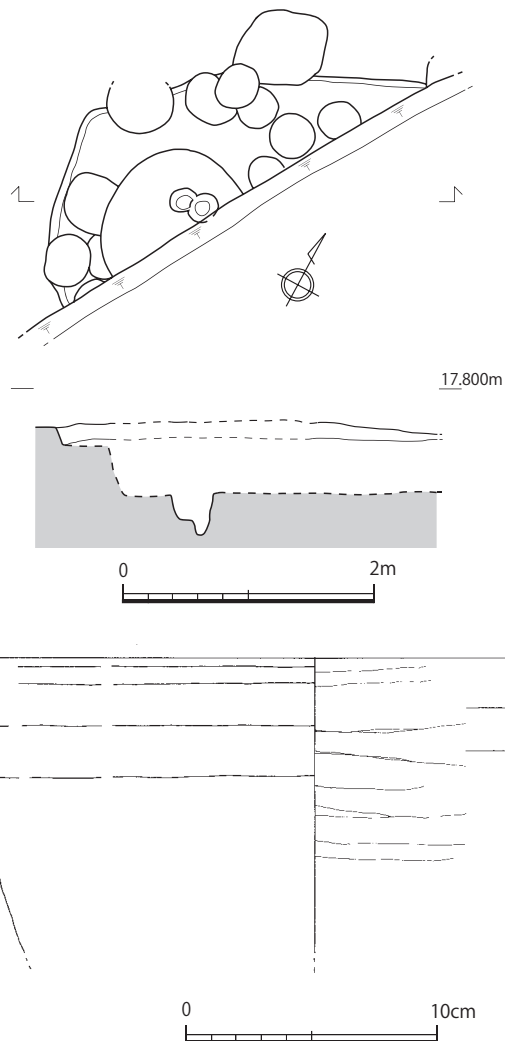
土坑は1基確認した。

SK006(第51図)

遺構はB-8・9区で検出した。切り合い関係は中世のピットSP1783に土坑の北側を切られている。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸0.75m、短軸0.5m、最大深0.28mを計る。埋土は2層確認でき、2層から1層が切り込んでいる。1層の土色は赤褐色を呈している。また1層からは土師器甕片と底部が出土している。出土状況からすると長方形に掘り込んだあと、甕を正位置に置き、甕を安定させるための土を周りに入れている。甕内部には赤色顔料である「丹」を入れていた。遺物(第51図)は土師器甕が1点出土した。584は土師器甕の底部である。丸みをおび、外面はナデ調整、内面には一部、工具痕が確認できるが、丹が内面全体についており、調整は不明な点がある。丹に関しては分析をしている。(第19章分析結果を参照)



第 51 図 SK006 遺構・出土遺物
実測図 (1/20・1/3)



第 52 図 SH690 遺構・出土遺物
実測図 (1/60・1/3)

ハ. 竪穴建物跡 (SH)

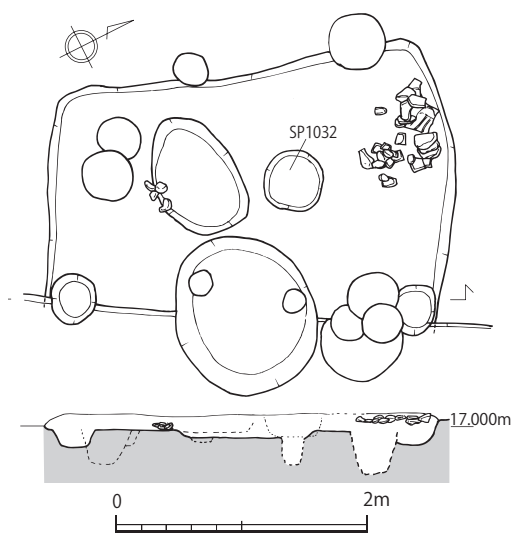
竪穴建物跡は 2 基確認した。ただし、前述したとおり、古墳時代に帰属できるピットが周辺にあることが考えられるので、竪穴建物跡は周辺に数基存在した可能性がある。

SH690(第 52 図)

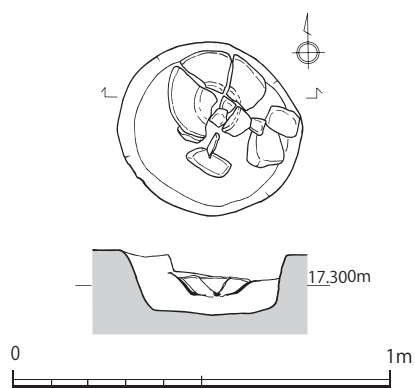
遺構は C-6 区で検出した。古代と中世のピットに多く切られており、東側は現代の水田の境界で段差を設けており、削られている。平面プランは方形もしくは長方形を呈していると推定され、確認できる規模は $1.4 + \alpha$ m、 $2.5 + \alpha$ m、最大深 0.15 m を計る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物 (第 52 図) は土師器の鉢片が出土したのみである。555 は胴部がやや外側に開きながら直線的にのびる。調整は内面の上部に横方向の工具痕が確認できた。

SH1035(第 53 図)

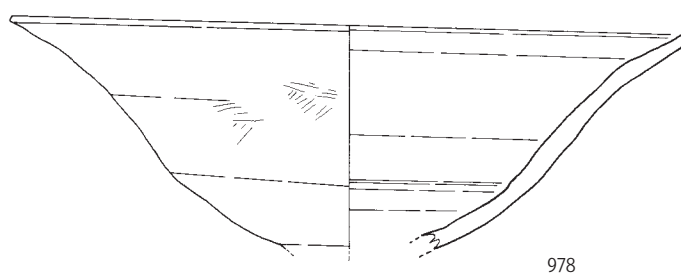
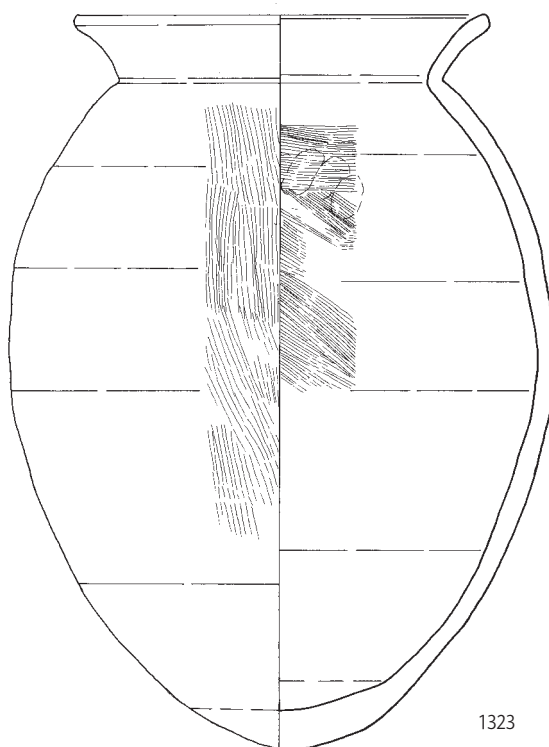
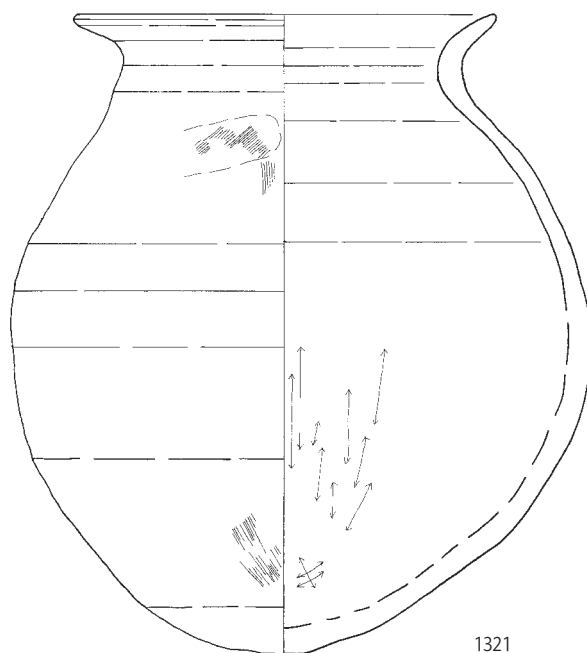
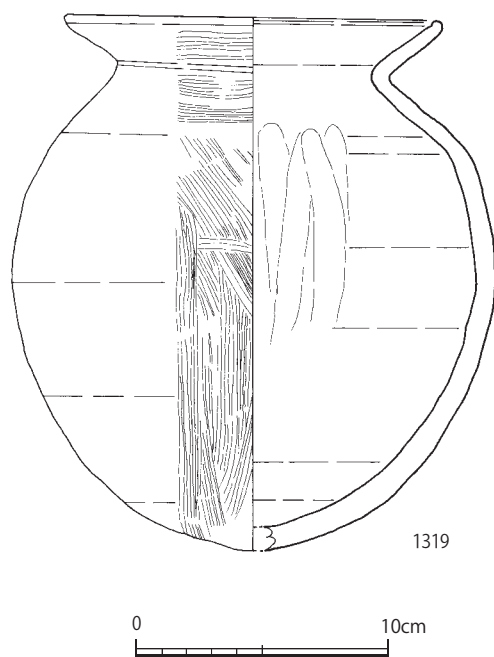
遺構は D-4 区で検出した。切り合い関係は古代と中世ピット数個に切られている。平面プランは方形もしくは長方形を呈していると推定されるが、遺構の東側をのちの造成により削られている。規模は南北方向の軸が 3.5 m、東西方向の軸が $2.2 + \alpha$ m、最大深 0.2 m を計る。埋土は暗褐色粘質土である。主柱穴は現状で確認できる遺構の東側の南と北に 2 個確認できた。2 本柱か。土坑は屋内土坑が 2 基と高坏の坏部を埋置していた SP1032(第 54 図) が確認できた。遺物 (第 55 図) は土師器甕 3 点、高坏が 1 点出土した。1321 は底部から胴部にかけて丸みをもち、口縁部は外反する。調整は外面刷毛目とナデ調整で、内面はナデ・ヘラケズリ調整である。1323 は底部は丸みをもち、胴部の器高は高い。口縁部は頸部からシャープに屈曲し外反する。内外面とも刷毛



第 53 図 SH1035 遺構実測図 (1/60)



第 54 図 SP1032 遺構実測図 (1/20)



第 55 図 SH1035 出土遺物実測図 (1/3)

目調整である。1319 は底部から胴部にかけて丸みをもち、頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部を上方に若干つまみ上げている。調整は口縁部付近の外面は横方向刷毛目調整で、胴部から底部は縦方向刷毛目である。内面は縦方向のナデ調整である。978 は SP1032 の出土で、高坏の坏部である。外反しながらのび、口縁部付近でさらに外反する。ほとんどはナデ調整で、外面に若干の刷毛目が残る。

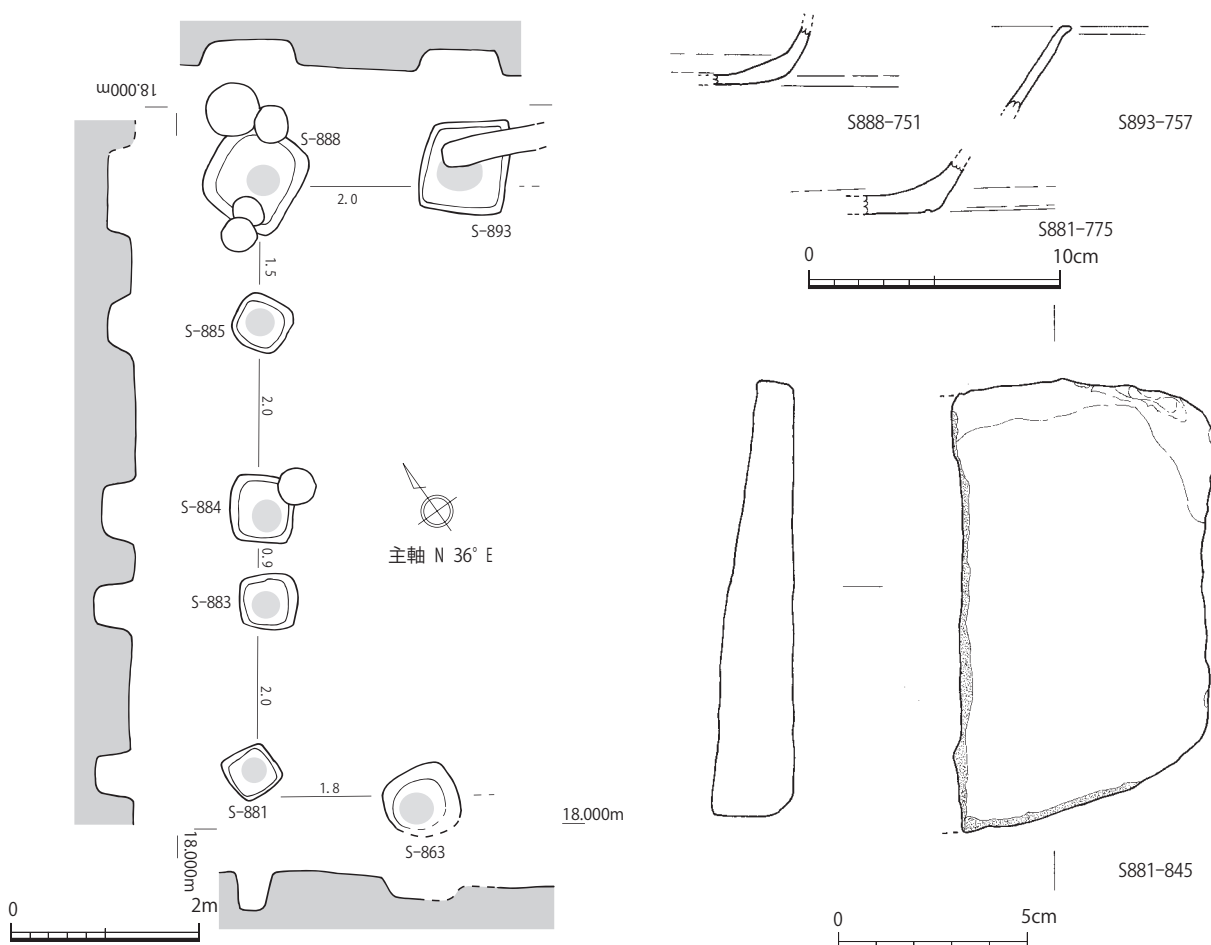
(3) 古代(奈良・平安時代)

古代の遺構は、調査区全体で検出でき、掘立柱建物跡 23 棟・土坑・溝跡などを検出した。特に掘立柱建物跡は柱穴の規模が大きいのが多いが、柱筋はきれいに通っていない建物跡が多い。同じような建物跡はこの第 4 調査地点から北東 110 m に位置している第 7 地点と第 8 地点でも同時期の建物跡が確認できている。第 7 地点では石敷き遺構に推定土壁作りの掘立柱建物跡が伴っている。また第 4 地点の場所は丹生川坂ノ市条里跡の起点となる場所でもある。ただ調査区南側の 11 ～ 17 区に関しては、遺構保存可能のため、中世より下層は調査対象から外したため、古代の遺構展開は不明であるが、付近の状況からすると、調査区の北側と同様に類似する展開の可能性が高い。

ここでは、掘立柱建物跡・柱穴列・溝跡・土坑・ピットの順に述べていく。

イ. 掘立柱建物跡 (SB)

古代の掘立柱建物跡は 23 棟確認した。遺構検出は中世を含めて多くの遺構が切り合っているため、きれいに検出できていないところもある。また掲載遺物は個別遺構としての掘立柱建物跡から出土した遺物だけでなく、切り合い関係にあるピットからの遺物も同じ版に掲載している。



第 56 図 SB001 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3・1/2)

SB001(第 56 図)

SB001 は D - 3・4 区で検出した。切り合い関係は SB002 を切り、中世ピットに切られる。建物東側は後世の削平をうける。建物規模は推定梁行 $1 + \alpha$ 間、推定桁行は等間隔ではないが、4 間である。身舎面積は $12.8 + \alpha \text{ m}^2$ である。すべての柱穴で円形柱痕を確認している。出土遺物 (第 56 図) は 751 は土師器坏片、757 は土師器坏の胴部から口縁部片が出土した。口縁端部を外側に屈曲させる。775 は土師器坏片である。845 は石製品で使用痕跡あり。硯か？

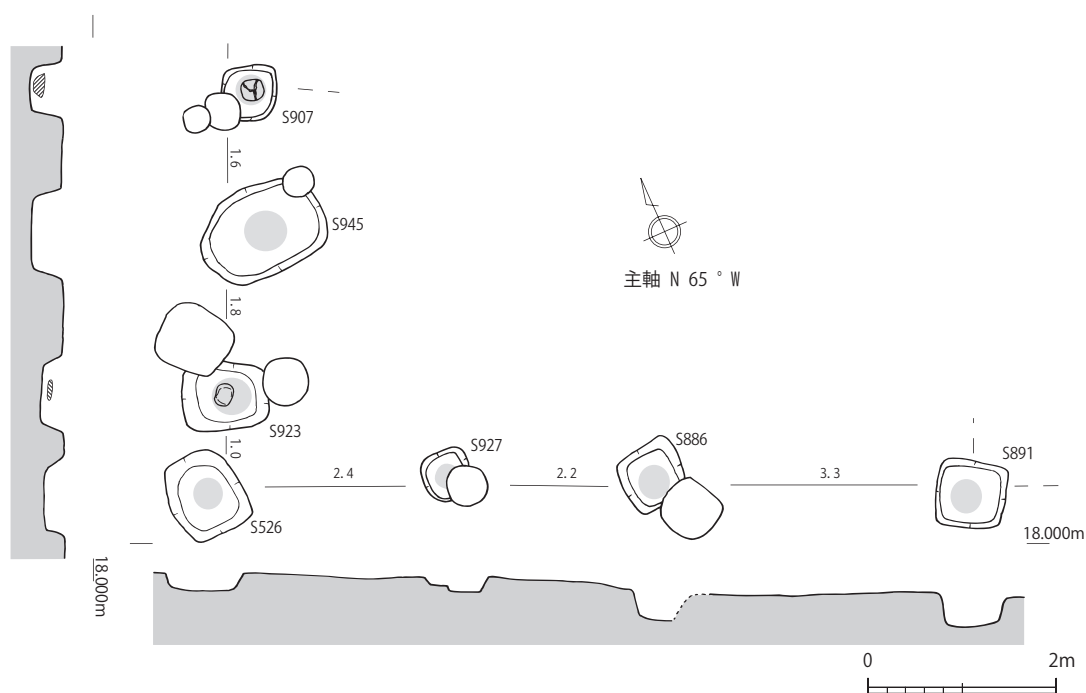
SB002(第 57 図)

SB002 は D - 2 区で検出した。切り合い関係は SB001 に切られる。建物北側は後世の削平、もしくは開析谷からの流路による削平をうける。建物規模は推定梁行 $3 + \alpha$ 間、桁行 $3 + \alpha$ 間である。身舎面積は $24.5 + \alpha \text{ m}^2$ である。すべての柱穴で円形柱痕を確認した。S907 及び S923 からは柱痕の真下から扁平な礫が出土した。礎盤石と推定される。出土遺物は小片のみであるが、切り合い関係から SB1 よりは古い。

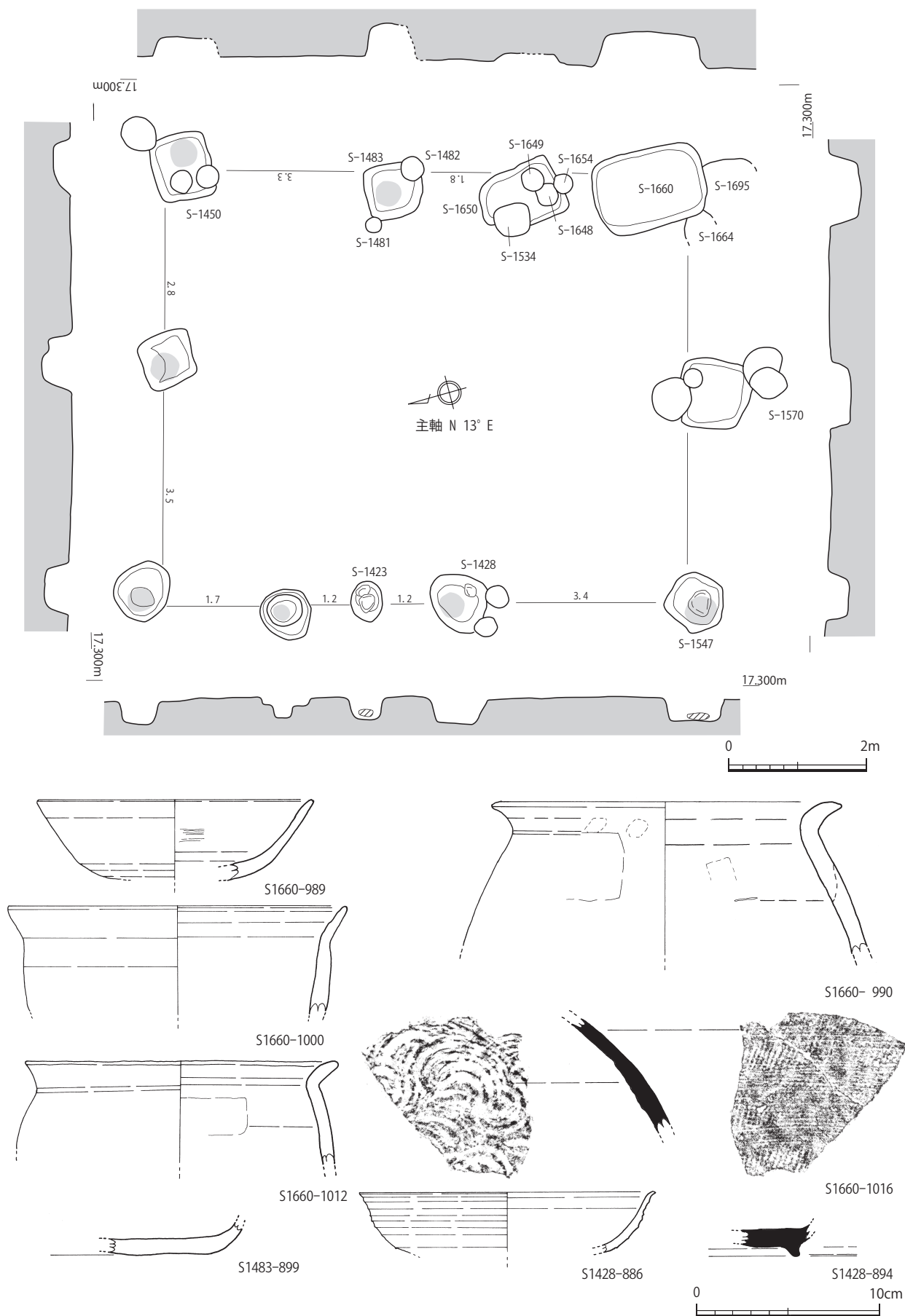
SB003(第 58 図)

SB003 は C・D - 6・7 区で検出した。切り合い関係は SB004・006・012 を切る。中世ピットに切られる。建物規模は梁行 2 間、桁行 3-5 間である。身舎面積は 56.9 m^2 である。S1650 以外の柱穴で円形柱痕を確認した。柱穴平面プランは方形～隅丸方形プランである。また S1547 と S1423 の柱穴底部には礎盤石と思われる扁平な礫が確認できた。埋土は S1450 や S1483 は褐色粘質土でしまり弱く、炭化物を少量含んでいる。他の柱穴は褐黒色粘質土主体であり、炭化物を少量含んでいる。また柱痕には褐黄色～褐灰色粘質土の土が埋土となっている。

遺物 (第 58 図) は、S1483・1428 から出土した。886 は土師器坏もしくは椀である。口縁端部を少し外反させる。胴部外面にはロクロに伴うヨコナデ痕跡が残る。色調は全体的に橙褐色を呈している。胎土には石英、長石を含む。894 は須恵器椀である。色調は灰青色を呈してる。899 は土師器坏片である。内外面ともにナデ調整である。色調は橙褐色を呈している。胎土には角閃石を含む。1016 は須恵器甕の胴部である。内面は波状文痕跡、外面は縦方向と横方向の刷毛状痕跡が残る。



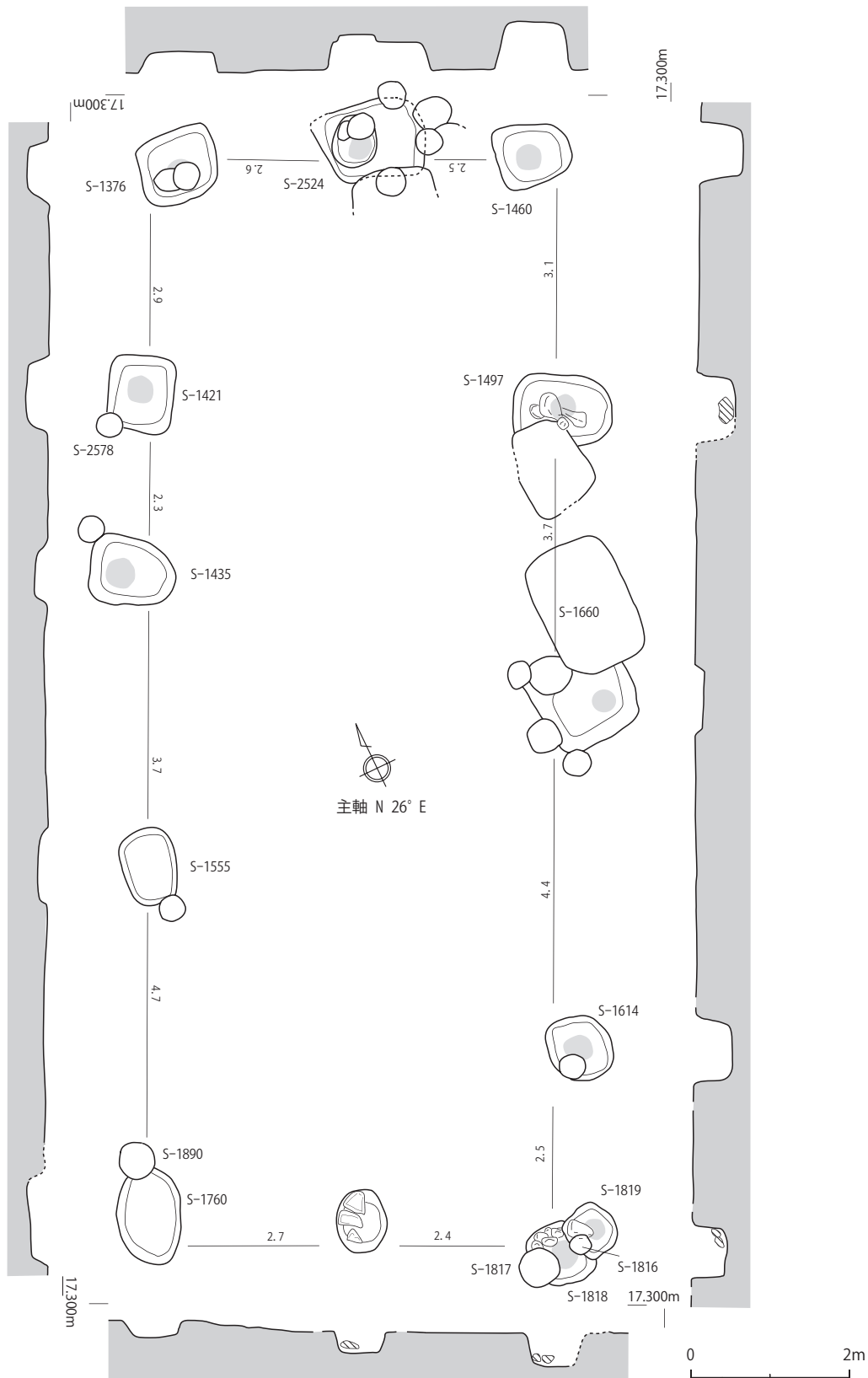
第 57 図 SB002 遺構実測図 (1/80)



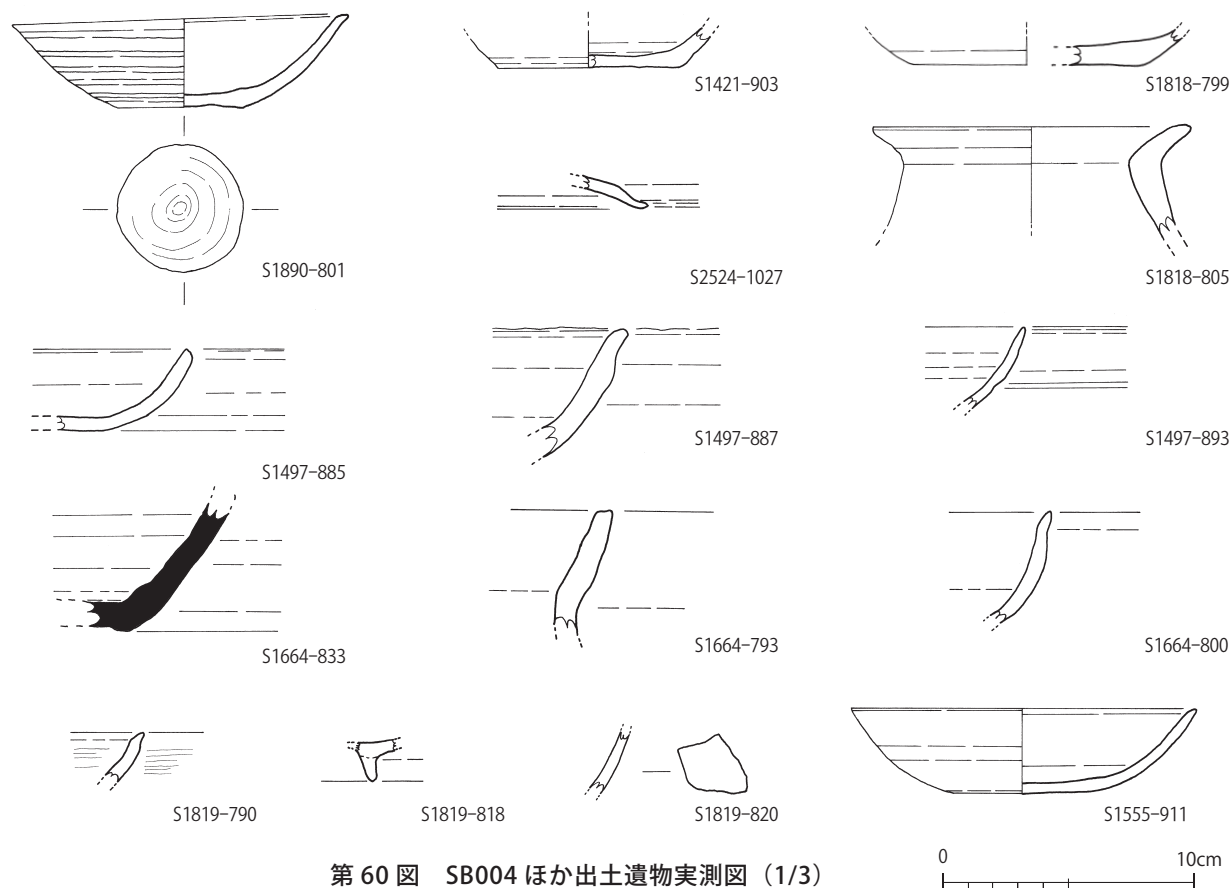
第58図 SB003遺構・出土遺物実測図(1/80・1/3)

SB004(第 59 図)

SB004 は C・D－6・7 区で検出した。切り合い関係は SB004 が SB006 を切り、SB003 に切られる。そのほか中世ピットなどに切られる。建物規模は梁行 2 間、桁行 3－4 間である。ただ西側桁行の南側は 8.0 m も柱間があることから、意図的になかったのか、破壊されたのか、礎盤石などで代用していたのかは不明である。



第 59 図 SB004 遺構実測図 (1/80)



第 60 図 SB004 ほか出土遺物実測図 (1/3)

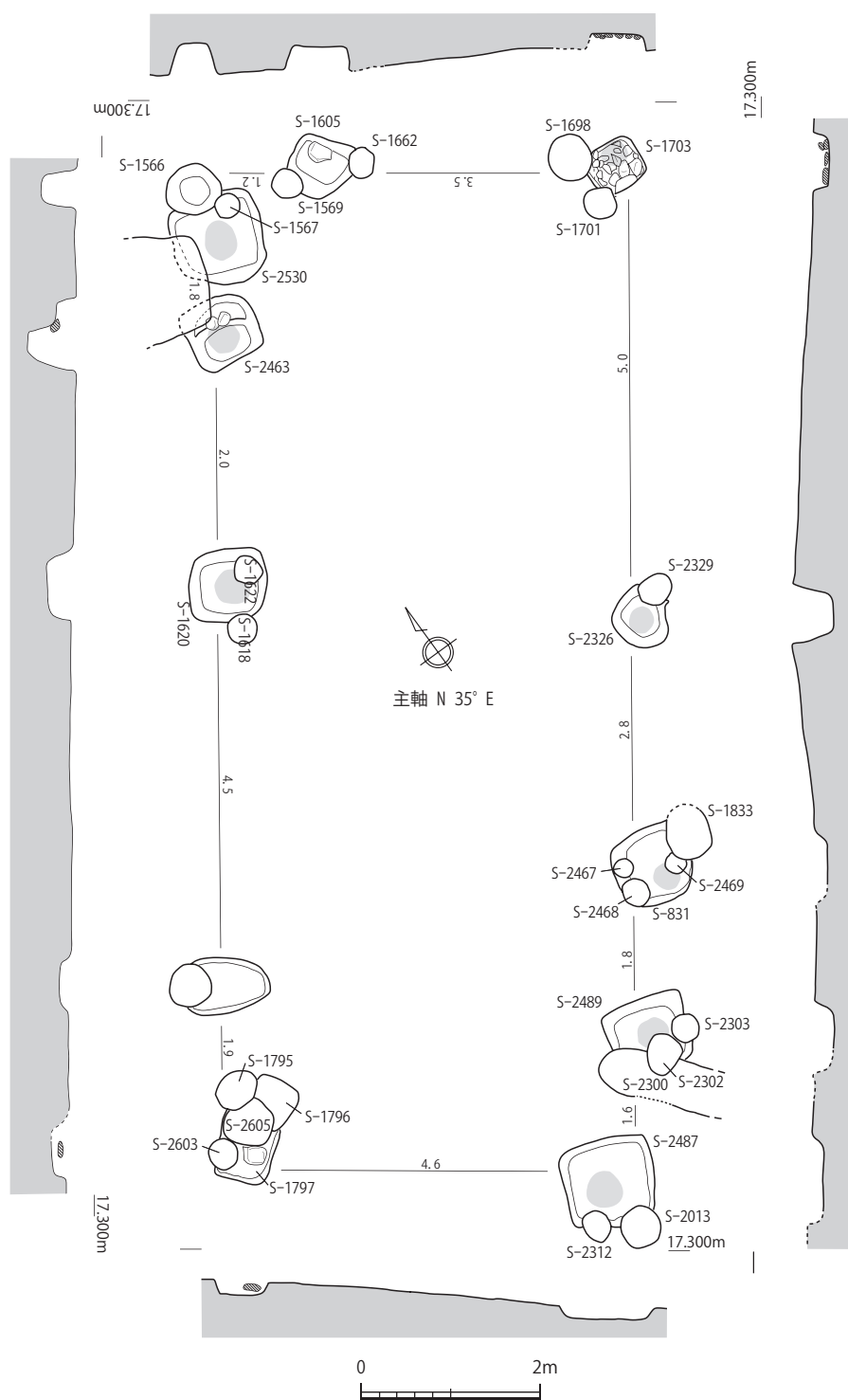
同じく東側桁行も S1614 の北側の柱間も 5 m ほど間隔があり、西側と同様なことが考えられる。身舎面積は 67.3 m²である。柱痕は多くの柱穴で確認でき、円形柱痕である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形である。また S1497 は礎盤石、S1818 は根締め石と思われる礎を検出した。

遺物 (第 60 図) は 800・801・903・799・885・911 は土師器坏である。801 は底径が口径に対して小さい。底部と外面に回転ヘラミガキを施す。口縁端部は外側に屈曲させ、口縁上面を平らに仕上げる。1027 は土師器蓋である。805・793 は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に外反する。1016 は須恵器甕片で、肩部である。790・818・820 は S1819 の出土である。S1819 は SB4 には伴わないが、SB4 を構成する S1818 を切る。790 は土師器坏口縁部、818 は黒色土器 A 類碗片、820 は白磁碗の胴部片である。同じく S1664 も SB004 を構成する S1695 を切り、833 は須恵器甕底部片、887・893 は土師器坏片である。

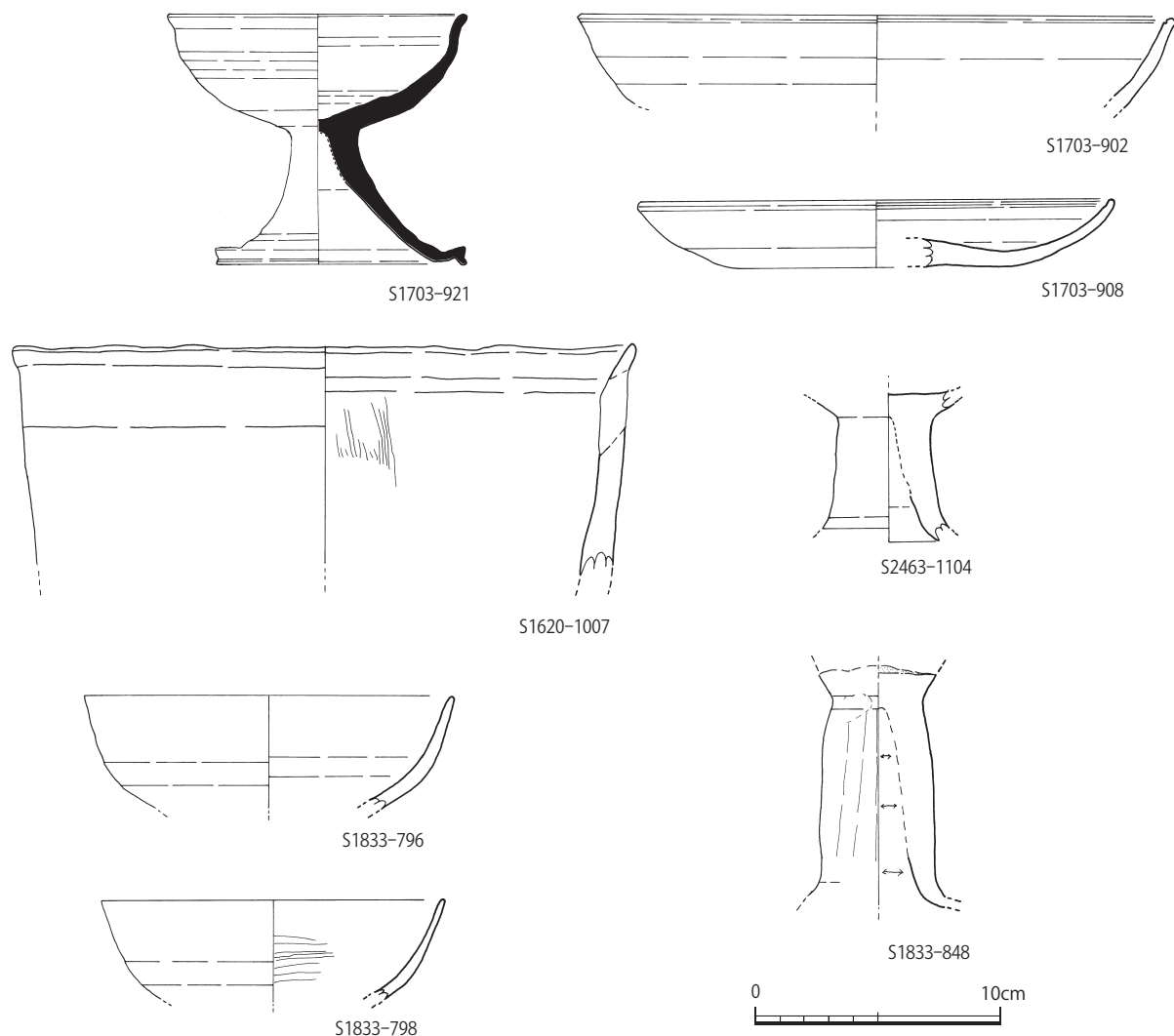
SB005(第 61 図)

SB005 は C・D－7・8 区で検出した。切り合い関係は SB006 を切る。そのほか、中世ピットなどに切られる。建物規模は梁行 1－2 間×桁行 4 間で、柱間距離は変則的なところがある。身舎面積 52.6 m²である。柱痕はほとんどの柱穴で確認でき、円形柱痕である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形である。S2603 は礎盤石、S1703 は拳大の礎を底部に敷き詰めている。柱穴毎埋土は褐黒色粘質土で、しまりやや弱い。黄土ブロックを含み、2～3 層の版築状に堆積している。柱痕埋土は褐色粘質土である。

遺物 (第 62 図) は、921 は須恵器高坏で、脚底部端は下方に屈曲させている。902・908 は土師器坏で、口縁端部内面に沈線が巡る。都城系土師器である。1007 は土師器鉢、1104 は土師器高坏である。796・798・848 は SB5 に該当しないが、SB5 を切るピット S 1833 から出土した。796・798 は土師器高坏の坏部である。口縁部は内側に少し屈曲させのびる。798 は内面にナデと横方向ミガキ調整がはいる。848 は土師器高坏の脚部である。外面は縦方向にヘラ状工具による調整、面取りが行われ、内面は横方向のケズリ痕跡が残っている。



第 61 図 SB005 遺構実測図 (1/80)

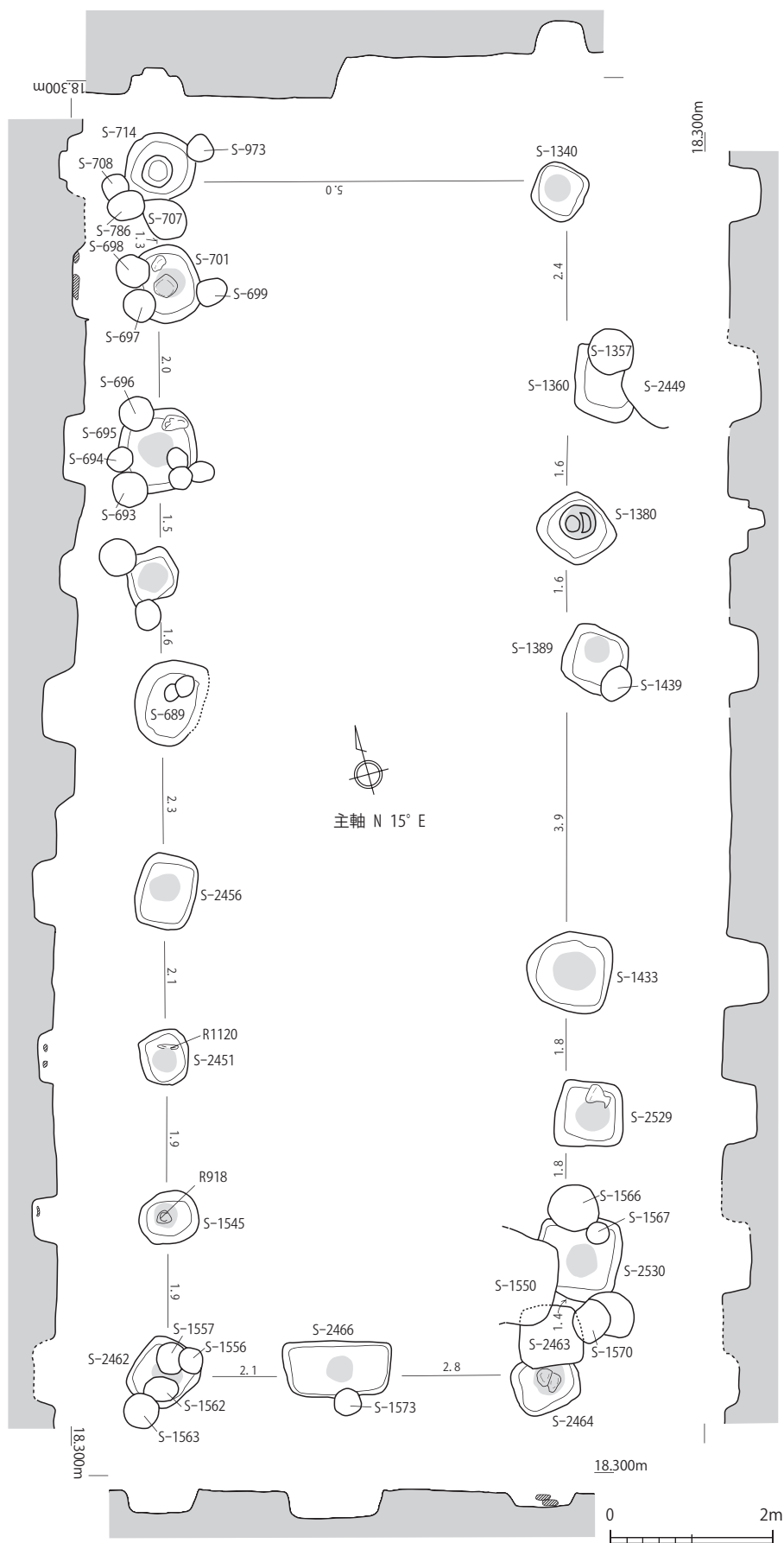


第 62 図 SB005 ほか出土遺物実測図 (1/3)

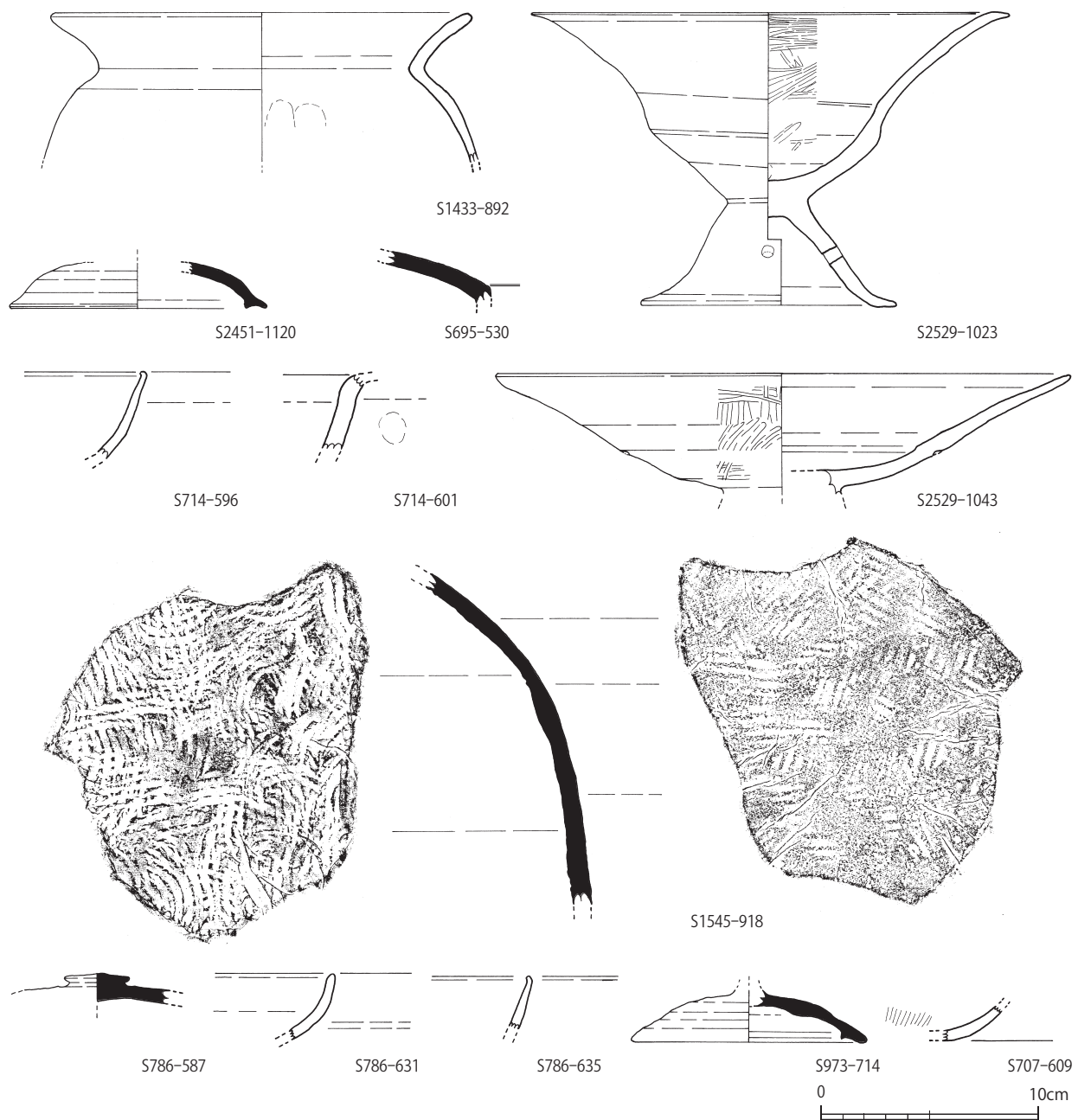
SB006(第 63 図)

SB006 は C・D - 5・6・7 区で検出した。切り合い関係は SB007 を切り、SB003・004・005・012 に切られる。そのほか、中世ピットに切られる。建物規模は梁行 1 - 2 間×桁行 7 - 8 間である。東側桁行で S1433 と S1389 の柱間距離と北側梁行の柱間距離は他と比べて間隔が開いている。身舎面積は 72.5 m² である。柱痕は S1340・689 以外の柱穴で確認でき、円形である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形である。S701・S2464 では柱痕と重複するように礎盤石と推定される石を確認した。柱穴埋土は暗褐色粘質土～暗褐色黒色粘質土である。柱痕埋土は暗灰褐色粘質土である。掘り方埋土は 2 - 3 層の版築状であった。

遺物 (第 64 図) は、SB006 柱穴出土遺物と切り合いのピットから出土した遺物を掲載した。892 は土師器甕である。古墳時代の所産であろう。1120 は須恵器蓋で、S2451 の掘り方埋土からの出土である。530 は須恵器瓶系の肩部であろう。596 は土師器坏で口縁端部を若干内側に屈曲させる。601 は土師器鉢か。1023 は土師器脚付き鉢である。1043 は土師器高坏。1023・1043 とも S2529 埋土からの出土である。918 は須恵器甕もしくは壺片である。S1545 の柱痕埋土からの出土である。SB 6 を切る古代ピットは、S786 から 587 の須恵器蓋片、631・635 の土師器坏片が出土、また S973 から 714 の須恵器蓋片出土、S707 から 609 の土師器坏片が出土した。



第 63 図 SB006 遺構実測図 (1/80)

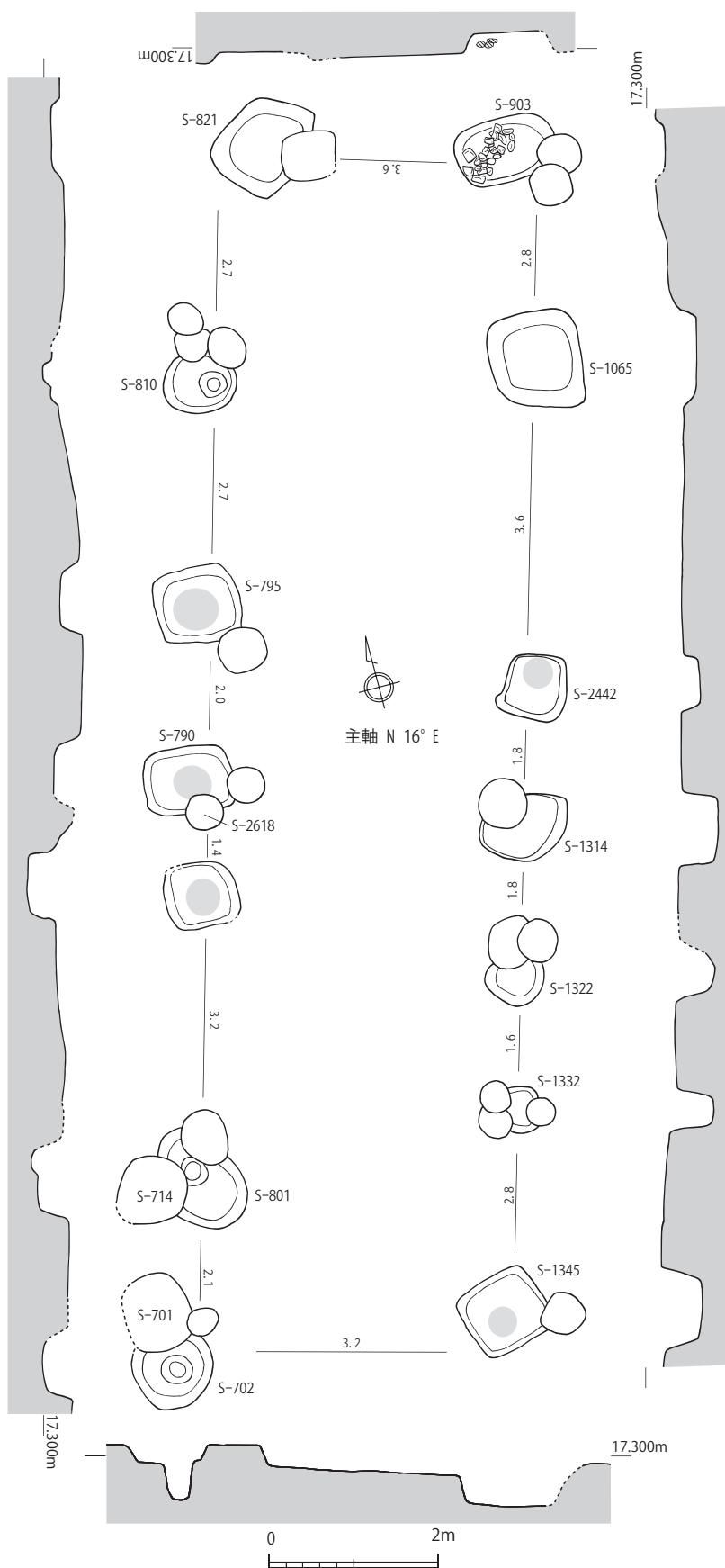


第 64 図 SB006 ほか出土遺物実測図（切合遺構含）（1/3）

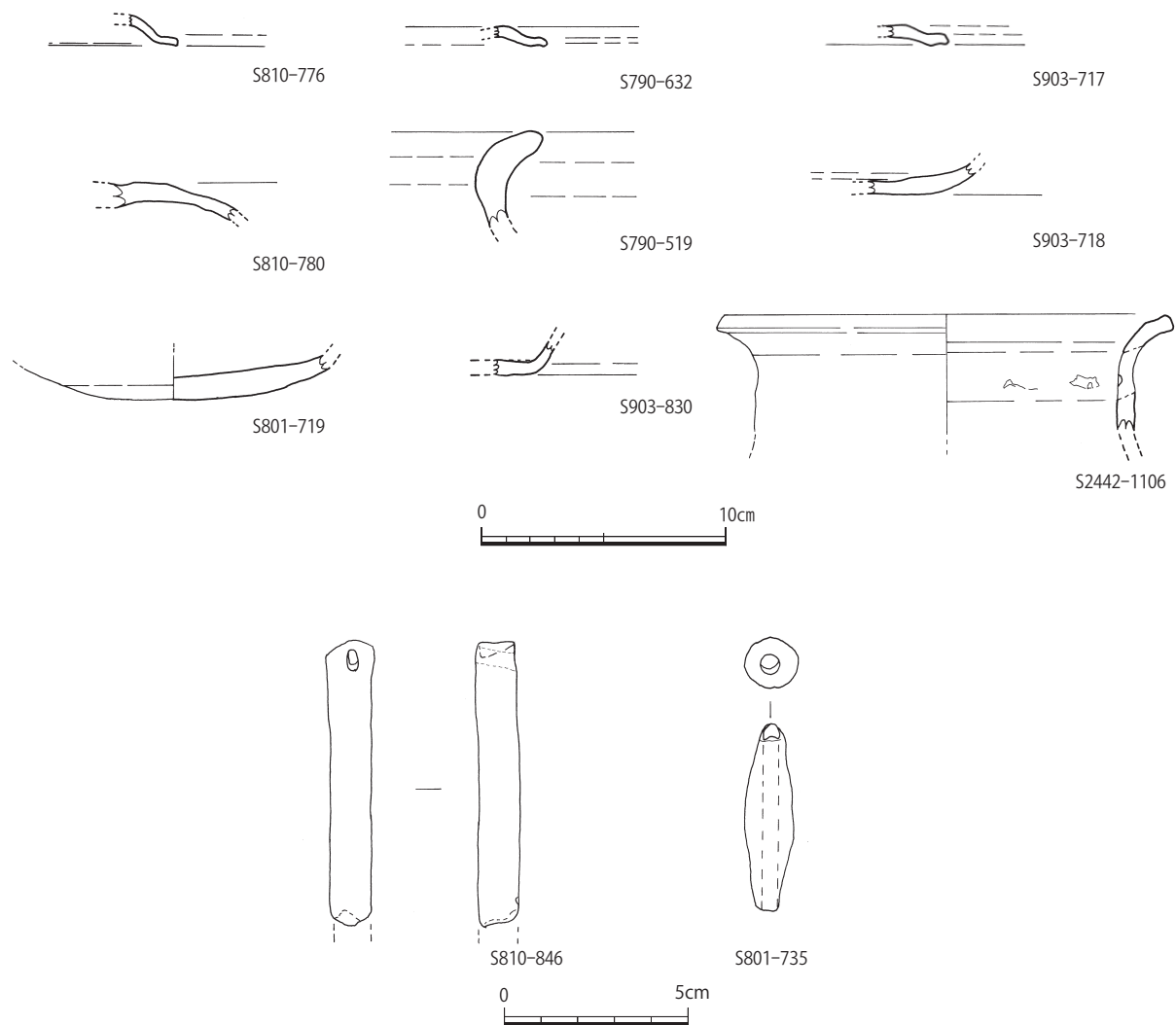
SB007(第 65 図)

SB00 7 は C・D - 4・5 区で検出した。切り合い関係は SB006 に切られる。建物規模は梁行 1 間、桁行 6 間で、柱間距離は等間隔ではない。身舎面積は 53.2 m² である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形主体で、柱痕は円形である。S903 からは柱基礎にしたと思われる拳大状の根締め石が出土した。埋土は暗褐色粘質土主体で、掘り方土層は 2 - 3 層の版築状にしている。柱痕埋土は褐色粘質土である。

遺物(第 66 図)は S810 から 3 点出土した。776 は土師器蓋である。底面を外側に屈曲させる。ナデ調整である。780 は土師器蓋であろう。846 は土製品で、土錘。上部に穿孔が 1 つ認められる。長さは下部が折れているため、最大長はのびる。S790 からは 2 点出土した。519 は土師器甕の口縁部である。ナデ調整で、口縁部は外反する。632 は土師器蓋片である。S801 からは 2 点出土した。719 は土師器坏の底部であろう。ナデ調整。735



第 65 図 SB007 遺構実測図 (1/80)



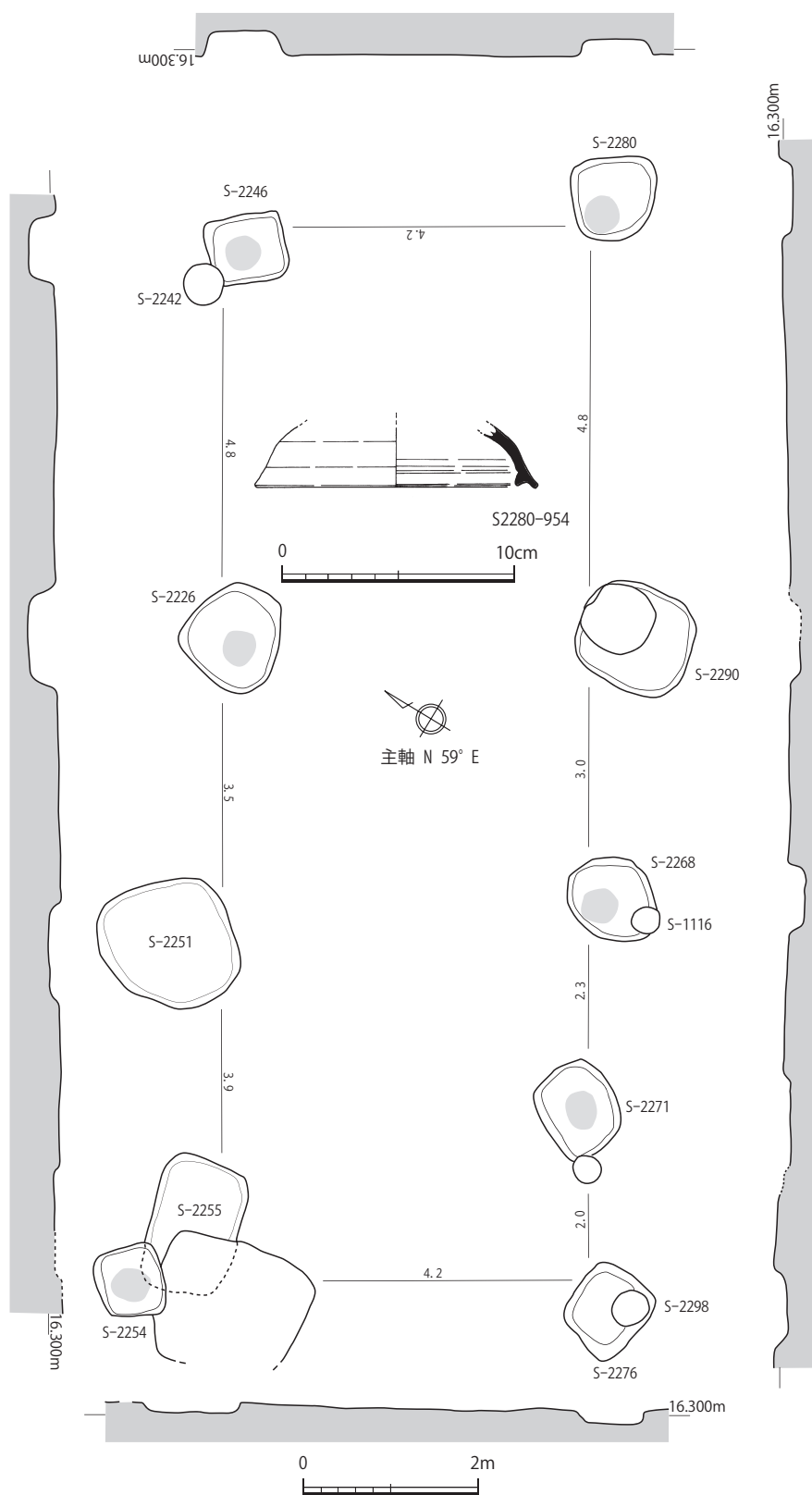
第 66 図 SB007 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

は土製品で管状土鍾である。S903 からは 3 点出土した。717 は土師器蓋である。器高は低く、外側を屈曲させる。718・830 は土師器坏である。718 は底部から胴部へ丸みをもちながら、立ち上がり、830 は底部から胴部への屈曲は 718 よりはシャープである。S2442 からは 1 点出土した。1106 は土師器甕である。口縁部は外反し、端部は面取りしている。成形は粘土積み上げである。胴部は口縁部からまっすぐのびながら、やや外側に膨らんでいきそうである。

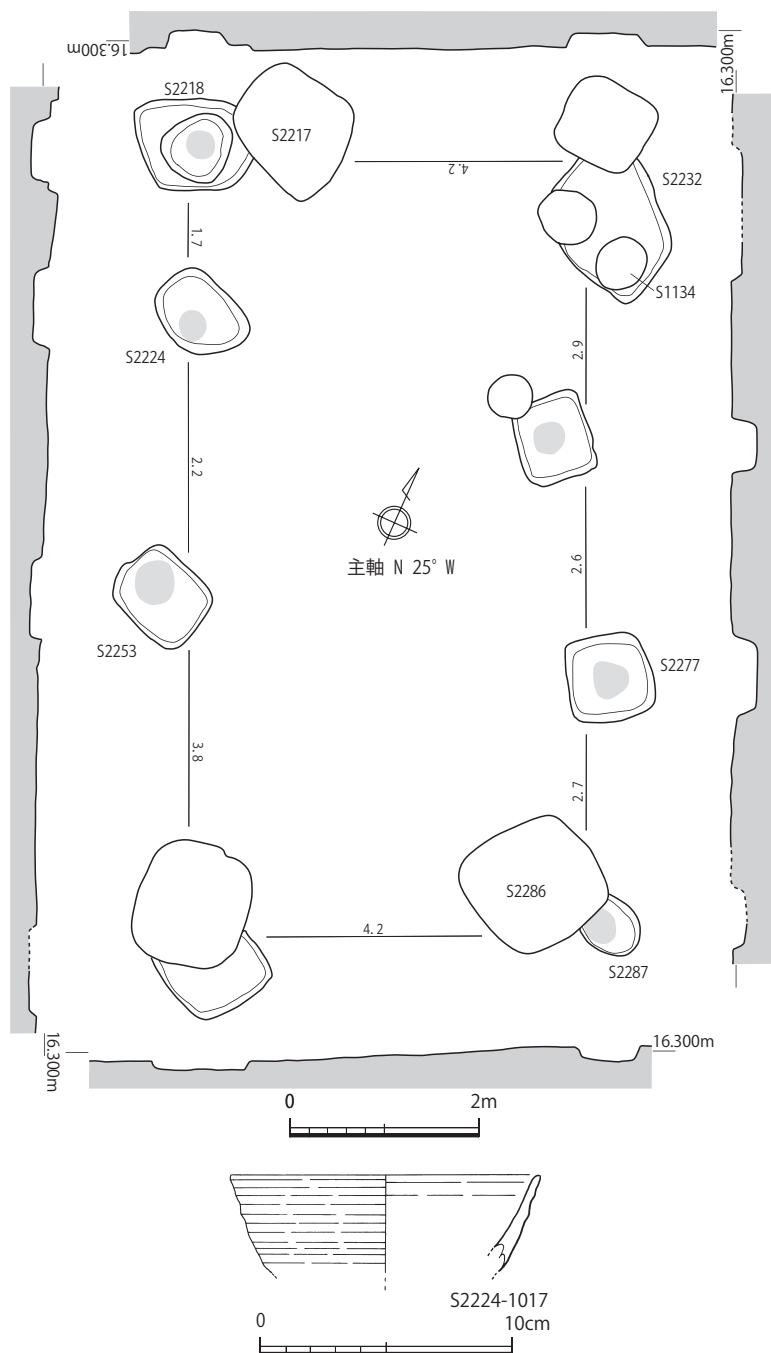
SB008(第 67 図)

SB008 は E・F－5・6・7 区で検出した。切り合い関係は SB009 を切る。建物規模は梁行 1 間、桁行 3－4 間である。柱間距離は等間隔ではない。身舎面積は 51.2 m² である。柱穴平面プランは不定形のものから方形～隅丸方形・円形である。柱痕は一部の柱穴で確認でき、円形である。柱穴の残存状況は他の建物跡に比べると悪く、中世の造成で大きく破壊されていると考えられる。柱穴掘り方埋土は 1－2 層で、平行に堆積している。褐灰色粘質土主体である。柱痕埋土は灰褐色粘質である。

遺物 (第 67 図) は数点しか出土せず、掲載できたものは、S2280 出土の 954 である。954 は須恵器蓋である。



第 67 図 SB008 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

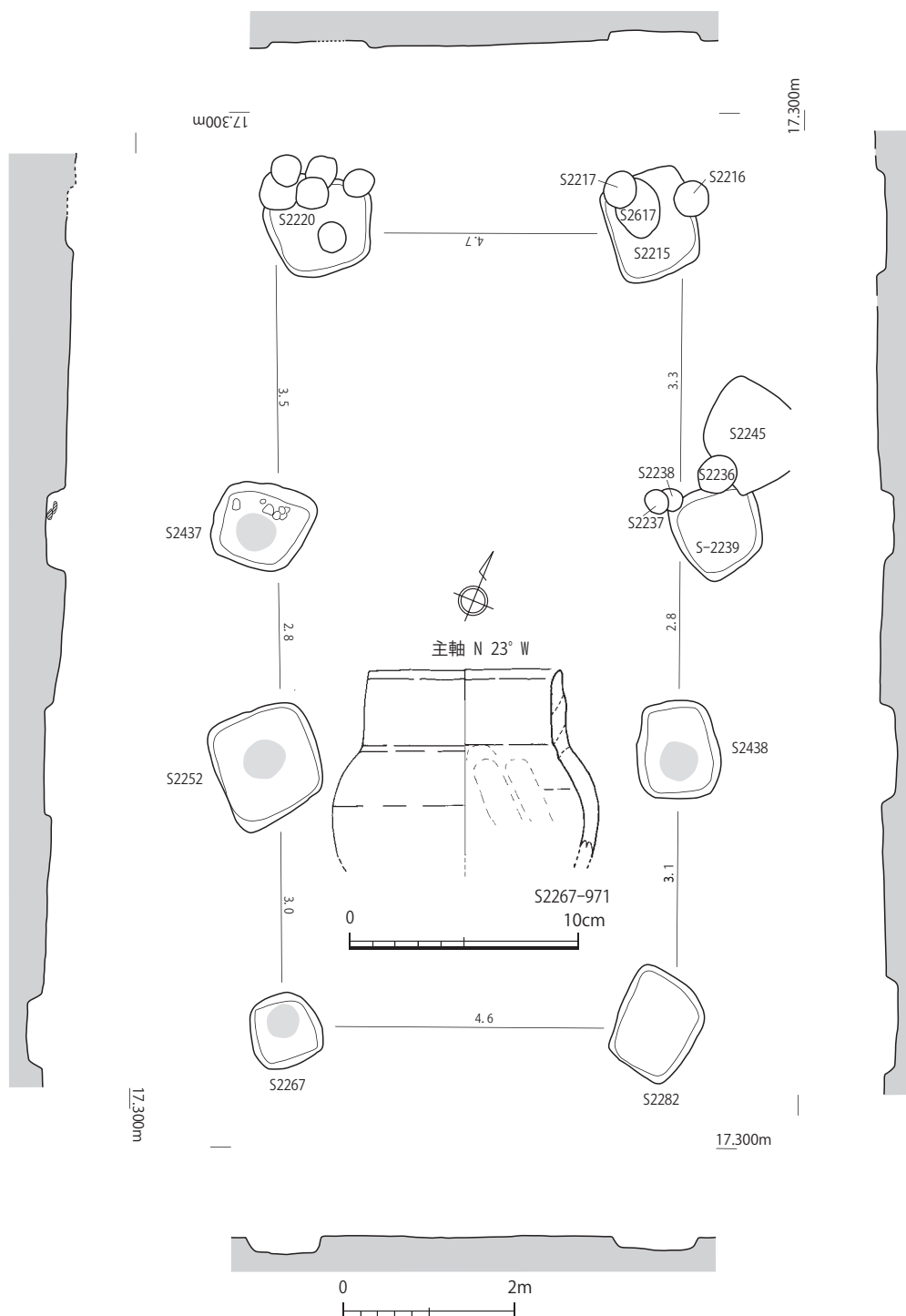


第 68 図 SB009 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB009(第 68 図)

SB009 は E・F - 5・6 区で検出した。切り合い関係は SB8 に切られる。建物規模は梁行 1 間、桁行 3 間である。柱間距離は不均等である。身舎面積は 34.4 m² である。柱穴平面プランは不定形～方形・隅丸方形を呈する。柱痕は一部の柱穴で確認でき、丸柱であったことがわかる。柱穴の残存状況は SB8 と同様に他の建物跡に比べると悪い。柱穴掘り方埋土は 1 - 2 層で平行に堆積している。埋土は暗褐色～暗灰褐色粘質土主体で、柱痕埋土は暗灰色土主体である。主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第 68 図) は少なく、1 点だけ掲載した。S2287 の出土で 1017 は土師器坏で、外面はロクロ痕跡のナデ跡が強く残る。

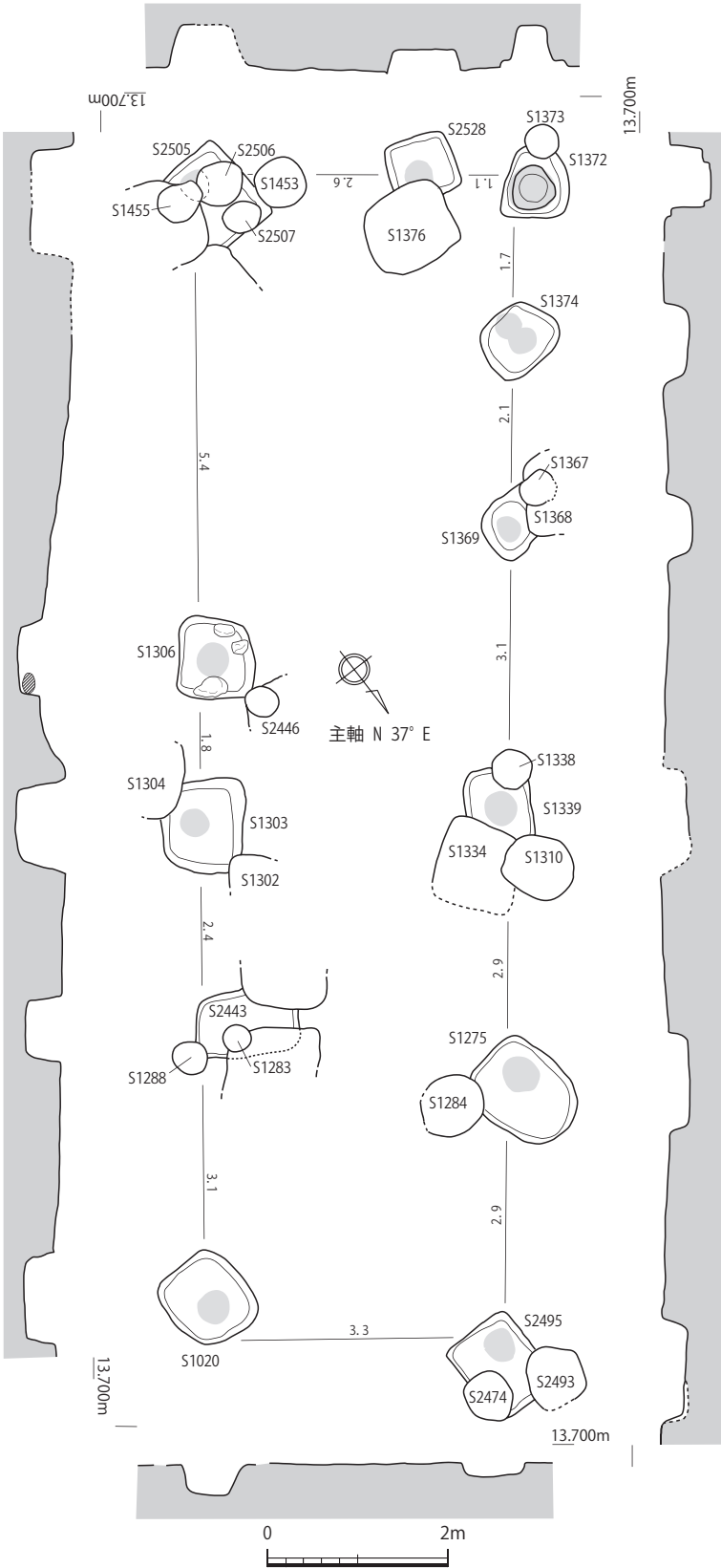


第 69 図 SB010 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB010(第 69 図)

SB010 は E・F－5・6 区で検出した。同時期の建物跡との切り合い関係はない。中世ピットには一部の柱穴で切られる。建物規模は梁行 1 間、桁行 3 間である。身舎面積は 43.7 m² である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形である。柱痕は一部の柱穴で確認でき、丸柱であったと推定される。柱穴埋土は暗褐色粘質土で、柱痕埋土は黒褐色粘質土である。柱穴の残存状況は SB8・9 と同様に良くない。S2437 は掘り方に拳大状の礫が出土し、柱を安定させていたものであろう。

遺物 (第 69 図) は S2267 より 1 点出土した。971 は土師器・小型丸底壺で、古墳時代の所産であろう。

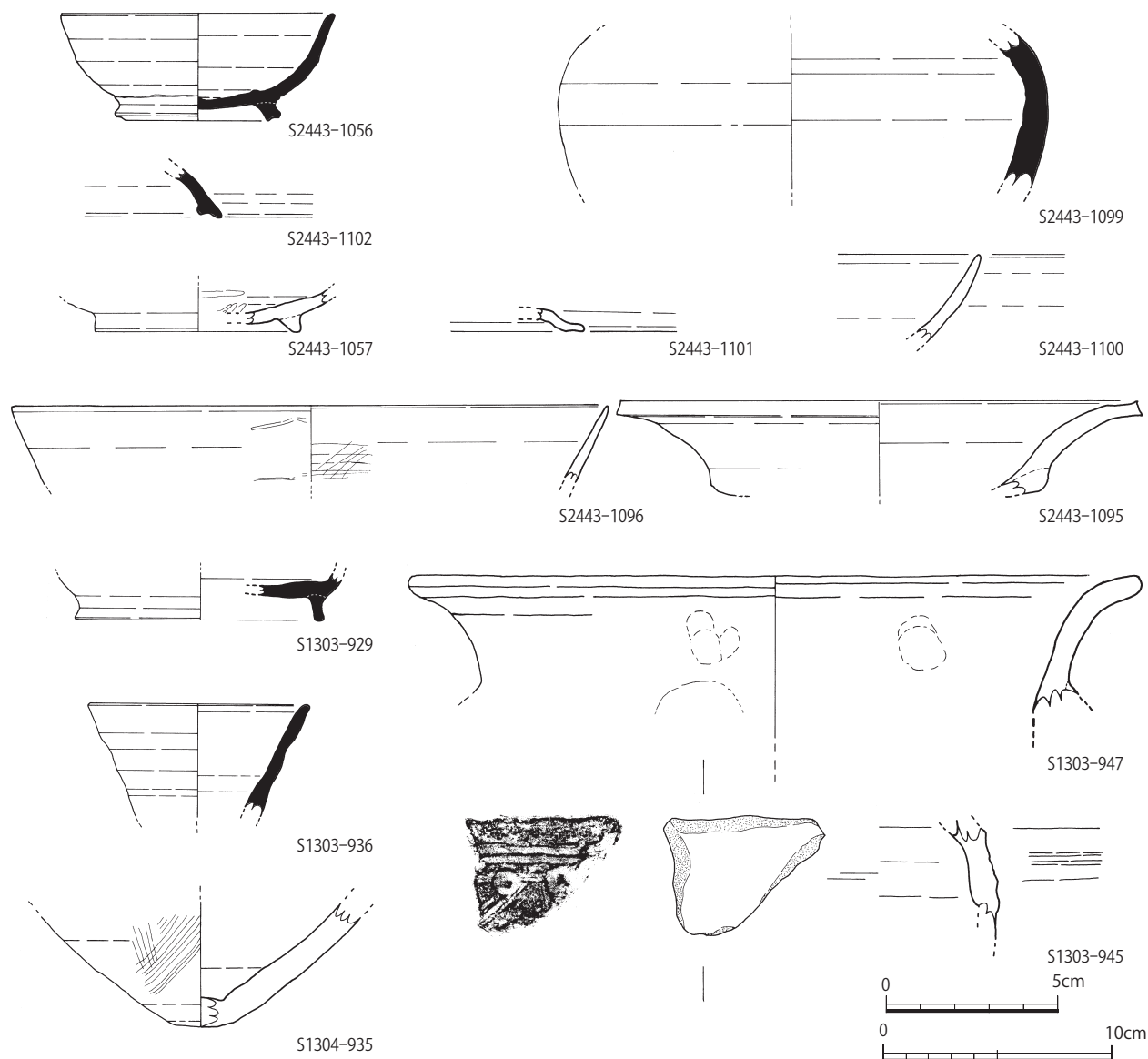


第 70 図 SB011 遺構実測図 (1/80)

SB011(第 70 図)

SB011 は C・D・E - 5・6 区で検出した。切り合い関係は SB012 に切られる。建物規模は梁行 1 - 2 間、桁行 4 - 5 間である。東側桁行の南側は柱間距離が 5.4 m あり、存在していないのか、礎石などで代用していたのか、不明である。身舎面積は 46.99 m² である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形である。柱痕は一部の柱穴を除いて確認でき、丸柱である。S1374 は柱抜き取り痕と推定される。S1306 の掘り方には拳大からやや大きい礫が出土し、柱を安定させるためのものだろう。柱穴埋土は暗灰褐色粘質土主体で、柱痕埋土は灰褐色粘質土主体である。主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第 71 図) は、S2443 は 8 点出土した。1056 は須恵器碗である。高台は「ハ」の字状に張り付ける。1102 は須恵器蓋、1099 は須恵器壺である。1057 は土師器碗、1101 は土師器蓋、1100 は土師器坏か碗の口縁部である。1096 は土師器鉢か。1095 は土師器高坏の坏部で、古墳時代の所産であろう。S1303 からは 4 点出土した。929 は須恵器碗である。936 は須恵器小型の碗か坏。947 は土師器甕もしくは甑か。残存胴部の端が外側に脹れかけているため、把手であろう。945 は土師器で器種は不明である、甕か壺の破片か。外面に 2 条横方向沈線の下部に鋸歯文と円形刺突文を施している。また S1304 は SB11 を切っているが、出土遺物を掲載した。935 は弥生時代の甕底部で、底部は若干平底気味である。外面はナデのち刷毛目調整。

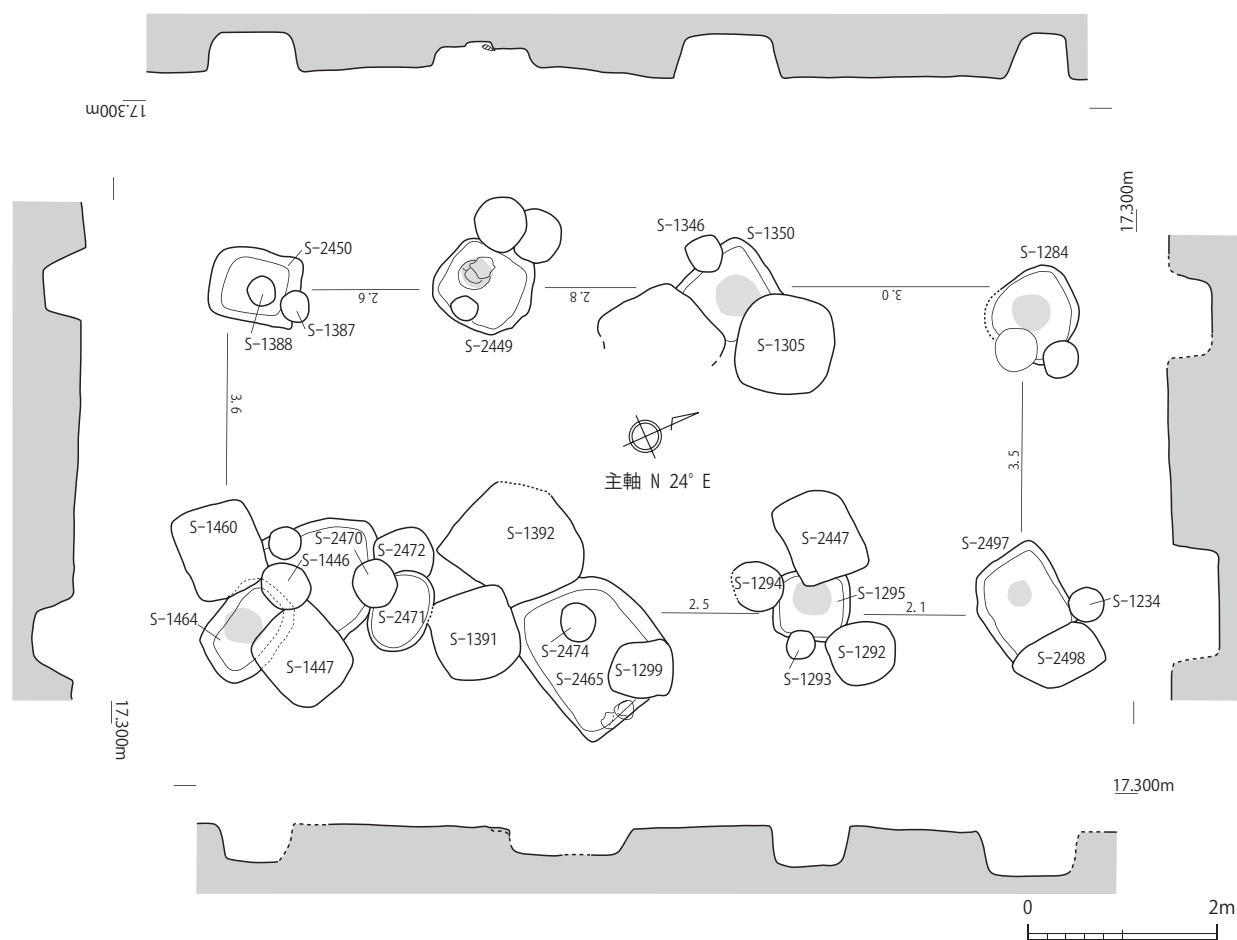


第 71 図 SB011 ほか出土遺物実測図 (1/3)

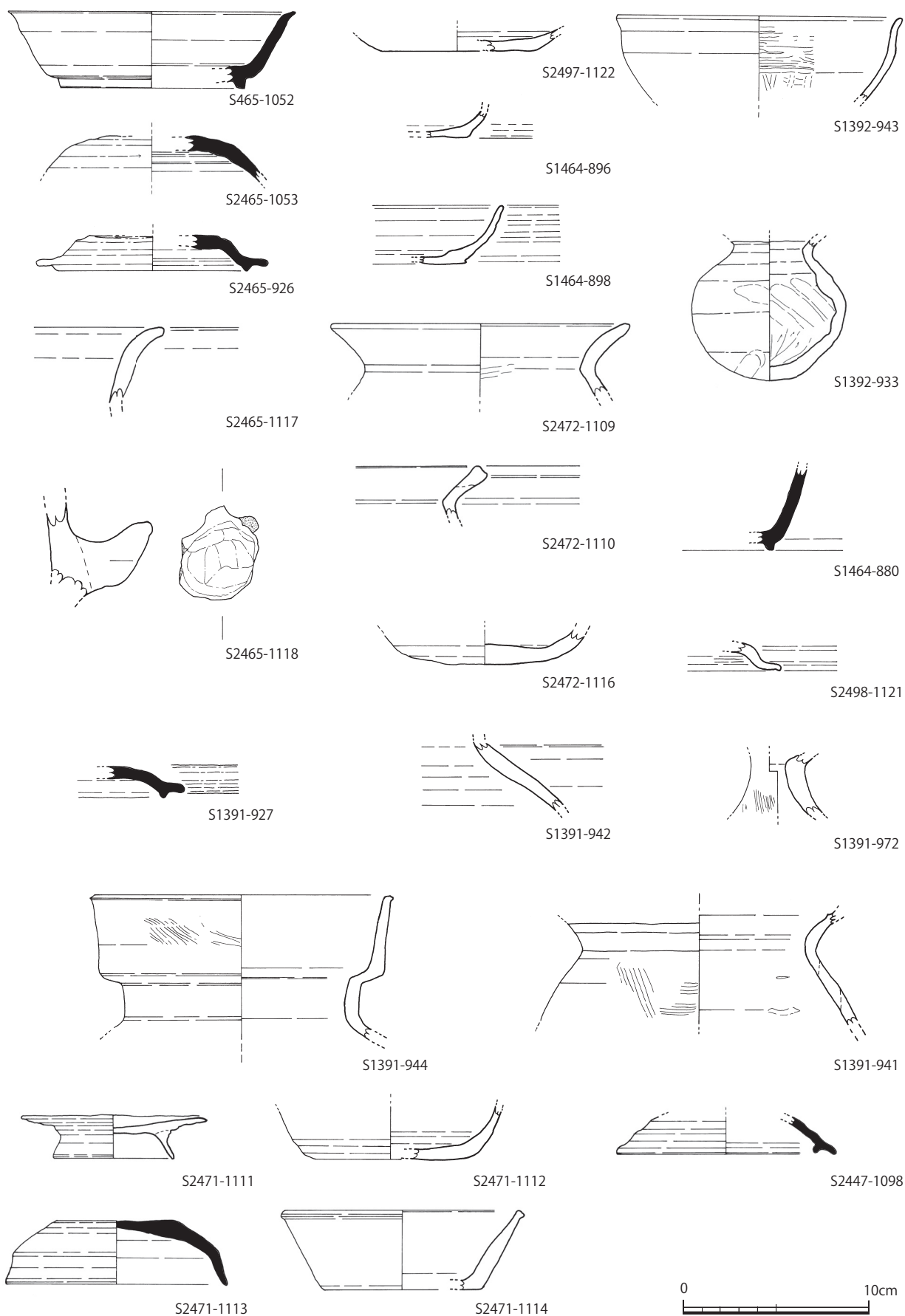
SB012(第 72 図)

SB012 は D・E - 4・5・6 区で検出した。切り合い関係は SB003・011 に切られる。建物規模は梁行 1 間、桁行 3 間である。身舎面積は 30.2 m² である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形である。柱痕は S2465 以外の柱穴で確認でき、丸柱であったと推定される。S2465 は掘り方に拳大の礫が少量出土した。柱穴埋土は暗褐色粘質土主体で、柱痕は褐色粘質土主体である。柱穴掘り方埋土は 1 - 3 層に分層でき、平行に堆積する。主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第 73 図) は多く出土したが、切り合いも多いため SB012 との切り合いがある古代ピットからの良好な出土遺物も掲載した。まず SB012 に該当する遺物であるが、1053 は須恵器蓋である。880・1052 は須恵器碗。1122・896・898 は土師器坏である。ただ 896・898 に関しては中世の混入の可能性あり。1117 は土師器鉢もしくは甕。1118 は土師器甕把手である。SB12 との切り合い関係をもつ遺構の出土遺物は、S2465 を切る S1392 から、926 の須恵器蓋、943 の土師器鉢もしくは坏、933 の小型丸底壺である。S2472 は 1109 が土師器甕、1110 は土師器甕、1116 は土師器坏である。S2497 を切る S2498 は 1121 が出土し、土師器蓋片である。S1391 は S2465 を切り、927 の須恵器蓋片のほか、972・941・944・942 が出土。S2471 からは 1113 の須恵器坏、1111 の高台付托、1112・1114 の土師器坏が出土している。S1464 からは 898 土師器坏片が出土し、胴部外面にロクロナデ痕が残る。



第 72 図 SB012 遺構実測図 (1/80)

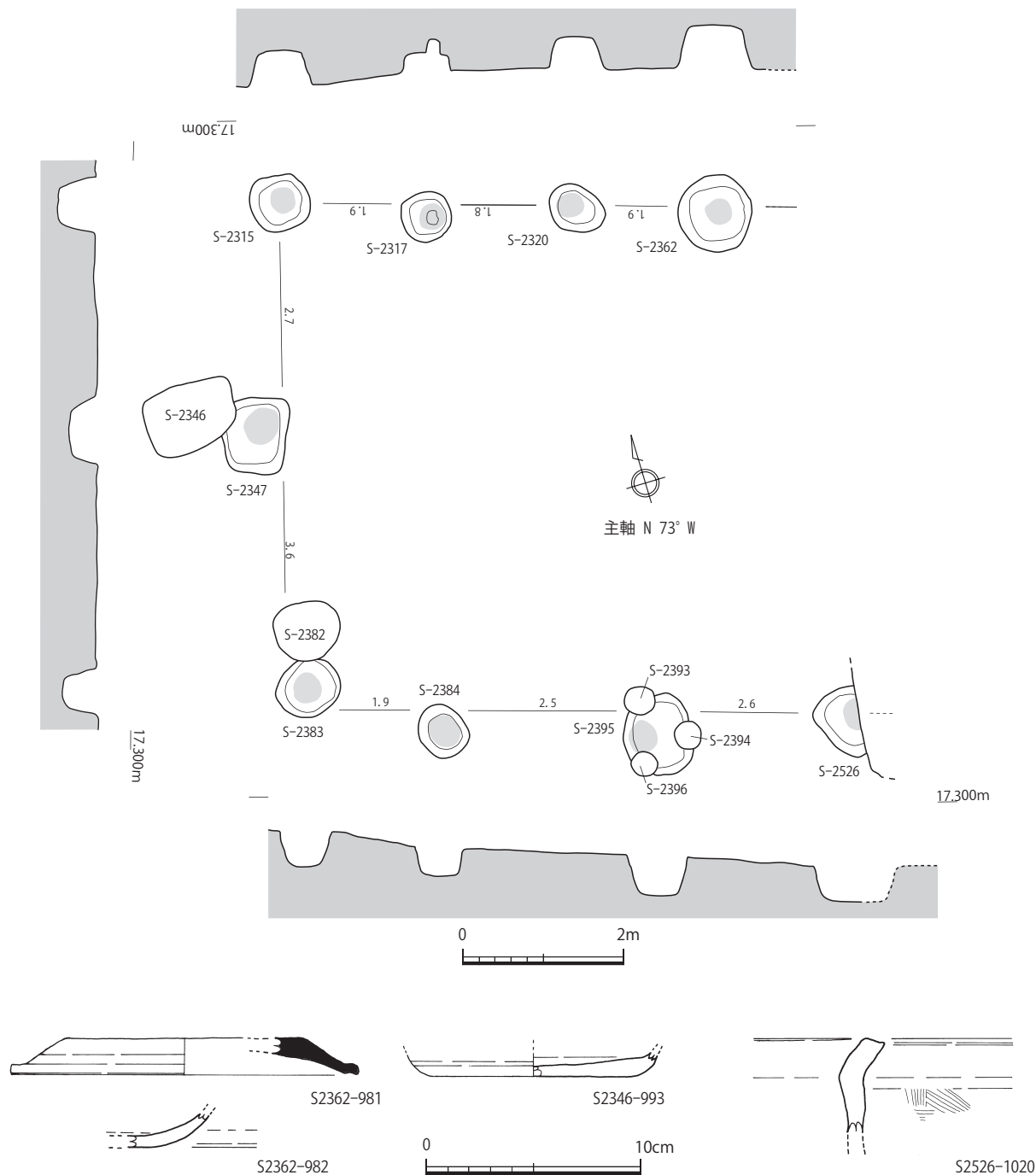


第73図 SB012 ほか出土遺物実測図 (1/3)

SB013(第74図)

SB013はC・D-8・9区で検出した。同時期の建物跡との切り合い関係はない。ただしこの建物跡は調査区外に延びるようで、現状から東側へ展開すると推定される。建物規模は梁行2間、桁行3+ α 間である。身舎面積は44.1+ α ㎡である。柱穴平面プランは隅丸方形～円形である。柱痕は確認できるすべての柱穴で確認し、丸柱である。柱穴埋土は暗褐色粘質土主体で炭化物や焼土を含んでいる。柱痕埋土は褐黒色粘質土である。柱穴掘り方埋土の堆積は1-3層の平行堆積を示す。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物(第74図)は、S2362から981の須恵器蓋、982の土師器坏片、S2346から993の土師器坏底部、S2526から1020の土師器甕が出土した。

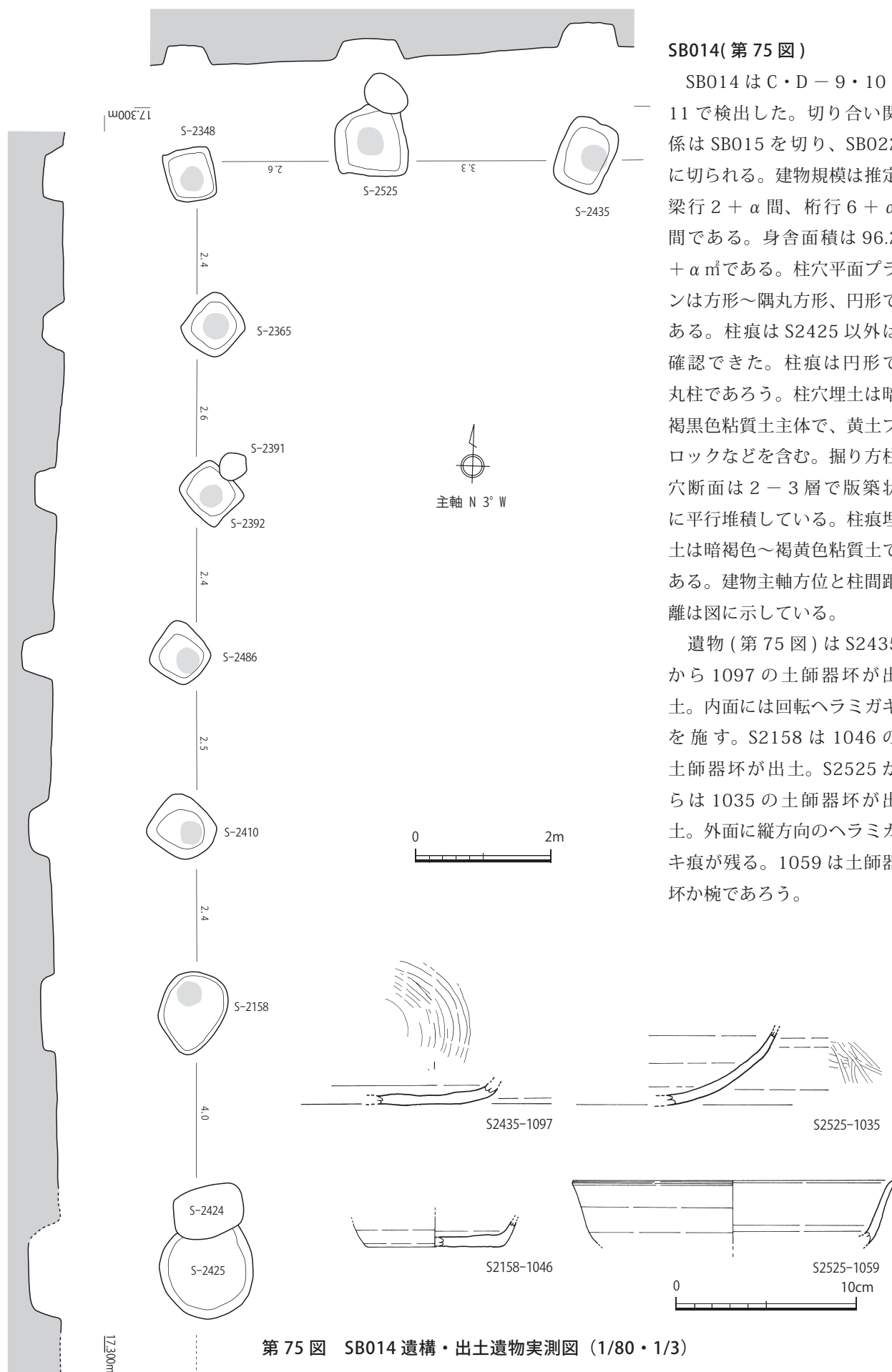


第74図 SB013遺構・出土遺物(切り合い遺構含む)実測図(1/80・1/3)

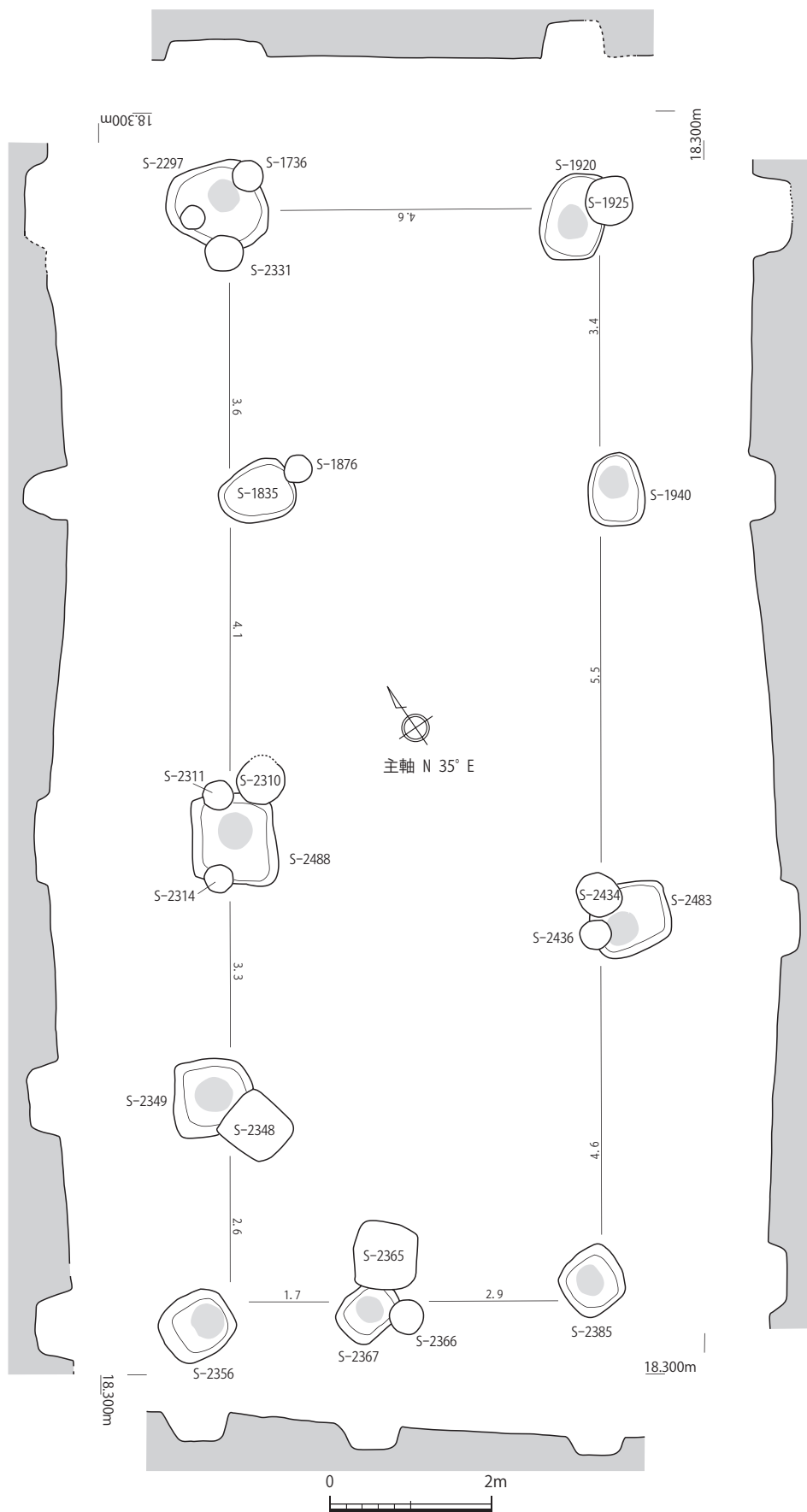
SB014(第 75 図)

SB014 は C・D - 9・10・11 で検出した。切り合い関係は SB015 を切り、SB022 に切られる。建物規模は推定 梁行 $2 + \alpha$ 間、桁行 $6 + \alpha$ 間である。身舎面積は $96.2 + \alpha \text{ m}^2$ である。柱穴平面プランは方形～隅丸方形、円形である。柱痕は S2425 以外は確認できた。柱痕は円形で丸柱であろう。柱穴埋土は暗褐色黒色粘質土主体で、黄土ブロックなどを含む。掘り方柱穴断面は 2 - 3 層で版築状に平行堆積している。柱痕埋土は暗褐色～褐色粘質土である。建物主軸方位と柱間距離は図に示している。

遺物 (第 75 図) は S2435 から 1097 の土師器坏が出土。内面には回転ヘラミガキを施す。S2158 は 1046 の土師器坏が出土。S2525 からは 1035 の土師器坏が出土。外面に縦方向のヘラミガキ痕が残る。1059 は土師器坏か椀であろう。



第 75 図 SB014 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

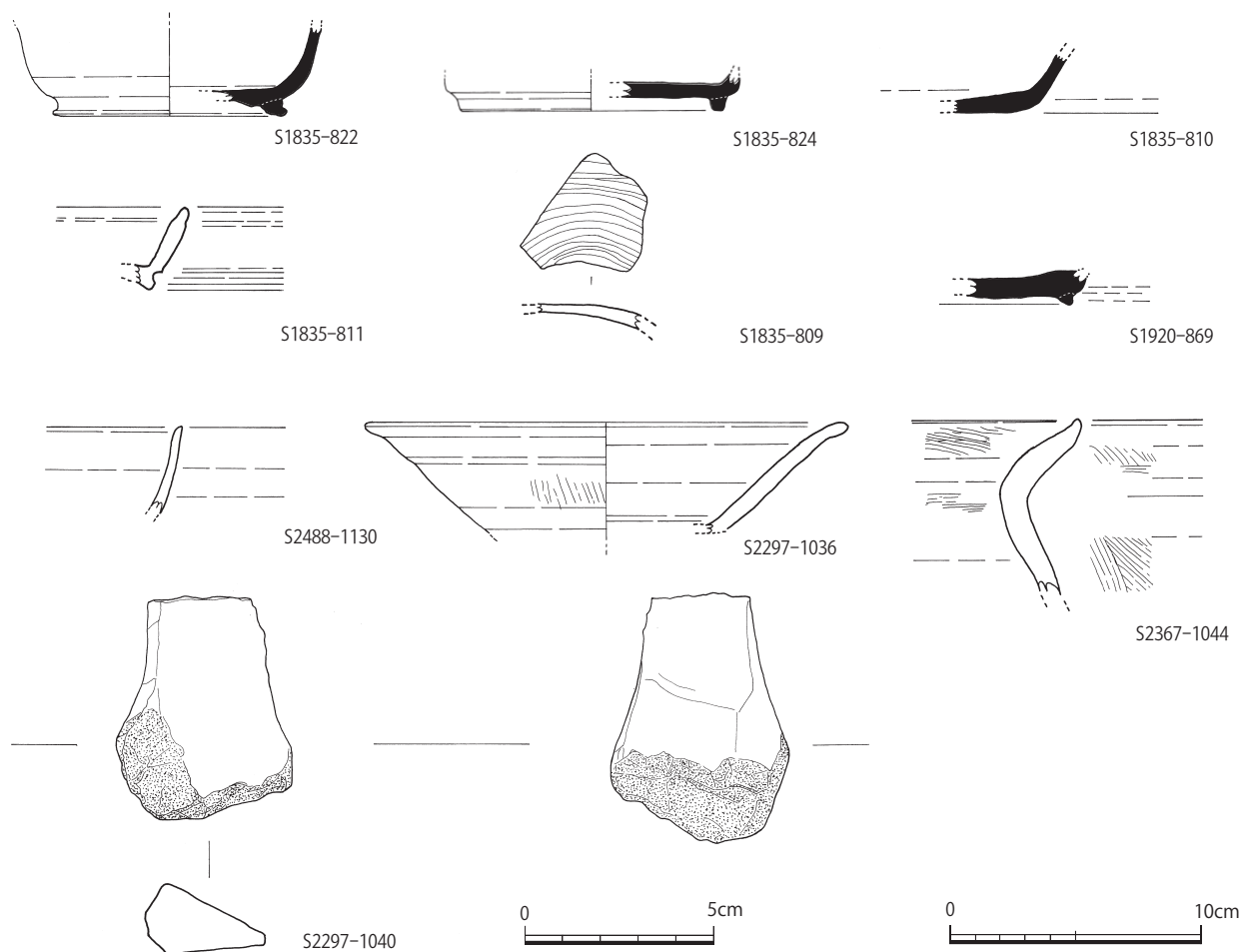


第 76 図 SB015 遺構実測図 (1/80)

S0B15(第 76 図)

S0B15 は C・D－7・8・9 区で検出した。切り合い関係は SB014 に切られる。建物規模は梁行 1－2 間、桁行 3－4 間である。柱間距離は等間隔ではない。東側桁行ラインで S2483 と S1940 の間隔は 5.5 m と長い。もともと柱がなかったか、礎石で代用したのだろうか。身舎面積は 62.6 m² である。柱穴平面プランは、隅丸方形～不定形なものである。柱痕は S1835 以外では確認でき、円形柱痕で、丸柱であろう。柱穴埋土は暗褐色粘質土主体で、黄土ブロック、焼土を含んでいる。また断面は 1－3 層で版築状に平行堆積している。柱痕埋土は暗褐色粘質土主体である。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第 77 図) は、一部の柱穴で確認できた。S1835 からの出土遺物は 5 点。822・824 は須恵器椀である。810 は須恵器杯。811 は土師器椀である。底部の外側近くに高台が張り付く。口縁端部は内外面ともにナデ痕が強く残る。809 は土師器蓋である。天井部に回転ヘラミガキ痕が残る。S1920 からは、869 の須恵器椀が出土した。高台が底部外側に付く。S2297 は 1036 の土師器杯が出土した。1040 は天草石の砥石であろう。S2367 からは 1044 の土師器甕が出土した。口縁端部を上方につまみ上げる。口縁端部内面と外面にナデ調整のち刷毛目調整を施す。S2488 から、1130 土師器坏片が出土。



第 77 図 S0B15 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SB016(第 78 図)

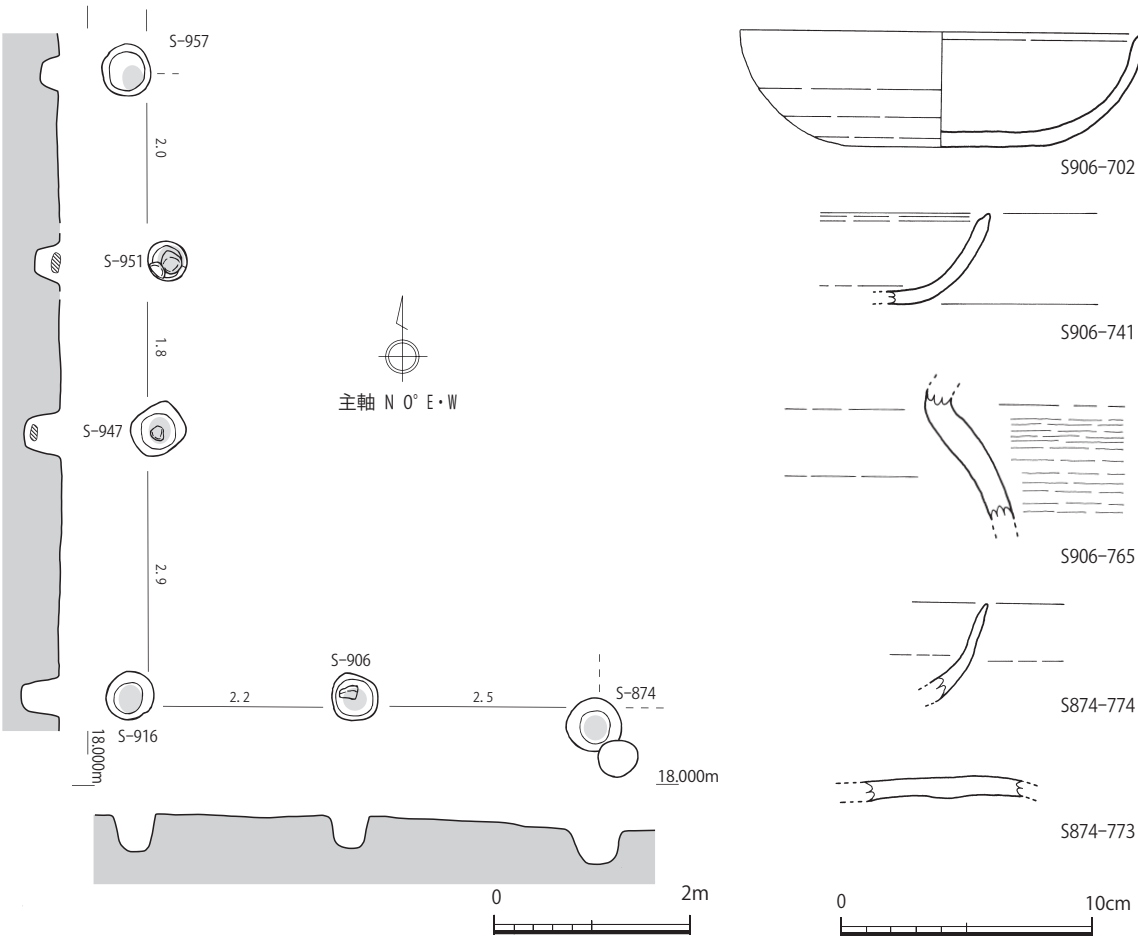
SB016 は D - 2・3 区で検出した。切り合い関係は SB001 を切る。この建物跡は北側と東側に展開すると推定されるが、前述したとおり、近接する北側は開析谷が広がり、試掘調査によっても遺構は皆無で、水分を多く含む粘質土であった。このため、積極的に生活遺構は調査区北側には展開しない可能性が高い。建物規模は推定梁行 $2 + \alpha$ 間、桁行 $3 + \alpha$ 間である。身舎面積は $29.4 + \alpha \text{ m}^2$ である。柱穴平面プランは円形及び隅丸方形である。柱痕は円形で、丸柱であろう。S951・947 は柱痕部に礫が出土し、礎盤石などに使われたものだろう。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第 78 図) は S906 から 702・741 の土師器坏、765 の土師器甕片が出土、S874 から 774 の土師器坏、773 の土師器蓋が出土した。

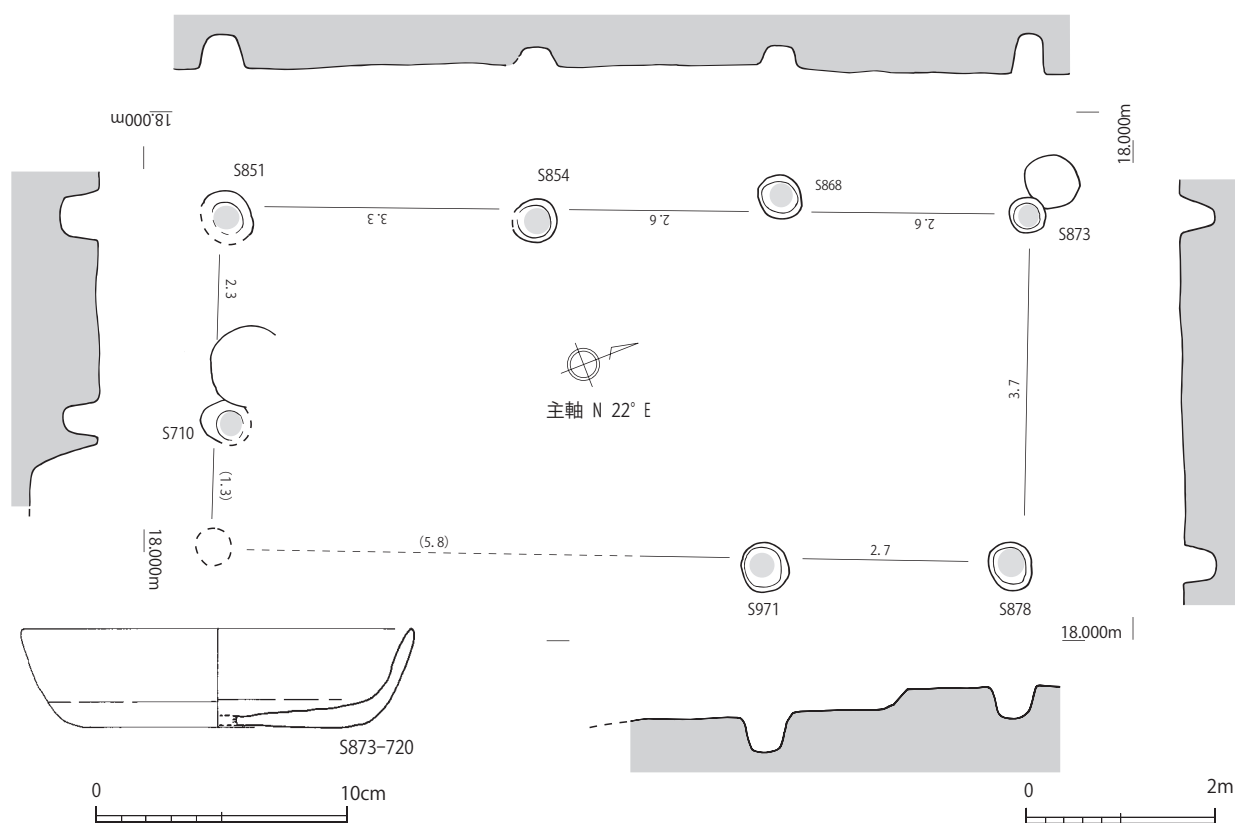
SB017(第 79 図)

SB017 は D・E - 2・3 区で検出した。切り合い関係は SB001 を切る。建物跡は南東部分は攪乱のため検出可能であった。建物規模は推定梁行 1 - 2 間、桁行 3 間であろう。柱穴平面プランは円形で、柱痕も円形で丸柱であろう。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第 79 図) は S873 から 720 が出土した。土師器坏である。



第 78 図 SB016 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第79図 SB017 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB018(第80図)

SB018 は E・F - 3・4 区で検出した。同時期の建物跡との切り合い関係はない。建物跡の柱穴は調査区外に近接しているため、すべて検出できていない。推定建物規模は梁行 3 + α 間、桁行 4 + α 間である。身舎面積は 53 + α 間である。柱穴平面プランはほぼ円形である。柱痕は一部の柱穴以外で確認でき、円形柱痕である。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。遺物は少量出土したが、図示できるものはない。

SB019(第81図)

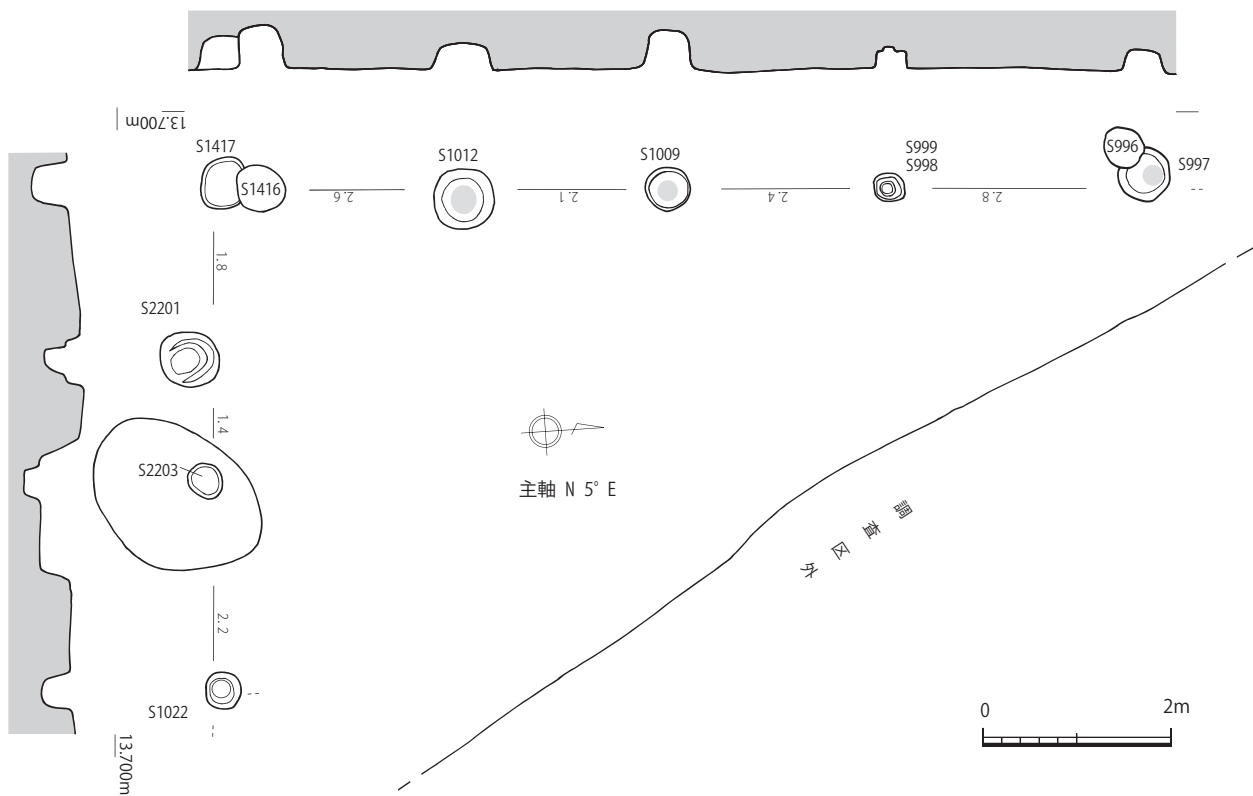
SB019 は E - 5・6 区で検出した。切り合い関係は SB009 を切り、SB20 に切られる。建物規模は梁行 1 間、桁行 3 間である。身舎面積は 19.6 m² である。柱穴平面プランは円形で、柱痕は一部の柱穴で確認でき、円形柱痕である。柱穴埋土は暗褐色粘質土で、柱痕は褐黄色粘質土である。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

遺物 (第81図) は S2223 で出土し、1038 は土師器高坏の脚である。穿孔を確認できる。

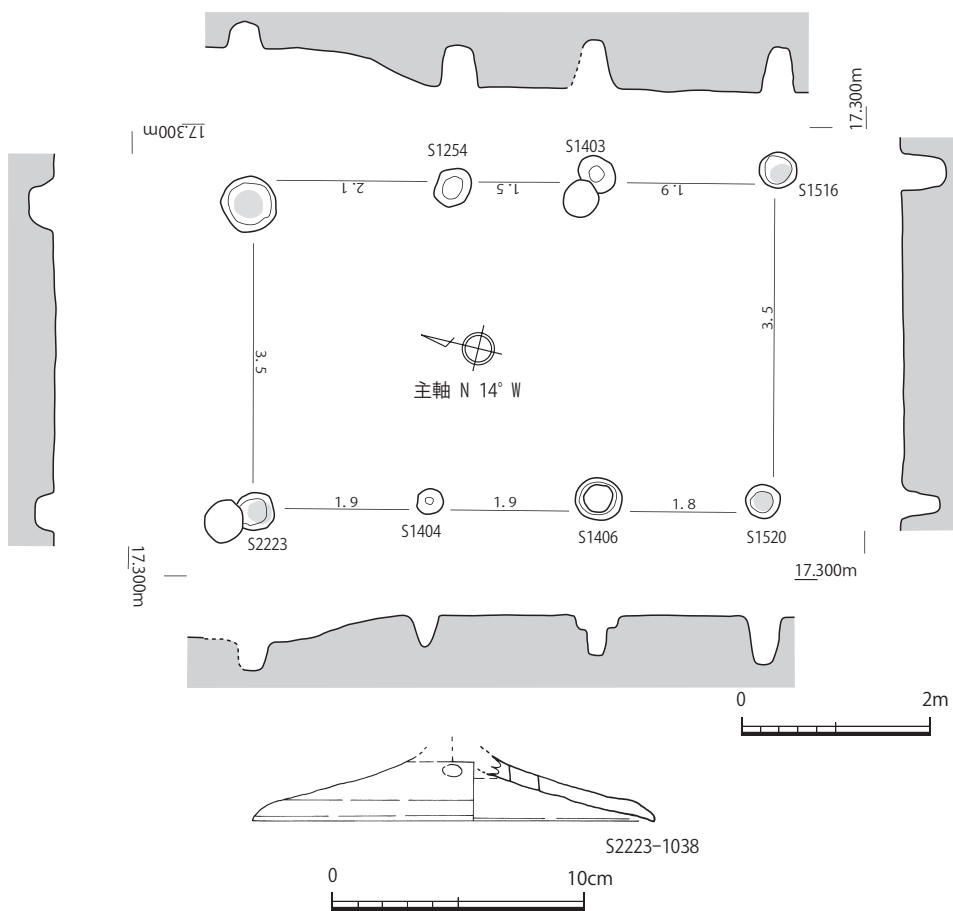
SB020(第82図)

SB020 は D・E - 5・6 で検出した。切り合い関係は SB009・010・019 を切る。建物規模は西側に庇が付く。建物規模は梁行 1 - 2 間、桁行 3 - 4 間である。東側桁行ラインの S1251 と S1407 間はやや間隔があく。また庇の桁行ラインも北側で間隔があく。身舎面積は 26.9 m² である。柱穴平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴で柱痕も確認した。円形柱痕で、丸柱であっただろう。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

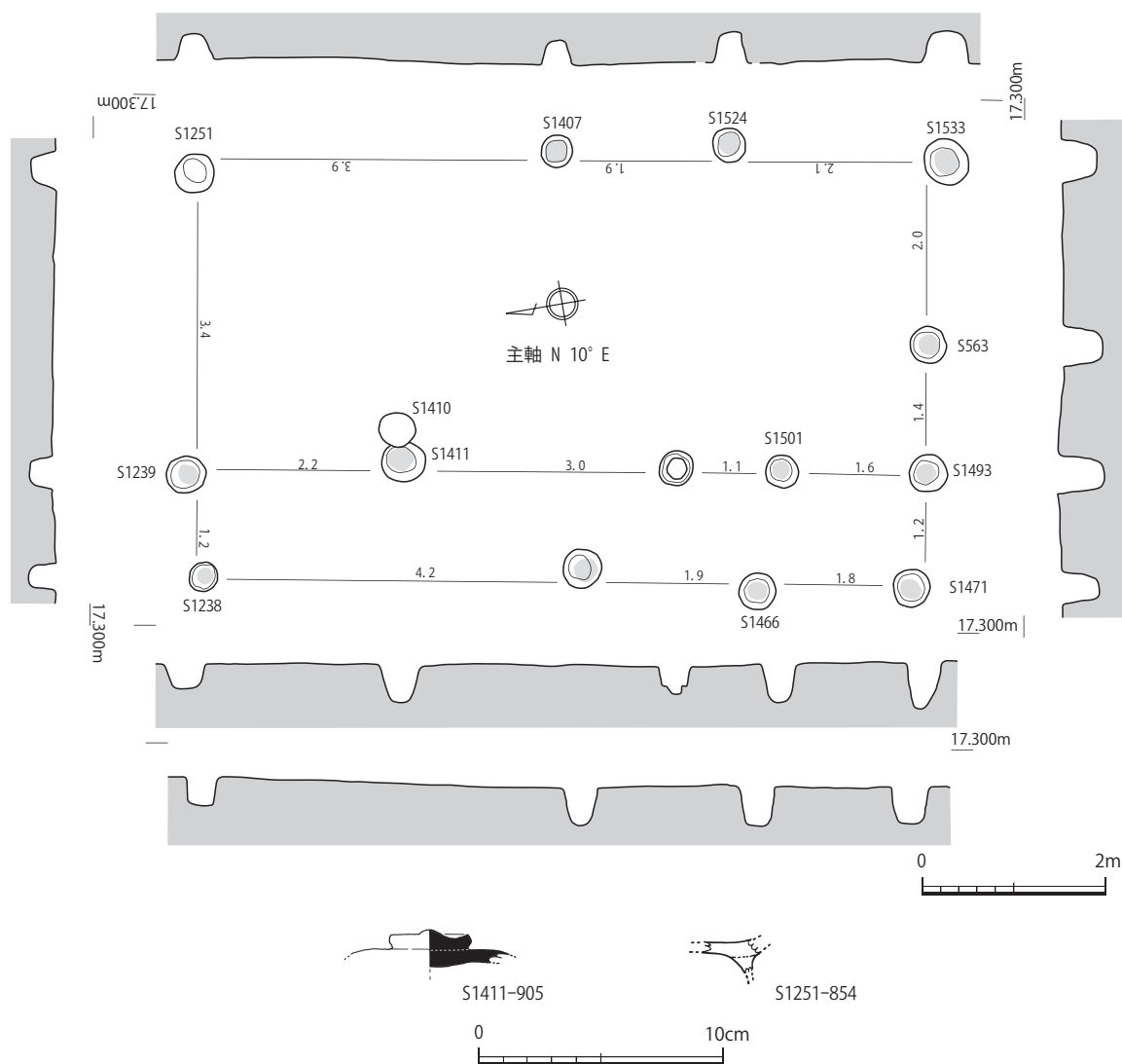
遺物 (第82図) は、2 点出土した。905 は S1411 からの出土で、須恵器蓋の天井部分である。扁平なツマミがつく。854 は S1251 からの出土で、土師器碗で、黒色土器 A 類である。



第 80 図 SB018 遺構実測図 (1/80)



第 81 図 SB019 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 82 図 SB020 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

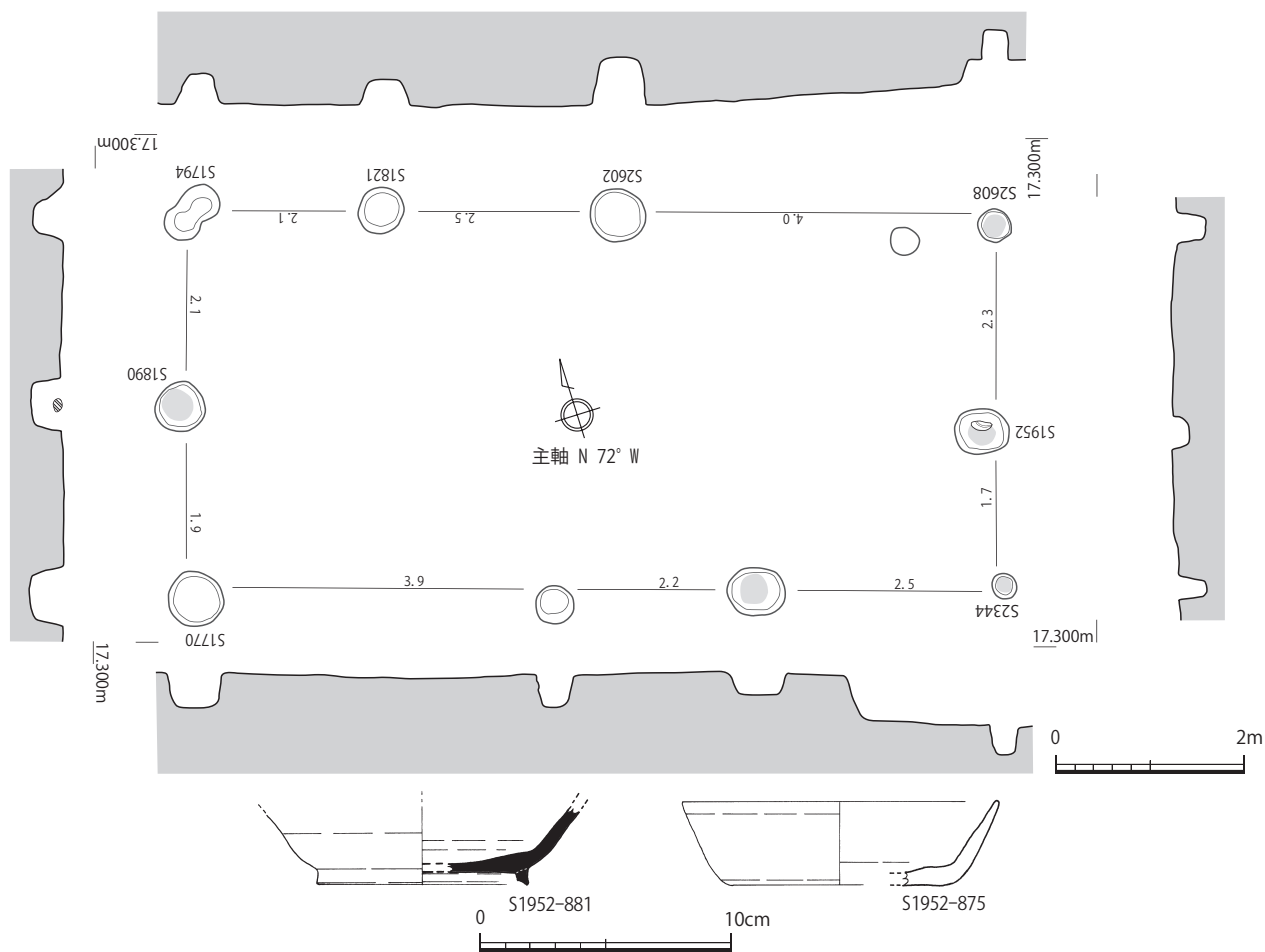
SB021(第 83 図)

SB021 は C・D－8 区で検出した。同時期の建物跡との切り合い関係はない。建物規模は梁行 2 間、桁行 3 間である。桁行の東西ラインとともに柱間距離が他に比べてやや間隔が開く箇所がある。身舎面積は 34.4 m²である。柱穴平面プランはほぼ円形を呈する。柱痕は一部の柱穴で確認でき、円形である。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

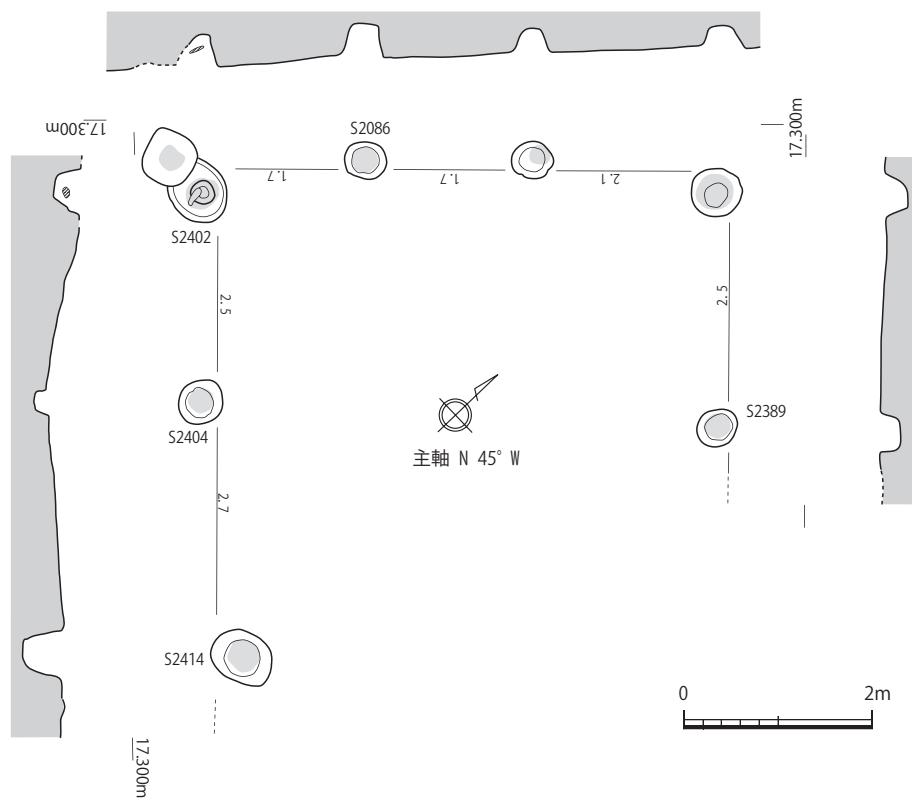
遺物 (第 83 図) は 2 点出土した。2 点ともに S1952 からの出土である。881 は須恵器椀である。高台は底部と胴部の屈曲する境付近に張り付ける。875 は土師器坏である。胴部は底部からやや外反しながらまっすぐにのびる。

SB022(第 84 図)

SB022 は C－9・10 区で検出した。切り合い関係は SB014 を切る。建物跡は調査区外に近接しているため、すべてを検出できていない。建物自体は南東方向に展開していきそうである。現状の推定建物規模は梁行 3 間、桁行 2 + α 間である。身舎面積は 28.6 + α m²である。柱穴平面プランはほぼ円形である。柱痕は検出しているすべての柱穴で確認できた。すべて円形である。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。出土遺物は少量出土したが図示できるものはなかった。



第 83 図 SB021 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

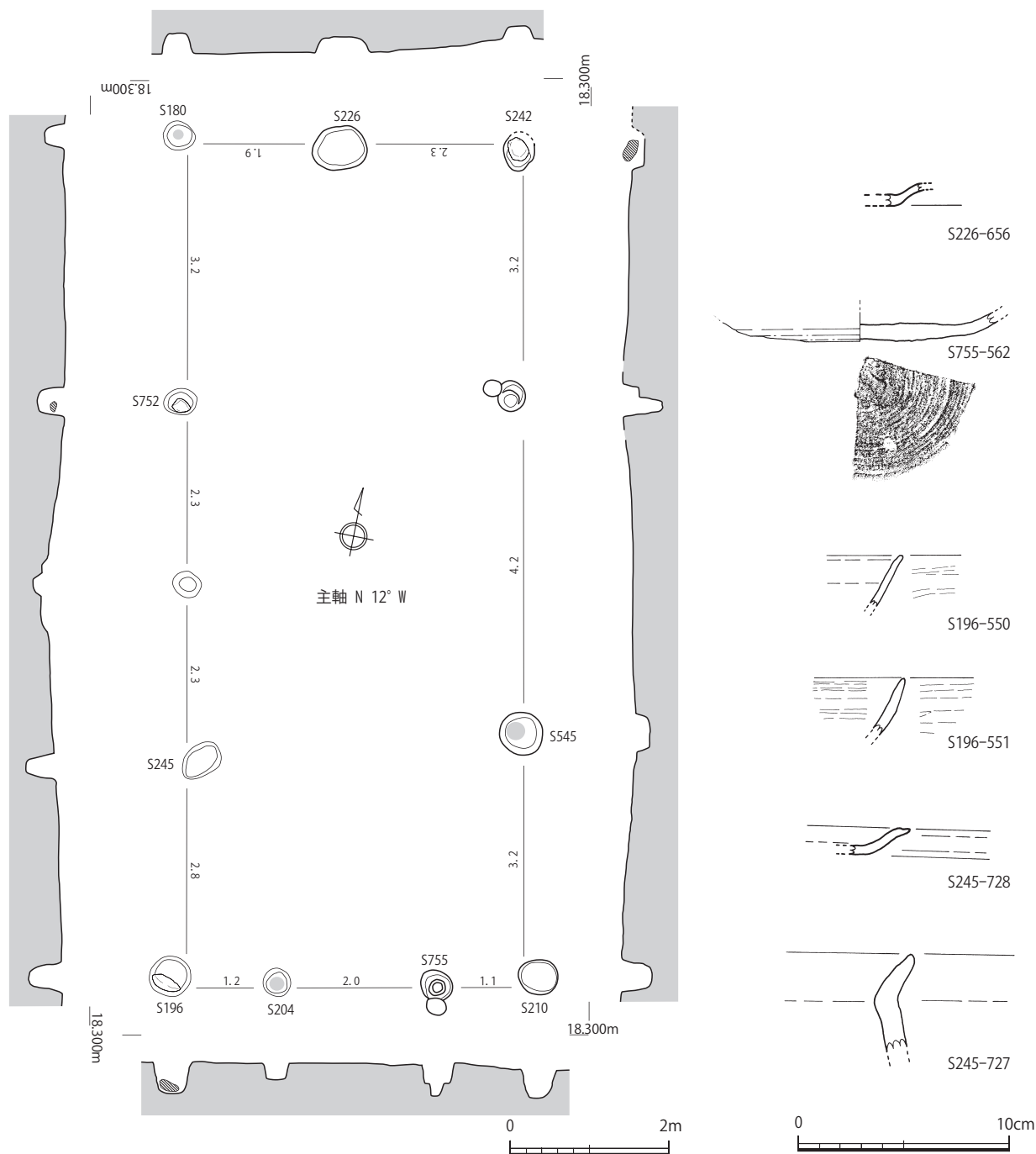


第 84 図 SB022 遺構実測図 (1/80)

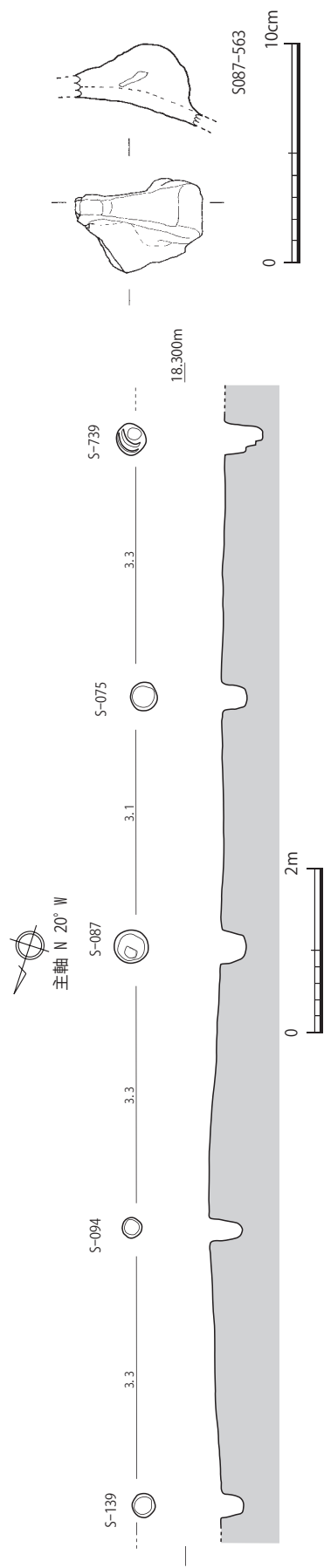
SB023(第 85 図)

SOB23 は A・B - 11・12・13 で検出した。切り合い関係は SOK60 に切られる。建物規模は梁行 2 - 3 間、桁行 3 - 4 間である。東側桁行ラインの S545 北側の間隔が他に比べて広い。身舎面積は 45.6 m² である。柱穴平面プランはほぼ円形を呈する。柱痕は一部の柱穴で確認でき、円形である。また S196・752・242 では、礫が出土し、柱を安定させる根石や礎盤石と推定される。また周辺の柱穴列がこの建物跡に伴う柵跡になる可能性もある。建物主軸方位と柱間距離は図に示した。

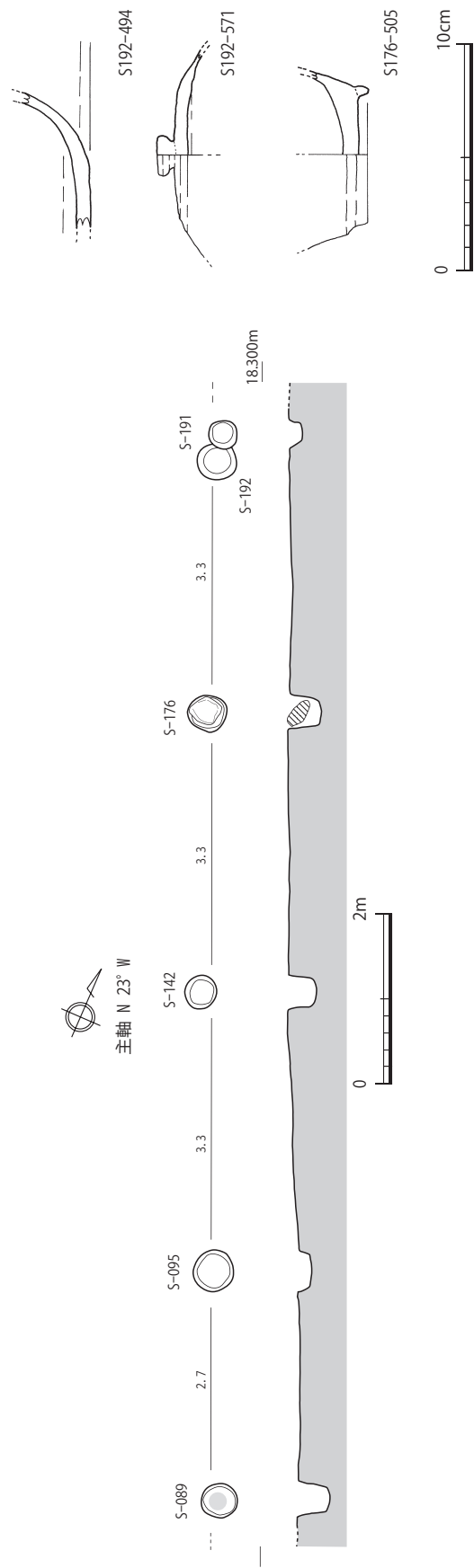
遺物 (第 85 図) は S226 から 656 の土師器盤、坏が出土した。S755 からは 562 の土師器坏が出土。底部は回転ヘラケズリを施す。S196 からは 2 点出土し、550 の土師器坏が出土。外面に横方向のミガキがはいる。551 は土師器坏片で、内外面ともに横方向ヘラミガキを施す。S245 から 2 点出土した。728 は土師器盤である。727 は土師器甕である。



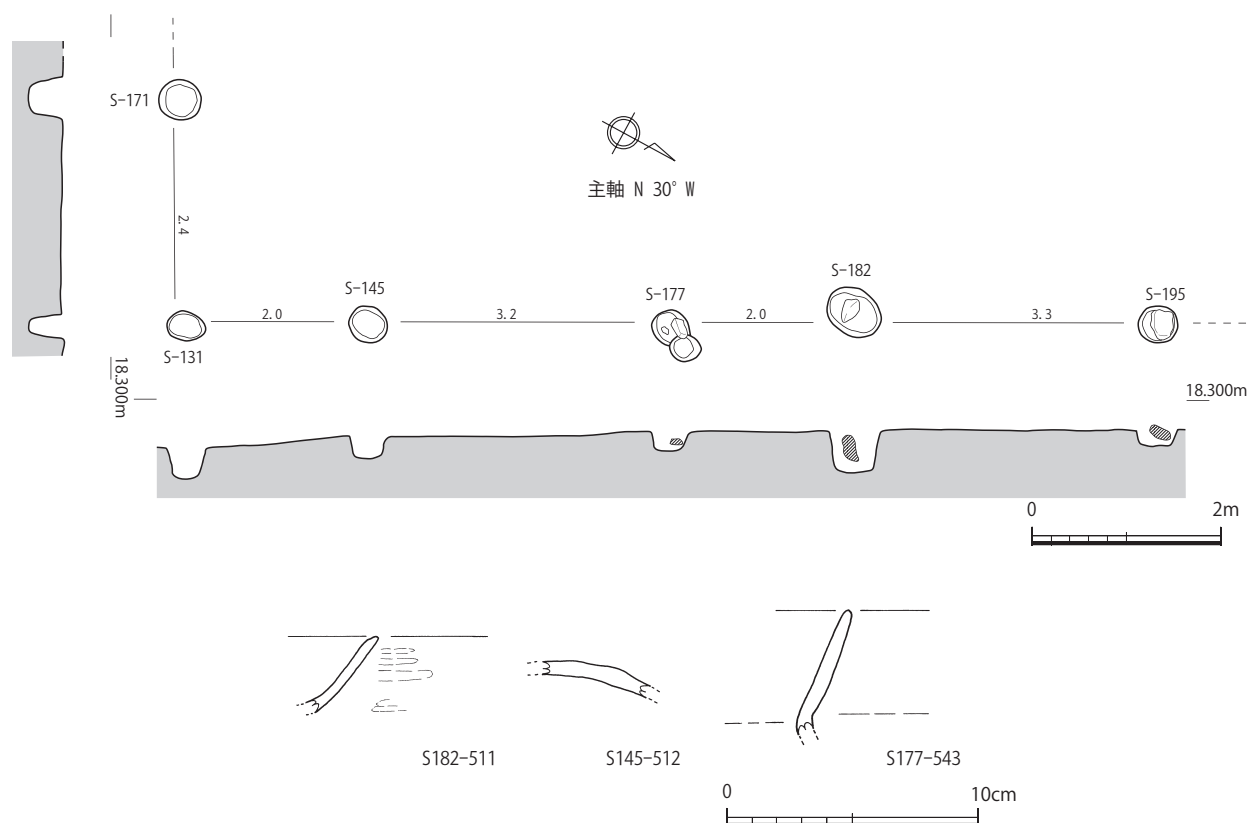
第 85 図 SOB23 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 86 図 SA001 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3))



第 87 図 SA002 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 88 図 SA003 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

ロ. 柱穴列 (SA)

古代の柱穴列は 3 列確認した。古代柱穴列は調査区南側の調査区外付近で検出したため、性格としては柵跡になるか、もしくは掘立柱建物跡を構成するものになると推定される。

SA001(第 86 図)

SA001 は A・B - 13・14・15 区で検出した。切り合い関係は特になし。規模は $4 + \alpha$ 間である。柱間距離はほぼ等間隔で 3 m 強である。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。遺物 (第 86 図) は 1 点出土した。S087 から 563 の土師器・甑の把手部が出土した。

SA002(第 87 図)

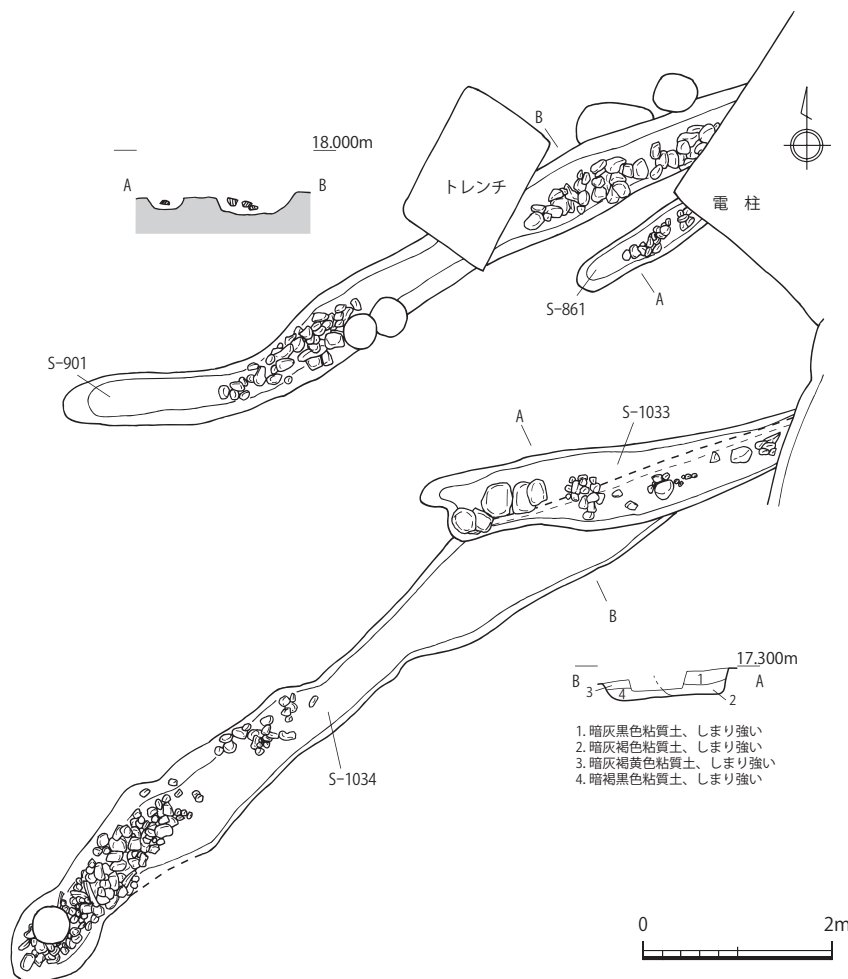
SA002 は A - 13・14 区で検出した。切り合い関係は特になし。規模は $4 + \alpha$ 間である。柱間距離は南側を除くと等間隔である。S176 は礎盤石と推定される礫が出土した。柱穴平面プランはほぼ円形である。柱間距離と主軸方位は図に示した。遺物 (第 87 図) は 3 点出土した。494 は土師器坏片、571 は土師器蓋である。天井部には若干、扁平なツマミが付く。505 は土師器小椀である。高台部が底部の一番外側に取りつく。

SA003(第 88 図)

SA003 は A・B - 13・14 区で検出した。切り合い関係は特になし。この柱穴列は南側で西側に折れて、のびる。規模は南北列で $4 + \alpha$ 間、東西列で $1 + \alpha$ 間である。柱穴平面プランはほぼ円形である。柱痕は確認できなかった。しかしながら、S177・182・195 において、礎盤石と推定される礫が出土した。柱間距離は不均等である。詳細な柱間距離と主軸方位は図に示している。遺物 (第 88 図) は、3 点出土した。S182 から 511 の土師器坏が出土。外面に横方向ミガキ調整を施す。S145 からは 512 の土師器蓋片が出土。S177 からは土師器壺もしくは甕の口縁部付近が出土した。

ハ. 溝跡 (SD)

古代の溝跡は5条ほど確認した。調査区D-3・4区付近で検出した溝跡には、拳大の礫が多く混入しているのが確認できた。またD・E-7区で検出したSD2200は東西方向に延びる。土器が多く出土した。溝の性格が水路跡なのか、区画溝なのかは不明であるが、付近で検出した建物跡と重複する時期と考えられ、関連があると推定される。



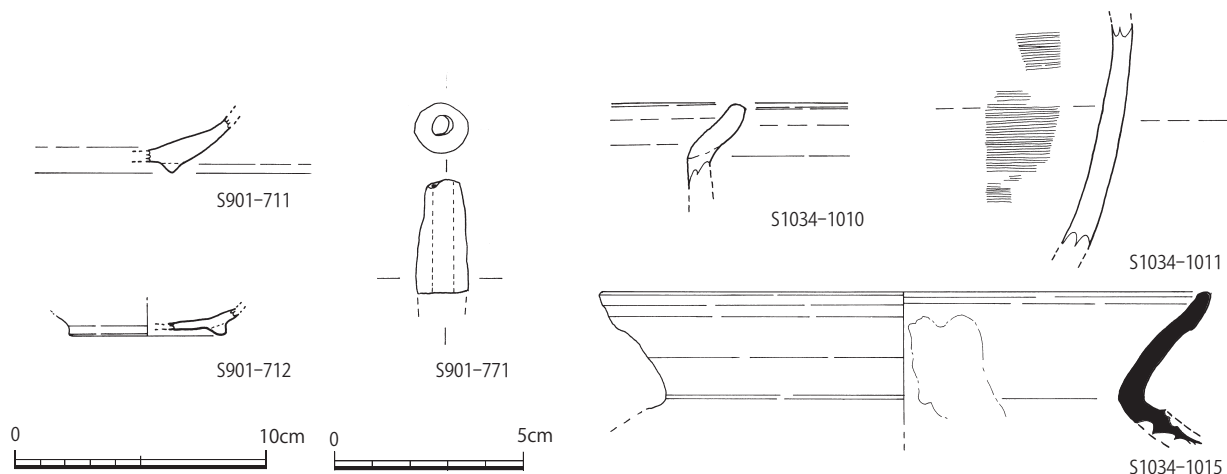
第89図 SD861、901、1033、1034 遺構実測図 (1/80)

SD861(第89図)

遺構はD-3区で検出した。切り合い関係は柱穴を切る。遺構の東側は攪乱により不明である。検出規模は最大長 $1.45 + \alpha$ m、最大幅 0.4 m、最大深 0.1 m である。埋土には拳大の礫が混入する。出土遺物は少量で、図示できるものはない。

SD901(第89図)

遺構はC・D-3・4区で検出した。切り合い関係は複数の柱穴ともつ。遺構の東側は攪乱により不明である。検出規模は最大長 $8.0 + \alpha$ m、最大幅 0.76 m、最大深 0.25 m である。埋土には拳大の礫の集中箇所が2か所見られた。遺物(第90図)は、711は土師器碗である。高台は断面三角形形状を呈し、底部外側に張り付けている。712は土師器碗で内黒土器である。断面四角形で、底部外側に張り付く。771は土製品で管状土錘である。



第90図 SD861、901、1034 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SD1033(第89図)

遺構はD-3・4区で検出した。切り合い関係はSD1034やS950などを切る。遺構東側は古代以後の造成で、削平を受けている。規模は最大長4.1+ α m、最大幅0.85m、最大深0.3mである。埋土は拳大～人頭大ほどの石が出土した。埋土は図に示した。遺物(第90図)は少量出土したが、小破片のみである。

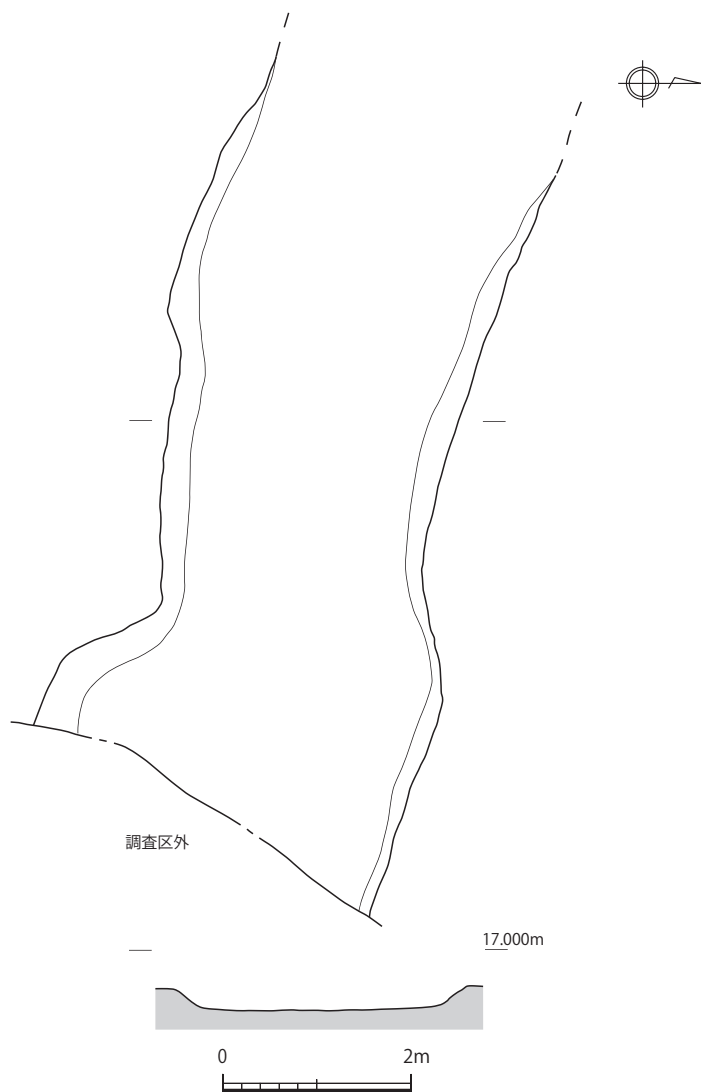
SD1034(第89図)

遺構はD-4区で検出した。SD1033とその他のピットから切られる。遺構はSD1033の底部で掘り方が確認でき、東側に延びるが、古代以後の造成により削平を受けていると推定される。規模は最大長10.0+ α m、最大幅1.20m、最大深0.15mである。埋土は図に示している。埋土中には拳大の礫が溝西端で集中して出土した。遺物(第90図)は1010は土師器甕である。1011は瓦質系甕もしくは壺か。内面に横方向の刷毛目がある。1015は須恵器甕の口縁部である。

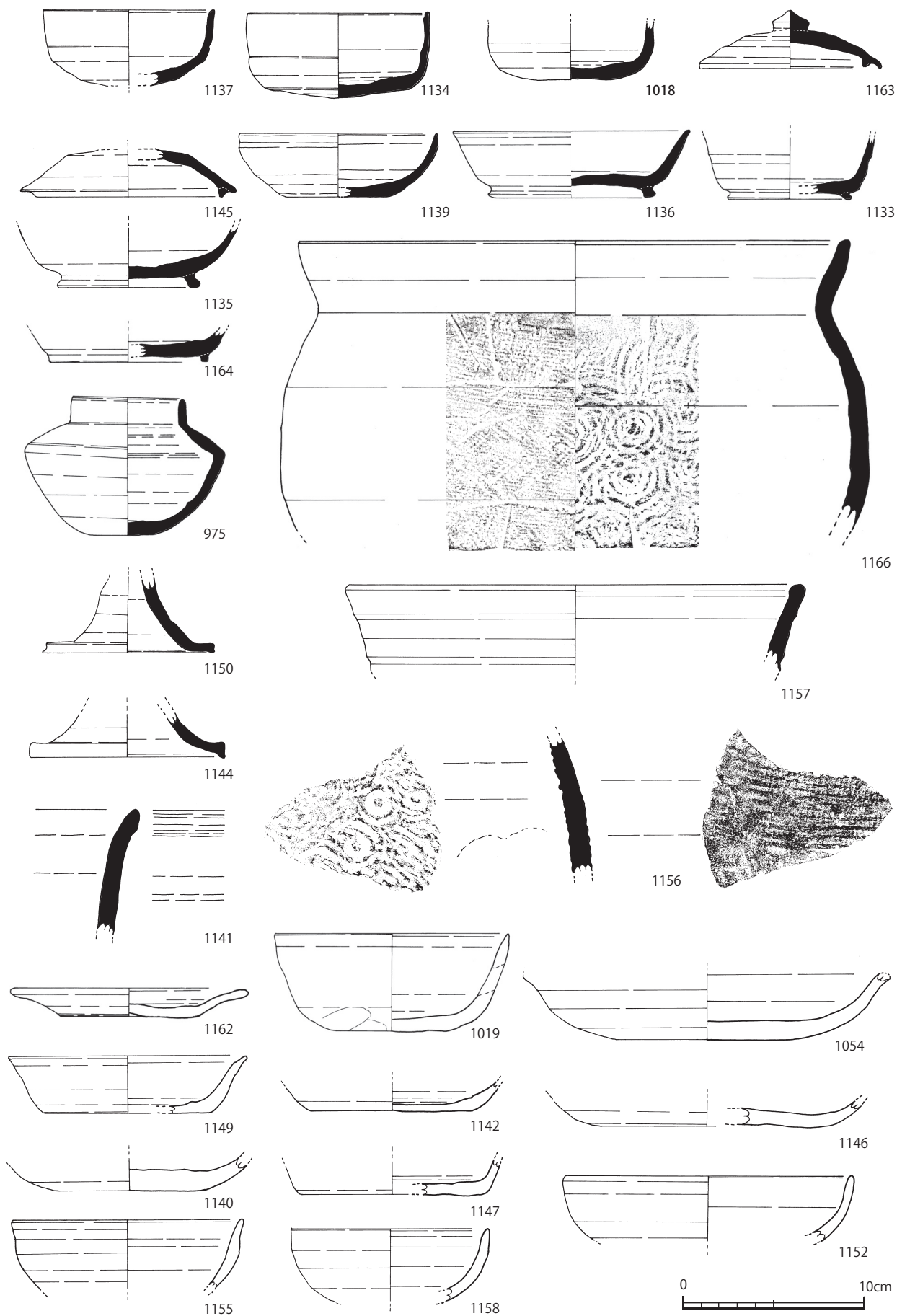
SD2200(第91図)

遺構はD・E-7区で検出した。複数の中世・古代ピットとの切り合いをもつ。溝は東西方向にのび、東側は古代以後の造成により削平され、西側は調査区外にのびる。規模は最大長8.4m、最大幅4.0m、最大深0.3mである。埋土は暗褐色粘砂質土であり、土器片を多く含む。遺物(第92・93図)は40点掲載した。須恵器

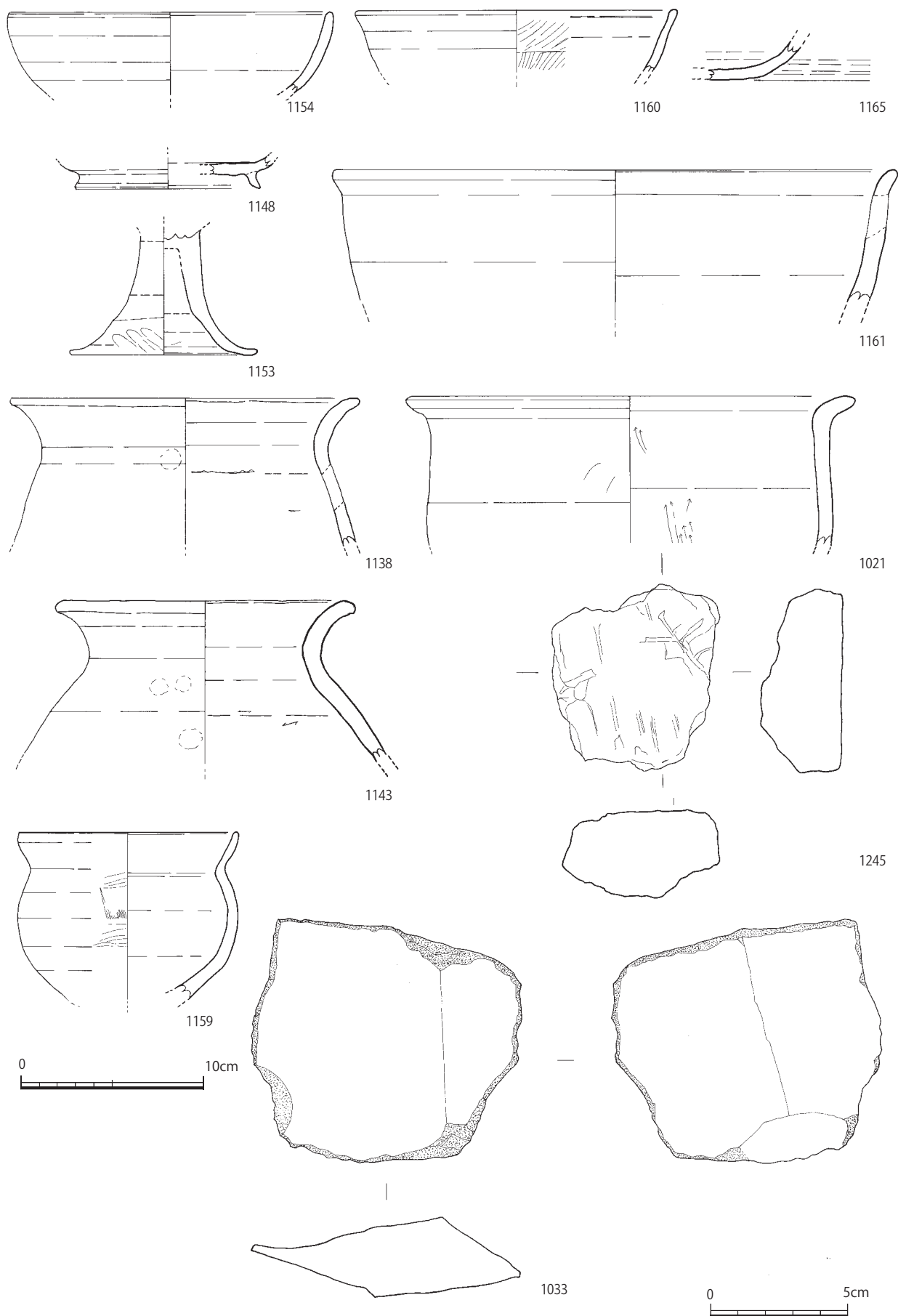
は1137ほか1145・1163は蓋である。1163は天井部に乳頭状のツマミがつく。1139は坏、1136・1133・1135・1164は椀である。1133は高台部が底部外側ラインより若干内側に張り付けているが、それ以外は底部の外側に張り付けている。975は埴、1144・1150は高坏脚。1144は脚端を下方につまみ出している。1166は甕で内面は同心円文、外面は格子目状のタタキのち刷毛状工具でナデている。1156・1157は須恵器甕口縁部。土師器は1162～1143(R番不順)で、土師器坏は1019、1149～1165(R番不順)である。1149は口縁端部を外反させる。1019は粘土積み上げで、底部に手持ちヘラケズリ痕のちナデ痕跡が残る。1155は口縁端部外面に強いナデ痕を残し、若干「く」の字状になる。1160は内面に刷毛状工具痕がある。土師器椀は1148である。1153は土師器高坏脚片である。1161は鉢で、成形は粘土積み上げ。1021・1138・1143は甕である。1159は小型甕。1159や1143は古墳時代の所産であろう。石製品は1033で、砂岩製の砥石である。土製品は1245で壁土片である。



第91図 SD2200遺構実測図(1/80)



第 92 図 SD2200 出土遺物実測図① (1/3)



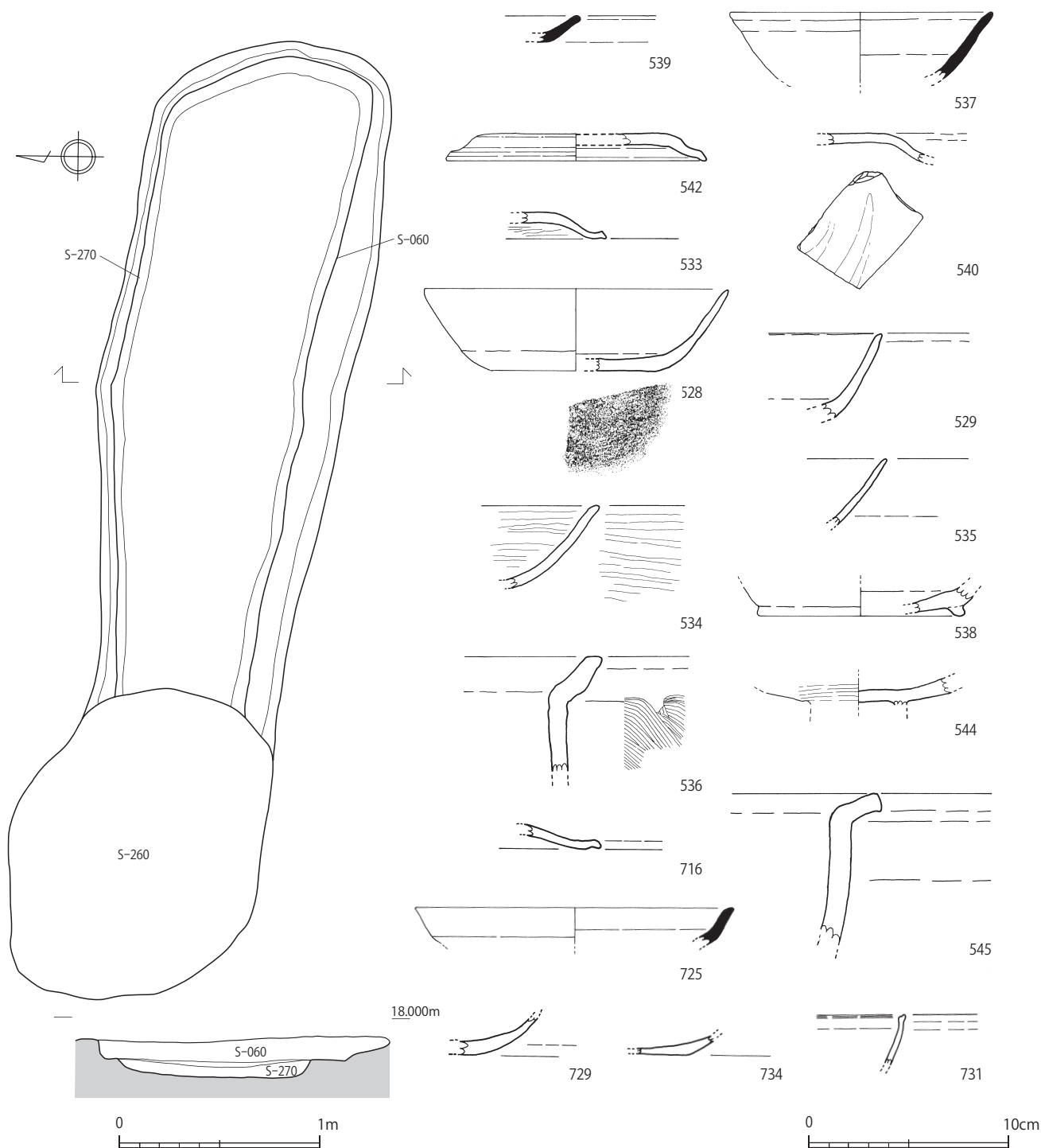
第93図 SD2200 出土遺物実測図② (1/3)

二. 土坑 (SK)

古代の土坑は調査区内で 10 基以上確認した。ここでは残存状況と出土遺物が良好な遺構を抽出して個別に掲載した。またここで取り扱う土坑としては廃棄的なものから意図的なものまでが含まれると推定される。また掘立柱建物跡とも重複する時期でもあり、掘立柱建物跡との関連が推定される。

SK060・SK270(第 94 図)

遺構は A・B - 12 区で検出した。切り合い関係は SB023 を切り、SK260 に切られる。SK260 は出土遺物は皆無であったが、拳大状の礫が集中して検出された。古代もしくは中世の遺構であると考えられる。また SK060 と SK270 は分けて遺構の掘り下げをおこなったが、その埋土は暗茶褐色粘質土であり、2 遺構とも類似するため、一連の遺構の可能性もあることを注意したい。SK060・270 とも平面プランは長い楕円形を呈し、

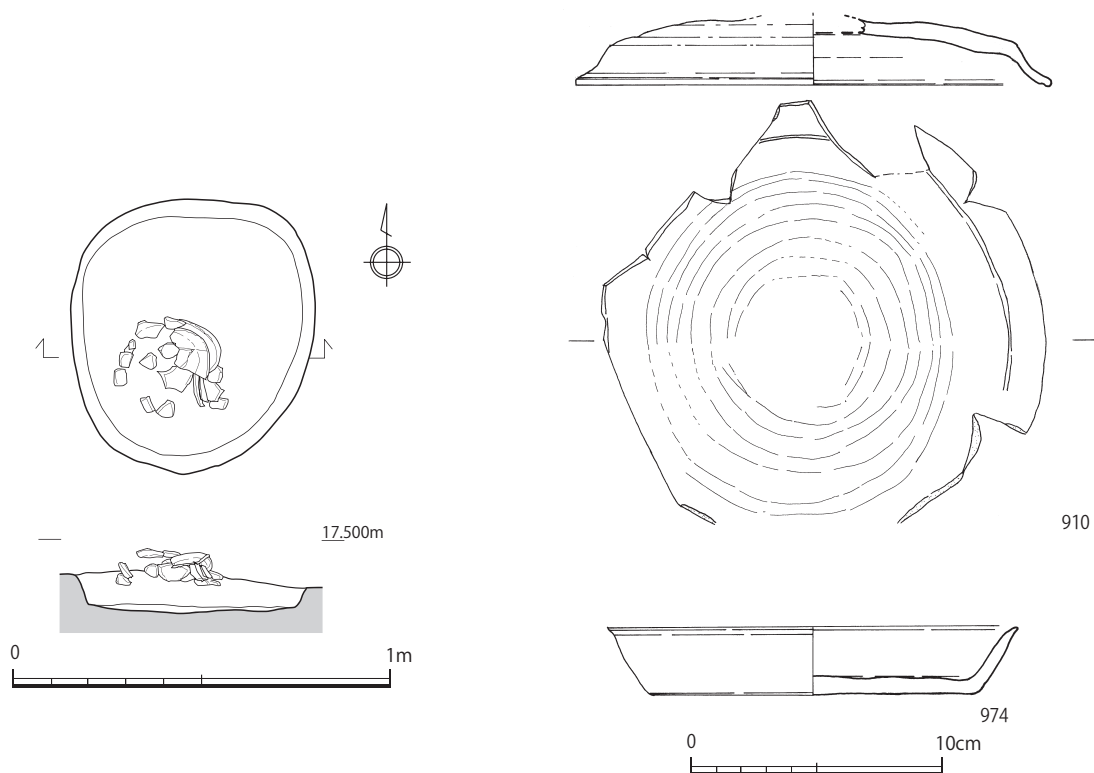


第 94 図 SK060・270 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

東側をSK260に切られる。SK060は長軸3.3m、短軸1.2m、最大深0.15m、SK270は長軸3.2m、短軸0.95m、最大深0.1mを計る。出土遺物(第94図)は、SK060は須恵器は盤1点、坏もしくは椀1点出土、土師器は蓋が3点、坏4点、椀1点、高坏1点、甕2点が出土した。540は内面に回転ヘラミガキが残る。534は胴部の内外面に横方向ミガキを施す。536の外表面は荒い刷毛状工具痕がのこる。SK270は須恵器坏? 1点、土師器蓋1点、坏3点が出土した。731は口縁端部を若干器壁を厚くし、内外面にヨコナデ痕が強くのこる。

SK1029(第95図)

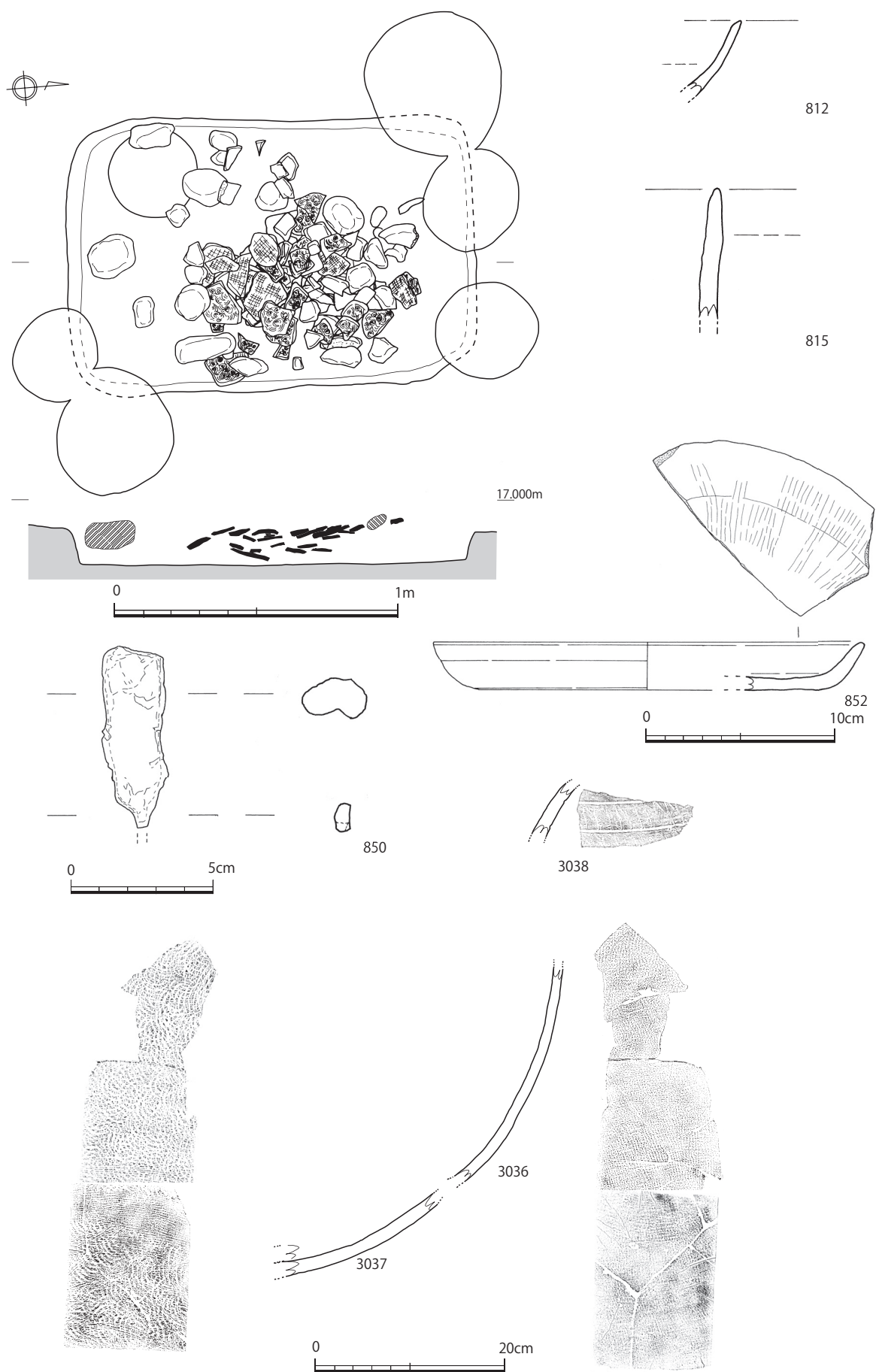
遺構はD-4区で検出した。切り合いはSK950、SD1033を切る。平面プランは楕円形を呈する。規模は南北軸で0.73m、東西軸で0.62m、最大深0.15mを計る。埋土は暗褐色粘質土である。土坑底部に遺物が2点重なって出土した。意図的に置かれた可能性がある。遺物(第95図)は、土師器が2点出土した。910は蓋である。外面天井部は回転ヘラケズリのちミガキ、ナデを施す。内面は回転ヘラミガキ痕跡が残る。口縁端部内側には1条の沈線が巡る。974は盤で、底部はロクロ切り離しのちナデ調整。



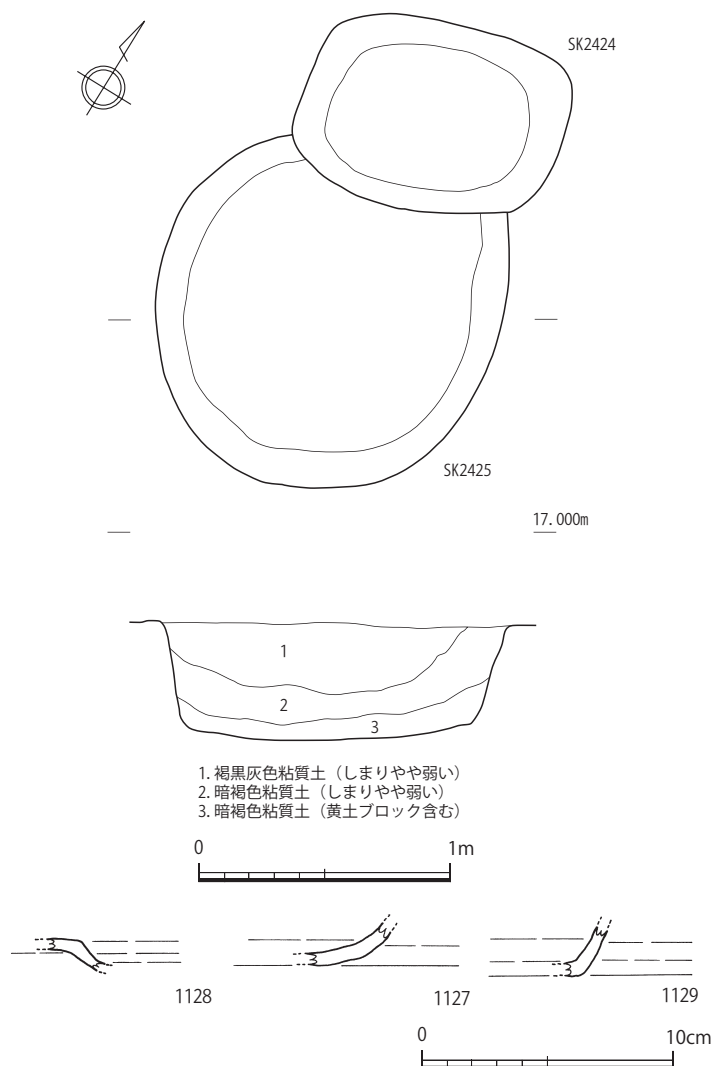
第95図 SK1029遺構・出土遺物実測図(1/20・1/3)

SK1695(第96図)

遺構はD-7で検出した。切り合い関係はSP2479と複数の中世ピットに切られる。平面プランは隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.45m、短軸0.95m、最大深0.15mを計る。埋土は暗褐色灰色粘質土で、炭化物混じる。埋土から、拳大～人頭大の礫が少量出土した。また須恵器甕の破片が多く出土し、そのほか土師器類も出土している。須恵器甕片は意図的に破碎した可能性もある。遺物(第96図)は土師器は3点出土、852は坏もしくは盤で、内面はナデ調整のち放射状の暗文を施す。812は坏で口縁端部を面取りしシャープにしている。815は鉢片か。鉄製品は1点出土し、850は羽子板状の鉄鏃である。須恵器は甕1点が出土し、完形にはならないが、底部～胴部にかけての破片と口縁部片を確認したが、法量を出せなかった。口縁部付近外面には櫛描状の波状文を残す。胴部は格子目状タタキのち工具によるナデ調整、内面は胴部中央付近は同心円文、底部付近は同心円文のち刷毛状工具痕が残る。



第 96 図 SK1695 遺構・出土遺物実測図 (1/20・1/2・1/3・1/6)



第 97 図 SK2425 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK2425(第 97 図)

遺構は C - 11 区で検出した。切り合い関係は古代の SK2424 に切られる。平面プランは推定円形に近い。規模は直径約 1.4 m 前後で、最大深 0.5 m を計る。埋土は土層観察により、3 層に分層できた。褐色粘質土主体の埋土であり、レンズ状に堆積している。廃棄土坑であろう。遺物 (第 97 図) は土師器 3 点が出土した。すべて破片であり残存状況は良好ではない。1128 は蓋である。1127、1129 は坏の底部片である。1127 のほうが 1129 底部から胴部の屈曲部は丸みをもちながらたちあがっていく。

ホ. その他柱穴 (SP)(遺構第 45-48 図, 遺物第 98-105 図)

ここでは、特に掘立柱建物跡などの個別遺構に掲載することができなかった主に古代に該当する柱穴からの出土遺物をまとめて掲載する。中にはこれら柱穴が掘立柱建物跡や柵跡などを構成するものもあると思われるが、遺構配置図で遺構場所と出土遺物の報告にとどめる。S 番号 (検出区) のごとに述べていく。

S014(C - 16) 土師器坏片が 2 点出土。566 は口縁部片、590 は底部片である。

S044(B - 16) 549 は土師器蓋片である。

S045(B - 15) 619 は土師器坏である。

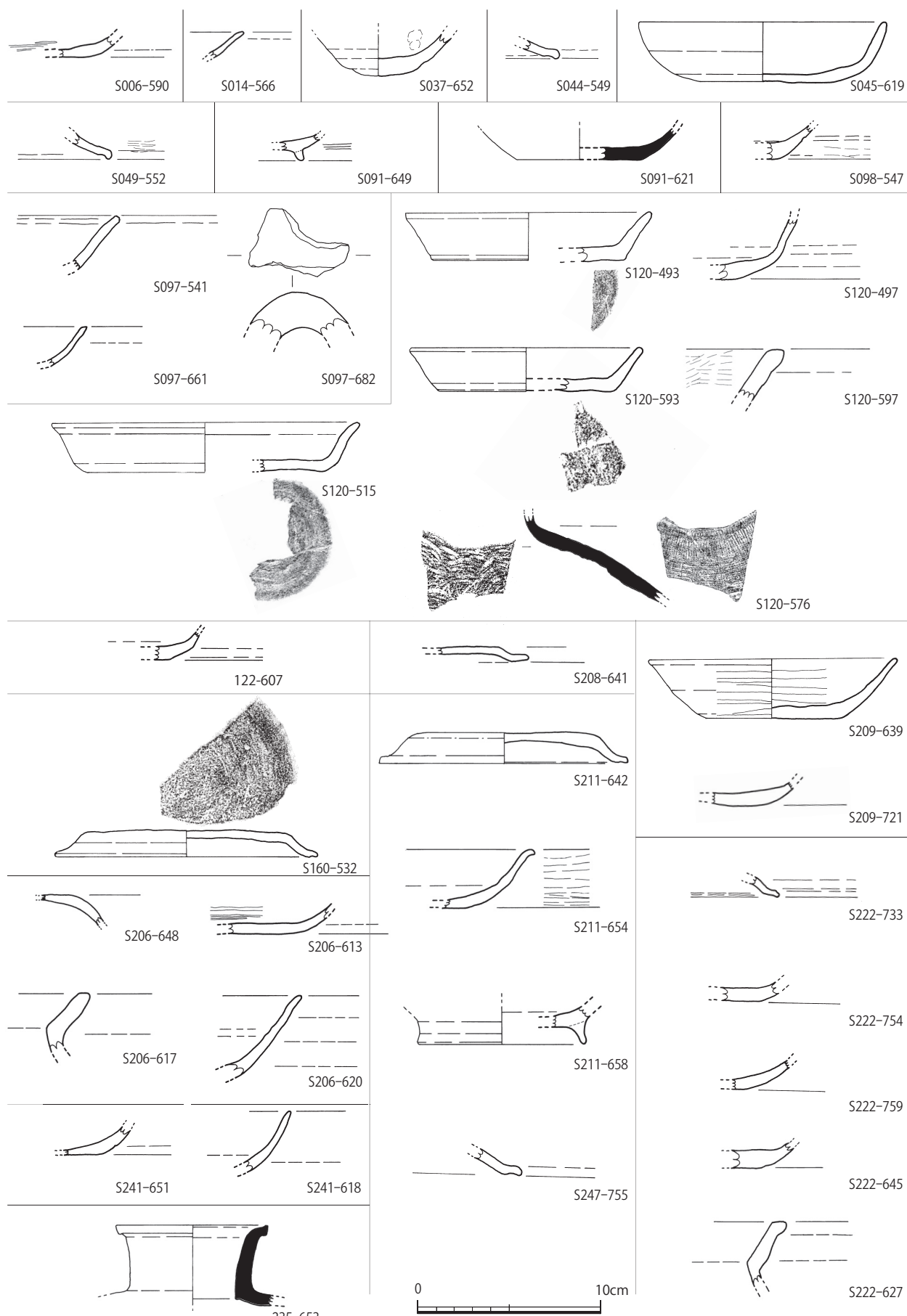
S049(B - 15) 552 は土師器蓋か。外面横方向ヘラミガキを施す。

S091(A - 14) 649 は土師器碗である。外面に横方向ヘラミガキ痕を残す。621 は須恵器坏片である。

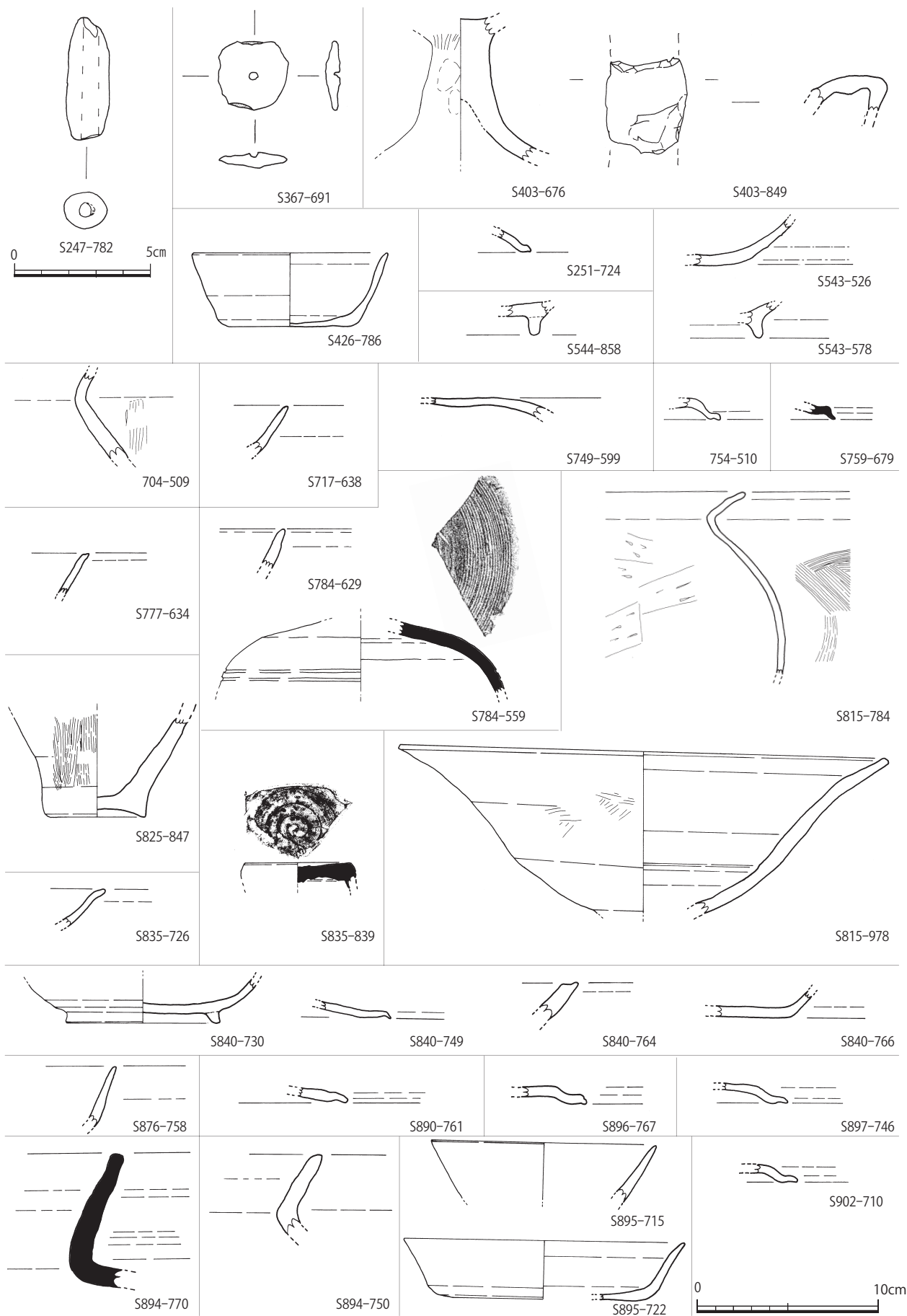
- S097(A - 14) 541・661 は土師器坏片、682 は丸瓦片である。
- S098(B - 14) 547 は土師器坏である。
- S120(B - 15) 土師器坏 4 点、土師器甕 1 点、須恵器甕片 1 点出土。515 は底部回転ヘラ切りのちナデ。497 は胴部途中で屈曲し、やや外反しながらのびる。576 は内面に同心円文、外面はタタキのちナデ調整。
- S122(B - 15) 607 は土師器坏片。
- S160(A - 12) 532 は土師器蓋。天井部回転ヘラケズリのちナデ調整。
- S206(A - 13) 土師器 4 点出土。613・620 は坏。617 は甕。648 は蓋。
- S208(A - 13) 641 は土師器蓋片。
- S209(A - 13) 639 は土師器坏。底部は回転ヘラ切り。内外面に横方向ヘラミガキを施す。721 は土師器坏片。
- S211(B - 13) 土師器が 2 点出土。654 は坏。外面に横方向ヘラミガキ痕あり。口縁端部を外側につまみだす。658 は土師器碗である。
- S222(A - 12) 土師器片 5 点出土。733 は蓋片。754・759・645 は坏片。627 は土師器甕片である。
- S235(B - 11) 653 は須恵器甕の口縁部。
- S241(B - 13) 651 は土師器坏片。
- S247(A - 12) 755 は土師器蓋片である。782 は土製品で管状土錘である。
- S251(A - 12) 724 は土師器蓋片である。
- S543(B - 12) 578 は土師器碗片。526 は土師器坏片である。胴部外面にケズリ痕が巡る。
- S544(A - 12) 858 は土師器碗片である。
- S704(C - 5) 509 は土師器甕片である。外面に縦方向の刷毛目が見える。古墳時代の所産であろうか。
- S749(A - 13) 599 は土師器蓋片である。
- S754(A - 14) 510 は土師器蓋片。
- S759(B - 12) 679 は須恵器蓋。
- S777(A - 12) 634 は土師器坏片である。口縁端部を面取りして、断面を四角状にしている。
- S784(C - 5) 629 は土師器坏である。559 は須恵器壺もしくは瓶片である。外面肩部にカキメが巡る。
- S815(D - 4) 784 は土師器甕。外面は刷毛目調整で、内面は横方向ケズリ。口縁部は「く」の字状に屈曲する。古墳時代前期の所産。978 は土師器高坏の坏部である。外面の一部に刷毛目調整が残るが、内外面とも丁寧なナデ調整である。
- S835(D - 4) 726 は土師器坏。口縁端部を外反させる。839 は須恵器壺系の蓋。天井部は回転工具調整。
- S840(D - 4) 土師器 4 点出土。749 は蓋。766 は坏。730 は碗。764 は甕か。
- S876(E - 2) 758 は土師器坏片である。
- S890(D - 2・3) 761 は土師器蓋片である。
- S894(E - 2) 770 は須恵器甕口縁部片。750 は土師器甕口縁部片。
- S895(E - 2) 土師器坏片が 2 点出土。823 は底部から胴部はやや外反してのびる。
- S896(D - 4) 767 は土師器蓋片である。
- S902(D - 4) 710 は土師器蓋片である。
- S905(D - 3) 823 は土師器坏である。内外面ともナデ調整。
- S911(D - 3) 713 は土師器坏。841 は須恵器坏底部。内面にナデのち放射状の工具痕あり。
- S912(C - 4) 703 は土師器甕片である。
- S918(D - 2) 768 は土師器蓋片。
- S932(D - 2) 土師器坏が 3 点出土した。778 は外底部回転ヘラ切りのちナデ調整。外面は丁寧なナデ。
- S935(D - 2) 土師器が 4 点出土した。752・738・747 は坏。742 は甕片である。736 は須恵器碗である。
- S936(D - 2) 745 は土師器坏もしくは盤か。器高は低い。740 は須恵器甕口縁部片である。

- S937(D - 2) 739・744 は土師器坏片である。古墳時代の所産であろうか。
- S938(D - 2) 743 は土師器坏である。
- S939(D - 2) 705 は土師器片である。坏もしくは盤。704 は土師器甕である。外面工具ナデ痕が巡る。
- S943(D - 2) 756 は土製品管状土錘である。
- S946(D - 2) 737 は土師器坏底部片である。
- S950(D - 4) 706 は土師器坏である。外底部は回転ヘラ切りである。748 は土師器椀である。777 は土師器甕片で、外面には荒い刷毛状工具痕が残る。
- S975(D - 4) 779 は土師器坏である。外底部は回転ヘラ切りのちナデである。
- S1003(F - 3) 1005 は土師器で、坏で、底部は突出している。1006 は土師器蓋か。
- S1010(E - 4) 980 は土製品で管状土錘である。
- S1070(C - 5) 967 は土師器鉢である。外面にわずかに刷毛状工具痕がのこる。
- S1094(F - 5) 952 は土師器椀底部片である。
- S1118(F - 5) 948・979 とも土師器甕である。948 は口縁部は「く」の字状に丸く屈曲させる。979 は内面は横から斜め、縦方向のケズリ痕跡がのこる。外面には意図的に欠いたと思われる欠損が認められる。
- S1139(F - 5) 957 は須恵器椀である。外底部は回転糸切りのち高台貼り付け、ナデ調整を行う。1001 は土師器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ。1001 は中世に帰属する可能性もある。
- S1189(D - 4) 923 は土師器坏である。外面にヘラ状工具痕のこる。
- S1193(E - 5) 956 は土師器坏もしくは椀。口縁部付近の器壁が若干肥厚する。
- S1217(E - 5) 873 は土師器坏である。
- S1242(E - 5) 867 は須恵器蓋である。
- S1243(E - 5) 856 は須恵器蓋である。天井部を欠損している。868 は土師器甕で、874 は鉢片か。粘土積み上げ痕が確認できる。
- S1268(D - 5) 876 は土師器甕の胴部である。
- S1280(D - 5) 924 は須恵器椀である。930 は土師器鉢である。922 は土師器高坏。脚部外面はヘラ状工具による調整。坏部外面には縦方向刷毛目調整を施し、のちナデ。947 は土師器甕の口縁部。胴部に把手が付く可能性あり。
- S1331(D - 5) 937 は須恵器椀である。
- S1394(D - 6) 934 は須恵器蓋片、940 は土師器椀である。
- S1401(E - 6) 901 は須恵器蓋片、897 は土師器椀底部、914 は土師器坏で器壁厚く、内面に放射状の暗文が見える。906 は土師器鉢である。内外面ともにユビオサエによる調整が明瞭である。(SB028 参照・中世 pit)
- S1411(E - 6) 905 は須恵器蓋片で、天井部のツマミである。
- S1484(D - 6) 907 は須恵器坏もしくは盤片である。904 と 907 は S1484 と S1488 の遺構間接合したものである。904 は土師器甕の底部。弥生時代の所産か。904 は土師器高坏脚部。
- S1530(E - 6) 916 は土師器椀片である。高台部は底部外側に「ハ」の字状にとりつく。
- S1539(D - 6) 915 は土師器高坏脚部。穿孔 1 つあり。
- S1619(C - 7) 828 は土師器甕把手。
- S1648(D - 7) 825 は須恵器坏身片。804 は土師器坏口縁部片である。
- S1651(D - 7) 987 は土師器高坏脚部。内面は横方向のケズリ。
- S1655(D - 7) 814 は須恵器蓋坏。813 は須恵器口縁部。794 は土師器椀片である。
- S1659(D - 7) 992 は灰釉陶器椀片。996 は土師器甕の把手である。
- S1666(D - 7) 997 は土師器坏。
- S1667(D - 7) 1003 は須恵器蓋である。口縁端部を下方に屈曲させる。外面は回転ヘラケズリ。

- S1672(D－6・7) 983 は土師器坏である。口縁端部はすぼまりながら、若干外反する。外面は横方向ヘラミガキ痕と内底部に回転ヘラミガキ痕が確認できる。
- S1693(D－7) 835 は土師器坏。外底部は手持ちヘラケズリのちナデ。838 は土師器坏片。外面最終調整はミガキ。816 は土師器甕片である。
- S1697(D－7) 836 は須恵器蓋片。天井部に扁平ツマミをつける。817 は土師器甕片である。834 は土師器鉢。内外面ともに荒い刷毛状工具調整やユビオサエ痕が残る。840 は土師質で、胴部の破片か。円形に穿孔があるようである。円筒埴輪片か。
- S1808(C－8) 787 は土師器坏である。
- S1828(C－8) 827 は土師器坏底部である。
- S1833(C－8) 796 は土師器坏もしくは高坏か。内面は丁寧なナデ調整である。798 は土師器坏で、内面は横う方向ミガキ調整である。848 は高坏の脚部。内面は横方向ヘラケズリ。外面は縦方向にヘラ状工具による面取り。この遺構は古墳時代か。
- S1872(D－8) 789 は須恵器坏もしくは碗の口縁部。
- S1890(C－8) 801 は土師器坏である。外底部は回転ヘラ切りのち回転ヘラミガキを施す。胴部外面もまた横方向に回転ヘラミガキを施す。内面はナデ調整。
- S1903(D－8) 863 は土師器坏片。
- S1923(D－8) 853 は内黒色土器碗である。
- S2022(B－9) 1055 は土師器坏もしくは鉢片である。
- S2080(C－9) 1022 は内黒土器碗片である。
- S2137(B－10) 1050 は須恵器蓋。1045 は須恵器高坏。1051 は土師器甕口縁部。1115 は土師器甕把手である。
- S2212(E－5) 1028 は須恵器蓋である。口縁端部は下方に屈曲する。
- S2248(F－5) 1025 は須恵器坏である。胴部は丸みを帯びながらのびる。
- S2249(F－5) 1041 は土師器高坏の坏部。内面は横方向刷毛状工具調整後斜め方向にヘラミガキ。外面は丁寧なナデ調整。1042 は土師器甕で、外面は刷毛目調整。内面はケズリのちナデ。口縁部は「く」の字状に外反する。
- S2250(F－5) 965 は土師器坏。高坏の坏部の可能性あり。973 は土師器甕片。外面は刷毛状工具による調整。内面はヘラ状工具による調整。
- S2257(E－6) 969 は土師器蓋。955 は土師器高坏脚部。内面は横方向ヘラケズリ。
- S2258(E－6) 963 は弥生土器甕の底部か。976 は土師器甕の胴部。
- S2294(D－7) 964 は須恵器蓋片。970 は土師器坏片。962 は土師器鉢片。
- S2304(C－8) 994 は土師器高坏脚部。外面はヘラ状工具による面取りのあと縦方向ミガキ調整。991 は土師器小型の高坏。
- S2307(C－8) 984 は土師器坏底部であろう。
- S2346(C－9) 993 は土師器坏底部である。
- S2350(C－9) 1039 は弥生土器甕である。995 は土師器鉢。外面は刷毛状工具による調整。1049 は土師器もしくは弥生土器の胴部片。
- S2380(C－9) 985 は須恵器碗である。高台は「ハ」の字状に外底部の一番外側に付く。
- S2401(C－10) 1103 は土師器甕の口縁部である。
- S2431(C－8) 1105 は土師器碗で、器高は低い。
- S2469(C－8) 1126 は土師器坏である。外面は横方向ミガキを施す。
- S2475(C－7) 1119 は土師器鉢。
- S2484(D－6) 1107 は土師器鉢か。1108 は土師器坏。



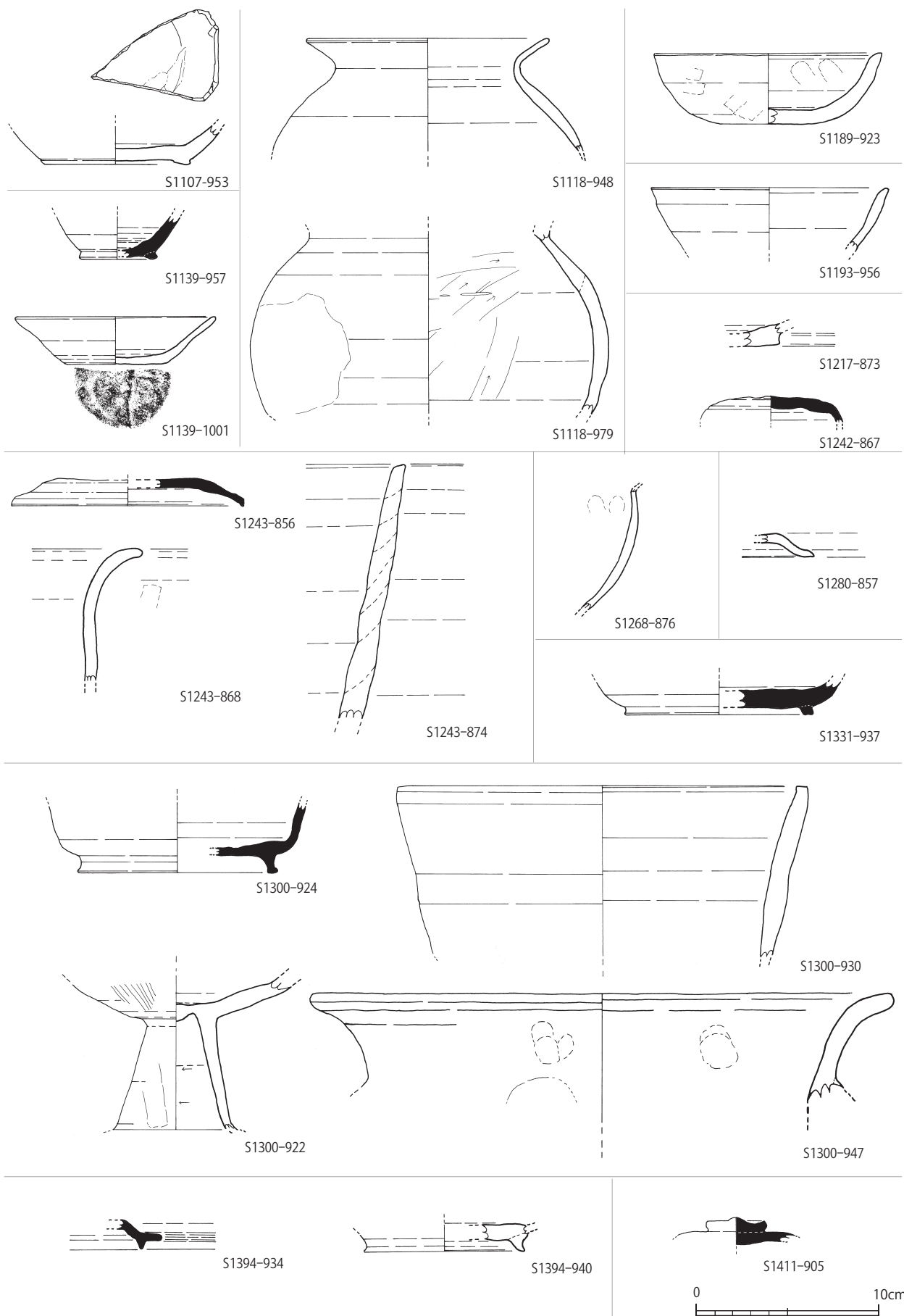
第98図 その他柱穴出土遺物実測図① (1/3)



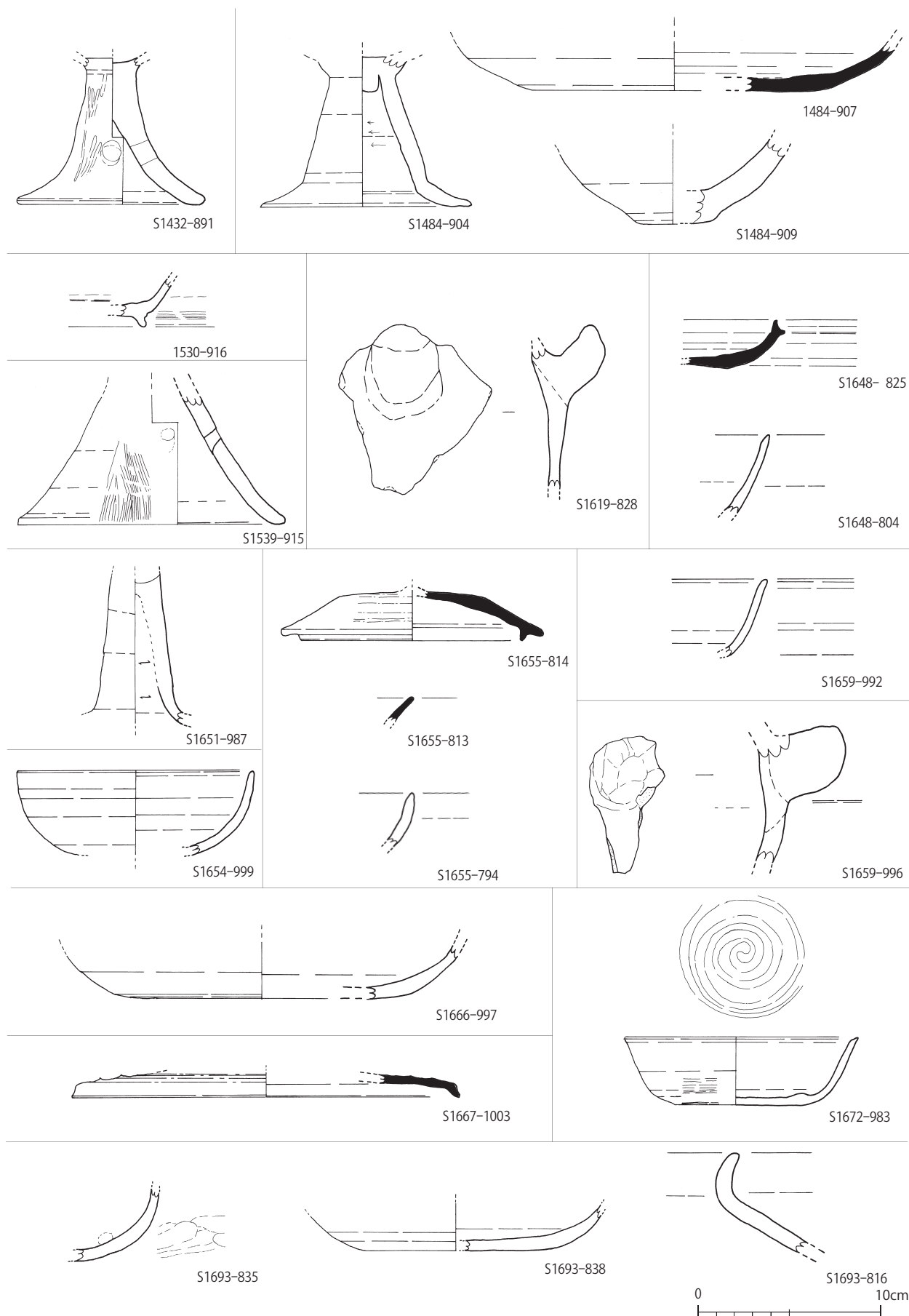
第 99 図 その他柱穴出土遺物実測図② (1/3)



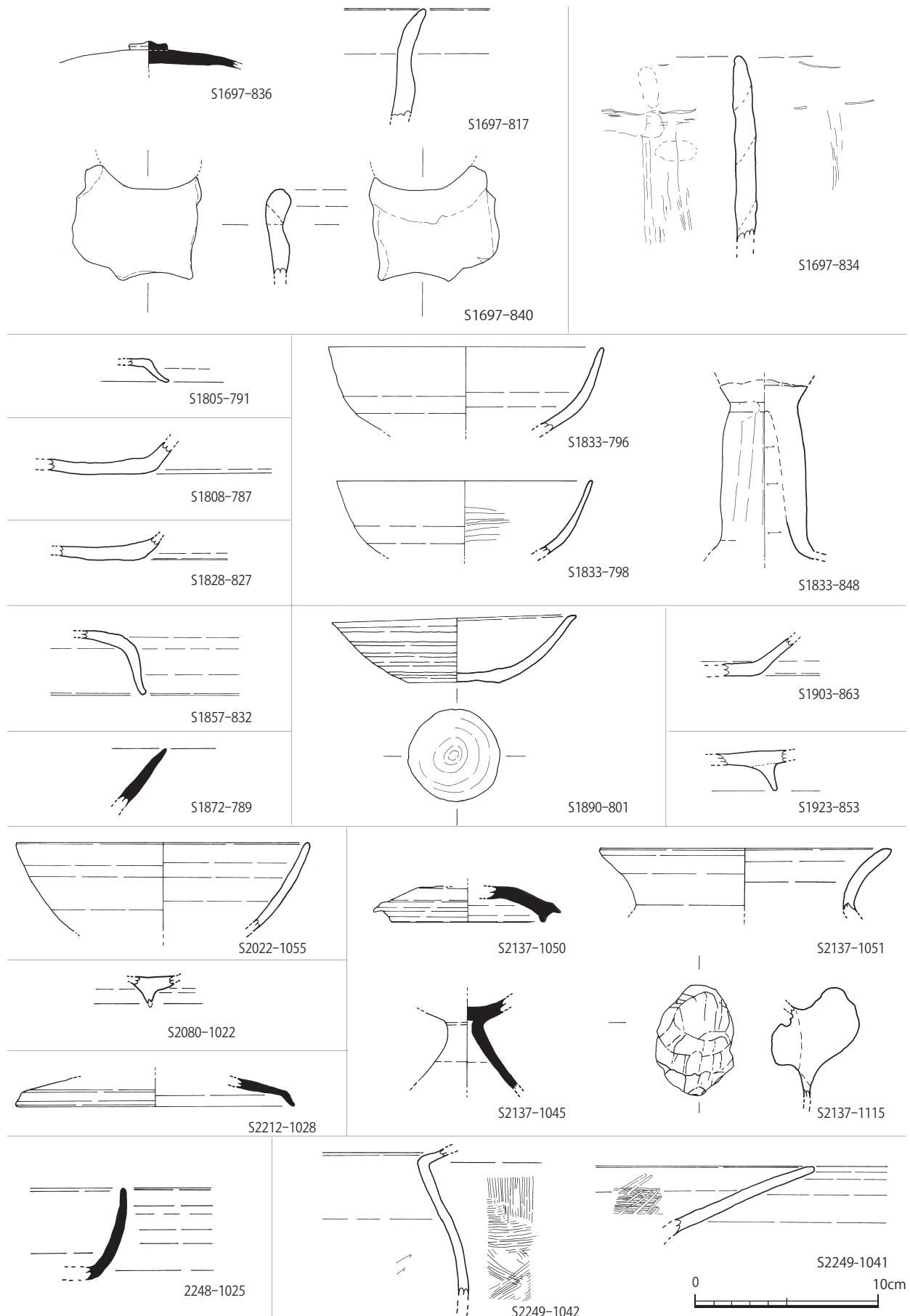
第 100 図 その他柱穴出土遺物実測図③ (1/3)



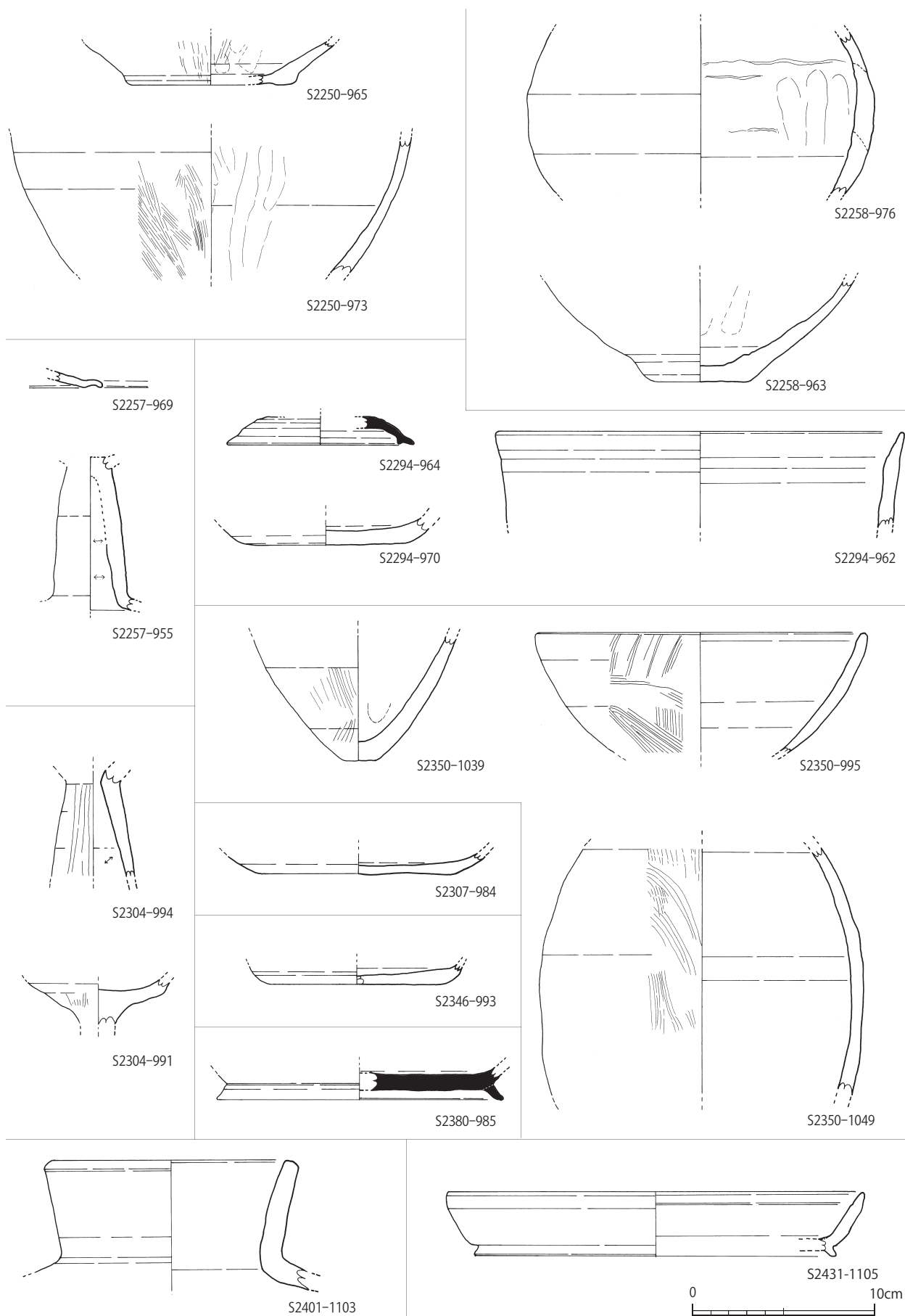
第 101 図 その他柱穴出土遺物実測図④ (1/3)



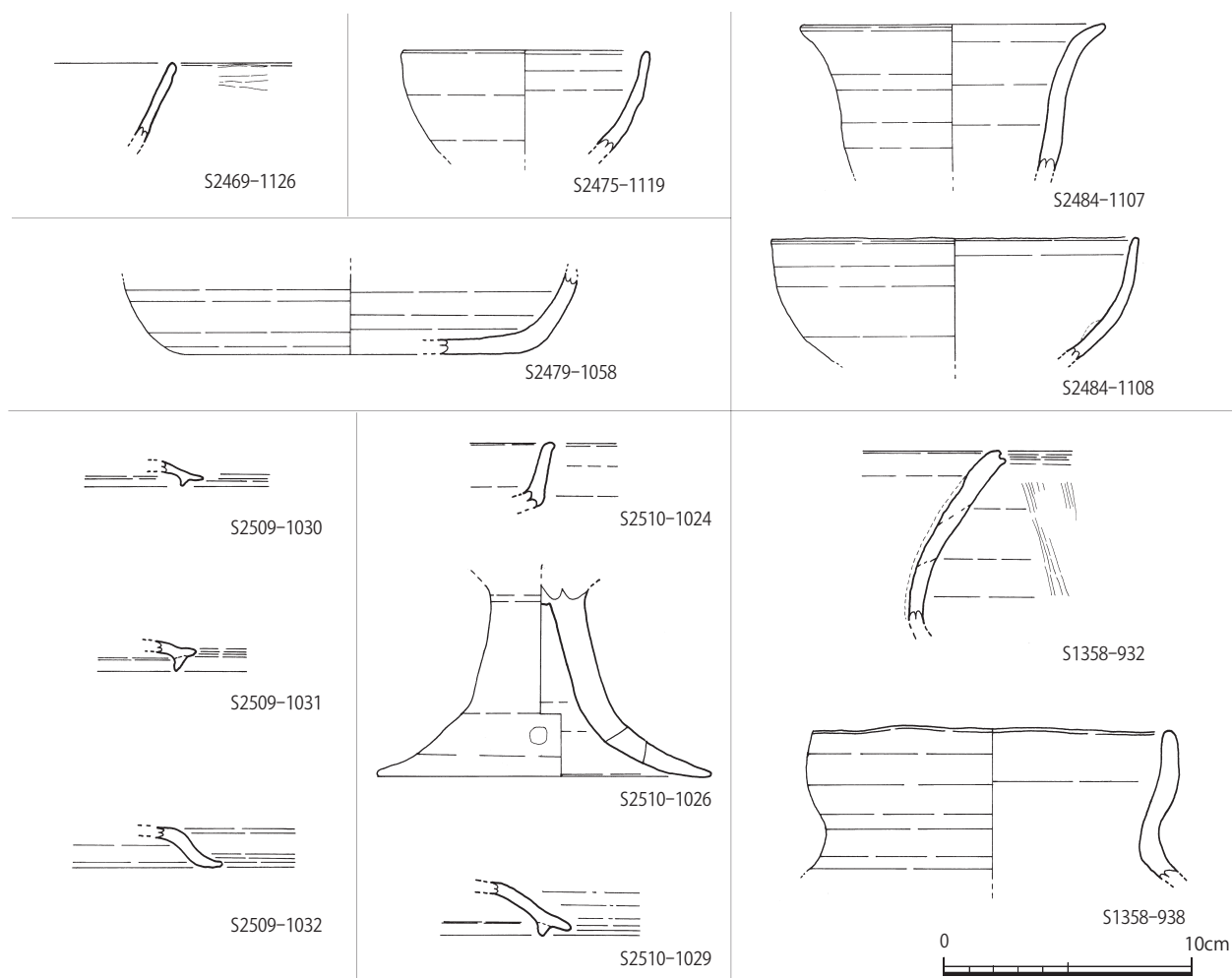
第 102 図 その他柱穴出土遺物実測図⑤ (1/3)



第 103 図 その他柱穴出土遺物実測図⑥ (1/3)



第 104 図 その他柱穴出土遺物実測図⑦ (1/3)



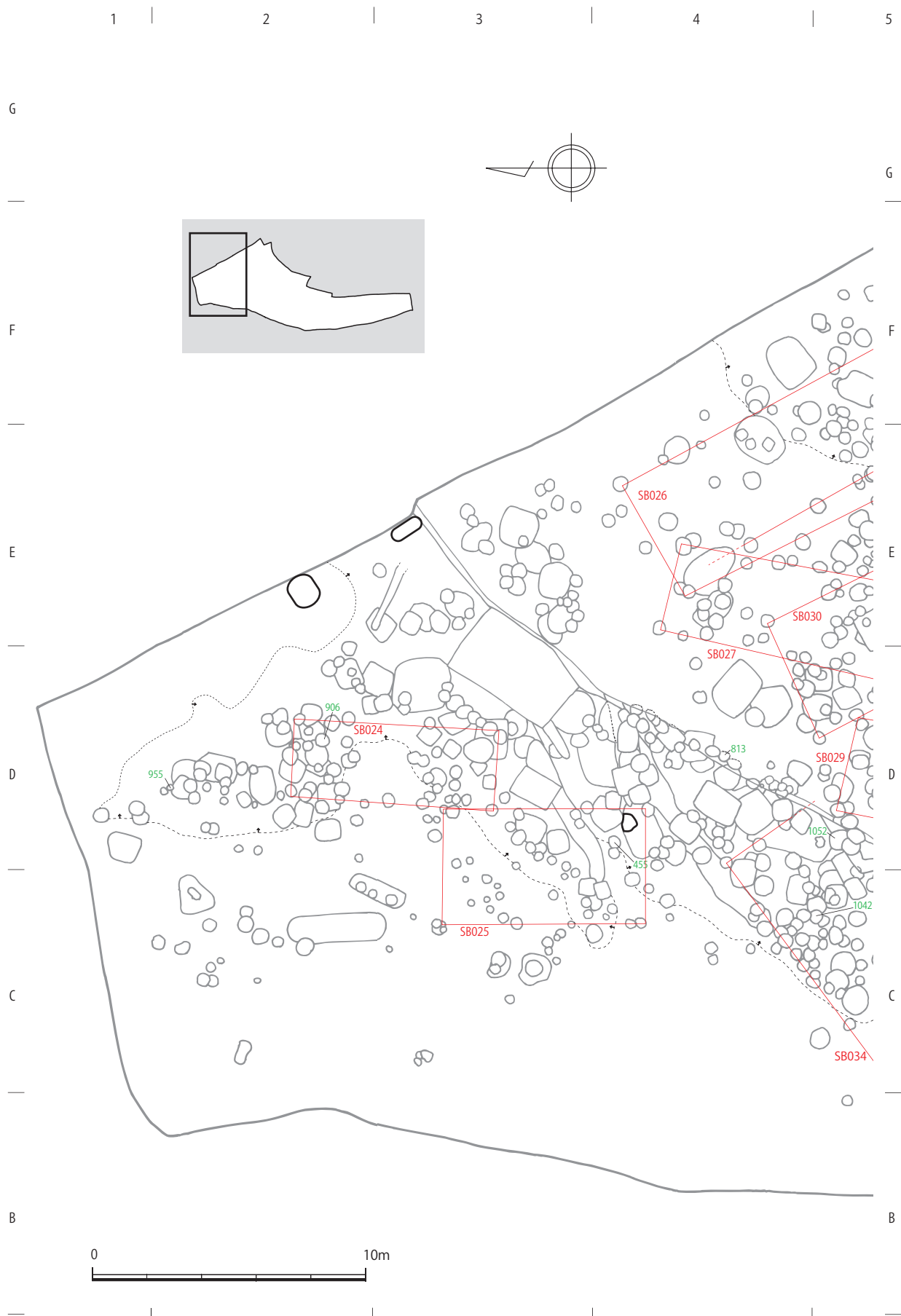
第 105 図 その他柱穴出土遺物実測図⑧ (1/3)

(4) 中 世 (室町時代)

中世の遺構は、調査区全体で検出できた。調査区東側には北から南まで中世に該当する造成土が存在し(第44図参照)、この造成土に切りこむ遺構が多い。造成土除去後も中世遺構は数は少ないが検出できた。ただ前述したが、調査区南側の11～17区は中世造成土は除去していない。また調査区北側の中央やや西側に段差が付く。調査前の水田の状況でもこの段差はあった。調査区西側の丘陵から東側にかけて緩やかに傾斜しているが、いつの時代に段差が設けられたのかは不明である。しかしながら、中世の建物跡も削られているものが数棟存在するため、中世以後に段差が設けられたのであろう。一方、当調査区の地名は「福寿庵」という字名が残っている。「福寿庵」から丹生川を挟んで、東側に字名「大恵寺」があるが、この大恵寺の塔頭の1つが福寿庵だったといわれる。今回調査で検出された遺構もこの福寿庵に関連する可能性は少なからずあるだろう。検出遺構は掘立柱建物跡30棟・土坑・溝跡・造成土などを検出した。全体的な出土遺物は少ない。しかしながら、後述するSK1265は土師質土器100枚弱と銭貨を整然と配置し、埋納していることがわかった。掘立柱建物跡、柱穴列、土坑、溝跡、造成土、ピットの順に述べていく。また出土遺物は中世以前のものも含めて、1つの遺構から出土したものをまとめて掲載している。

イ. 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は30棟近くを検出した。調査区は後背地が丘陵が迫っているため、建物配置などは規制を受けている。

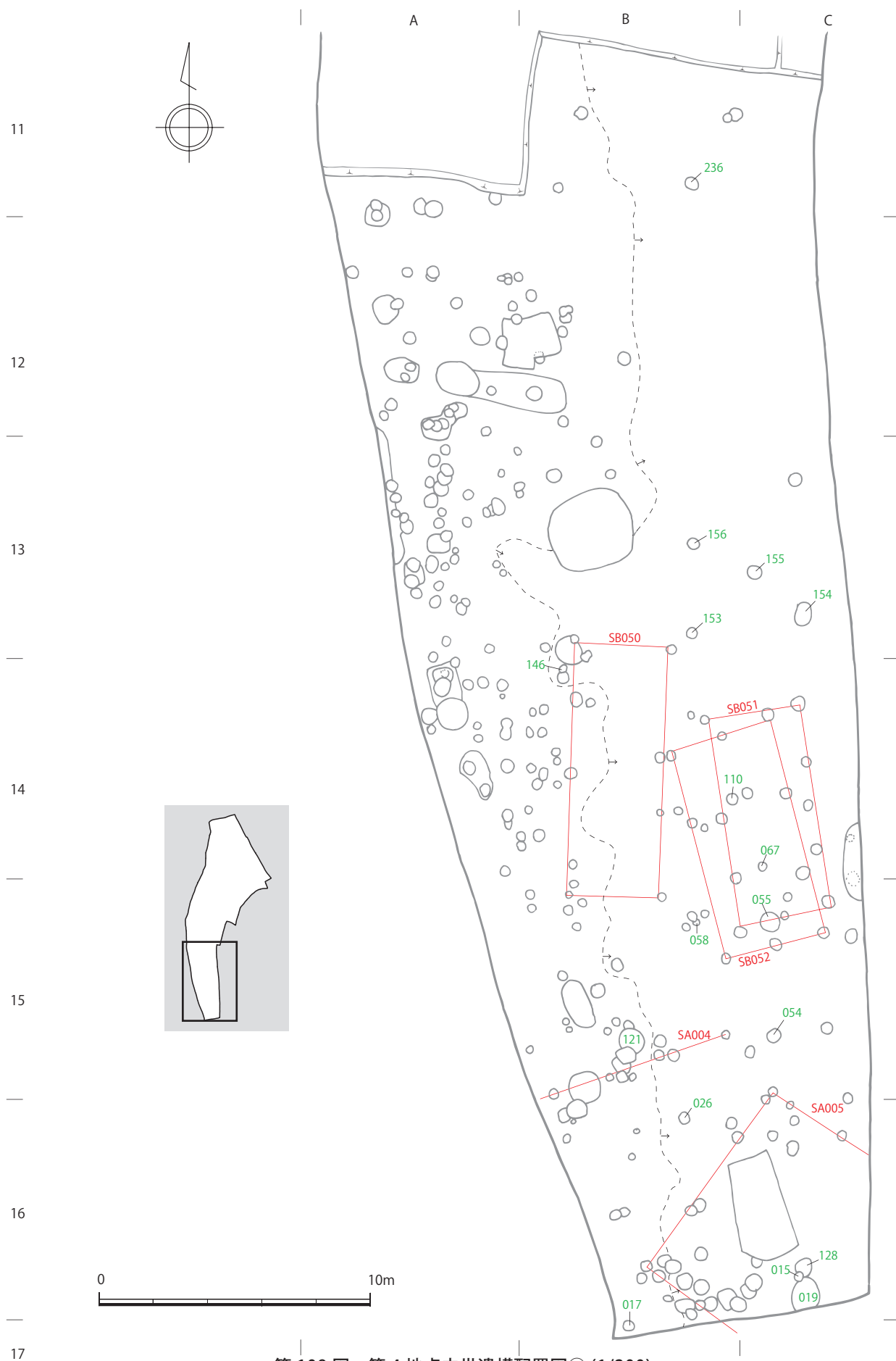


第106図 第4地点中世遺構配置図① (1/200)



第 107 図 第 4 地点中世遺構配置図② (1/200)

第 108 図 第 4 地点中世遺構配置図③ (1/200)



第 109 図 第 4 地点中世遺構配置図④ (1/200)

SB024(第 110 図)

SB024 は D - 3・4 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。建物プランは梁行 1 間、桁行 3 - 4 間で、身舎面積は 20.2 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物は少量で、土師質小片である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

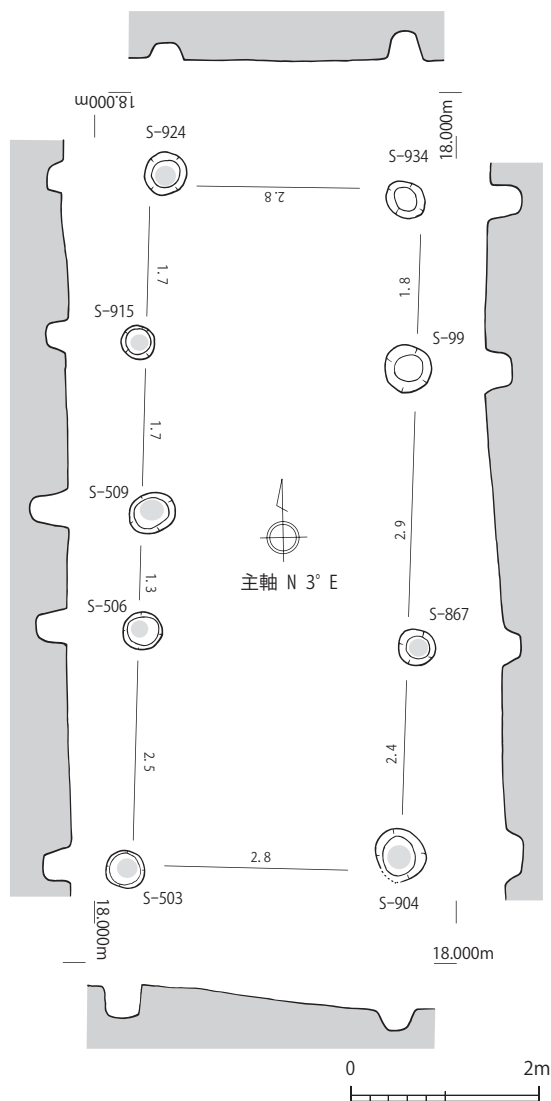
SB025(第 111 図)

SB025 は C・D - 3・4 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。建物プランは梁行 1 - 3 間、桁行 3 間で、身舎面積は 33.1 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。また S 448 は礎盤石と思われる礫が出土した。埋土は暗灰褐色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。出土遺物は少量で土師質小片である。

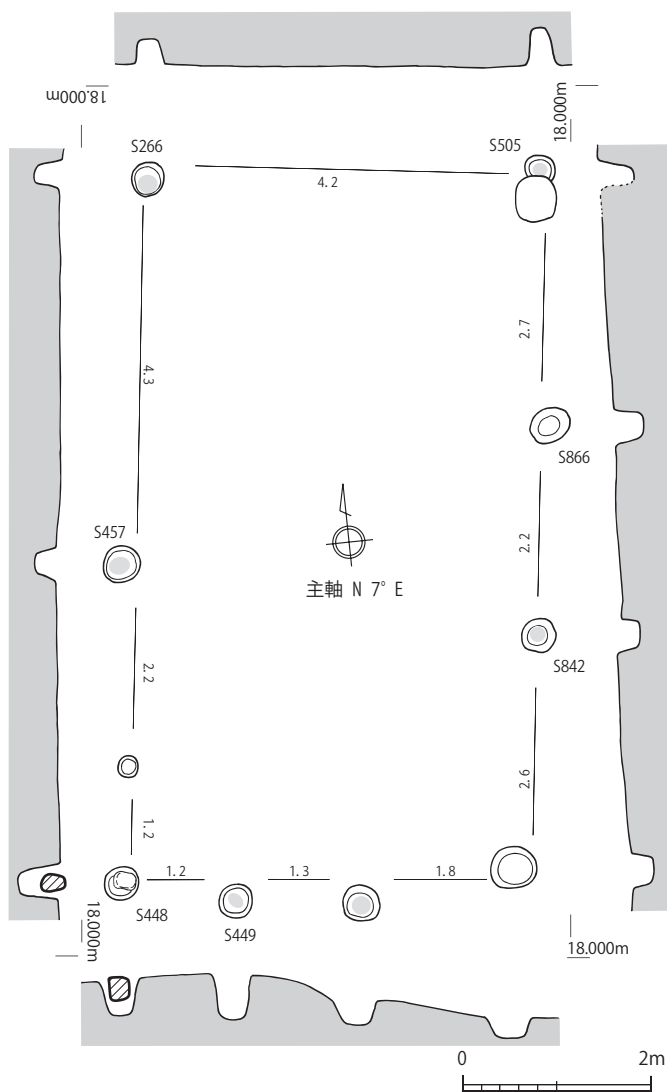
SB026(第 112 図)

SB026 は E・F - 4・5 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。建物プランは梁行 1 - 2 間、桁行 5 間で、身舎面積は 59 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

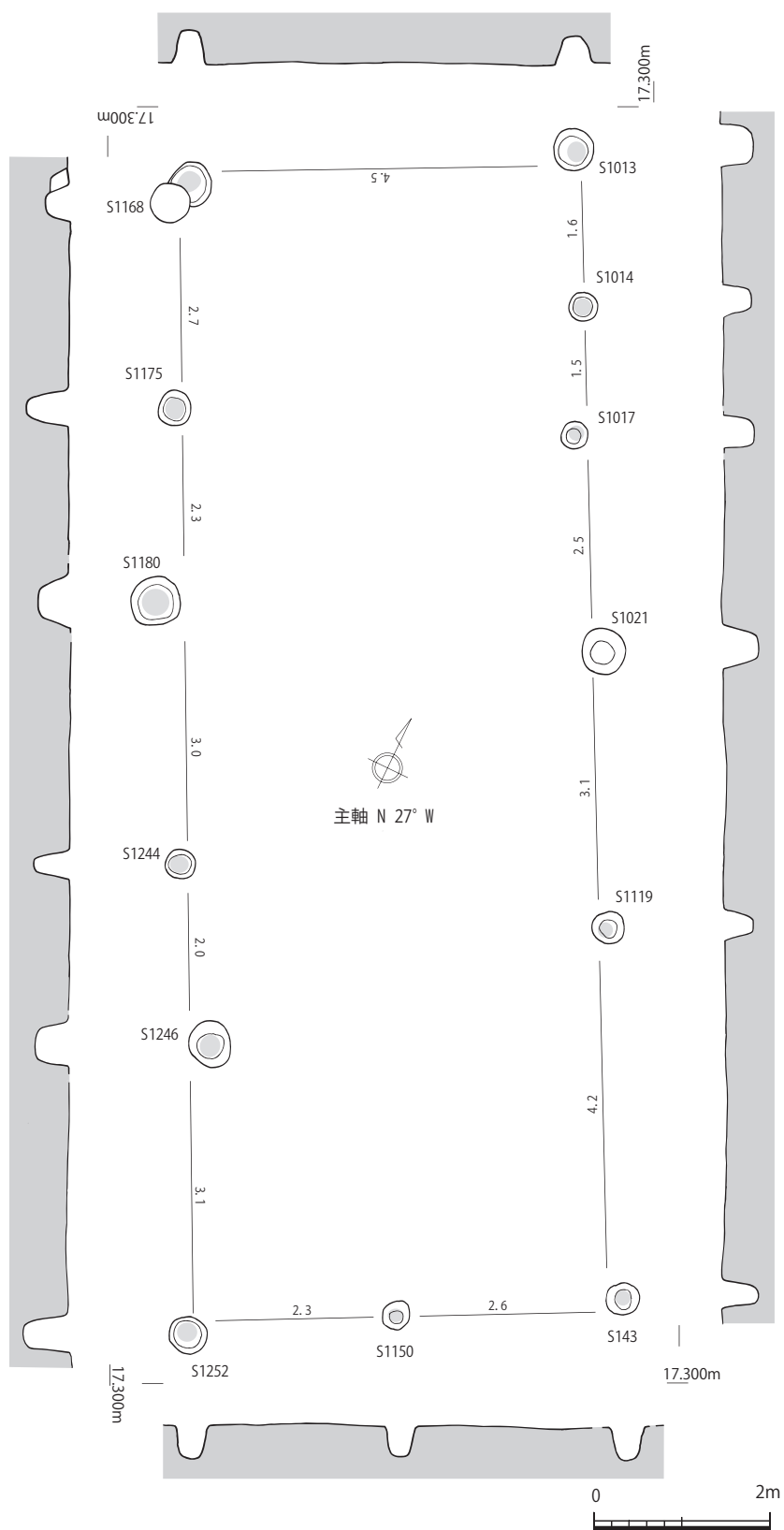
遺物 (第 113 図) は、S1181 から 950 の須恵器蓋坏片が出土。古代の所産。872・864・960 は土師器。864 は坏で、内面に回転ヘラミガキ痕がのこる。960 は円盤状高台がつく椀。4 点とも古代の所産で、中世に帰属するものではない。



第 110 図 SB024 遺構実測図 (1/80)



第 111 図 SB025 遺構実測図 (1/80)



第 112 図 SB026 遺構実測図 (1/80)

SB027(第114図)

SB027はD・E－4・5区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。SB026・030と重複する。建物プランは梁行1－2間、桁行3－5間で、身舎面積は28.2㎡である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物は少量で、土師質小片である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

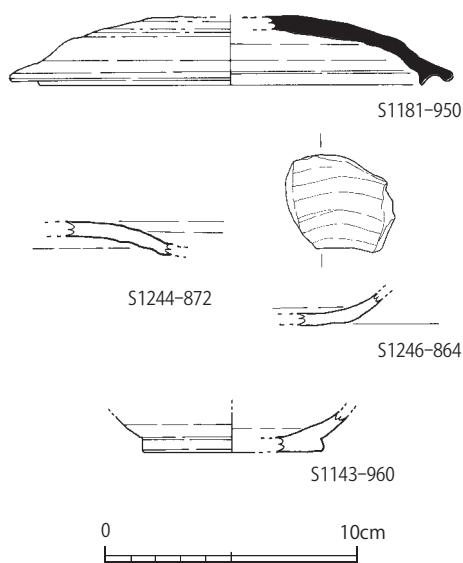
SB028(第115図)

SB028はE・F－6・7区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。SB034と重複し、SA009とほぼ並行関係を持つため、関連する可能性あり。建物プランは梁行1－2間、桁行4－5間で、身舎面積は48.8㎡である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

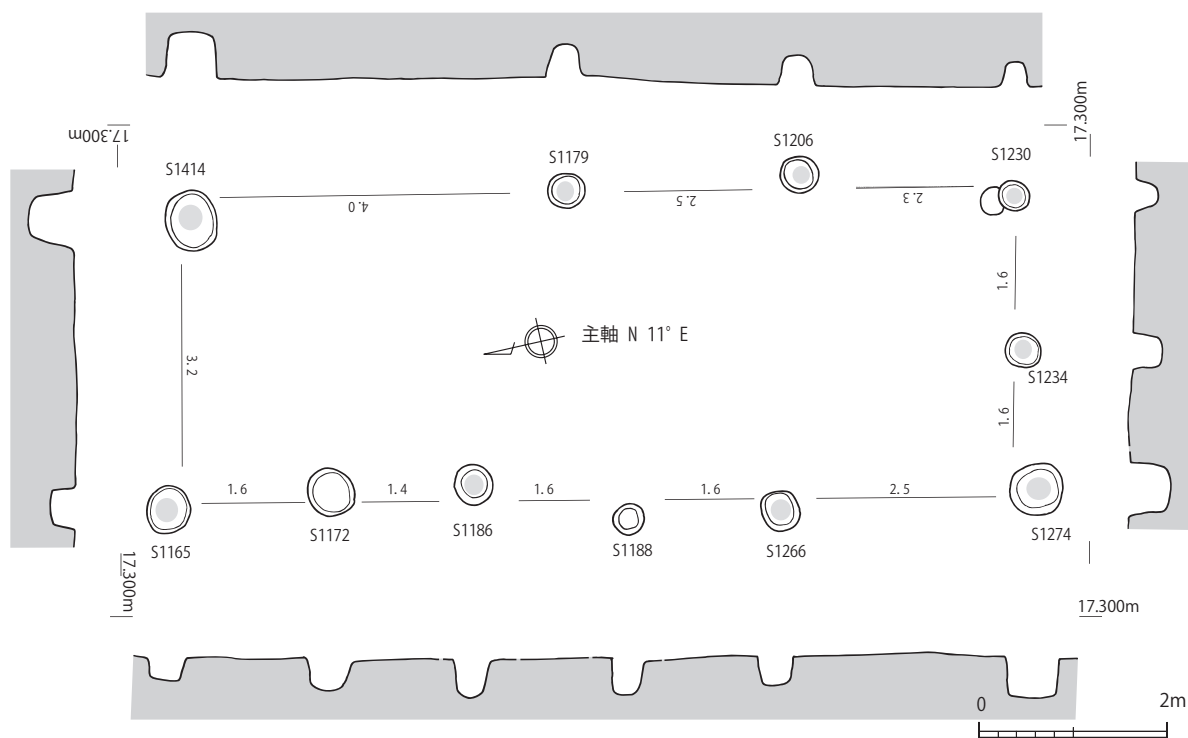
遺物(第115図)は、4点出土した。901は須恵器蓋、897は土師器椀、906は土師器鉢、914は土師器坏である。この4点はS1401の同一遺構から出土している。4点とも古代の所産であるが、古代の柱穴を切っているため、古代の遺物が混入したものと推定される。

SB029(第116図)

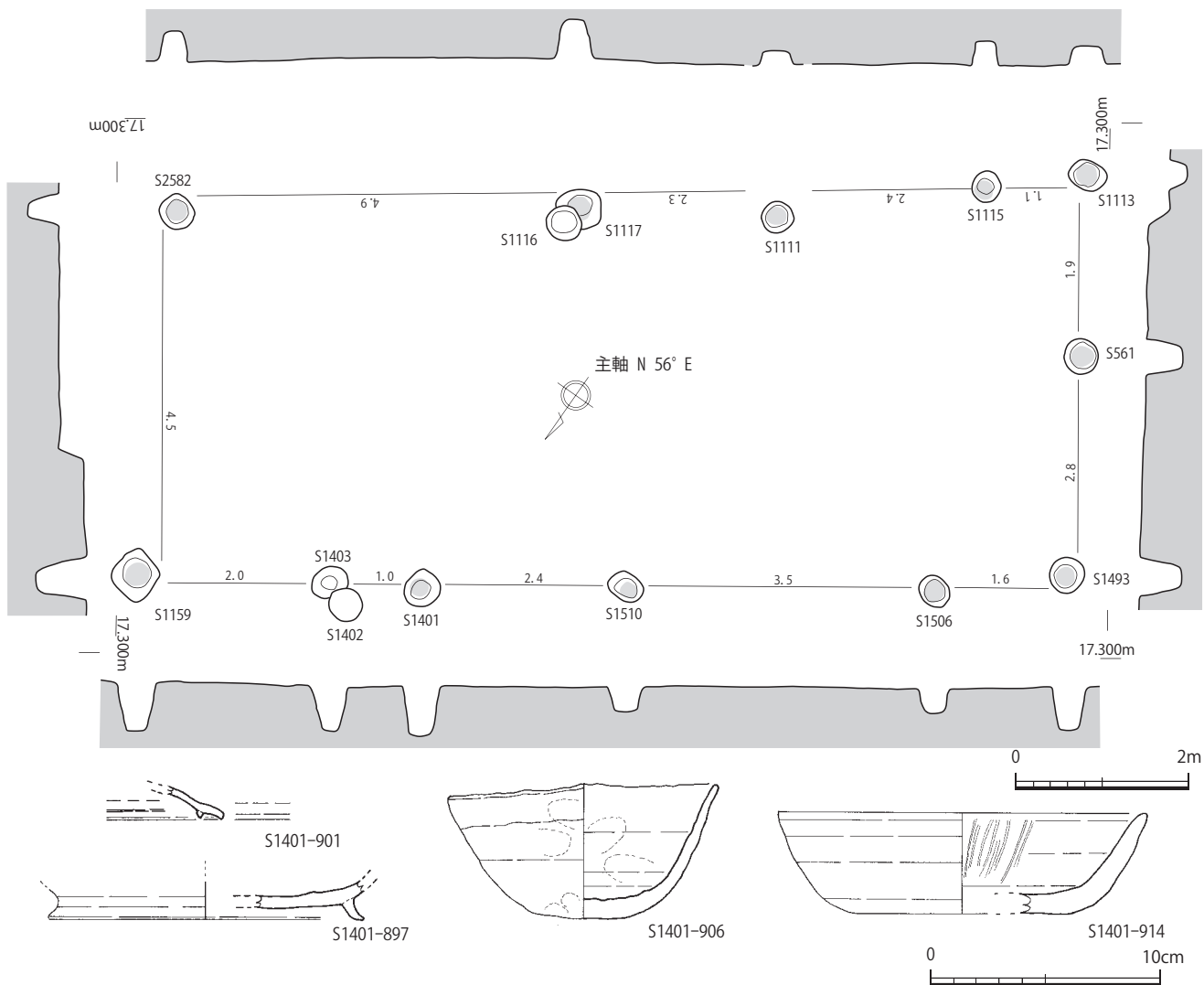
SB029はD－5・6区で検出した。切り合い関係はSB030を切る。SB032と建物が重複する。建物プランは梁行1－2間、桁行4間で、身舎面積は32.8㎡である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。S1315と2つ南側の柱穴から礫が出土した。礎盤石や根石に利用したものと考えられる。出土遺物は少量で土師質小片である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。



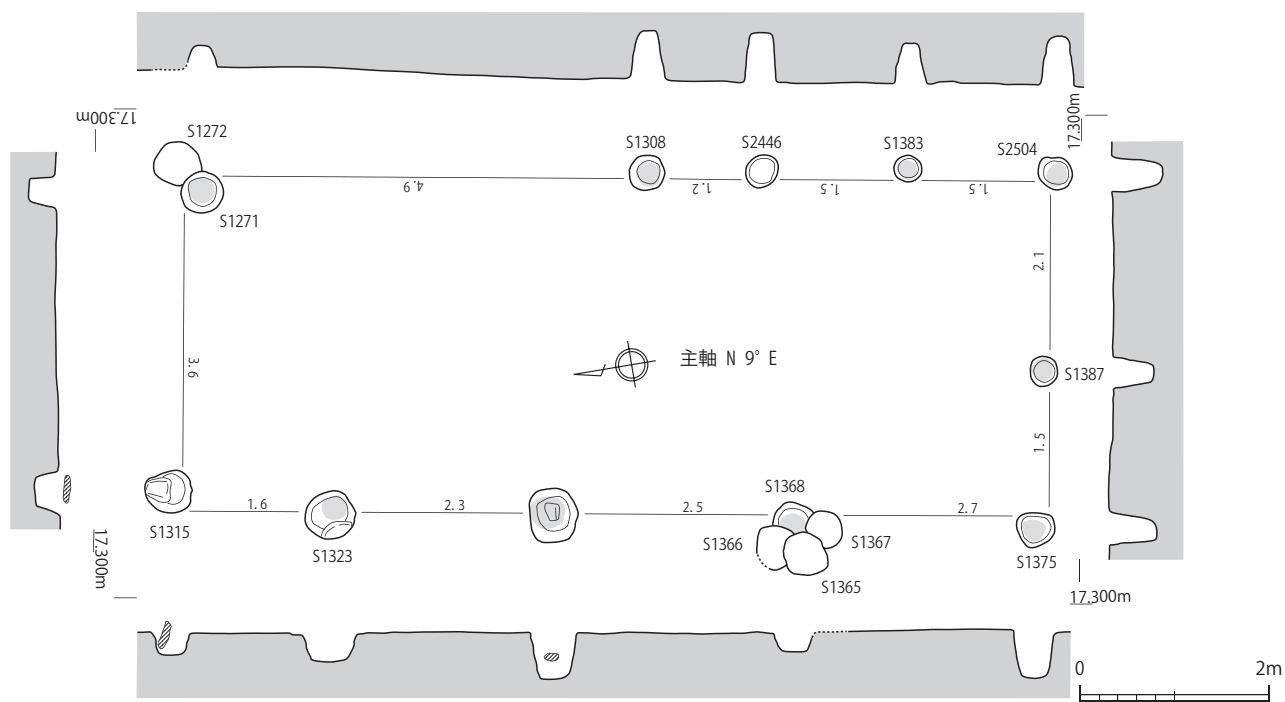
第113図 SB026 出土遺物実測図(1/3)



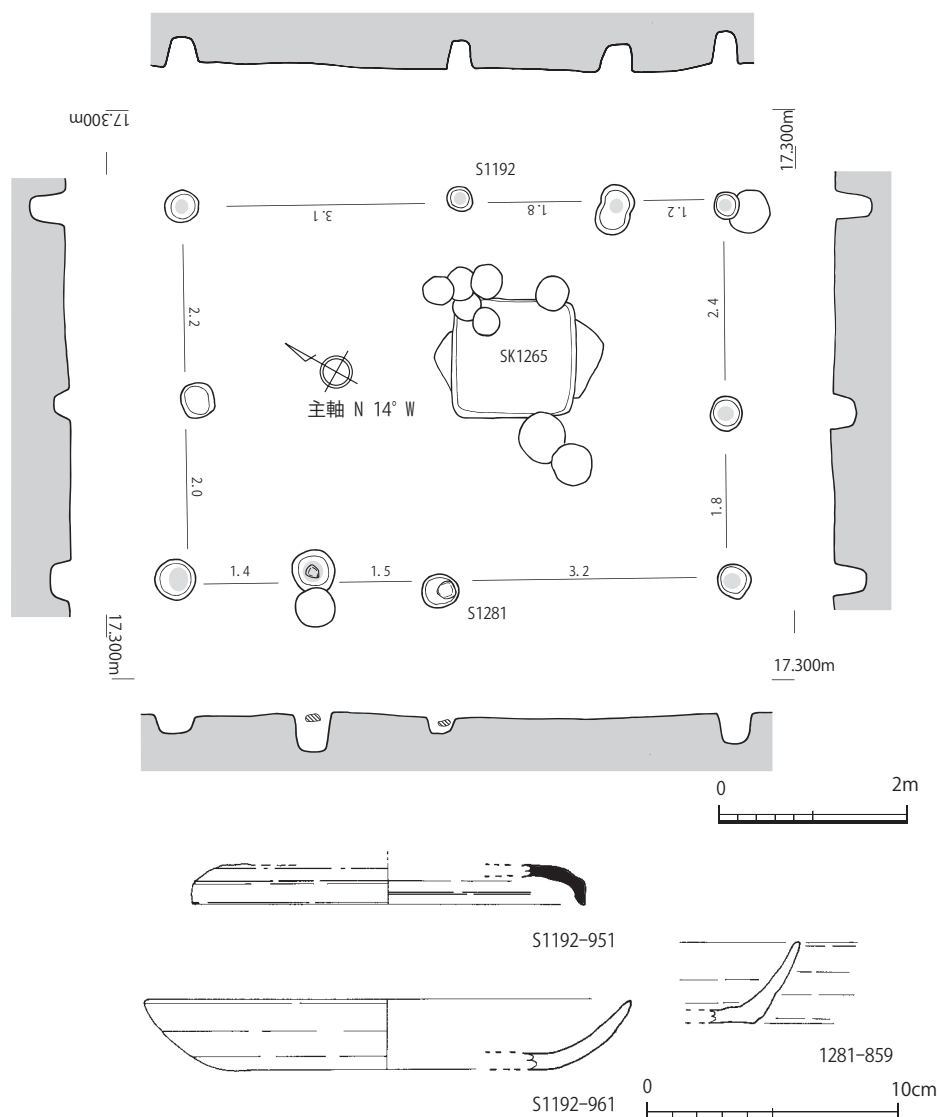
第114図 SB027 遺構実測図(1/80)



第 115 図 SB028 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 116 図 SB029 遺構実測図 (1/80)



第 117 図 SB030 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB030(第 117 図)

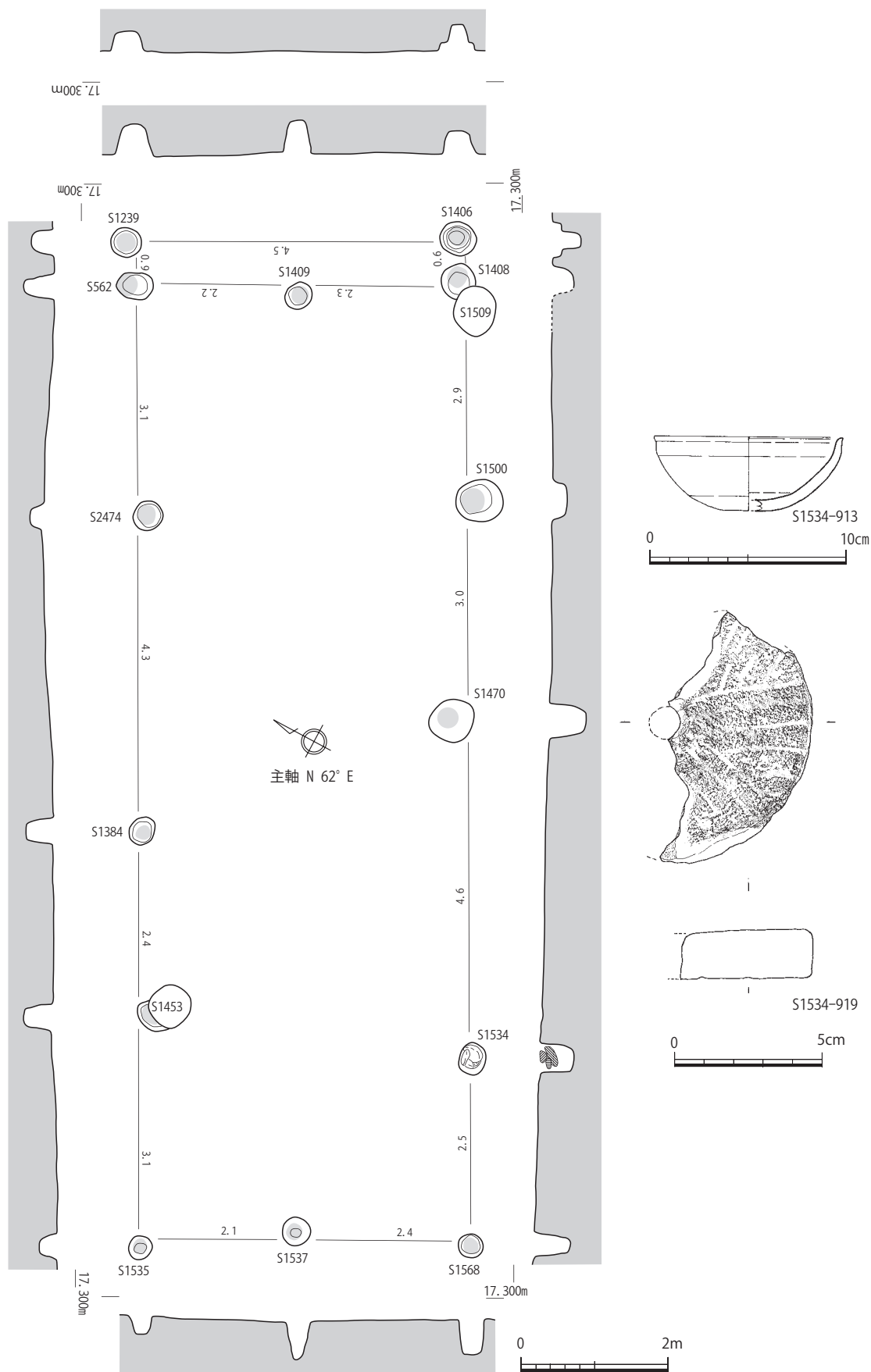
SB030 は D・E - 4・5 区で検出した。切り合い関係は SB029 に切られる。SB027 と建物が重複する。また SK1265 がこの建物跡と軸が類似し、重複するため、関連がある可能性がある。建物プランは梁行 2 間、桁行 3 間で、身舎面積は 25.6 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。また S1281 とその北側の柱穴で礫が出土した。柱を安定させるための根石などに利用したものか。埋土は色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 117 図) は、S1192 から 2 点出土。951 は須恵器蓋である。961 は土師器坏。この 2 点は古代の所産である。S1281 出土の 859 は土師質土器坏片である。

SB031(第 118 図)

SB031 は E・D・C - 5・6・7 区で検出した。切り合い関係は SB032 を切る。SB029・033 と重複する。建物プランは梁行 2 間、桁行 4 間で、東側に庇状のものが付く。身舎面積は 58.1 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗褐色粘質土である。S1534 から礫が出土した。根石や礎盤石に利用したものと推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 118 図) は、S1534 から 2 点出土した。913 は土師器坏である。古代以前の所産。919 は石製品で石臼片である。



第 118 図 SB031 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB032(第 119 図)

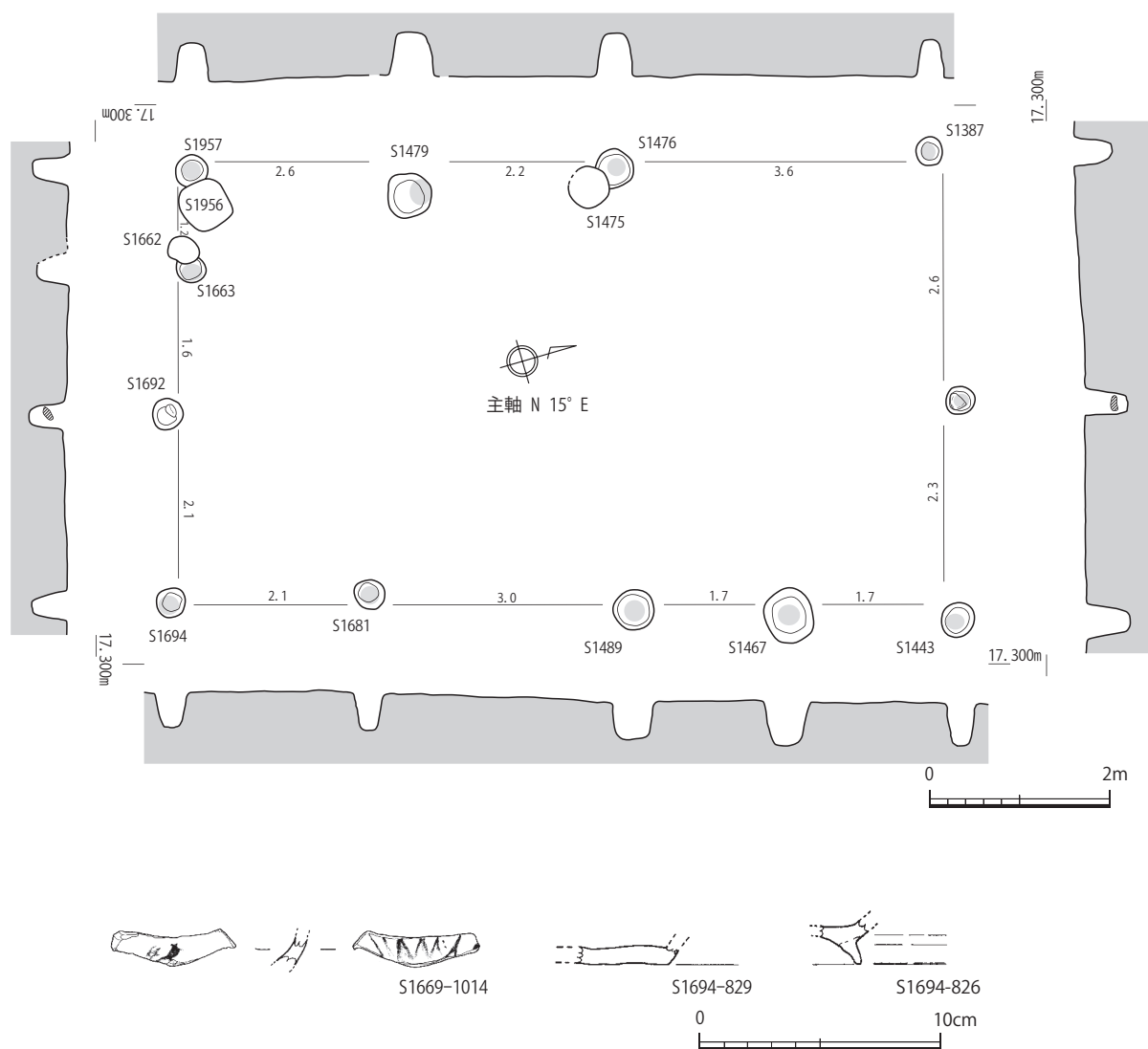
SB032 は C・D－7・6 区で検出した。切り合い関係は SB031 に切られ、SB029・033 と重複する。建物プランは梁行 2－3 間、桁行 3－4 間で、身舎面積は 41.2 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗褐色粘質土である。S1692 と北側梁行の真ん中の柱穴から礫が出土し、根石もしくは礎盤石の関連のものと思われる。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 119 図) は、3 点出土した。S1669 出土の 1014 は中国景德鎮窯系皿片である。外面は芭蕉葉文。S1694 出土は、829 は土師器もしくは土師質土器坏である。826 は黒色土器 A 類である。古代の所産。

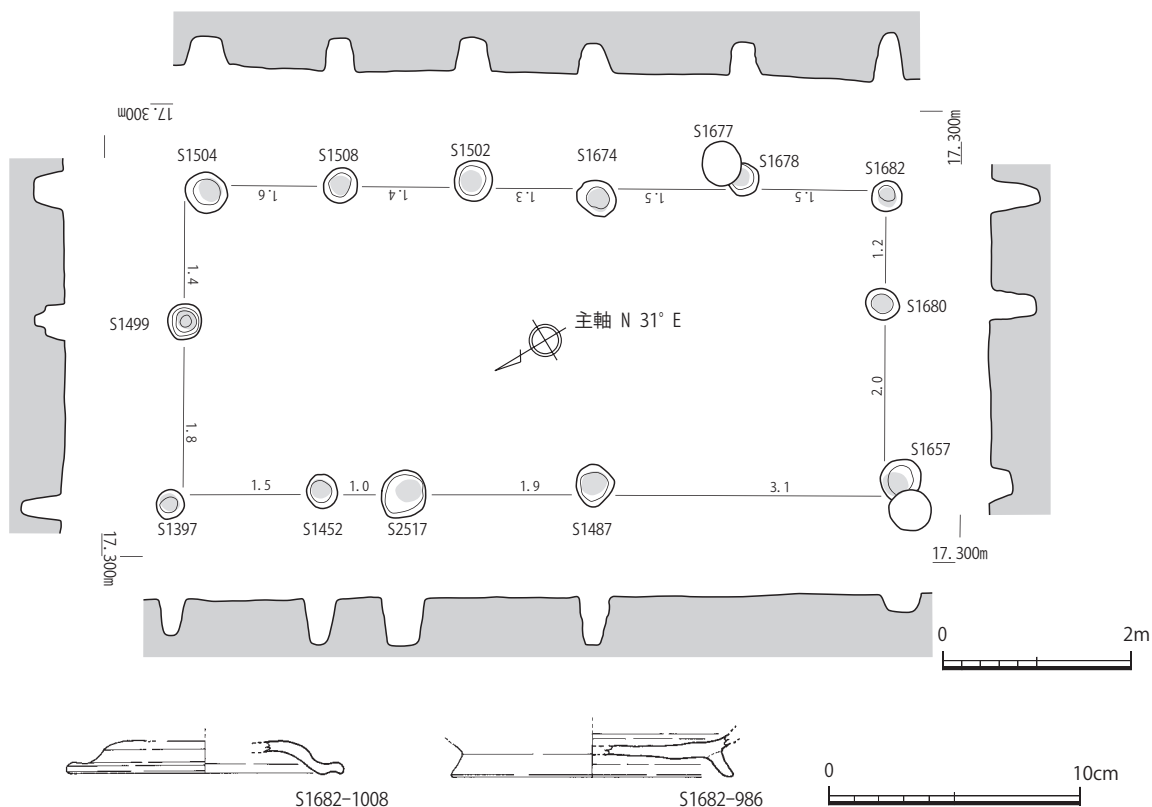
SB033(第 120 図)

SB033 は D・E－6・7 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切り、SA006 に切られる。また SB028・031・032 と重複する。建物プランは梁行 2 間、桁行 4－5 間で、身舎面積は 23.7 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、すべての柱穴で円形柱痕が確認できた。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 120 図) は 2 点出土。S1682 出土で、1008 は土師器蓋片、986 は土師器碗である。2 点とも古代の所産である。



第 119 図 SB032 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 120 図 SB033 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB034(第 121 図)

SB034 は B・C・D - 4・5 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。SB035・036 と重複する。建物プランは梁行 3 - 4 間、桁行 6 間で、身舎面積は 65 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。S773・1313 など計 6 柱穴で、礫が出土した。柱を安定させるための根石などと推定される。特に S773 は底面に詰めた状態で検出された。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 121 図) は、S713 出土で、604 は土師質土器杯である。外底部は回転糸切りのちナデ調整。胎土には赤色粒子や黒色粒子、角閃石などを含んでいる。

SB035(第 122 図)

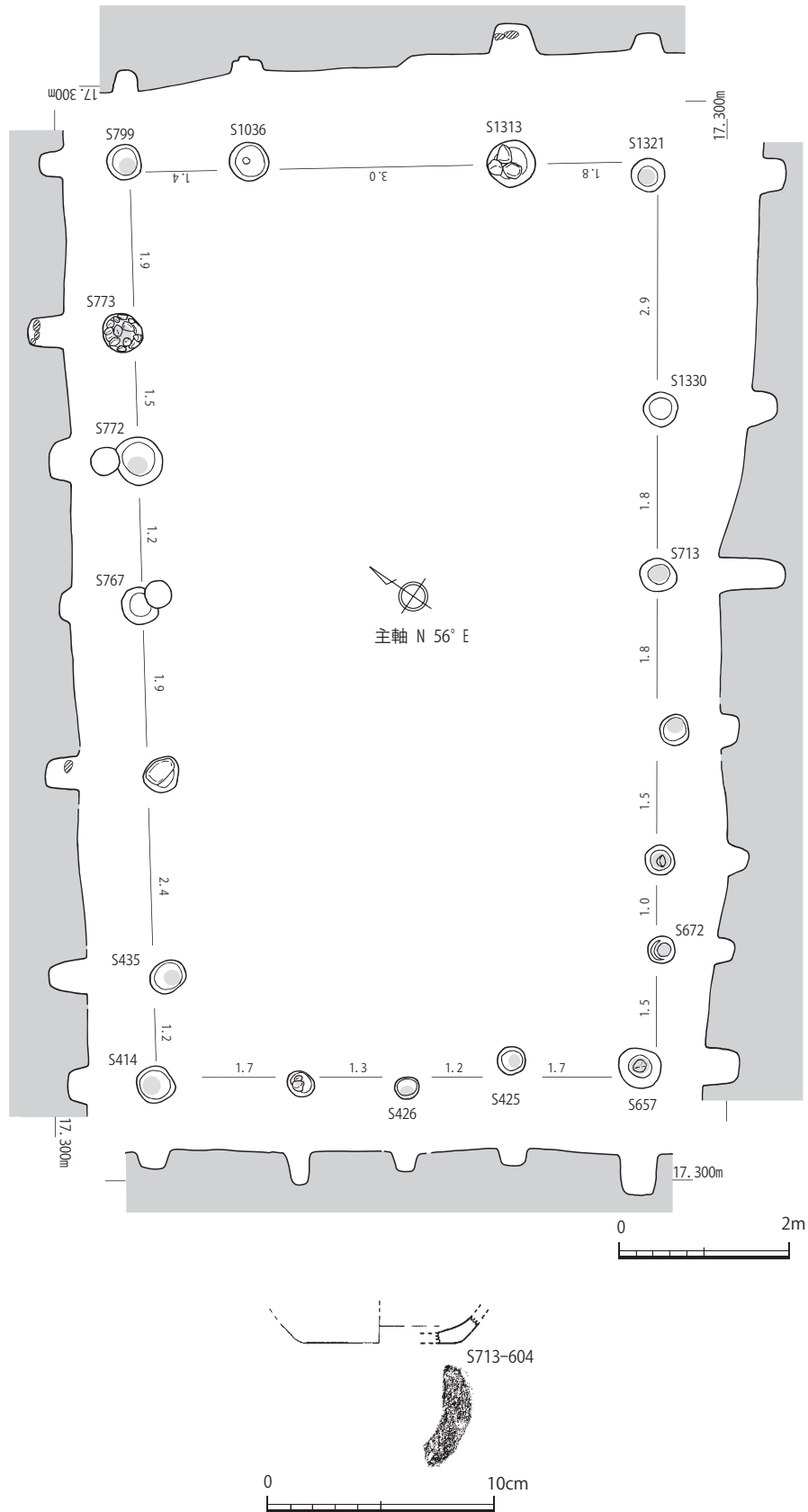
SB035 は B・C - 5・6 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切り、SB037 を切り、SB036 に切られる。SB037 と重複する。建物プランは梁行 1 - 3 間、桁行 5 - 6 間で、東側に 1 間分底がつくが、建物跡東側を中世以後の造成で削平を受けており、建物全体のプランは不明である。身舎面積は 23.1 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗褐色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 122 図) は、S442 出土で、781 は土師質土器杯である。外底部は回転糸切りのちナデ調整。

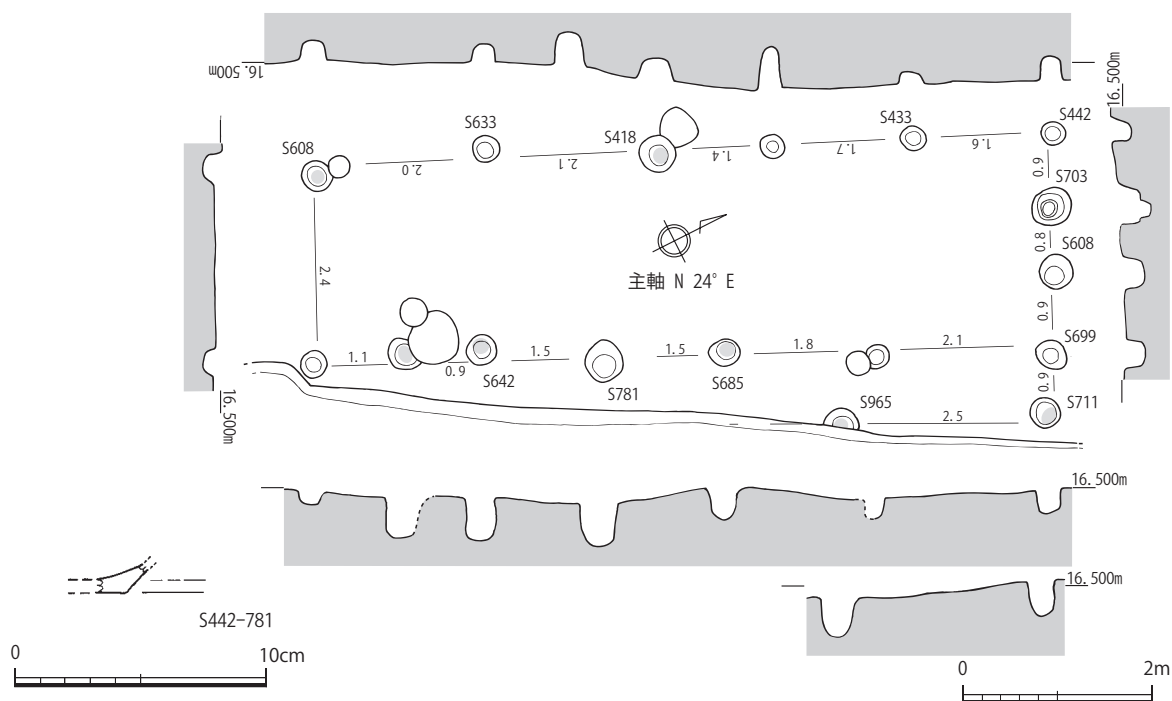
SB036(第 123 図)

SB036 は B・C - 5・6 区で検出した。切り合い関係は SB035 を切る。SB037 と重複する。建物プランは梁行 1 - 2 間、桁行 4 間で、東西の両側に底がつく。底と身舎の距離は東西で柱間距離は若干東側の方が短い。ただ建物跡の南東部は中世以後の造成を受けており詳細は不明である。身舎面積は 17.9 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。S681・1024 で、礫が出土した。柱を安定させるための根石や礎盤石と推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

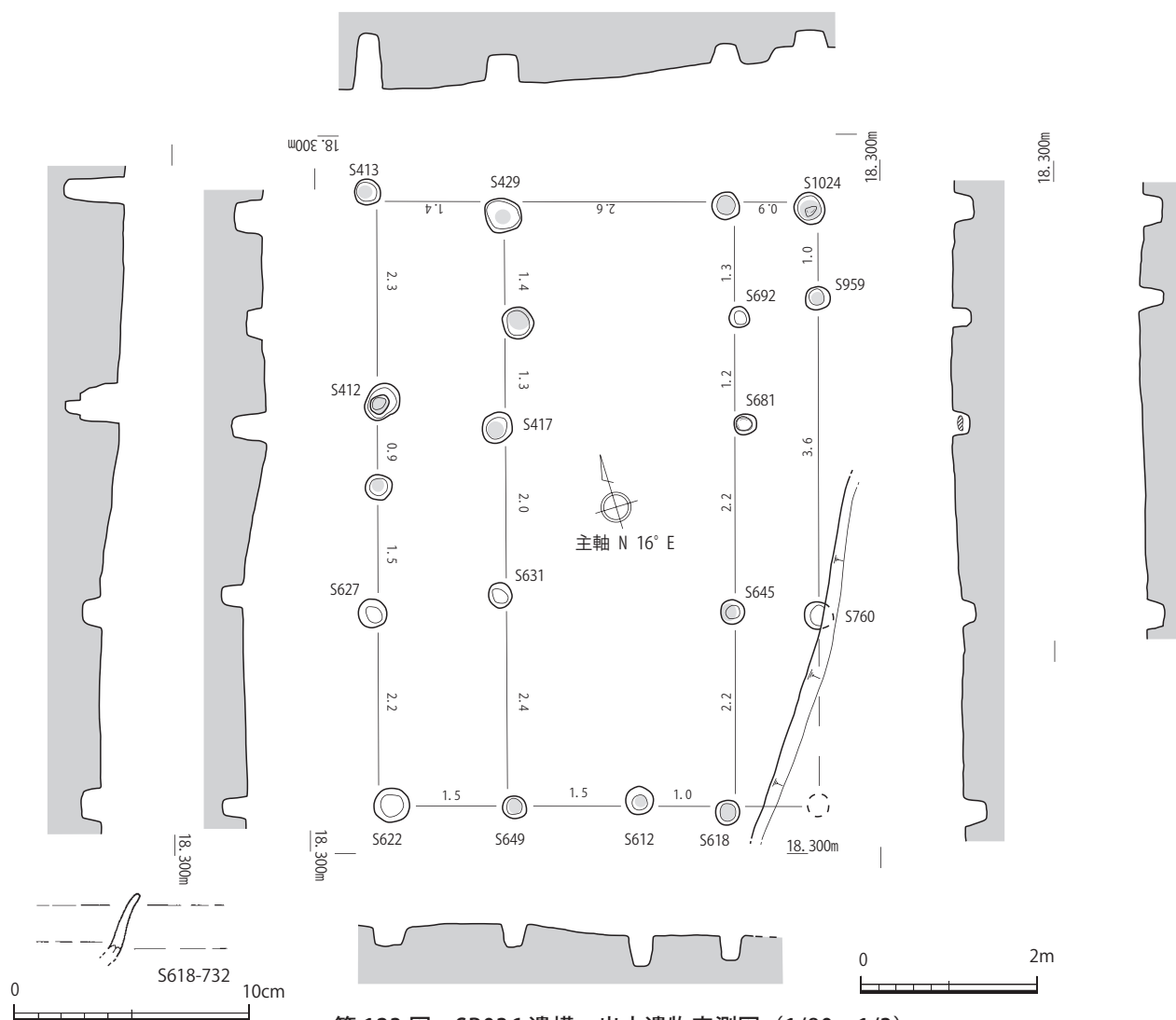
遺物 (第 123 図) は、S681 出土で、732 は土師器杯もしくは椀片である。古代の所産の可能性が高い。



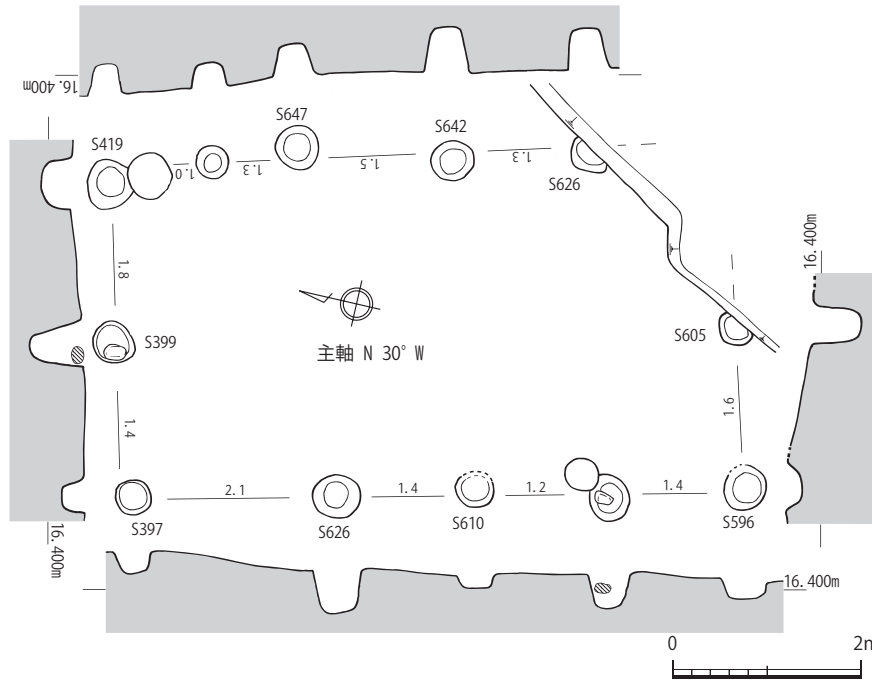
第 121 図 SB034 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



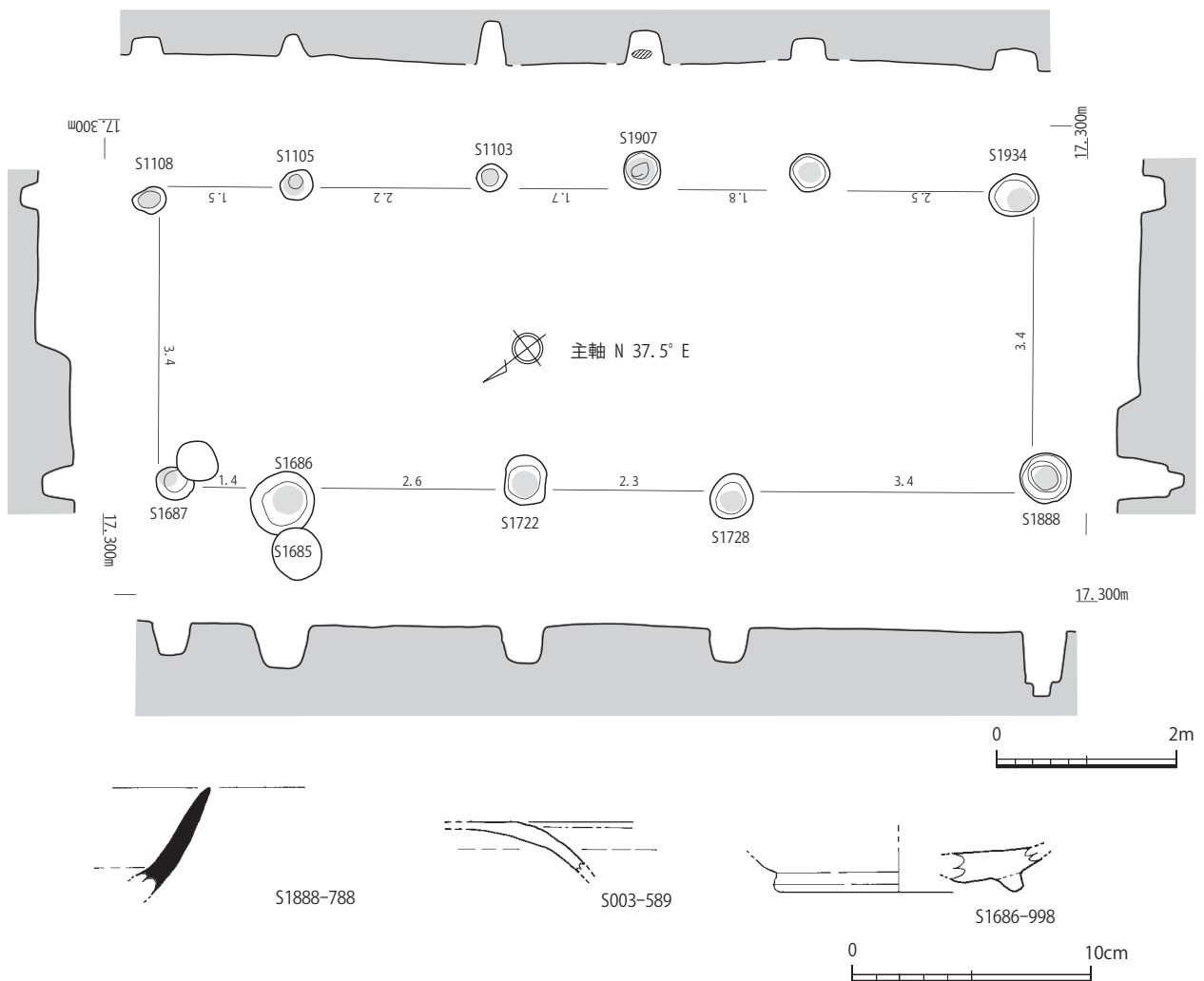
第 122 図 SB035 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 123 図 SB036 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



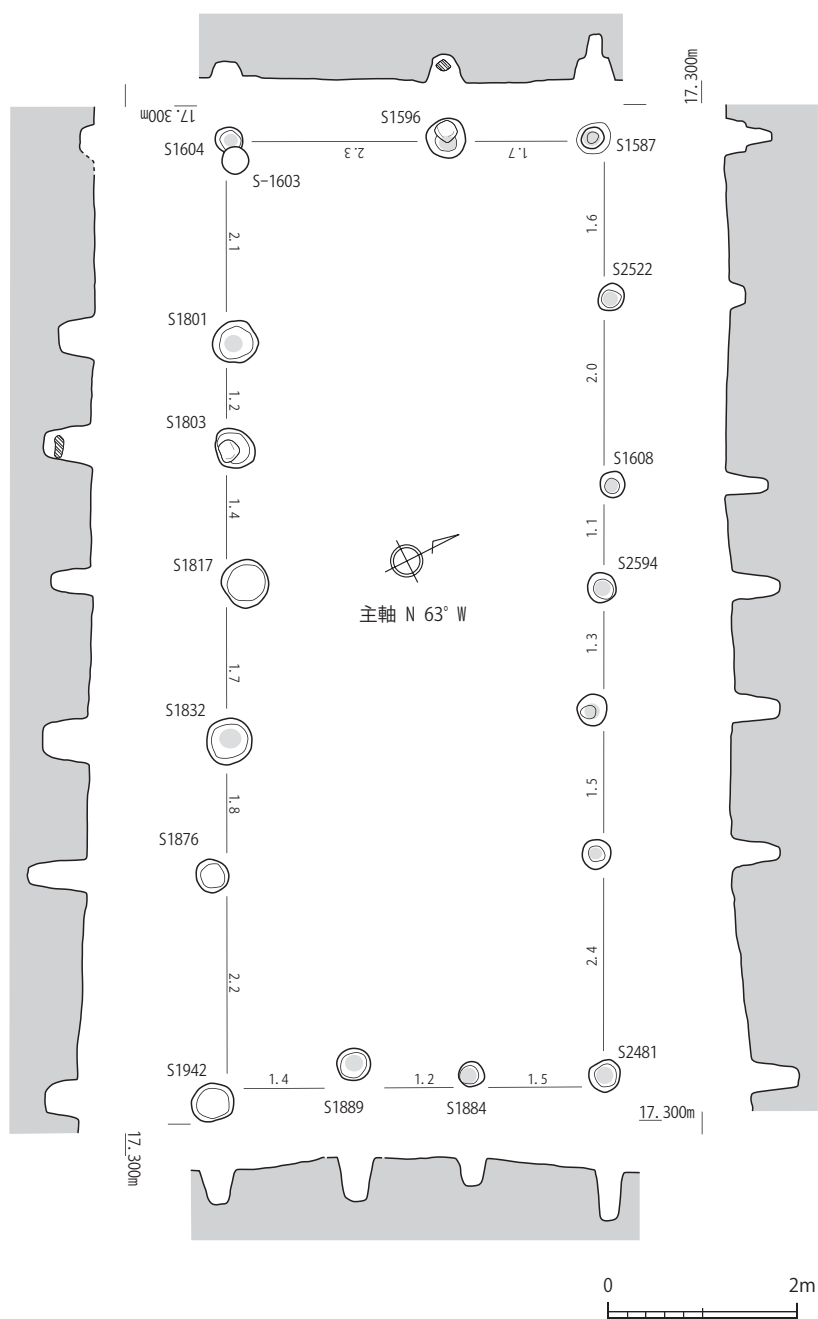
第124図 SB037 遺構実測図 (1/80)



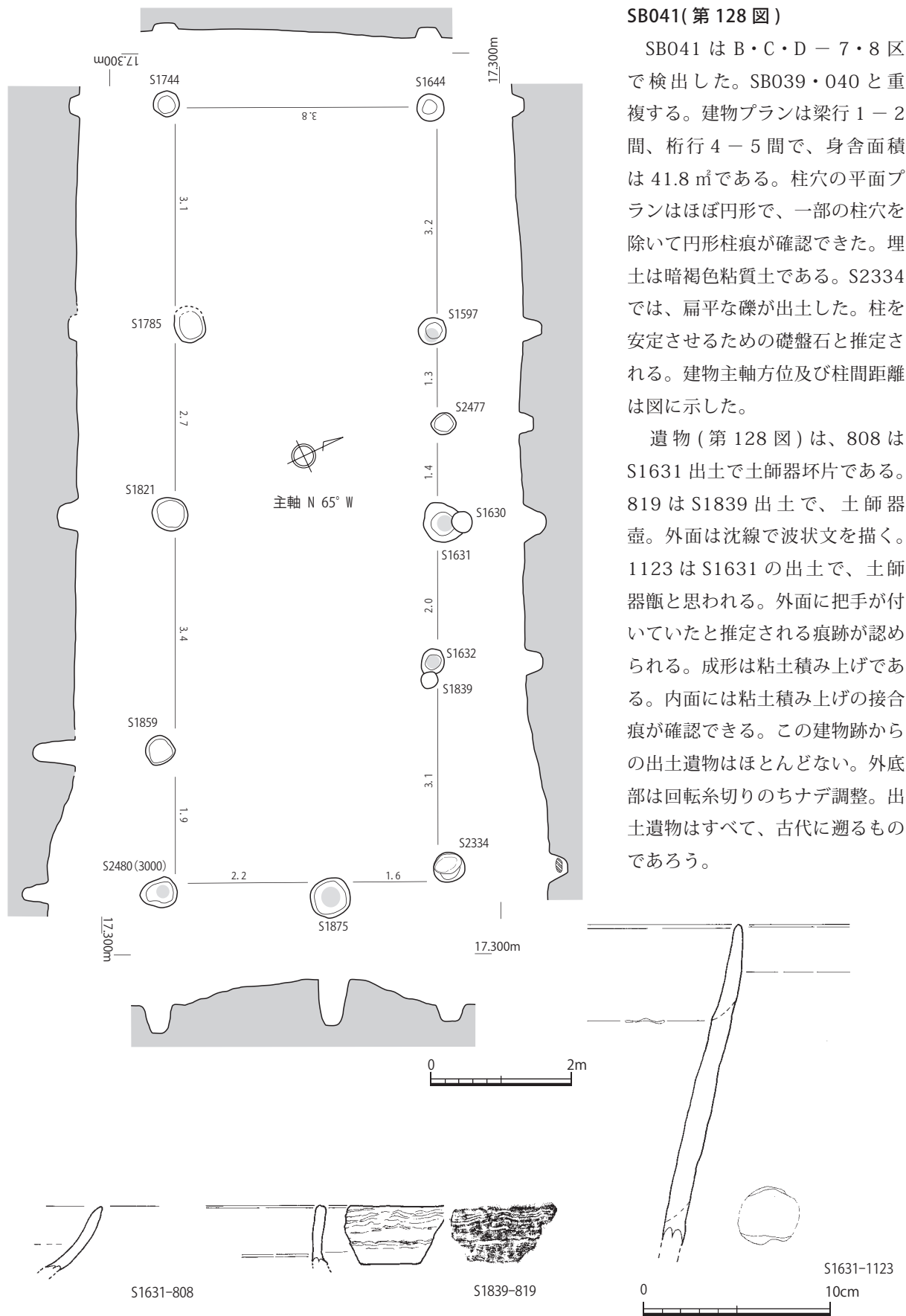
第125図 SB038 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB040(第 127 図)

SB040 は C・D－7・8 区で検出した。切り合い関係は SB039 に切られる。SB038・041 と重複する。建物プランは梁行 2－3 間、桁行 6 間で、身舎面積は 41 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。S1596・1803 の柱穴で、礫が出土した。柱を安定させるための根石や礎盤石と推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。出土遺物は土師器小片出土のみである。



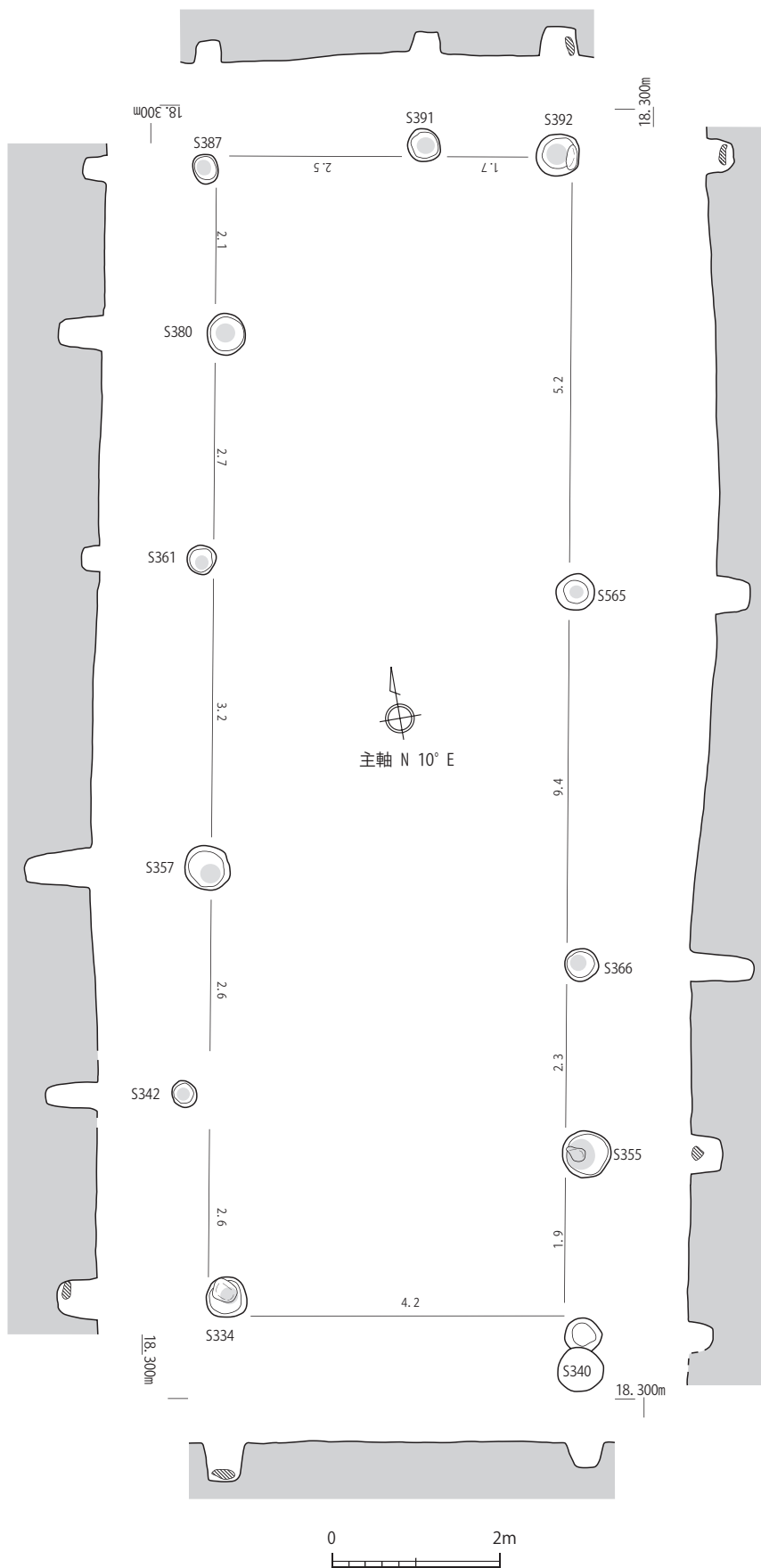
第 127 図 SB040 遺構実測図 (1/80)



第128図 SB041遺構・出土遺物実測図(1/80・1/3)

SB042(第 129 図)

SB042 は A・B - 6・7・8 区で検出した。切り合い関係は SB043 に切られる。SB044 と重複する。建物プランは梁行 1 - 2 間、桁行 4 - 5 間で、身舎面積は 58 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。S334・355・392 の柱穴で、礎が出土した。柱を安定させるための根石もしくは礎盤石と推定される。出土遺物はほとんどない。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

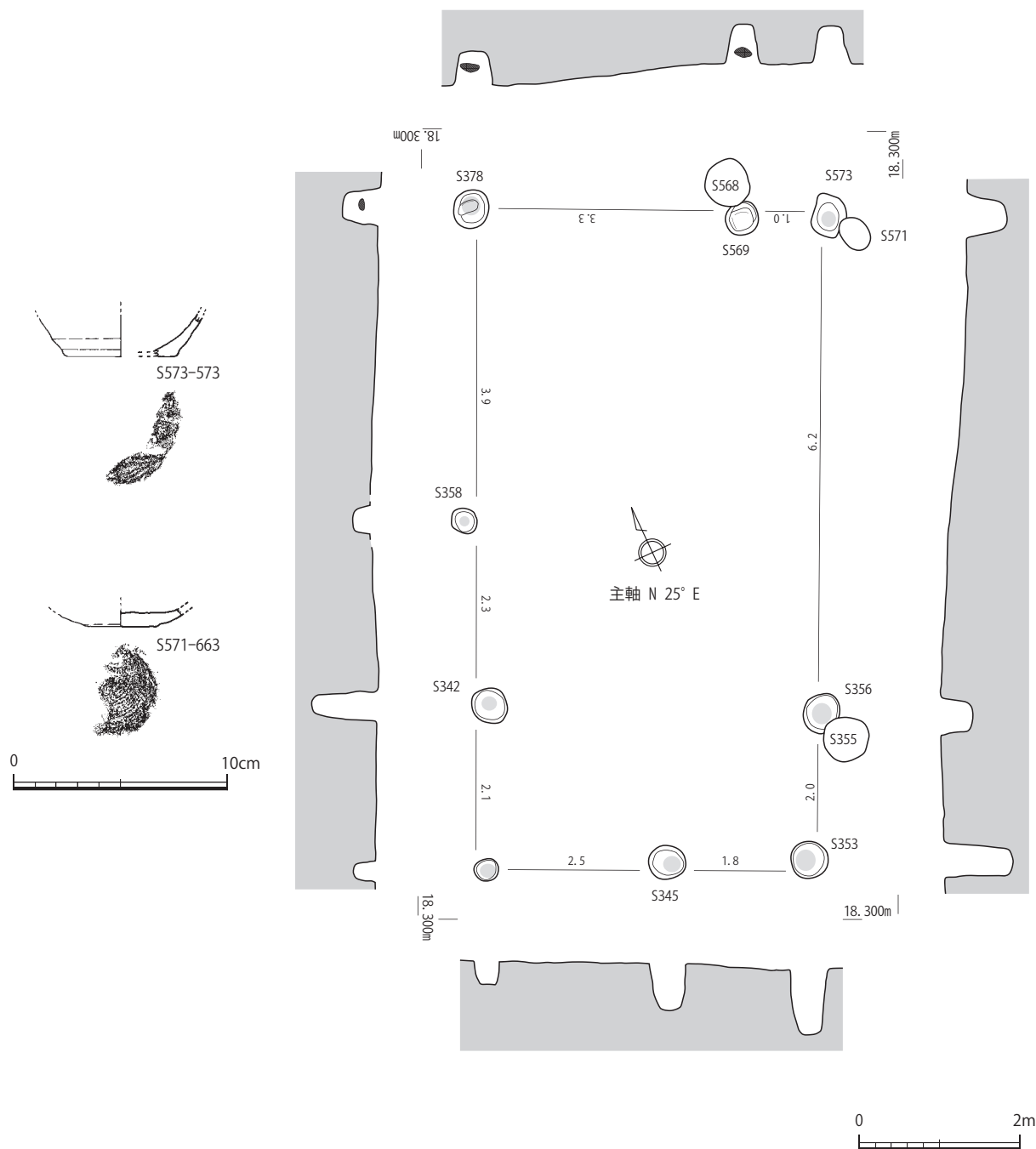


第 129 図 SB042 遺構実測図 (1/80)

SB043(第 130 図)

SB043 は A・B－7・8 区で検出した。切り合い関係は SB042 を切る。SB042・044 と重複する。建物プランは梁行 2 間、桁行 2－3 間で、身舎面積は 35.3 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。S378・569 で、礫が出土した。柱を安定させるための根石や礎盤石と推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 130 図) は、573 は S573 の出土で、土師質土器杯である。外底部は回転糸切りのちナデ調整である。胴部はゆるやかに外反しながら立ち上がっているが、底部に近いほうで、若干の屈曲をもつ。663 は S571 出土で、土師質土器杯片では外底部は回転糸切りのちナデ調整。底部から胴部へはゆっくり丸みを帯びながら立ち上がっていきそうである。



第 130 図 SB043 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB044(第 131 図)

SB044 は B - 6・7 区で検出した。切り合い関係は SD2587・580 などに切られる。SB042・043 と重複する。建物プランは梁行 2 間、桁行 3 + α 間である。建物跡の東側はさらに展開すると推定されるが、中世以後の削平により不明である。身舎面積は $30.4 + \alpha$ m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。出土遺物は土師質土器小片である。

SB045(第 132 図)

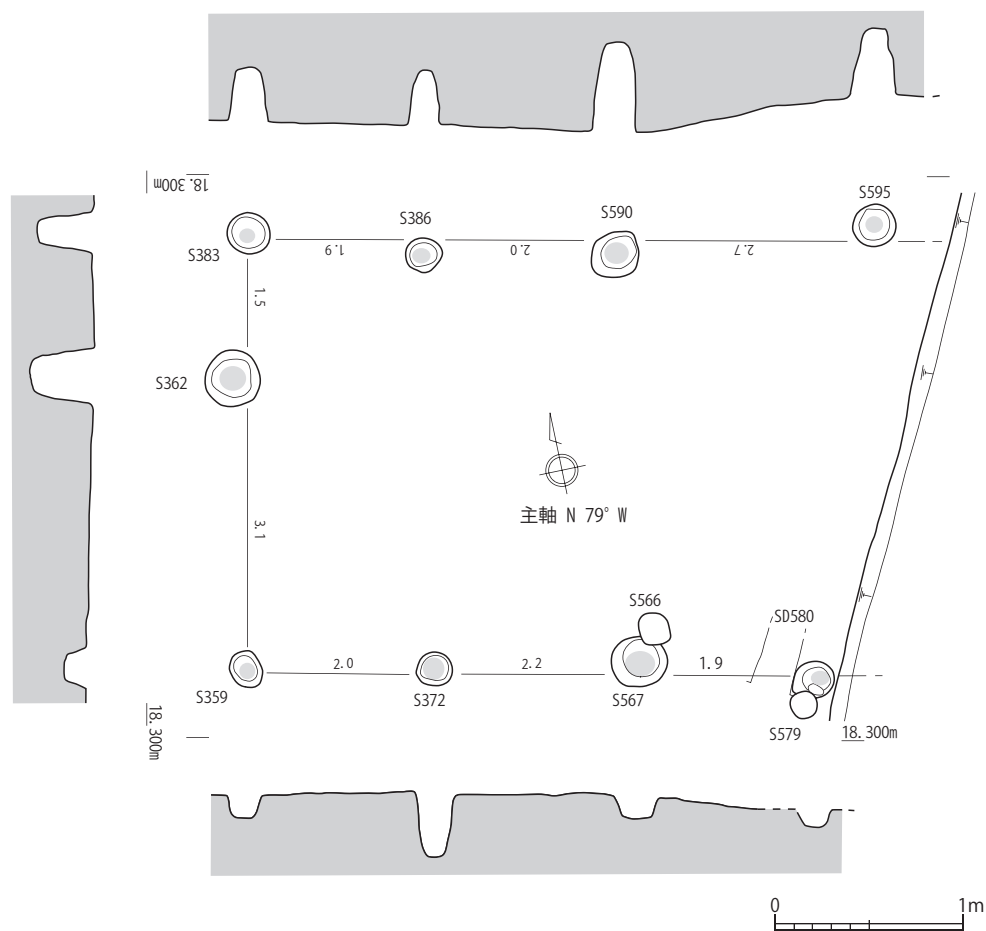
SB045 は C - 8・9 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。SB046、SA008 と重複する。建物プランは梁行 3 間、桁行 3 間で、方形プランを呈する。身舎面積は 42.7 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗褐色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

出土遺物はない。

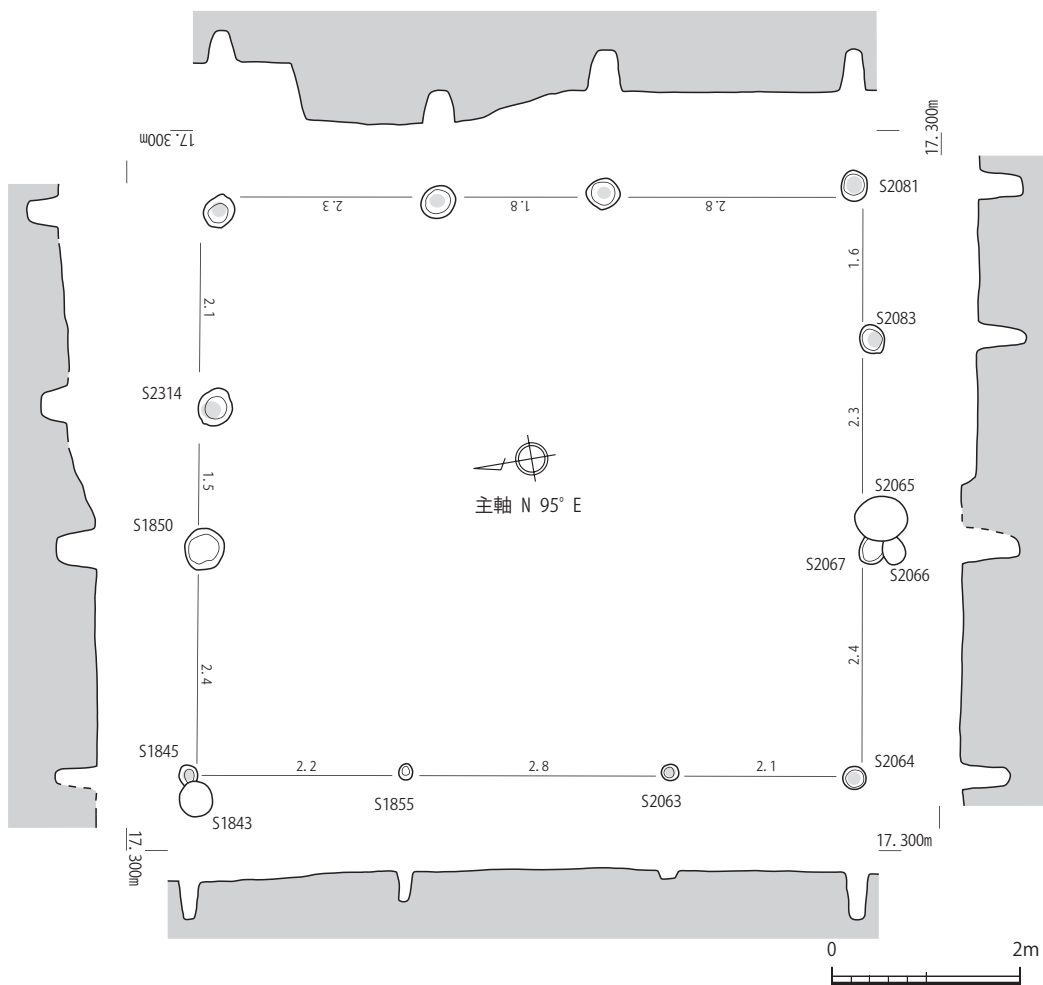
SB046(第 133 図)

SB046 は B・C - 8・9 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。SB045・048 と重複する。建物プランは長方形で、梁行 2 間、桁行 3 間で、柱間距離は等間隔ではない。身舎面積は 24.4 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗褐色・暗灰色粘質土である。S1770・1971 は礫が出土した。柱を安定させるための礎盤石などと推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

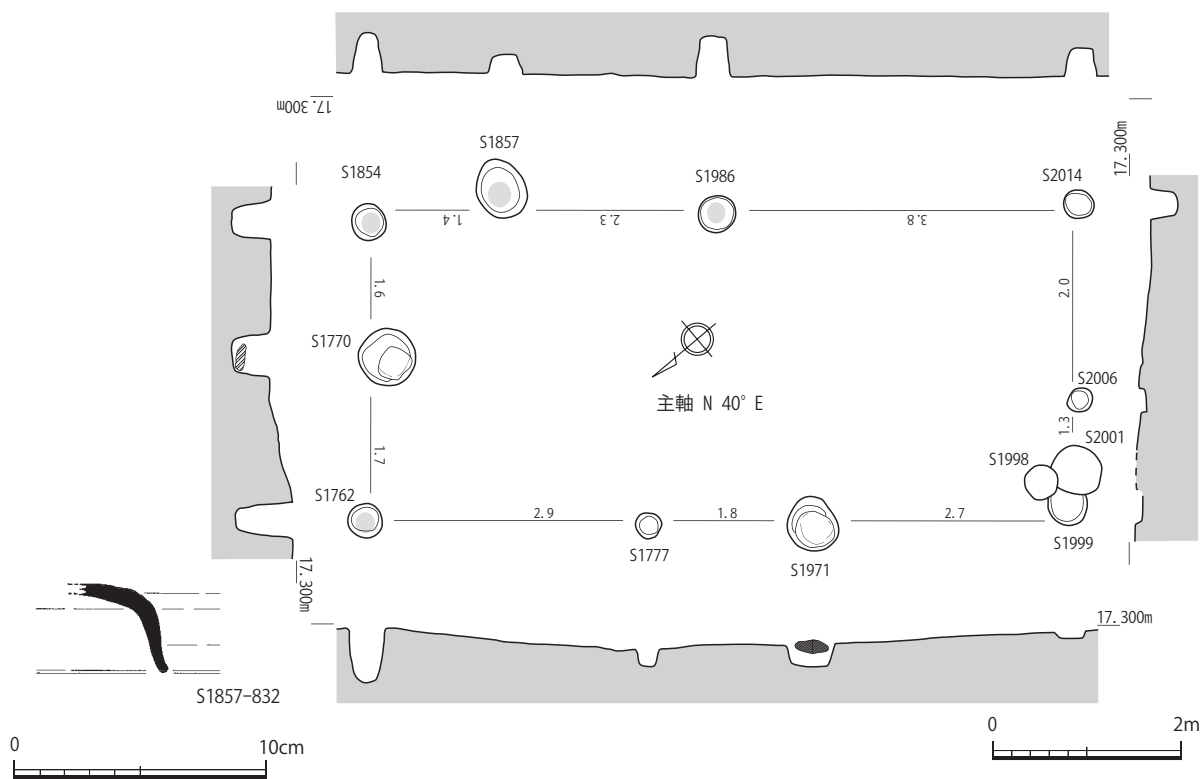
遺物 (第 133 図) は、832 は S1857 出土で、須恵器蓋である。古代の所産である。



第 131 図 SB044 遺構実測図 (1/80)



第 132 図 SB045 遺構実測図 (1/80)



第 133 図 SB046 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB047(第134図)

SB047はB-9・10区で検出した。切り合い関係はSB048・049を切る。建物プランは長方形を呈し、梁行1間、桁行3-4間である。身舎面積は31.9㎡である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、S2138にて円形柱痕が確認できた。埋土は褐色粘質土である。S2134は礫が出土した。柱を安定させるための根石などと推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。出土遺物は土師質土器小片のみである。

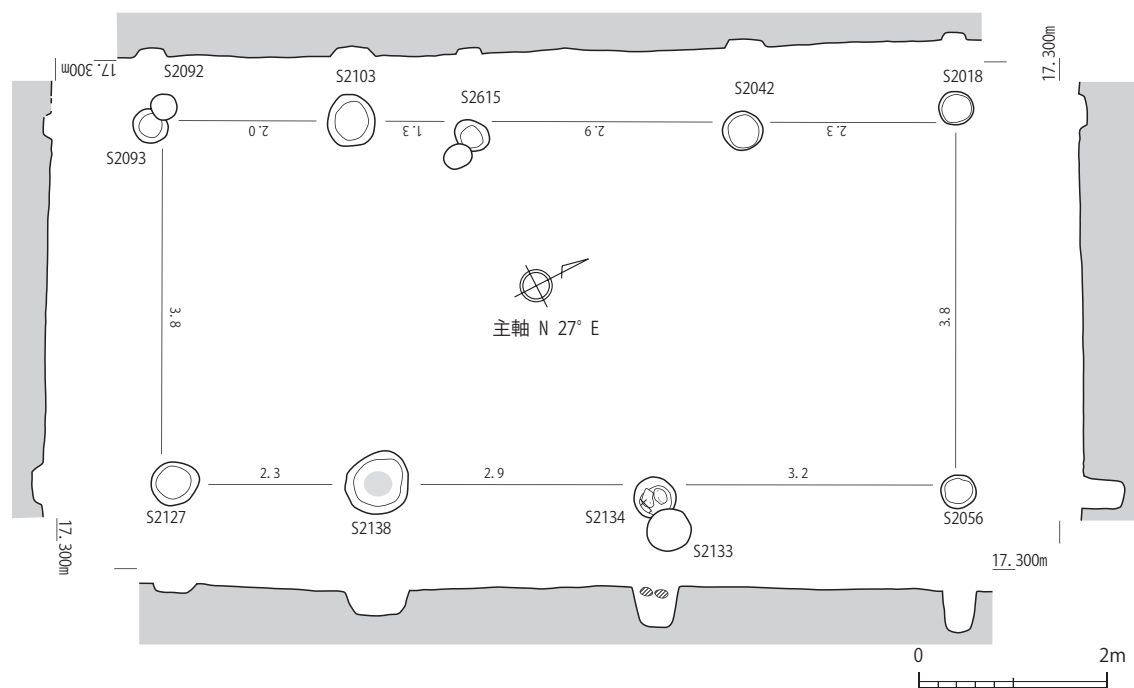
SB048(第135図)

SB048はA・B-8・9区で検出した。切り合い関係はSB047に切られる。SB046と重複する。建物プランはほぼ方形を呈し、梁行3-4間、桁行3-4間である。建物の南東部は総柱状に柱穴が展開する。身舎面積は72.2㎡である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗褐色粘質土である。S330・1972の柱穴で、礫が出土した。柱を安定させるための根石や礎盤石などに利用されたと推定される。また建物跡は検出面の段差(前述した段差)にまたがって展開している。建物東側の柱穴は西側の柱穴に比べて、底レベルは深い。このことは若干の傾斜面があるにせよ、あまりにも底レベルの差があるので、段造成をしたあとに当該建物が建った可能性がある。しかしながら、段造成と当該建物跡との関連までは不明である。多少の時期差も含めて考えておきたい。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

SB049(第136図)

SB049はA・B-10区で検出した。切り合い関係はSB047に切られる。建物プランは長方形で、梁行1間、桁行2間で、身舎面積は12.5㎡である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。この建物跡もSB48と同様に段差にまたがって展開するが、段差の低い部分の柱穴の底レベルと段差の高いところで検出した柱穴の底レベルはS271を除けば大差がないため、段造成前に建てられた可能性がある。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

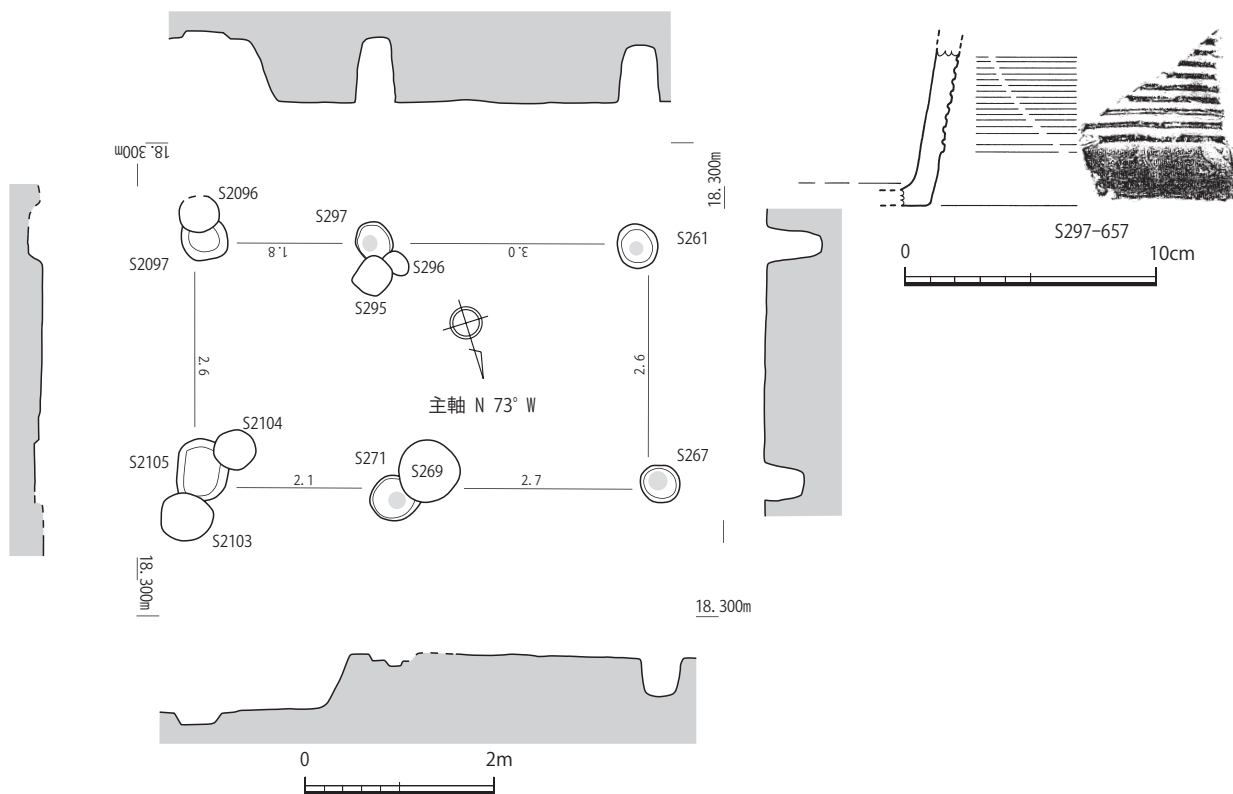
遺物(第136図)は、657はS297出土で、瓦質土器火鉢片である。胴部外面に平行に沈線を入れる。



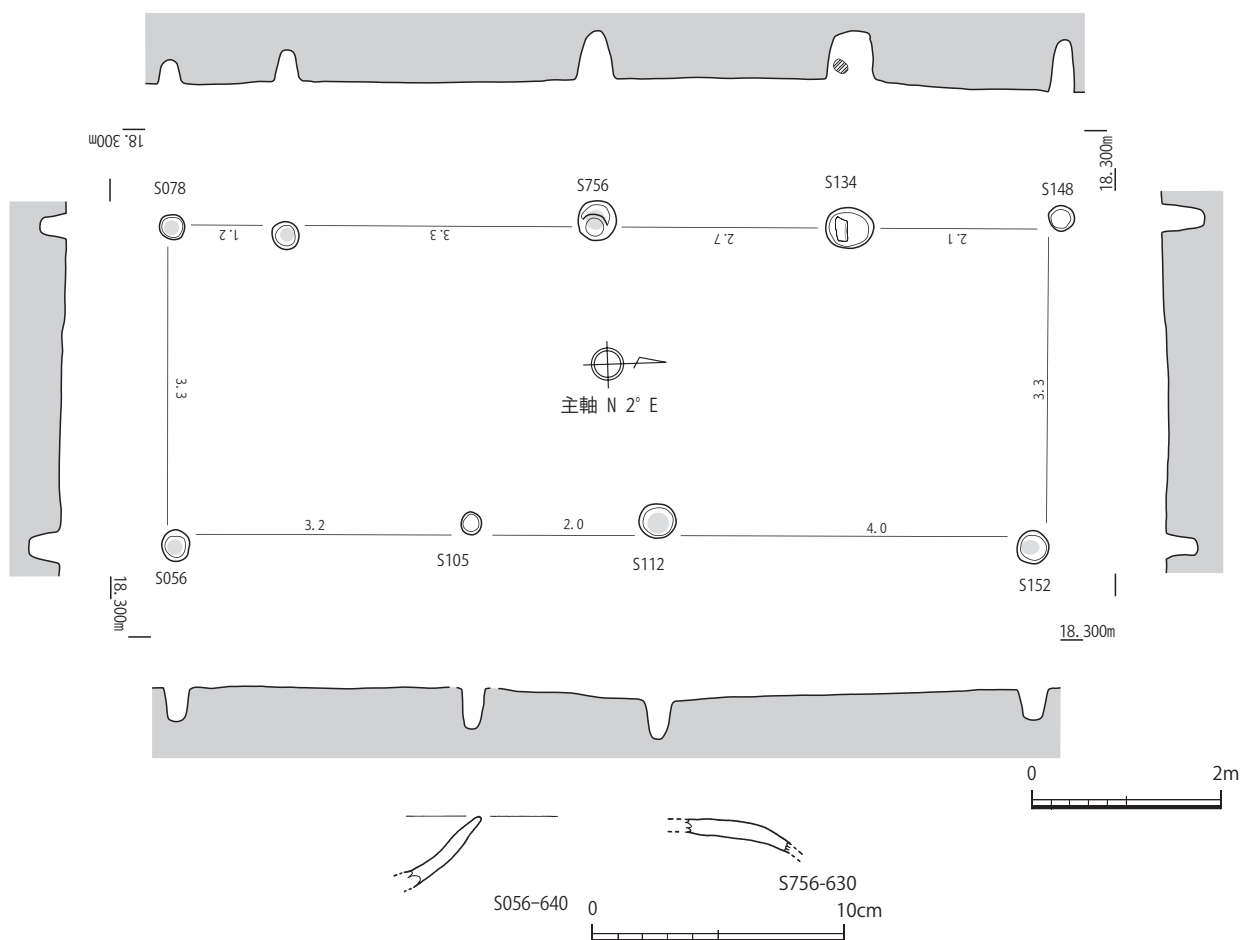
第134図 SB047遺構実測図(1/80)



第 135 図 SB048 遺構実測図 (1/80)



第136図 SB049 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第137図 SB050 遺構・出土遺物実測図 (1/3)

SB050(第 137 図)

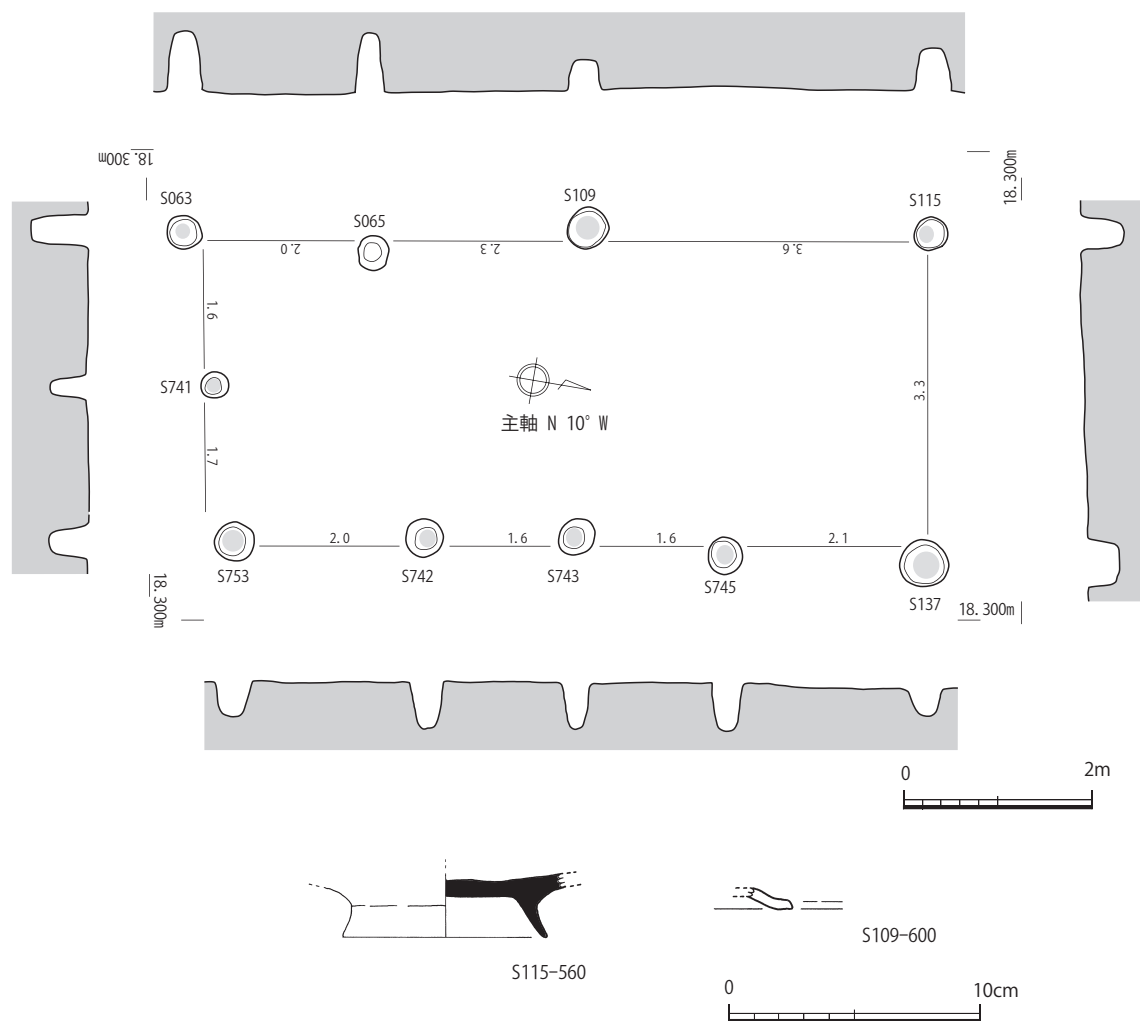
SB050 は B - 13・14・15 区で検出した。切り合い関係は古代の遺構を切る。建物プランは長方形で、梁行 1 間、桁行 3 - 4 間で、柱間距離は等間隔ではない。身舎面積は 30.7 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。S134 の柱穴で、礫が出土した。柱を安定させるための根石などと推定される。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 137 図) は、640 は S056 からの出土で、土師質土器坏か。もしくは土師器の可能性もあり。内外面ともナデ調整である。630 は S756 からの出土で、土師器蓋片である。外面に丹塗りの可能性あり。胎土は赤色粒子、白色粒子、黒色粒子、石英、角閃石、雲母を含んでいる。これは古代の所産であろう。

SB051(第 138 図)

SB051 は B・C - 14・15 区で検出した。切り合い関係は中世造成土を切る。SB052 と重複する。建物プランは長方形を呈し、梁行 1 - 2 間、桁行 3 - 4 間である。身舎面積は 25.1 m²である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、一部の柱穴を除いて円形柱痕が確認できた。埋土は灰褐色粘質土である。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 138 図) は、560 は S115 からの出土で、須恵器碗である。高台部は「ハ」の字状に開く。内外面ともにナデ、ヨコナデ調整である。600 は S109 からの出土で、土師器蓋である。内外面の調整はナデ・ヨコナデ調整である。胎土には角閃石などを含む。

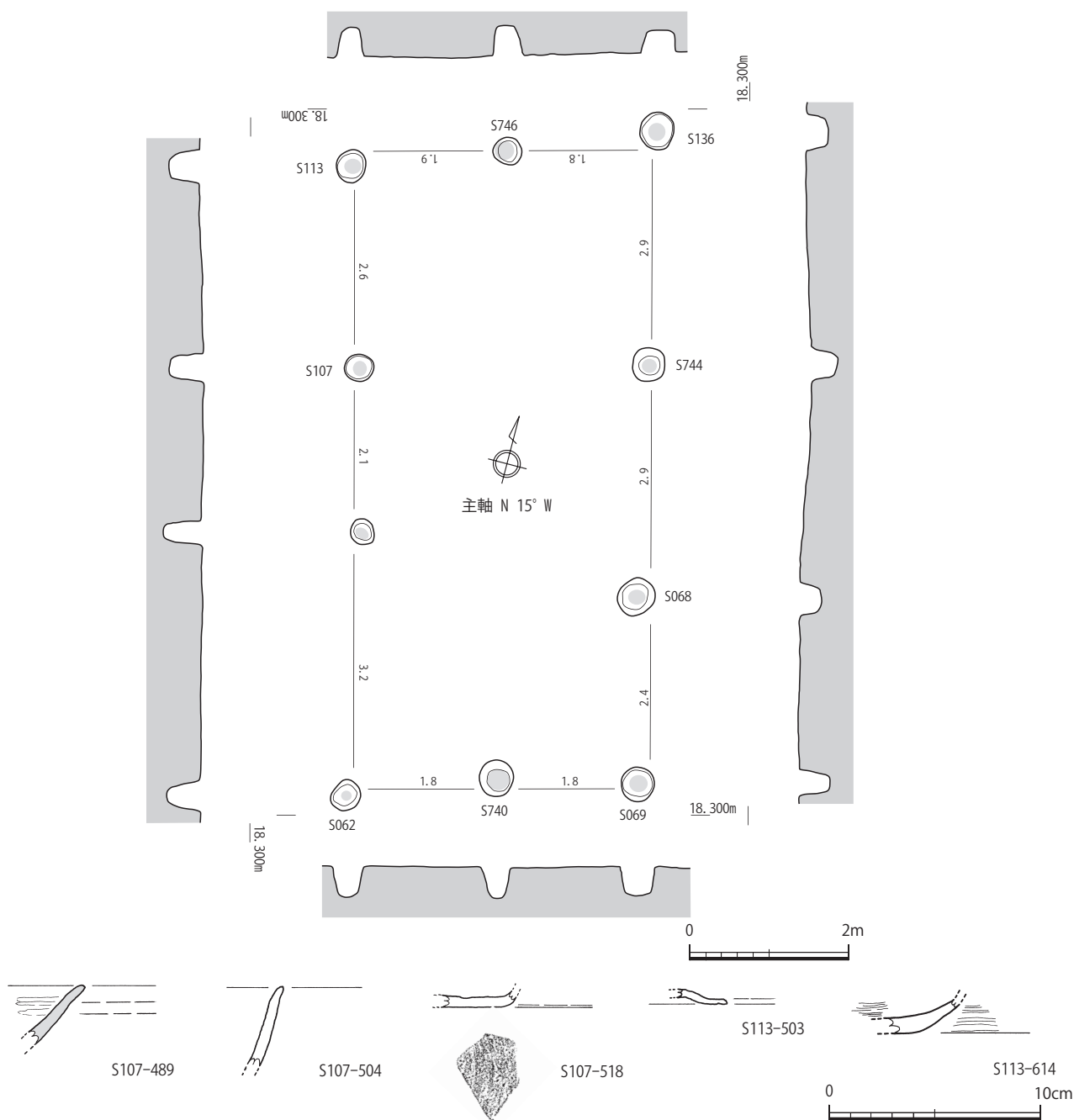


第 138 図 SB051 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB052(第 139 図)

SB052 は B・C - 14・15 区で検出した。切り合い関係は中世造成土を切る。SB051 と重複する。建物プランは長方形を呈する。梁行 2 間、桁行 3 間で、桁行の柱間距離は不均等である。身舎面積は 29.2 m² である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、すべての柱穴において円形柱痕が確認できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。建物方位などを参照すれば、この SB52 と SA04 はほぼ同様の方位を軸にしており、SB52 に対する SA02 は柵跡などになる可能性がある。建物主軸方位及び柱間距離は図に示した。

遺物 (第 139 図) は、S107 から 489・504・518 が出土した。489 は瓦器碗の口縁部～胴部である。内面に横方向のミガキ痕がある。504 は土師質土器坏である。胎土に黑色粒子、石英、長石などを含む。色調は黄橙褐色を呈する。518 は土師質土器坏片で、底部は回転糸切りのちナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。S113 から 503・614 の 2 点が出土した。503 は土師器蓋の口縁部。614 は土師器坏片である。内外面には横方向のミガキ痕が見られる。

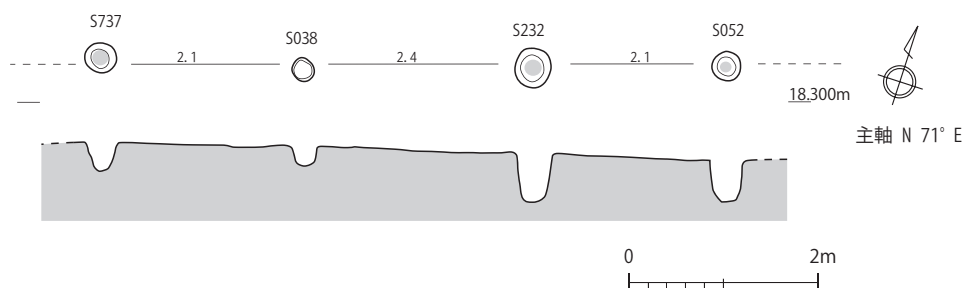


第 139 図 SB052 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

ロ. 柱穴列 (SA)

古代の柱穴列は6列確認した。中世の柱穴列は、性格としては柵跡になるか、もしくは掘立柱建物跡を構成するものになると推定される。

SA004(第 140 図)

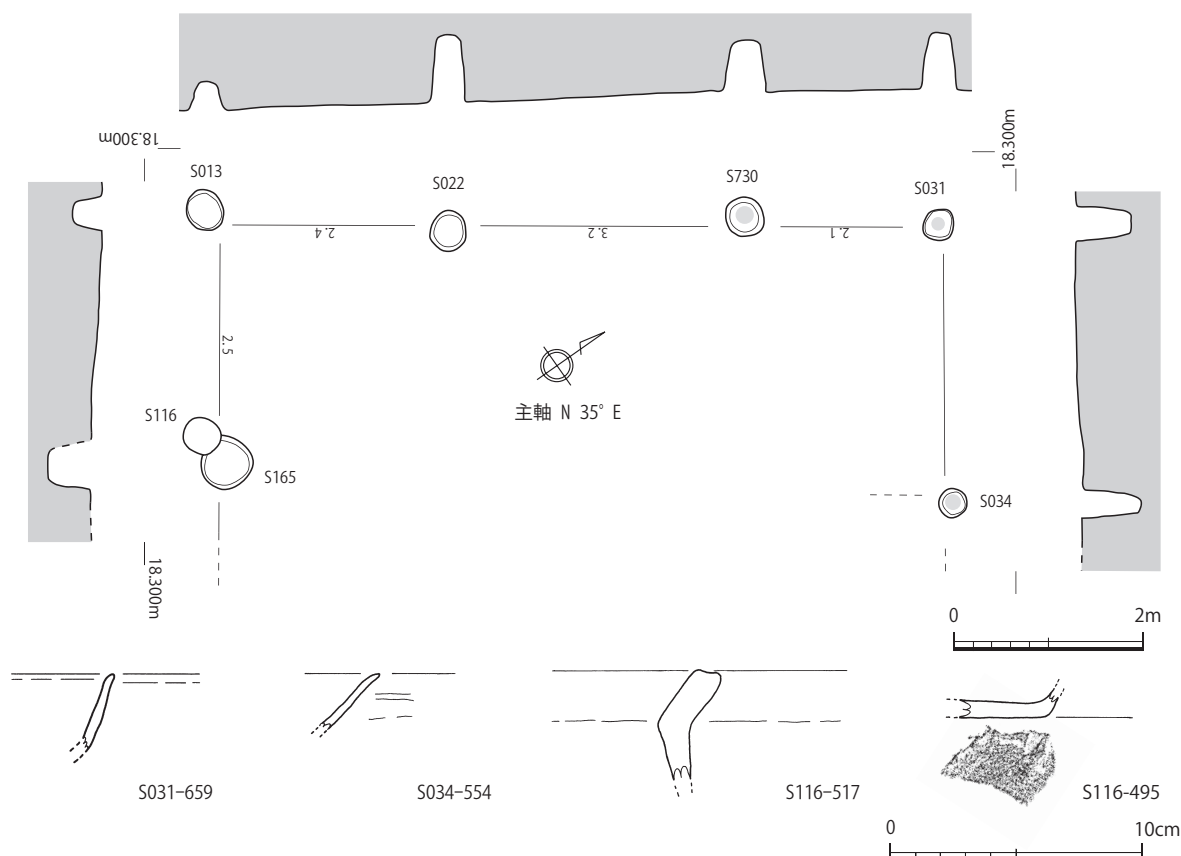


第 140 図 SA004 遺構実測図 (1/80)

SA004 は B - 15 区で検出した。切り合い関係は特にないが、中世の造成土を切る。規模は $4 + \alpha$ 間である。柱間距離はほぼ等間隔で約 2.1 m である。S038 以外では円形の柱痕を確認した。両側に展開しない状況なので、柵跡になる可能性がある。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。出土遺物はない。

SA005(第 141 図)

SA005 は B・C - 15・16 区で検出した。切り合い関係は、中世の造成土を切る。規模は南北方向に 3 間、北側と南側で東方向に屈曲し、1 間までは確認できたが、あとは調査区外にのびそうである。一部柱痕を除いて、円形の柱痕を確認した。遺構の状況からすると当該柱穴列は柵跡よりも掘立柱建物跡を構成する一部になりそ

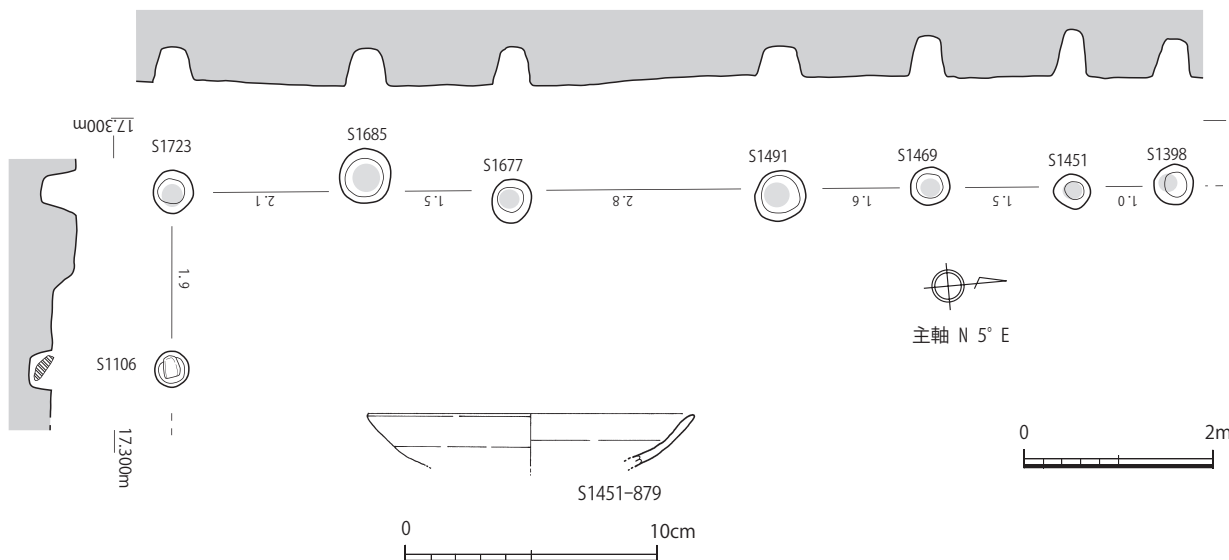


第 141 図 SA005 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

うである。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。遺物(第141図)はS031より、659の土師器坏が出土。S034より、554の土師器坏が出土。S116はSA05を構成しないが、S165を切る遺構から掲載した。S116から517の土師器甕片、495の土師器坏が出土した。出土遺物は古代の所産であろう。

SA006(第142図)

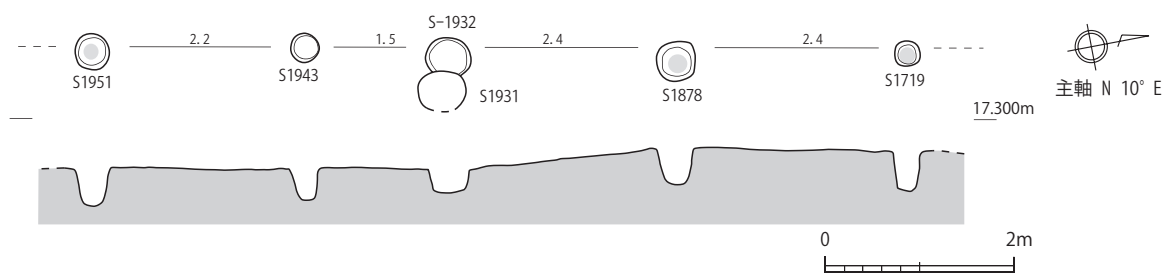
SA006はD・E-6・7区で検出した。切り合い関係はSB033・038を切る。規模は南北方向に6+α間、南側で東方向に屈曲し、1間までは確認できたが、さらに延びるかどうかは不明である。一部柱痕を除いて、円形の柱痕を確認した。S1106からは扁平な礫が出土した。柱間距離は等間隔ではない。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。遺物(第142図)はS1451より、879の緑釉陶器皿が出土。遺物は古代の所産である。



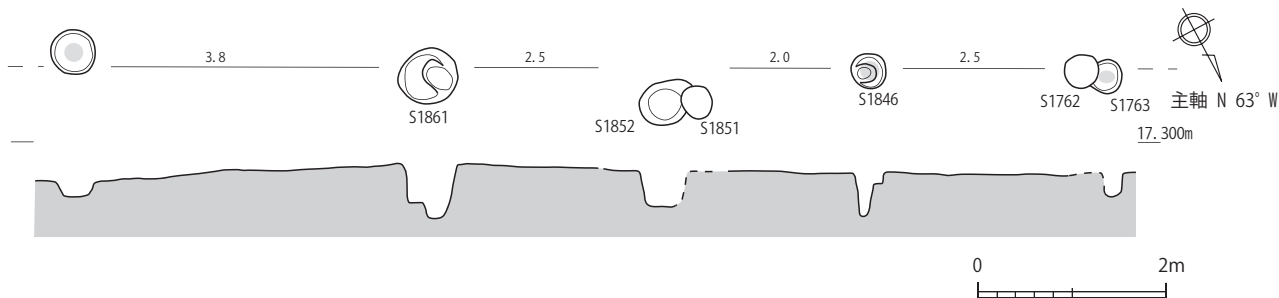
第142図 SA006遺構・出土遺物実測図(1/80・1/3)

SA007(第143図)

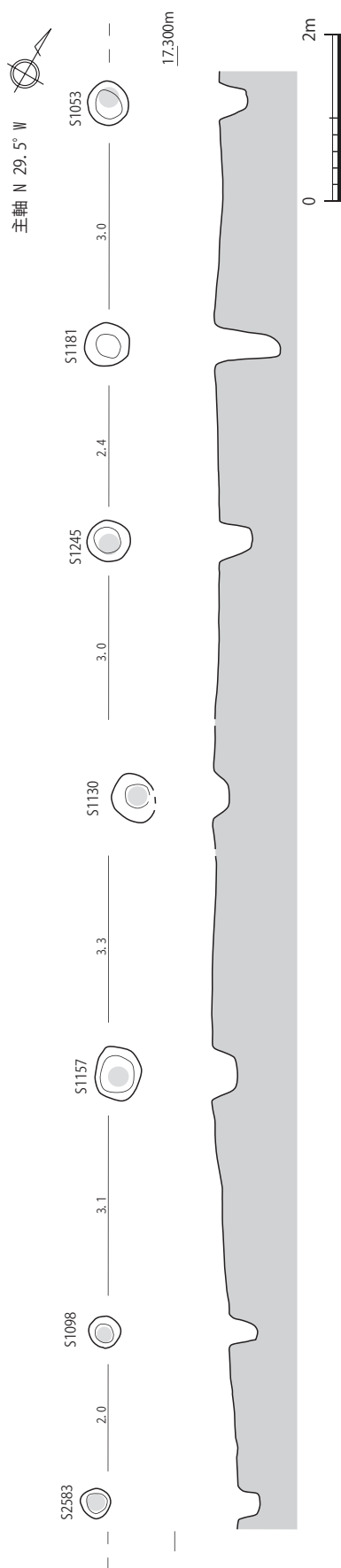
SA007はD-7・8区で検出した。切り合い関係はSB038を切る。規模は南北方向に4間である。一部柱痕を除いて、円形の柱痕を確認した。正確としては両側に展開しないことから、柵跡の可能性が高い。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。出土遺物はない。



第143図 SA007遺構実測図(1/80)



第144図 SA008遺構実測図(1/80)



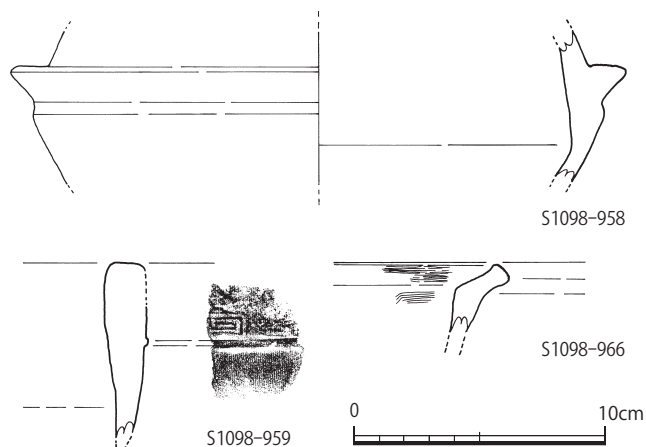
第145図 SA009 遺構実測図 (1/80)

SA008(第144図)

SA008はB・C－8・9区で検出した。切り合い関係はS046に切られる。規模は東西方向に4間である。一部柱痕を除いて、円形の柱痕を確認した。柱間距離は等間隔ではない。この柱穴列も両側に展開しないことから、柵跡の可能性が高い。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。出土遺物は土師器小片が少量出土した。

SA009(第145・146図)

SA009はE・F－4・5・6区で検出した。切り合い関係は古代遺構を一部切る。規模は南北方向に6＋α間である。一部柱痕を除いて、円形



第146図 SA009 出土遺物実測図 (1/3)

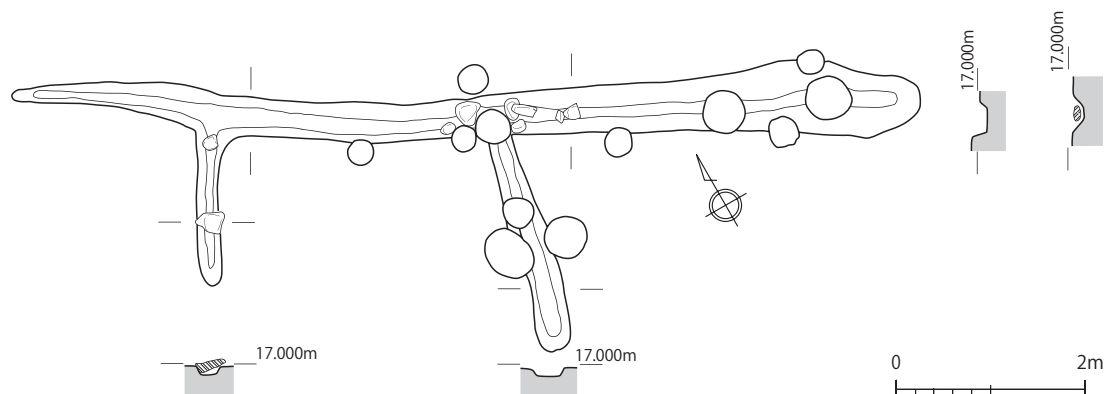
の柱痕を確認した。柱間距離は等間隔ではない。この柱穴列も両側に展開がなさそうで、柵跡の可能性が高い。正確な柱間距離と主軸方位は図に示した。遺物(第146図)はS1098より3点出土した。958は瓦質土器羽釜である。959は瓦質土器火鉢の口縁部である。口縁部外面には雷文が巡り、その下部に突帯が1条巡る。966は土師質土器の鍋片である。口縁部は外側に大きく外反する。内面は刷毛状工具による調整あり。

ハ. 溝跡 (SD)

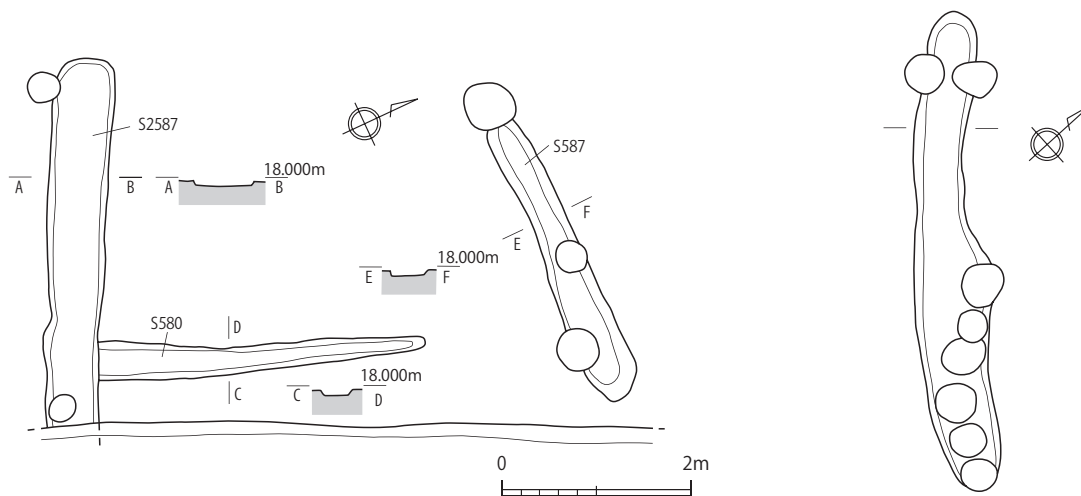
中世の溝跡は5条ほど確認した。それぞれの溝跡の規模は小さく、出土遺物も少量のため、その性格までは不明なものが多い。しかしながら付近で検出した建物跡と重複する時期と考えられ、関連があると推定される。

SD1575(第147図)

遺構はC・D－7区で検出した。切り合い関係は複数の遺構とあるが、当遺構を切るのは中世ピットのみである。溝プランは東西に長くのび、2か所で南北方向に短くのびるものがある。検出規模は東西最大長9.6m、最大幅0.8m、最大深0.15mである。南北に出ている溝は2本あるが、最西側の南北溝規模は、長さ1.6m、最大幅0.25m、最大深0.15mを計る。東側の南北溝規模は、長さ2.4m、最大幅0.36m、最大深0.1mを計る。埋土には拳大の礫が混入する。出土遺物は少量で、図示できるものはない。



第 147 図 SD1575 遺構実測図 (1/80)



第 148 図 SD2587・580・587 遺構実測図 (1/80)

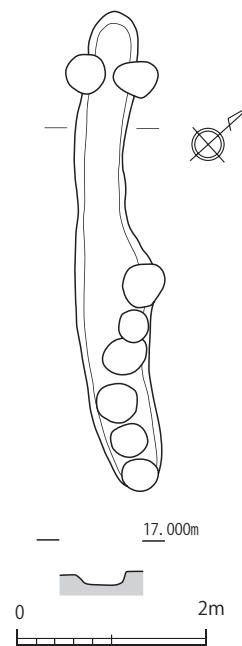
SD2587・SD580・SD587(第 148 図)

これら遺構は B-7 区で検出した。SD2587 は SD580・SB044 を切る。規模は溝の東側を中世以後の削平により、不明であるが、最大長 4.0 m、最大幅 0.65 m、最大深 0.05 m を計る。SD580 は SD2587 に切られ、SB44 を切る。規模は長さ $3.4 + \alpha$ m、最大幅 0.4 m、最大深 0.1 m を計る。SD587 は SB44 に切られる。規模は長さ 3.2 m、最大幅 0.55 m、最大深 0.1 m を計る。これら遺構の埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物はない。

SD2300(第 149 図)

遺構は C・D-8 区で検出した。規模は南北に延びる溝で、最大長 5.1 m、最大幅 0.8 m、最大深 0.14 m を計る。埋土は褐色粘質土で、出土遺物はない。この SD2300 に関しては古代に帰属する可能性もありうる。

第 149 図 SD2300
遺構実測図 (1/80)

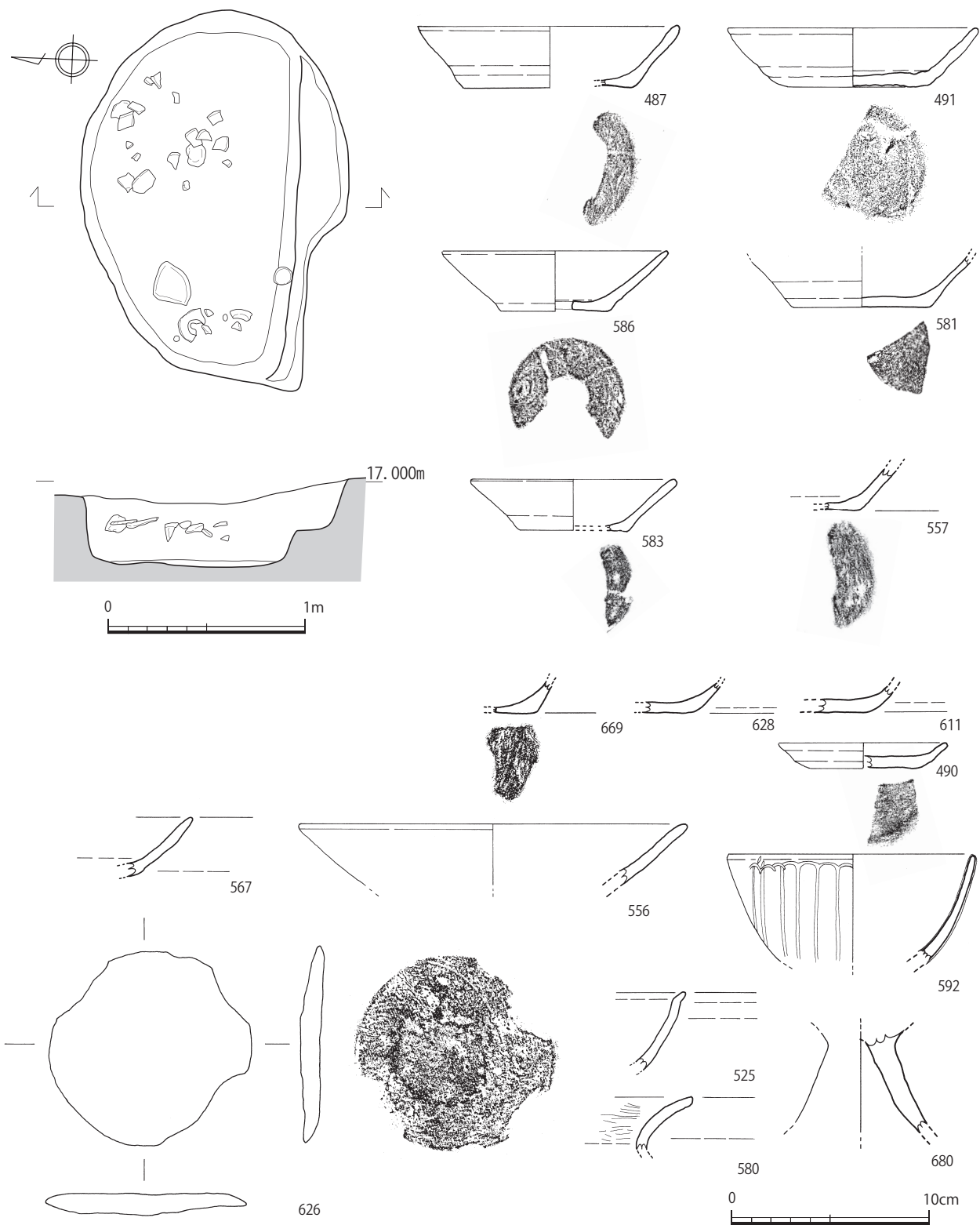


二. 土坑 (SK)

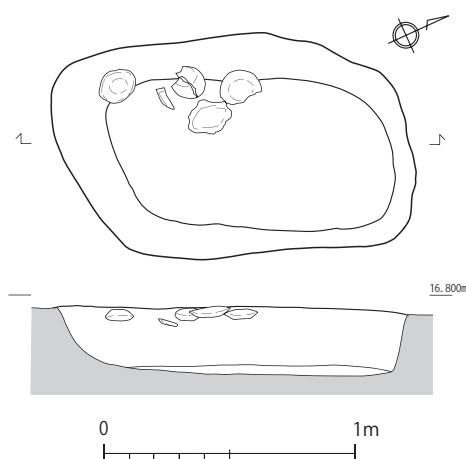
中世の土坑は調査区内で 12 基以上確認した。ここでは残存状況と出土遺物が良好な遺構を抽出して個別に掲載した。またここで取り扱う土坑としては廃棄的なものから意図的なものまでが含まれると推定される。また掘立柱建物跡とも重複する時期でもあり、掘立柱建物跡との関連は推定される。

SK004(第 150 図)

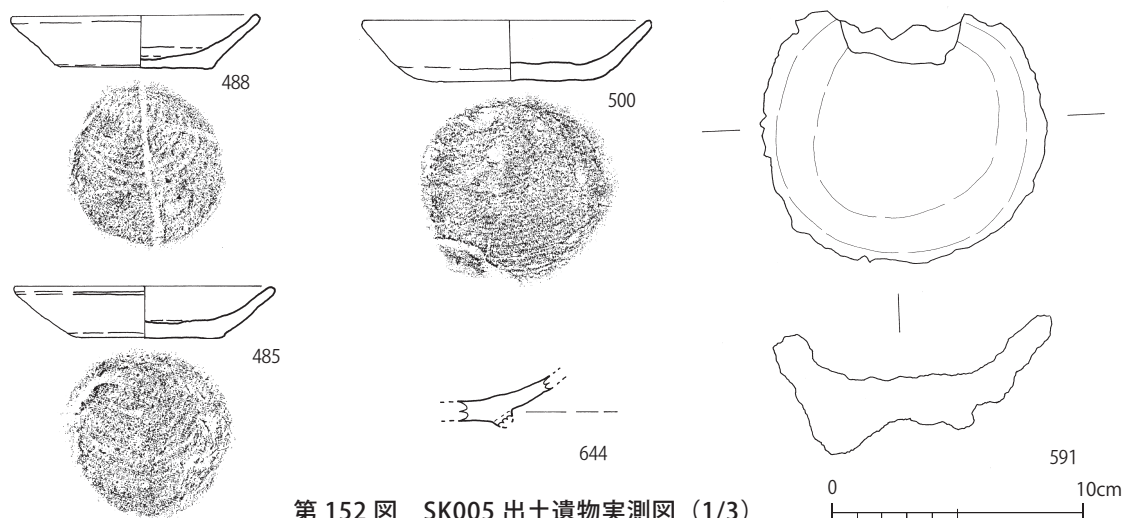
遺構は C-10 区で検出した。切り合い関係は 1 か所土坑を切る。平面プランは楕円形に近い。規模は長軸で 1.85 m、短軸で 1.35 m、最大深 0.45 m を計る。埋土は暗褐灰色粘質土、しまり強い、炭化物含む単層である。遺物は中間層あたりで出土している。遺物 (第 150 図) は、土師質土器は 487 ~ 490 (順不動) の 13 点出



第150図 SK004 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)



第151図 SK005 遺構実測図 (1/30)



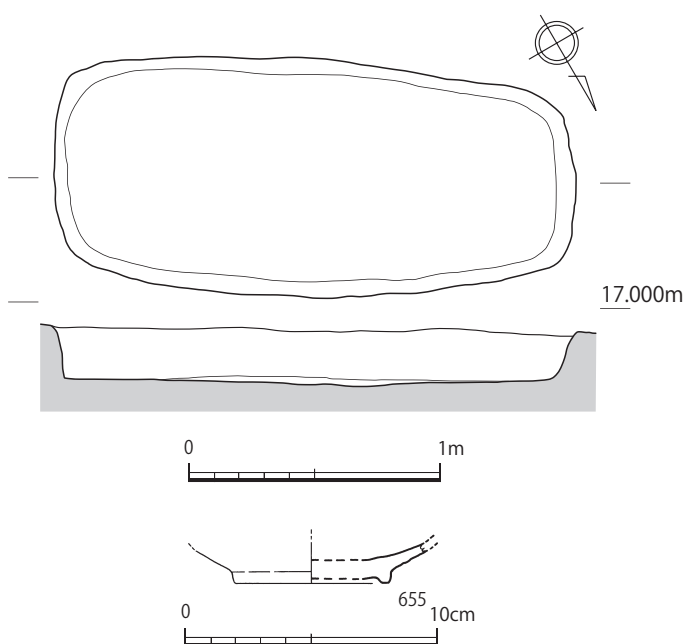
第152図 SK005 出土遺物実測図 (1/3)

土ブロックを少し含む。単層である。また床面の近い箇所から人骨片が残存状況はかなり不良であるが、確認できた。よって、この土坑は墓であることが推定される。遺物は上層からまとまって出土した。断面観察では木棺などの痕跡は見当たらなかったため、土坑墓であろう。埋葬したあとに遺物を置いたものと思われる。遺物(第152図)は、土師質土器は坏が488・500・485の3点、椀が644の1点、また土師質の鉄滓が全面に付着した埴塼として代用していたものが591の1点である。土師質土器坏の器高は低く、外底は回転糸切りである。644は古代の可能性もある。

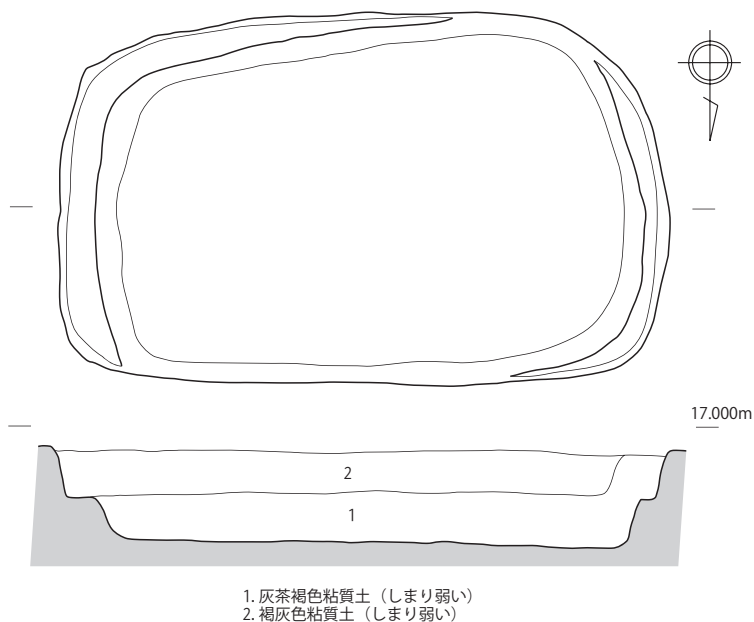
土した。490 以外は坏。底部は回転糸切りのちナデ調整を行っている。また底部から胴部にかけて 586 のように少し上方にあげて外反するものと底部から直接外反するもの、丸みを帯びながら外反するものがある。口縁端部は丸く仕上げるようである。586 や 581、487 など胴部の器壁が若干薄くなる個所がある。490 は小皿である。底部は回転糸切りのちナデ調整である。円盤状土製品は 626 で、土師質土器坏を加工したものであろう。龍泉窯系青磁は 592 で椀である。外面に線描状連弁文を施す。525・580・680 は古代以前の所産であろう。

SK(ST)005(第 151 図)

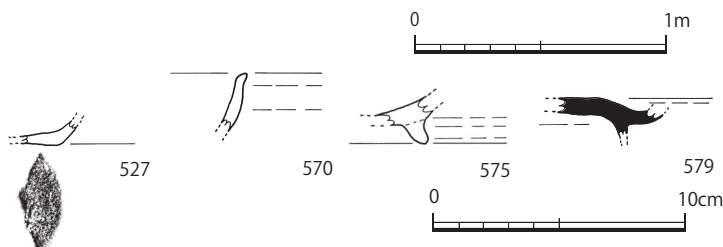
遺構は D - 8 区で検出した。切り合い関係はない。平面プランは隅丸長方形である。規模は長軸で 1.4 m、短軸で 0.9 m、最大深 0.3 m を計る。埋土は暗褐黄色粘質土。しまり強い。黄



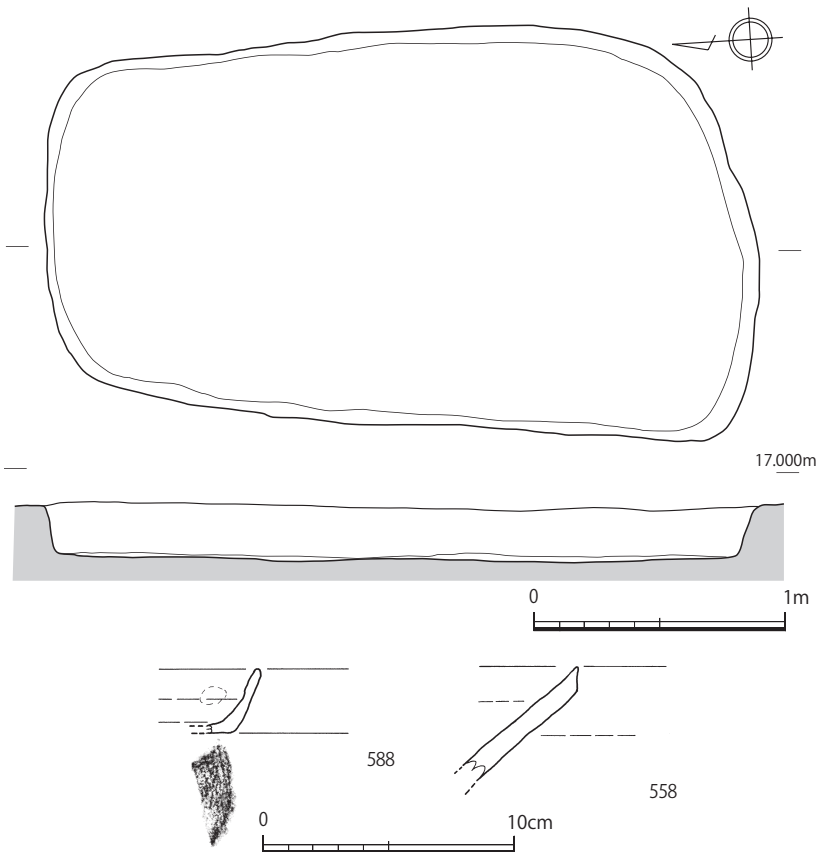
第153図 SK400 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)



1. 灰茶褐色粘質土（しまり弱い）
2. 褐灰色粘質土（しまり弱い）



第 154 図 SK500 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)



第 155 図 SK600 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK400(第 153 図)

遺構は E - 6 区で検出した。切り合い関係は中世造成土を切る。平面プランは隅丸長方形である。規模は長軸で 2.8 m、短軸で 1.3 m、最大深 0.3 m を計る。床面はややレンズ状に窪む。埋土は暗褐色粘質土、パサパサしている、しまりは強い、5mm ほどの小礫を多く含む。単層である。遺物 (第 153 図) は、655 の 1 点と土師質小片が少量出土した。655 は中世に帰属するものではないが、緑釉陶器皿で、古代の所産であろう。実際古代の遺構も切っているの、そこからの混入か。

SK500(第 154 図)

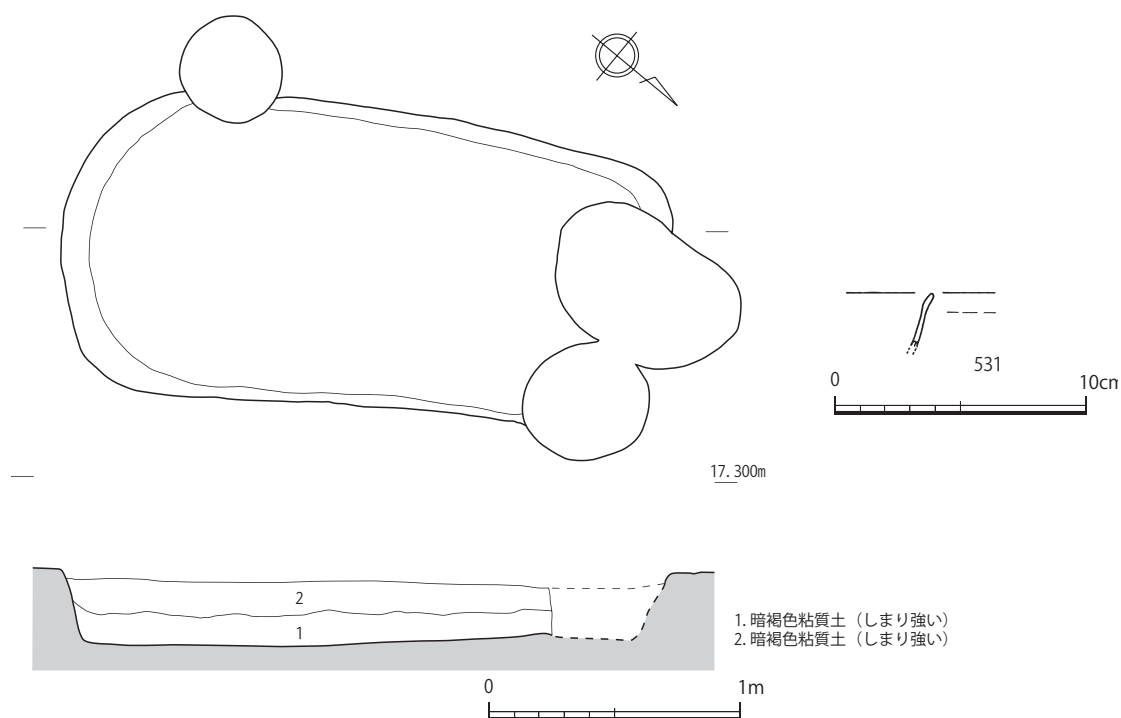
遺構は E - 6 区で検出した。切り合い関係は中世造成土を切る。平面プランは隅丸長方形である。規模は長軸で 2.42 m、短軸で 1.50 m、最大深 0.4 m を計る。掘り方の中段くらいに、西と南から東側にかけて、1 段テラスを設けている。床面はフラットである。埋土は第 154 図の土層に示すとおりである。遺物 (第 154 図) は、土師質土器杯は 527 の 1 点のみである。外底部は回転糸切りのちナデ調整。570・575・579 は古代の所産である。570 は土師器杯口縁部。575 は土師器碗底部。579 は須恵器で碗の破片か。

SK600(第 155 図)

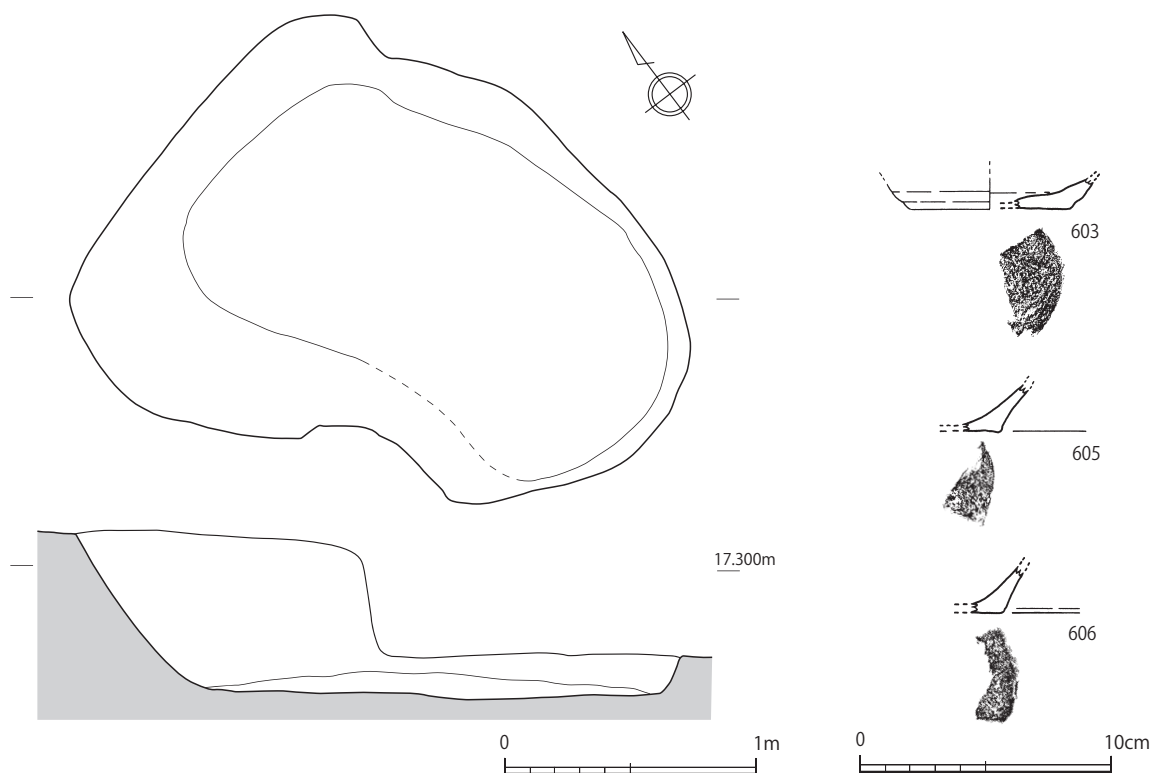
遺構は E - 6 区で検出した。切り合い関係中世造成土を切る。平面プランはやや不定形な長方形である。規模は長軸で 2.8 m、短軸で 1.6 m、最大深 0.2 m を計る。床面はフラットである。埋土は暗褐灰色粘質土、しまり強い、焼土と土器片を少し含む。遺物 (第 155 図) は、588 の土師質土器杯が出土し、底部は回転糸切りのちナデ調整。胎土は赤色粒子、白色粒子、雲母などを含む。558 は東播系須恵器鉢の口縁部である。

SK700(第 156 図)

遺構はE－6・7区で検出した。切り合い関係は中世造成土を切り、複数の中世ピットに切られる。平面プランは隅丸長方形である。規模は推定長軸で2.4 m、短軸で1.2 m、最大深0.3 mを計る。床面はやや北側が高く、南側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は図中の土層図に示した通りである。遺物(第 156 図)は、531の1点が出土した。531は白磁の椀である。口縁端部は外反する。



第 156 図 SK700 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)



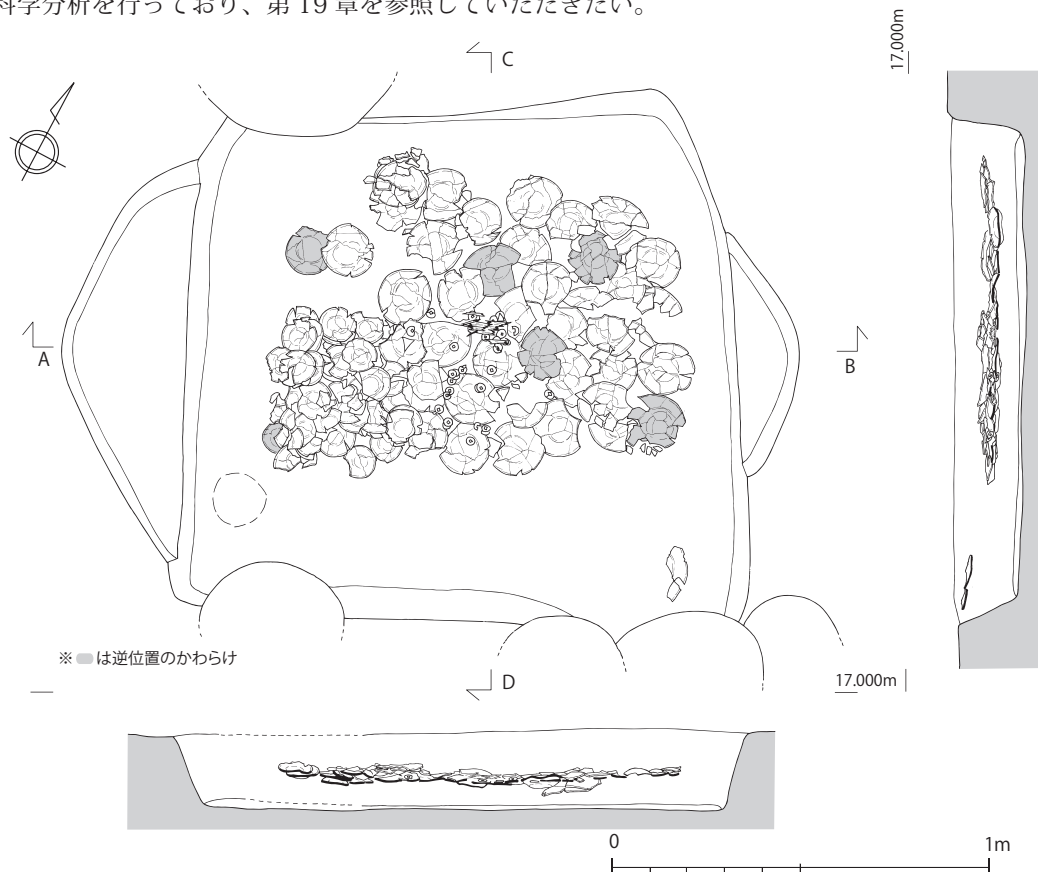
第 157 図 SK715 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK715(第157図)

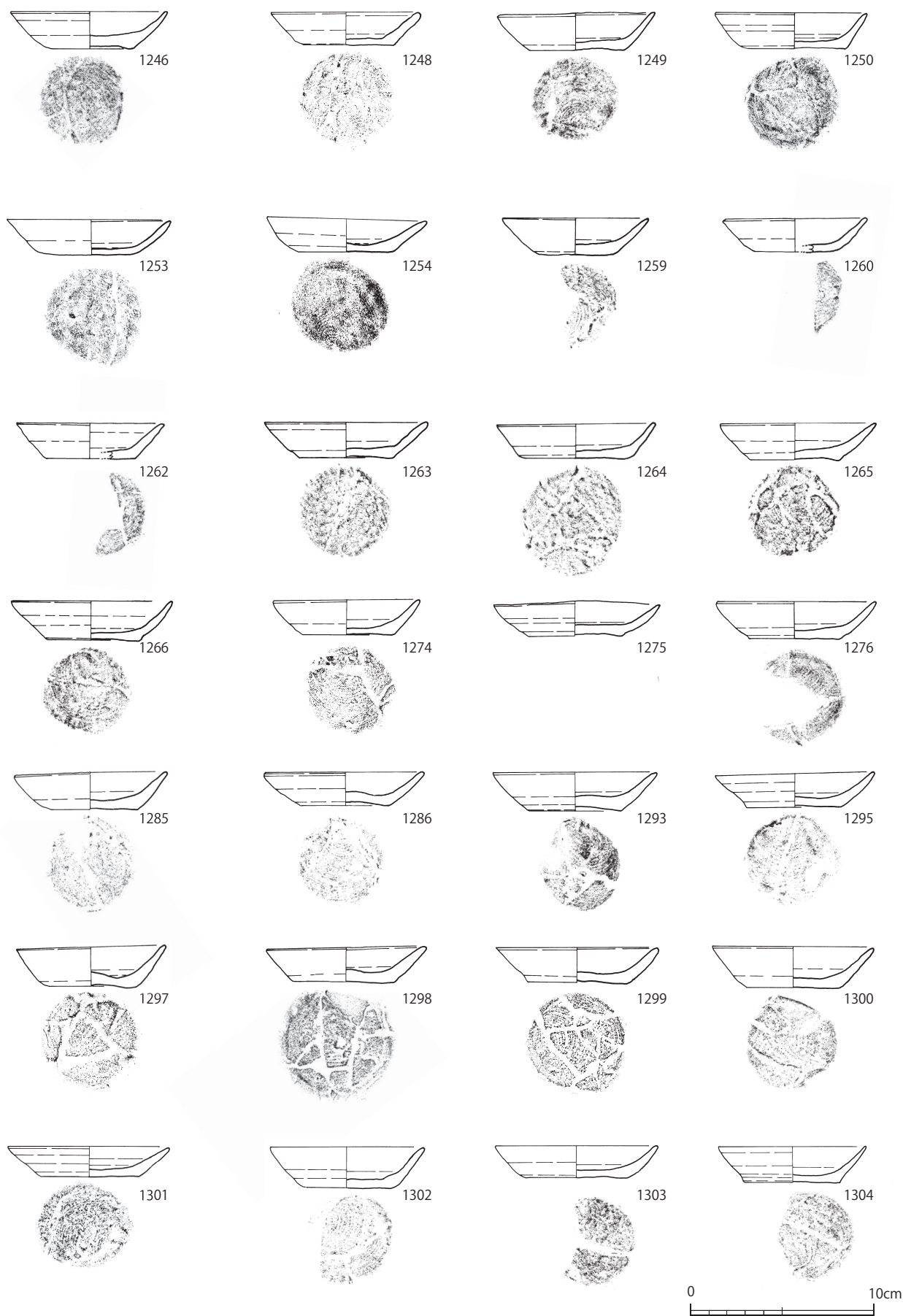
遺構はC・D—5区で検出した。切り合い関係はSP713などの中世ピットに切られ、また完掘した床面からピットが2つ検出されている。平面プランは段差にまたがる状態で検出したため、不定形を呈している。遺構の南東側はこの段差造成の時に大きく削られていると推定される。規模は長軸で2.2 m、短軸で1.5 m、最大深0.65 mを計る。床面は中央部がややレンズ状に窪んでいる。埋土は暗褐灰色粘質土、しまり強い。遺物（第157図）は、土師質土器が3点出土している。3点ともに外底部は回転糸切りのちナデ調整である。

SK1265(第158図)

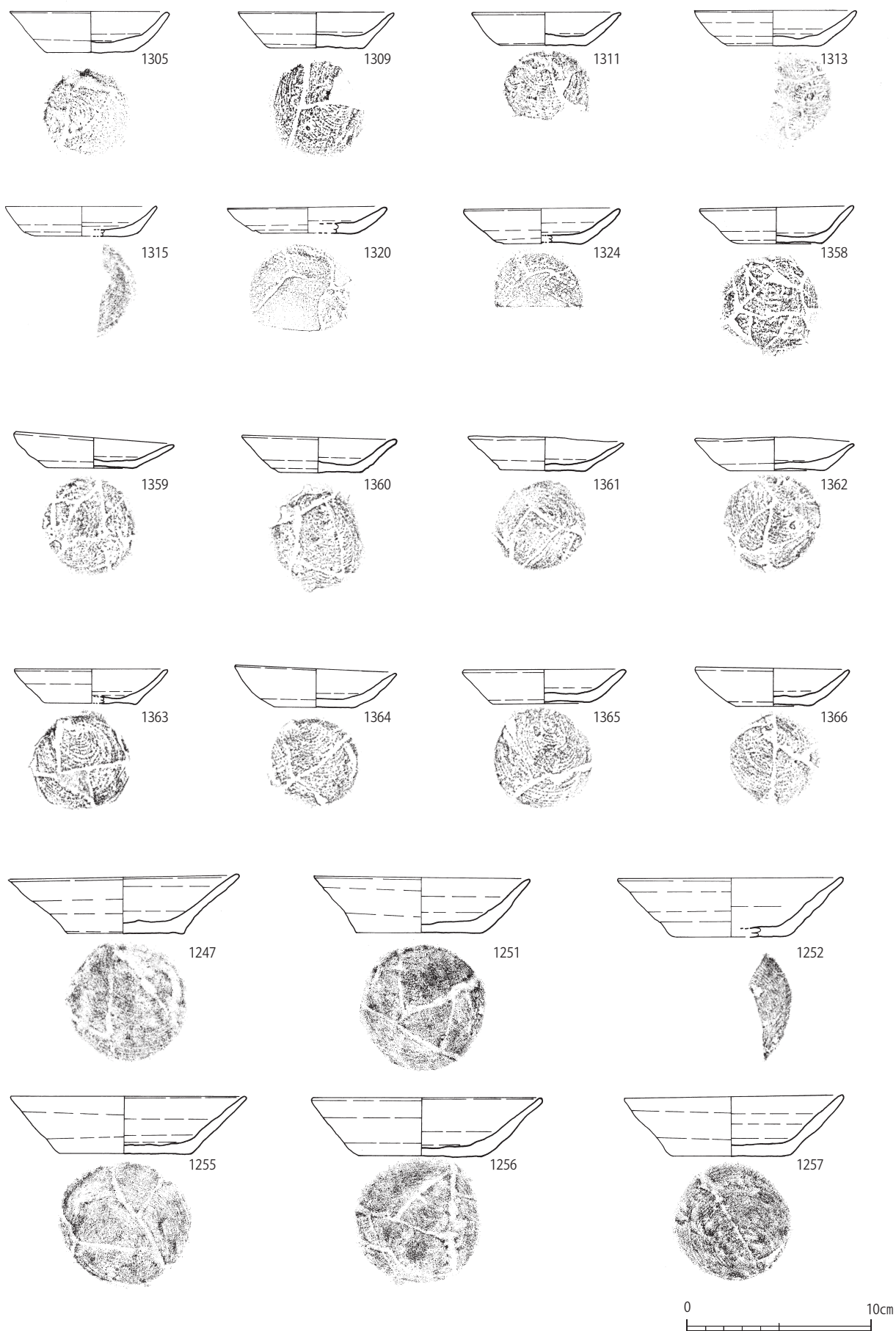
遺構はE—5区で検出した。切り合い関係は古代遺構を切り、複数の中世ピットに切られる。平面プランはほぼ方形を呈するものである。床面はほぼフラットである。掘り方規模はAB軸1.48 m、CD軸1.35 m、最大深0.2 mを計る。土師質土器(93枚)や銭貨(46枚)など深さ0.18 mのところ出土した。土器群中央から南側には小型坏が集中しているが、その他は坏であり、意図的である。また土器の規格の揃え方やそれぞれの規格の重ね方の点で恣意性を感じさせる。埋土は暗茶褐色粘質土で、炭化物および土器小片を含む。基盤層は淡茶褐色粘質土で5mm～2cmほどの小礫を多く含む。また平面・断面観察では木製容器などは確認できていない。土師質土器は掘り方の中央からやや西側に長形状に一部を除き正位置で置き、一部2～3枚を重ねているものもある。土師質土器が集中している南西隅には2枚の土師質土器坏を他と少し隔てて置いている。また掘り方の北東隅と南東隅(検出時に故意に取り上げを行ったため、図面上は波線で表記している)に離れて1枚ずつ土師器質土器が置かれていた。土師質土器は検出時、すべて土圧により潰れていたが、当時は完形のまま埋められたものと推定される。銭貨はすべて中国銭であり、土師質土器の直上出土のものと重ねてある坏の間に置かれた状況のものが観察できた。ただし土師質土器直上の銭貨は坏・皿の中に整然と置かれている状況ではない。さらに土師質土器の直上と直下には、残存状況は不良であるが、植物遺体を確認できた。土師質土器直下には白い数mm～数cmほどの筋状の有機体が確認できた。残存状況は不良であったが、動物の骨片と推定される。植物遺体などは科学分析を行っており、第19章を参照していただきたい。



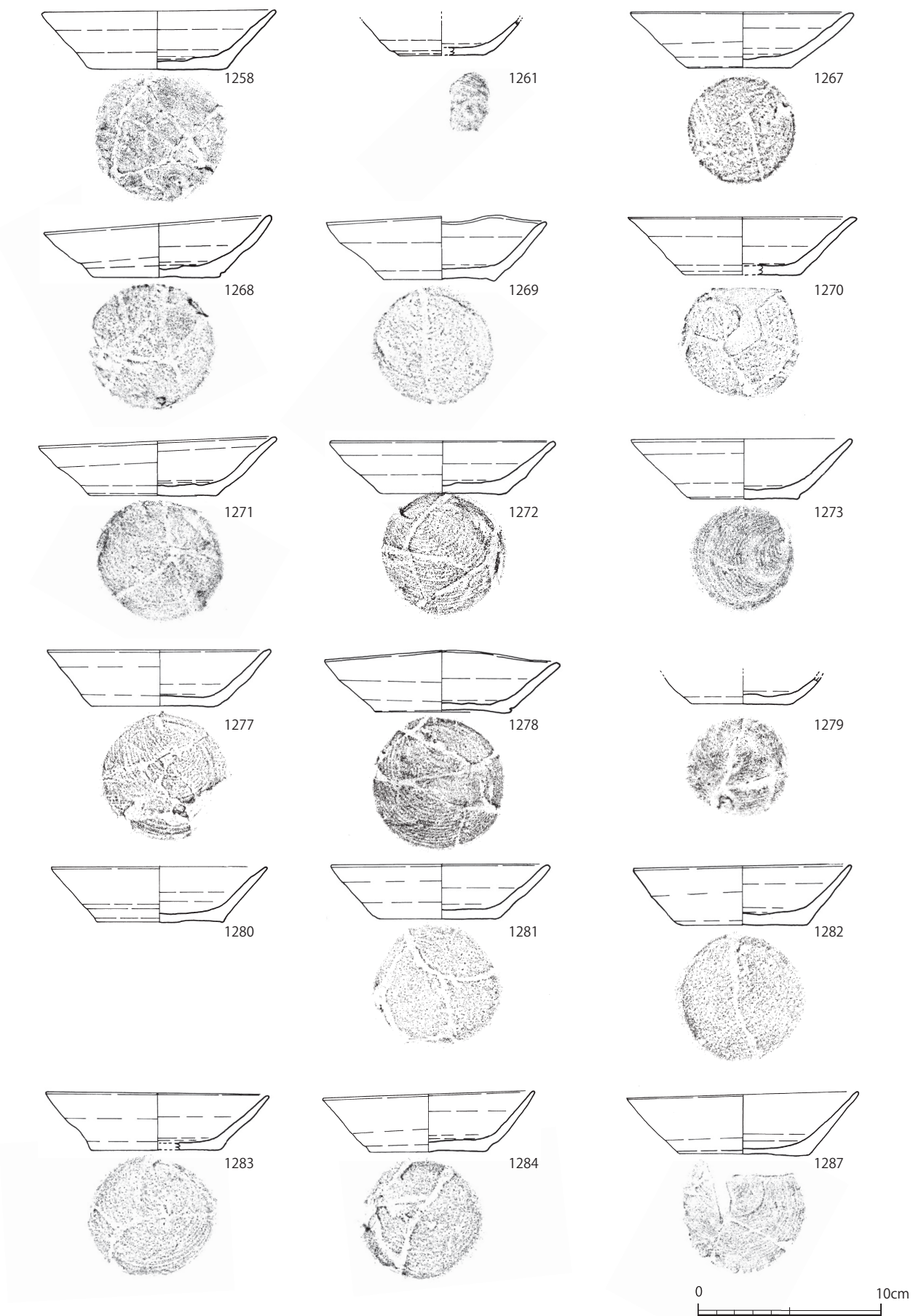
第158図 SK1265 遺構実測図 (1/20)



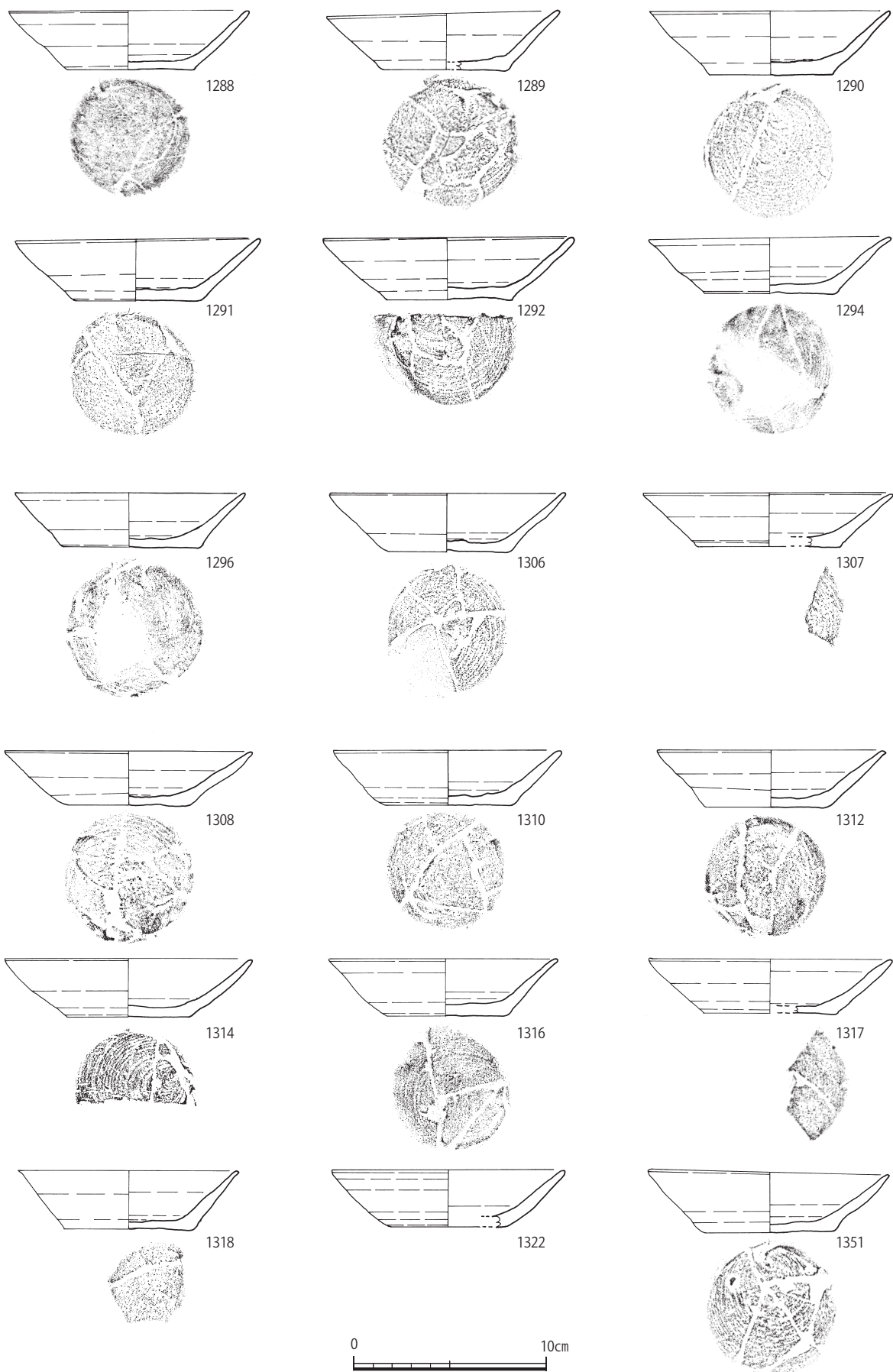
第159図 SK1265 出土遺物実測図① (1/3)



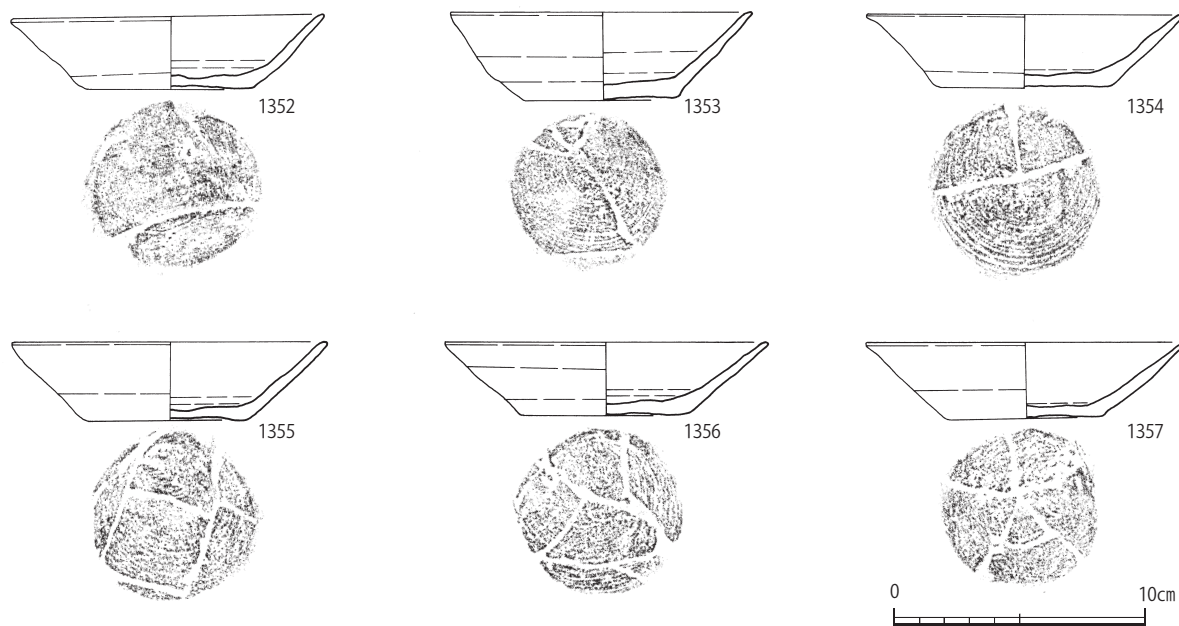
第 160 図 SK1265 出土遺物実測図② (1/3)



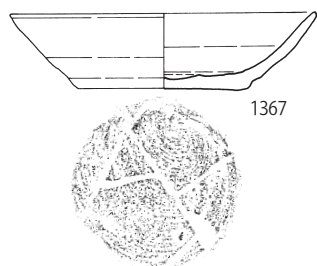
第 161 図 SK1265 出土遺物実測図③ (1/3)



第 162 図 SK1265 出土遺物実測図④ (1/3)



第 163 図 SK1265 出土遺物実測図⑤ (1/3)



ここで遺構の形成を簡略にまとめると、

- ①方形状に掘り下げ、若干の土を入れ、床面をフラットにする。
- ②植物と推定動物の骨を置く。
- ③土師質土器杯・皿を長方形に整然と配置。重ねている箇所には挟んで銭貨を置いているものもある。
- ④土師質土器の上に銭貨を撒き、植物を置く。

で行われていることが出土状況から推定される。

遺物(第 159-167 図)は、土師質土器が 93 枚確認できた。銭貨は 46 枚が確認できた。出土状況から良好な一括資料の一群といえる。土師質土器皿は 44 枚出土した。1246～1366(R 番不順)で、平均法量は口径 8.5 cm、底径 4.8 cm、器高 2.0 cm である。外底部は回転糸切り離しのちナデ調整を行っている。体部はナデ調整。器形は底部から胴部の屈曲部は、シャープもしくは丸みを帯び直接外反しながらほぼまっすぐに延びる。ただ 1266・1275 などのように底部から胴部への流れの屈曲部が直接外反するのではなく、底部から若干垂直気味に立ちあがって外反するものもある。また内底部はフラットもしくはレンズ状になるものが多いが、1286・1295・1297・1360 などのように内底中央付近が上方に膨らむものもある。器壁は 1361 や 1304 のように薄いものから 1298・1285 のように厚いものもある。土師質土器杯は 49 枚出土した。1247～1367(R 番不順)で、平均法量は口径 12.3 cm、底径 6.6 cm、器高 3.1 cm である。外底部は回転糸切り離しのちナデ調整を行っている。あとはナデ調整。器形は底部から胴部の屈曲部は、シャープもしくは丸みを帯び直接外反する。胴部はまっすぐ直線的にのびるものと丸みを持ちながらのびるものがある。ただ 1284・1292・1351・1353・1367 などのように底部から胴部への流れの屈曲部が直接外反するのではなく、底部から若干上方気味に立ちあがって外反するものもある。また内面の胴部と底部の屈曲がシャープに近いものと緩やかになるものがある。銭貨(銅銭)は 46 枚出土した。すべて中国銭で北宋銭が大半を占める。最古のもので 08・25・32 の開元通寶で、最新のもので 07・44 - 1 の政和通寶であろう。さらに銭貨には意図的に葉を巻いているものと布を巻いているものが存在する。葉を巻いている銭は 03 - 1・06・07・08・09・10・27・39・45・46 で、布を巻いているものは 30 である。ただ葉の残存状況は良好ではない。当時はすべての銭に葉か布を巻いて置いた可能性もある。また葉に関しては、科学分析を行っており、第 19 章を参照されたい。

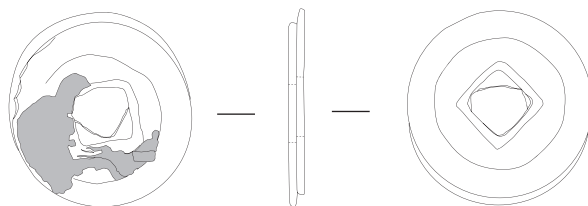
表 1 銭貨観察表

銭貨番号	銭貨名	国名	初鑄年	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	実測or拓本	備 考	植物質	出土時の 伏せ方	破片
銭01	熙寧元寶	北宋	1068年	2.4	0.12	1.37	60%	拓本	真書。一部欠損、裏面にズレあり。		背面	5
銭02	祥符元寶	北宋	1009年	2.4	0.1	1.36	80%	拓本	真書。一部欠損。	○	背面	4
銭03①	紹聖元寶	北宋	1094年	2.4	0.1	2.23	100%	拓本	行書。			0
銭03②	天聖元寶	北宋	1023年	2.4	0.1	1.7	95%	拓本	篆書。背面に植物が付着している。	○		0
銭04	元祐通寶	北宋	1086年	2.3	0.1	1.36	100%	拓本	行書。		背面	0
銭05	皇宋通寶	北宋	1038年	2.4	0.1	2.08	90%	拓本	真書。一部欠損。		背面	0
銭06	-	-	-	2.4	0.09	5.52	100%	実測	背面しか見えず、判読不能。癒着している。 背面に葉状植物が付着している。	○		0
	-	-	-	2.4	0.09		100%	実測	背面しか見えず、判読不能。癒着している。			0
銭07	政(和)通(寶)	北宋	1111年	-	0.1	0.63	30%	無	分楷。背面には植物が付着している。	○	表面	0
銭08	開元通寶	唐	621年	2.5	0.09	2.74	100%	実測	真書。表背面に葉状植物・木質片が巻きついている。	◎	表面	0
銭09	熙寧元寶	北宋	1068年	2.4	0.1	1.29	60%	拓本	篆書。銭貨に葉状植物(繊維質)が付着している。 一部欠損。		表面	0
銭10	元符通寶	北宋	1098年	2.4	0.12	2.41	90%	実測	篆書。背面に葉状植物(繊維質)が付着している。 一部欠損。			
銭11	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.09	1.92	100%	拓本	篆書。		背面	0
銭12	□符□□	北宋?	-	-	0.1	0.64	25%	拓本	行書。残部僅少であるが書体から「元符通寶(北宋、1098年)」と推測される。他に「祥符元寶」「祥符通寶」(いずれも北宋、1009年)が候補として挙げられる。		表面	0
銭13	熙寧元寶	北宋	1068年	2.4	0.1	2.21	90%	拓本	真書。一部欠損。		背面	
銭14	熙寧元寶	北宋	1068年	2.35	0.1	1.6	90%	実測	篆書。一部欠損。	○	背面	4
銭15	□聖□□	北宋?	-	-	0.1	0.21	20%	無	篆書。残部僅少。「天聖元寶(北宋、1023年)」か「紹聖元寶(北宋、1094年)」			0
銭16	(皇)宋(通)(寶)	北宋	1038年	-	-	0.54	60%	無	真書。表背面に木炭付着。一部欠損。			0
銭17	天聖元寶	北宋	1023年	2.45	0.1	5.83	100%	実測+拓本	篆書。銭18と癒着している。		表面	0
銭18	□□□□	-	-	2.3	0.09	5.83	100%	実測+拓本	銭名不明瞭のため判読不能。銭17と癒着している。		背面	0
銭19	元豐通寶	北宋	1078年	2.3	0.1	2.1	100%	拓本	篆書。		表面	0
銭20	元祐通寶	北宋	1086年	2.5	0.1	2.58	90%	拓本	行書。一部欠損。		背面	0
銭21	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.1	2.52	100%	拓本	篆書。	○	背面	0
銭22	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.1	2.51	100%	拓本	行書。		背面	0
銭23	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.09	2.02	90%	拓本	行書。一部欠損。		背面	0
銭24	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	0.1	2.75	100%	拓本	行書。		背面	0
銭25	開元通寶	唐	621年	2.35	0.1	2.92	100%	拓本	真書。背面下部に月。			0
銭26	元豐通寶	北宋	1078年	2.35	0.1	2.2	80%	拓本	篆書。一部欠損。		背面	0
銭27	聖宋元寶	北宋	1101年	2.4	0.09	2.54	100%	実測	篆書。内郭に植物(繊維質)が付着している。	○	背面	0
銭28	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.1	2.65	100%	拓本	行書。		表面	0
銭29	聖宋元寶	北宋	1101年	2.4	0.09	2.64	100%	拓本	篆書。		背面	0
銭30	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	0.1	2.57	100%	実測	篆書。表面に布(繊維質)が付着している。	○	背面	0
銭31	治平(元)(寶)	北宋	1064年	2.4	0.1	1.19	50%	拓本	真書。「治」「平」部残存。欠損。		背面	0
銭32	開元通寶	唐	621年	2.3	0.1	2.36	100%	拓本	真書。		背面	0
銭33	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	0.09	1.62	100%	拓本	篆書。	○	表面	0
銭34	不明	-	-	-	0.09	0.08	10%	無	残部僅少のため判読不能。		背面	0
銭35	□□□寶	-	-	-	0.09	0.44	15%	無	残部僅少のため判読不能。			2
銭36	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.1	2.92	100%	拓本	行書。		背面	0
銭37	不明	-	-	2.4	0.09	4.92	100%	実測+拓本	背面しか見えず、判読不能。銭38と癒着している。	○	背面	0
銭38	元豐通寶	北宋	1078年	2.3	0.09		100%	実測+拓本	篆書。銭37と癒着している。	○	背面	0
銭39	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	0.1	2.56	75%	拓本	行書。裏面全面は葉に覆われている。一部欠損。	○	表面	0
銭40	紹聖元寶	北宋	1094年	2.4	0.1	2.37	100%	拓本	行書。		背面	0
銭41	皇宋通寶	北宋	1038年	2.5	0.09	2.36	100%	拓本	篆書。星形孔。		背面	0
銭42	皇宋通寶	北宋	1038年	2.4	0.1	2.76	100%	拓本	篆書。郭の内側に塗装(黒色)。		表面	0
銭43	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	0.1	1.94	100%	拓本	行書。			0
銭44①	政和通寶	北宋	1111年	2.4	0.12	6.25	100%	実測	分楷。②と癒着している。			0
銭44②	-	-	-	2.4	0.1		100%	実測	背面しか見えず、判読不能。①と癒着している。			0
銭45	□聖□寶	北宋?	-	2.4	0.1	2.05	80%	実測	行書。表面に葉が貼りついている。「天聖元寶(北宋、1023年)」か「紹聖元寶(北宋、1094年)」	◎		2
銭46	元豐通寶	北宋	1078年	2.4	0.1	1.81	80%	実測	行書。表面に葉状植物が付着している。	○		3

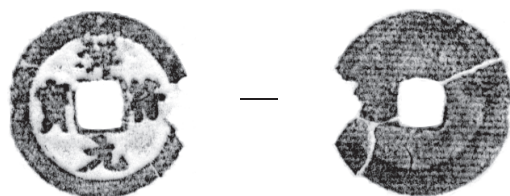
銭01『熙寧(元)寶』



銭06『銭名不詳』



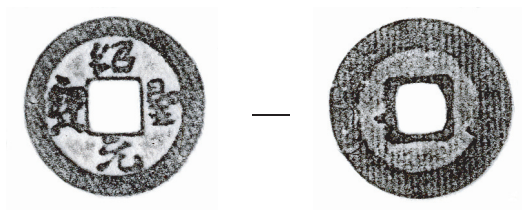
銭02『祥符元寶』



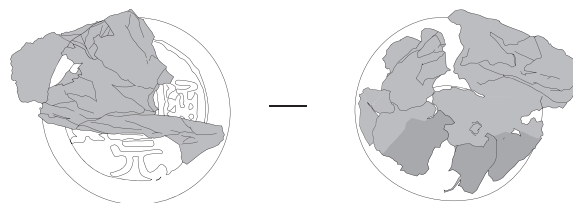
銭07『政(和)通(寶)』

(劣化のため拓本不可)

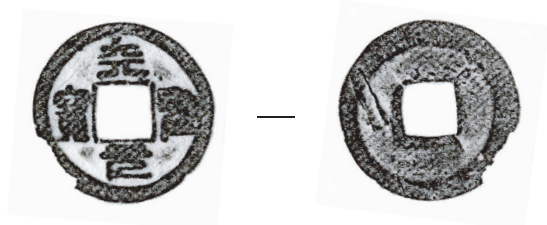
銭03①『紹聖元寶』



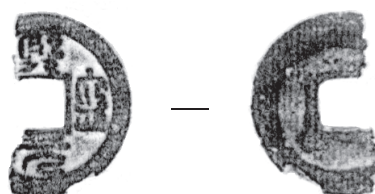
銭08『(開)元通寶』



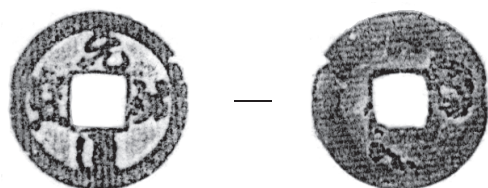
銭03②『天聖元寶』



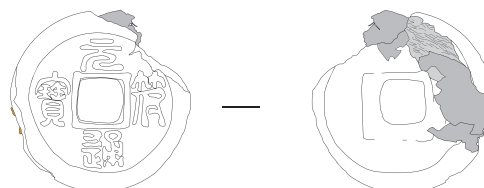
銭09『熙寧元(寶)』



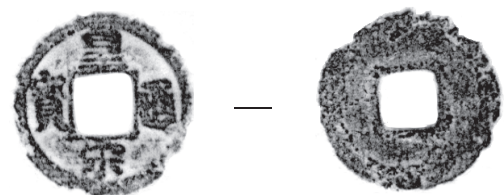
銭04『元祐通寶』



銭10『元符通寶』



銭05『皇宋通寶』



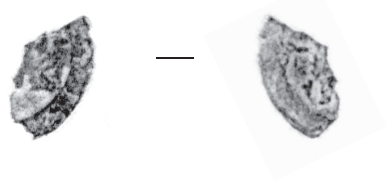
銭11『元豐通寶』



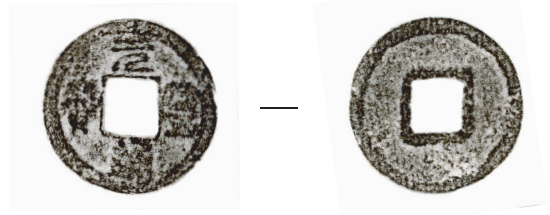
0 3cm

第 164 図 銭貨実測図① (1/1)

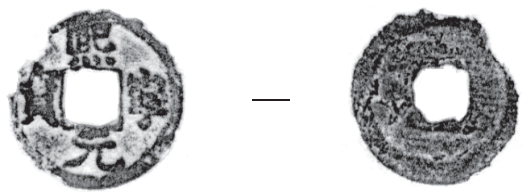
銭12 『口符口口』



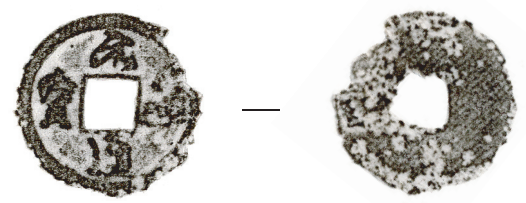
銭19 『元豊通寶』



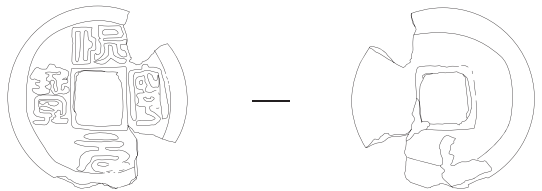
銭13 『熙寧元寶』



銭20 『元祐通寶』



銭14 『熙寧元寶』



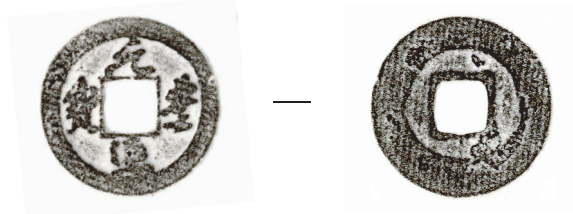
銭21 『元豊通寶』



銭15 『口聖口口』

(欠損のため拓本不可)

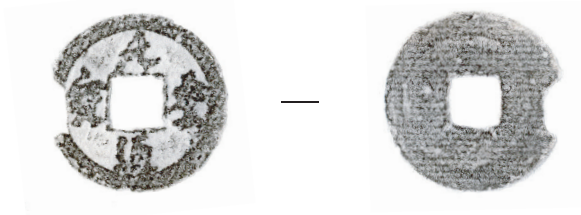
銭22 『元豊通寶』



銭16 『(皇)宋(通)(寶)』

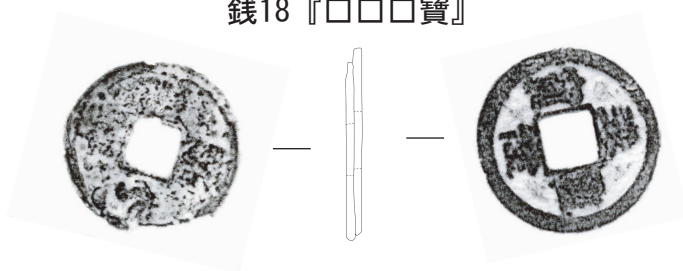
(劣化のため拓本不可)

銭23 『元豊通寶』



銭17 『天聖元寶』

銭18 『口口口寶』

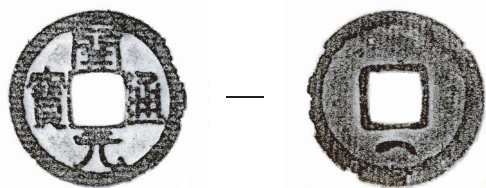


銭24 『元祐通寶』



第 165 図 銭貨実測図② (1/1)

銭25 『開元通寶』



銭25 『治平(元)(寶)』



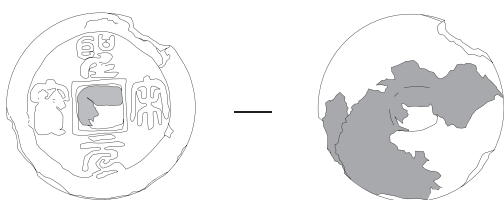
銭26 『元豊通寶』



銭32 『開元通寶』



銭27 『聖宋元寶』



銭33 『元祐通寶』



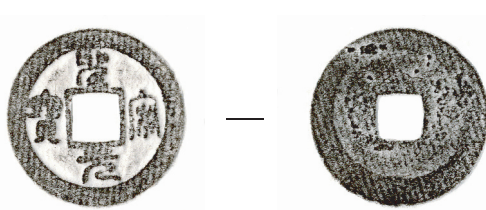
銭28 『元豊通寶』



銭34 『□□□□』

(欠損のため拓本不可)

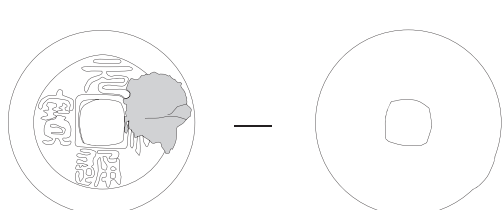
銭28 『聖宋元寶』



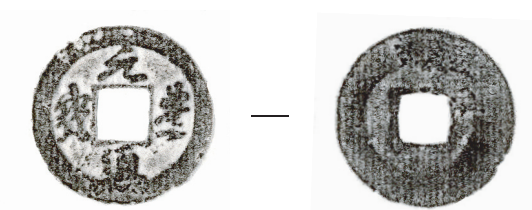
銭35 『□□□寶』

(欠損のため拓本不可)

銭29 『元祐通寶』



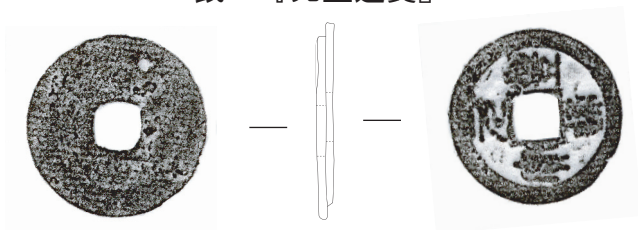
銭36 『元豊通寶』



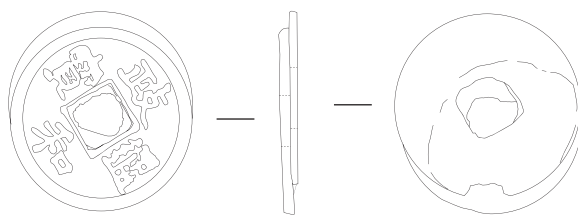
0 3cm

第 166 図 銭貨実測図③ (1/1)

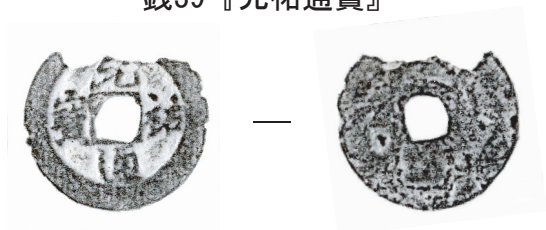
銭37『□□□□』
銭38『元豊通寶』



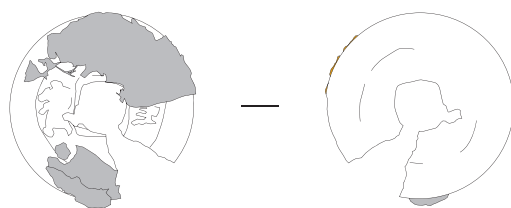
銭44『政和通寶』
『□□□□』



銭39『元祐通寶』



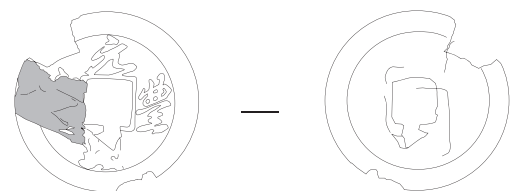
銭45『□聖□寶』



銭40『紹聖元寶』



銭46『元豊通寶』



銭41『皇宋通寶』



銭42『皇宋通寶』



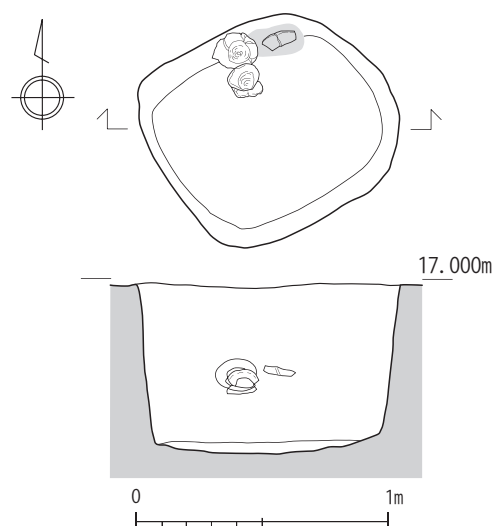
銭43『元祐通寶』



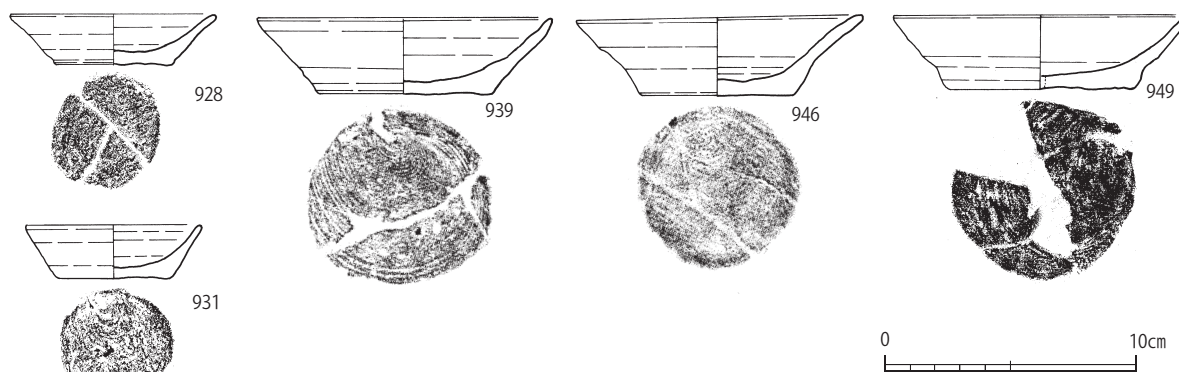
第 167 図 銭貨実測図④ (1/1)

SK1385(第168図)

遺構はD-6区で検出した。切り合い関係は古代遺構を切る。平面プランはやや隅丸方形に近い。規模は長軸0.9m、短軸0.8m、最大深0.7mを計る。床面は中央部が深いレンズ状を呈する。埋土は暗灰茶褐色粘質土、しまり強い。遺構内北側の中層付近で遺物が5点まとまって出土した。遺物(第169図)は土師質土器5点である。931・928は皿で、931は回転糸切りのちナデ調整。939・946・949は坏である。946・949は底部から胴部への屈曲は、少し上方に立ち上がって外反する。坏3点ともに外底部は回転糸切り離しのちナデ調整。



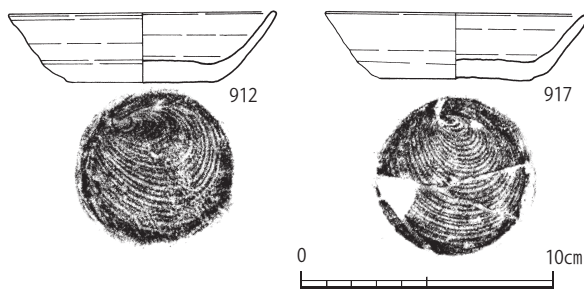
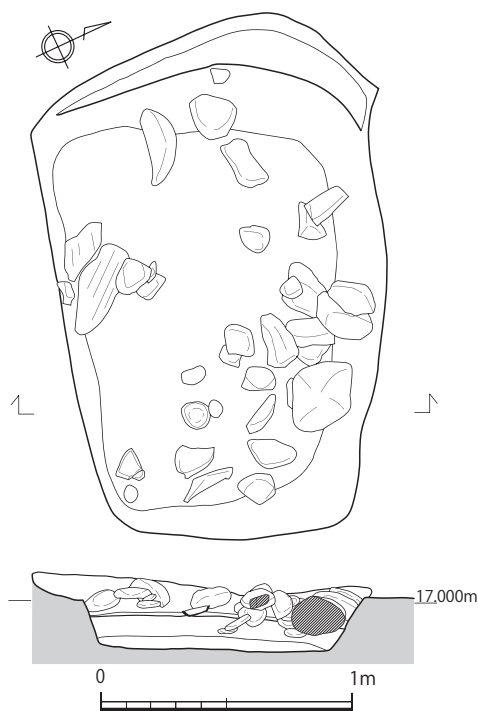
第168図 SK1385 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)



第169図 SK1385 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK1550(第170図)

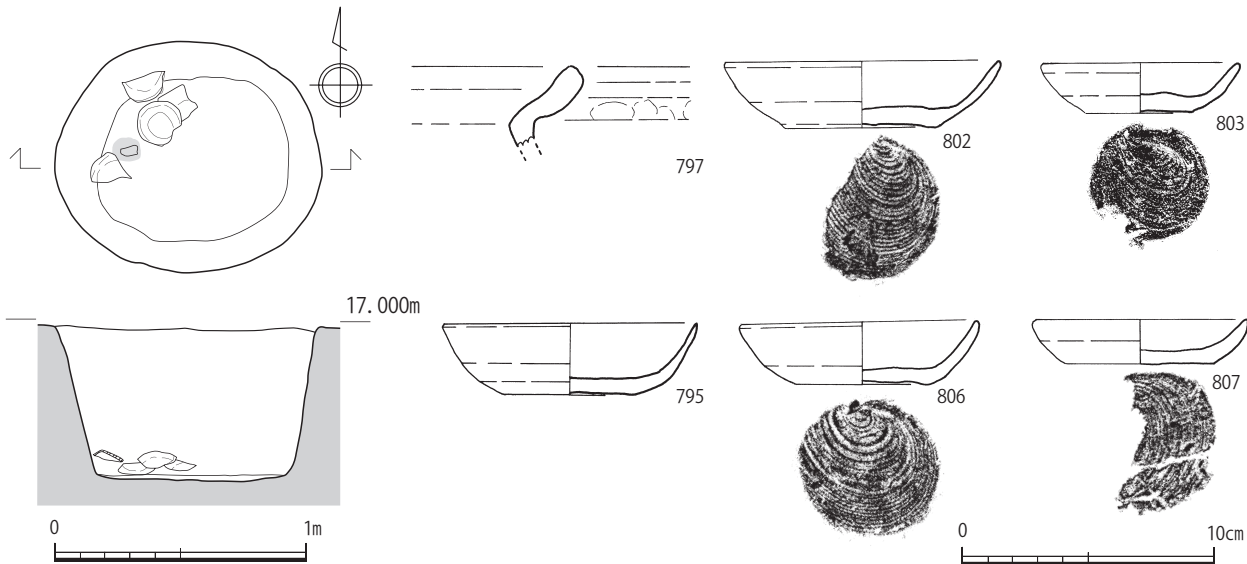
遺構はC-7区で検出した。切り合い関係は古代遺構を切る。平面プランはやや不定形な長方形である。規模は長軸2.1m、短軸1.3m、最大深0.3mを計る。西側にテラスが1段付く。床面はほぼフラットである。埋土は暗褐色粘質土、しまり強い、拳大～人頭大やや小の礫を多く含む。廃棄土坑であろう。遺物(第170図)は土師質土器坏が2点出土した。912は外底部回転糸切り離しのちナデ。内底部は若干盛り上がる。917は外底部回転糸切り離しのちナデ。底部器壁は912ほど厚くないが、屈曲部よりは肥厚する。



第170図 SK1550 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK1847(第171図)

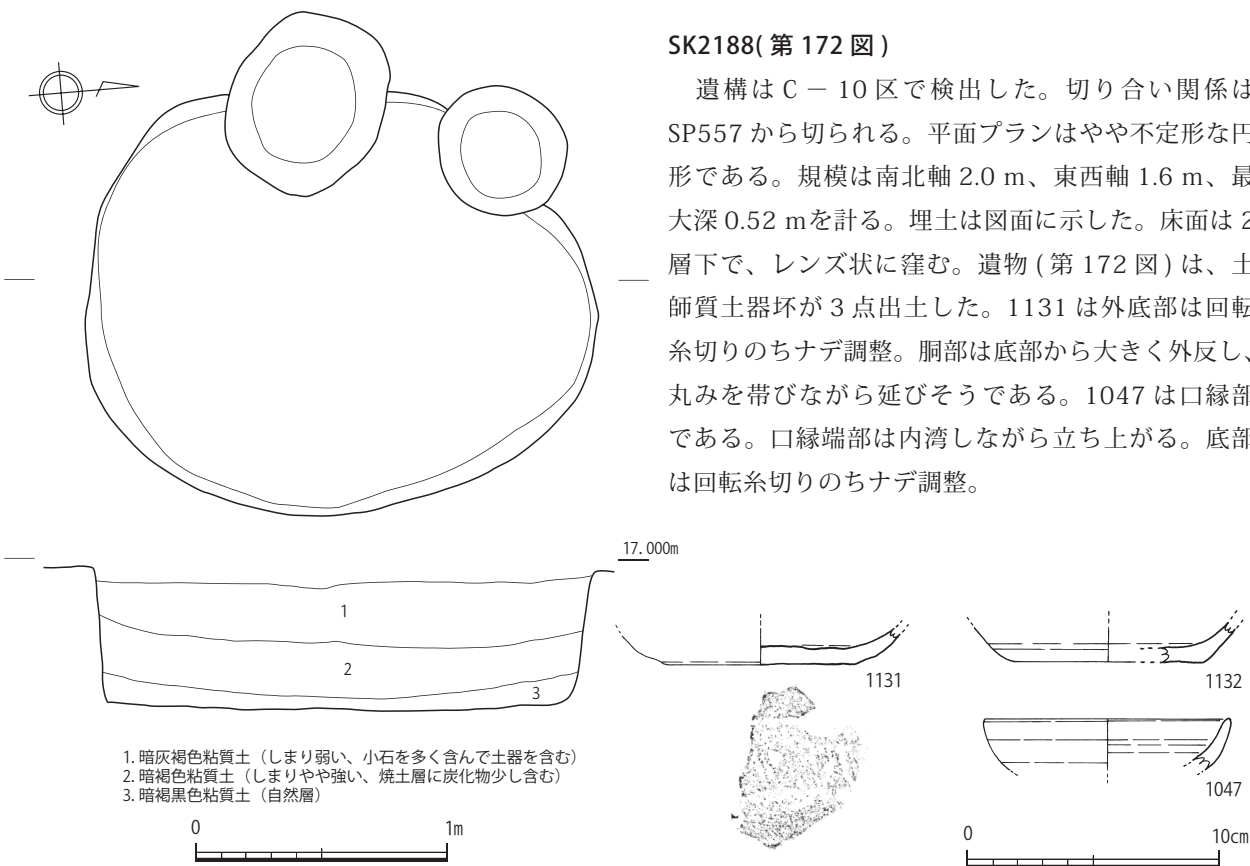
遺構はC－8区で検出した。切り合い関係は特になし。平面プランは楕円形を呈する。規模は東西軸 1.08 m、南北軸 0.9 m、最大深 0.6 m を計る。床面はほぼフラットである。埋土は3層に分層でき、平行に堆積する。上層は暗褐色粘質土、焼土を含む。中層は暗褐色粘質土。黄土ブロック含む。下層は黒褐色粘質土。黄土ブロックを含む。この下層から後述する遺物がまとまって出土している。遺物(第171図)は、土師質土器が5点出土した。外底部は回転糸切りのちナデ。803・807は802などに比べると器高がやや低い。外底部は若干上げ底気味。胴部は底部から丸みを帯びながらのびる。797は土師器甕片で、古代以前の所産であろう。



第171図 SK1847 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK2188(第172図)

遺構はC－10区で検出した。切り合い関係はSP557から切られる。平面プランはやや不定形な円形である。規模は南北軸 2.0 m、東西軸 1.6 m、最大深 0.52 m を計る。埋土は図面に示した。床面は2層下で、レンズ状に窪む。遺物(第172図)は、土師質土器が3点出土した。1131は外底部は回転糸切りのちナデ調整。胴部は底部から大きく外反し、丸みを帯びながら延びそうである。1047は口縁部である。口縁端部は内湾しながら立ち上がる。底部は回転糸切りのちナデ調整。



1. 暗灰褐色粘質土 (しまり弱い、小石を多く含んで土器を含む)
2. 暗褐色粘質土 (しまりやや強い、焼土層に炭化物少し含む)
3. 暗褐色粘質土 (自然層)

第172図 SK2188 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

ホ. その他柱穴 (SP) (遺構第 106-109 図, 遺物第 173-176 図)

ここでは、特に掘立柱建物跡などの個別遺構に掲載することができなかった中世に該当する柱穴からの出土遺物 (中世以前の遺物も含む) をまとめて掲載する。中にはこれら柱穴が掘立柱建物跡や柵跡などを構成するものもあると思われるが、遺構配置図で遺構場所と出土遺物の報告にとどめる。S 番号 (検出区) のごとに述べていく。

S015(C - 16) 565 は土師器蓋片である。天井部回転ヘラケズリのちミガキ調整。

S017(B - 17) 643 は土師器甕、664 は土製で竈のヒレの部分であろう。537 は土師質土器坏片である。

S026(B - 16) 685 は土師器もしくは弥生土器の複合口縁壺片である。

S040(A - 9) 668 は景德鎮窯系染付皿である。高台は若干逆「ハ」の字状に内傾する。口縁端部は端反りである。外面胴部は牡丹唐草文である。

S054(C - 15) 646 は須恵器蓋である。

S055(C - 15) 546 は土師器坏片で、外底部はヘラ切り離しのちナデ。

S058(B - 15) 548 は土師器蓋片である。

S067(C - 14) 633 は土師器盤もしくは土師質土器か。660 は土師器甕で、外面は縦方向刷毛目状痕。

S100(C - 10) 501 は龍泉窯系青磁碗。507 は土師器高坏。513 は土師器碗。520 は土師器長頸壺の破片。577 は土師器甕の把手。598 は土師器甕である。

S110(B - 14) 土師質土器坏の口縁部。

S121(B - 15) 568 は須恵器壺片であろう。602 は瓦器碗の口縁部。522 は土師器甕である。

S128(C - 16) 616 は土師器坏である。

S146(B - 14) 514 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデである。胴部外面下部に沈線が 1 条巡る。

S153(B - 13) 608 は土師質土器で、胴部片。

S154(C - 13) 524 は土製品で管状土錘である。

S155(C - 13) 502 は土師器坏である。外底部は回転ヘラ切りのちナデ。内面はミガキ痕がのこる。521 は土師器甕片である。

S156(B - 13) 553 は土師器蓋である。

S200(C - 10) 723 は土師器蓋である。

S236(B - 11) 760 は土師器坏片であろう。

S430(C - 5) 574 は景德鎮窯系染付碗片。外面に染付が確認できる。

S440(C - 5) 665 は土師質土器坏である。胴部は底部から少し上方にのびて外反する。胴部中央の器壁は薄く、口縁端部と下部は肥厚する。

S455(D - 4) 667 は土師質土器坏である。

S557(C - 10) 666 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのち丁寧なナデ。胴部と底部の屈曲部が肥厚し、外反する。671 は須恵器高坏で、外面に 1 条沈線が巡る。

S560(E - 6) 851 は金山産サヌカイトで、スクレイパー。

S571(B - 7) 663 は土師質土器坏で、外底部は回転糸切りのちナデ。

S599(不明) 523 は土師器坏口縁部片である。

S663(C - 6) 569 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ。

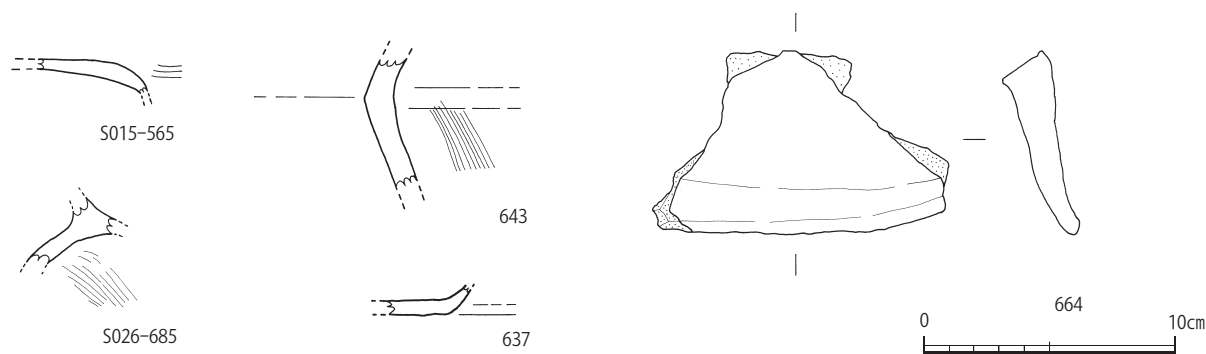
S677(C - 5) 572・564 は土師質土器坏。外底部回転糸切りのちナデ。

S713(C - 5) 604 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ。この遺構は SK715(第 157 図) を切る。

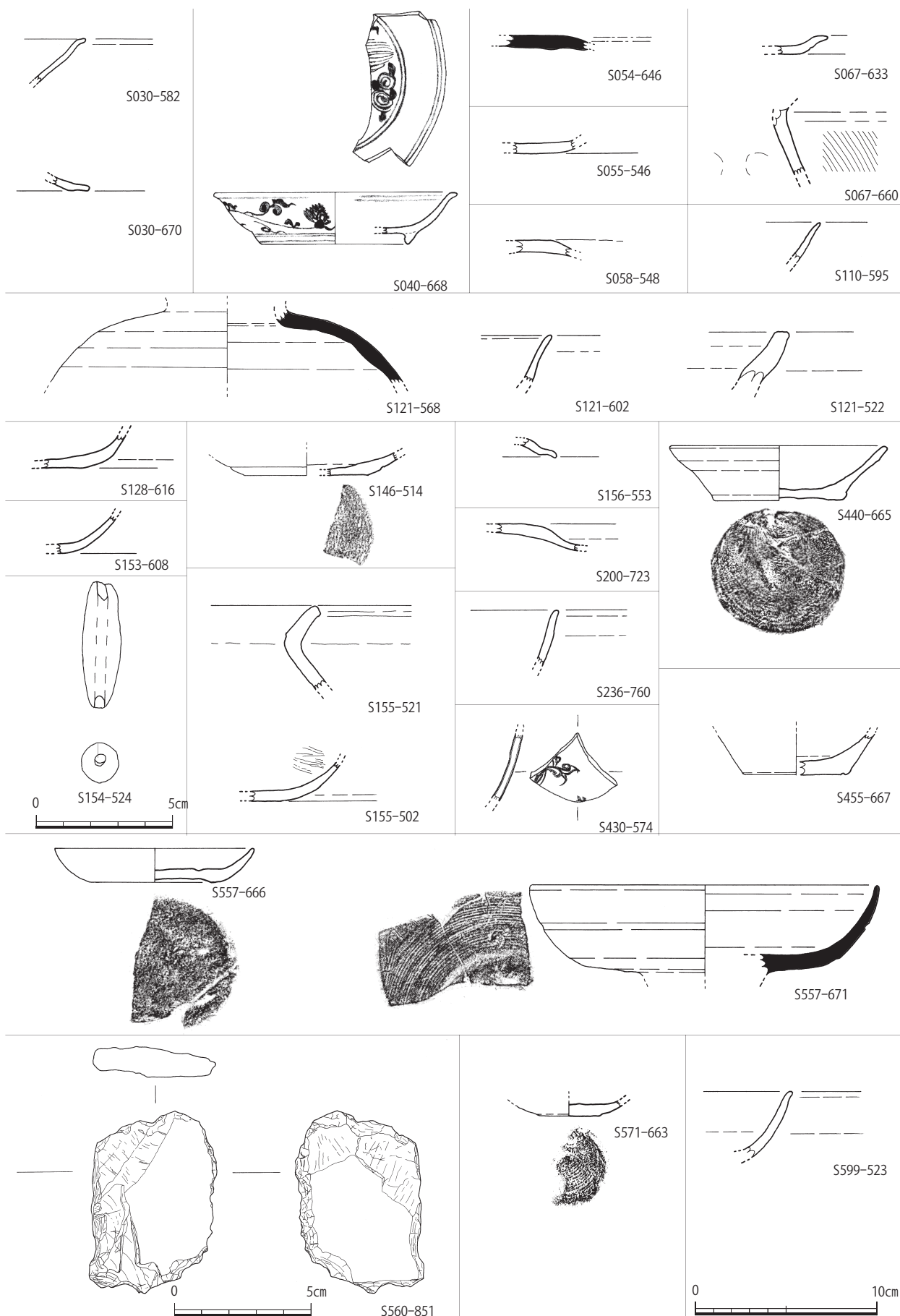
S718(C - 5) 508 は外底部は回転糸切りのちナデ。胴部は底部から若干斜め上方に延びたあと外側に大きく屈曲し、のびる。

S813(D - 4) 762 は白磁碗である。内面に櫛目文を施す。

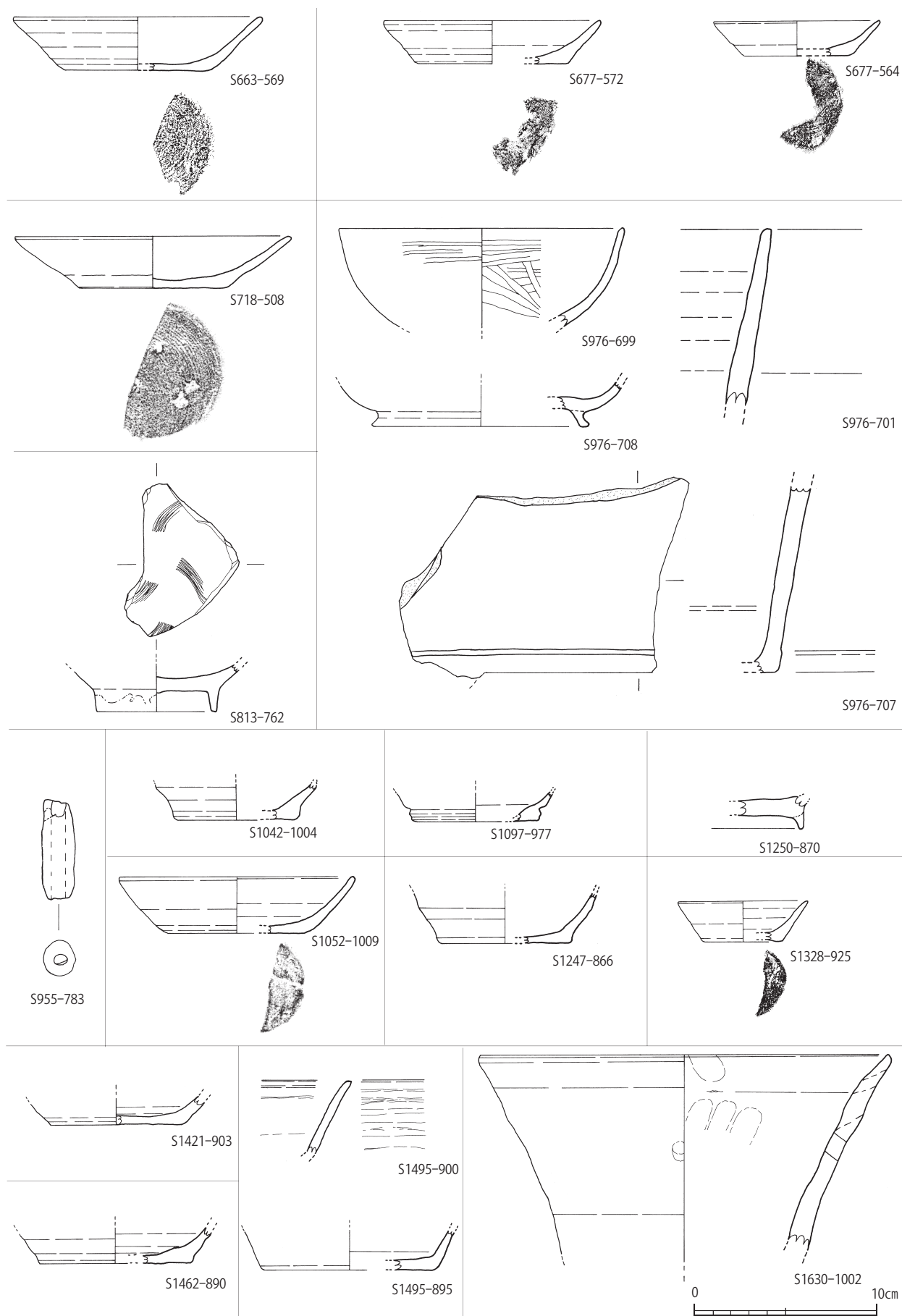
- S955(D - 2) 783 は土製品で、管状土錘である。
- S976(E - 3) 699 は土師器内黒土器碗である。内外面ともにミガキ調整あり。708 は土師器碗片。701 は土師器鉢である。707 は瓦質火鉢の破片である。脚が付く。699・701・708 は古代の所産である。
- S1042(C - 4・5) 1004 は土師質土器坏である。胴部は底部から上方へのびたあとと外反してのびる。
- S1052(D - 5) 1009 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ調整。
- S1097(F - 6) 977 は土師質土器坏である。底部と胴部の境界に沈線が1条巡る。
- S1247(E - 5) 866 は土師質土器坏である。
- S1250(E - 5) 870 は内黒土器碗である。
- S1328(D - 5) 925 は土師質土器皿である。色調は橙褐色を呈する。
- S1421(C - 6) 903 は土師質土器坏である。
- S1462(D - 6) 890 は土師質土器坏である。胴部は底部から若干上方へのびたあと、外反してのびる。
- S1495(D - 6・7) 900 は土師器坏片。内外面ともに横方向ミガキ調整あり。895 は土師器坏である。
- S1629(D - 6・7) 1013 は土師器坏である。内外面に横方向ミガキ痕がのこる。
- S1630(C - 7) 1002 は土師器で鉢片。
- S1671(D - 6・7) 988 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ調整。胴部は底部から若干上方へのびたあとと外反してのびる。
- S1734(D - 7) 878 は須恵器碗である。高台は底部一番外側に張り付く。884 は土師器坏片で、内外面に回転ヘラミガキ痕をのこす。
- S1841(C - 8) 877 は須恵器坏もしくは盤。
- S1844(C - 8) 831 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ。
- S1912(D - 8) 855 は土師質土器皿片。
- S1913(D - 8) 865 は須恵器碗である。860 は土師器坏である。外面横方向ミガキあり。
- S1929(D - 8) 871 は土師器碗片である。882 は土師質土器坏である。胴部下部外面に工具痕による沈線状のものが1条巡る。外底部は回転糸切りのちナデ。胴部は底部から直接外反し、まっすぐのびる。
- S1948(D - 8) 883 は土師器坏か。889 は土師器鉢片。
- S1958(E - 8) 861 は土師器盤。内面に横方向ミガキ調整あり。
- S1963(E - 8) 862 は土師器坏片である。内外面に横方向ミガキ痕あり。
- S2079(C - 9) 1034 は須恵器蓋片である。
- S2151(C - 10) 1124・1125 は土師質土器坏である。外底部は回転糸切りのちナデ調整。1125 は底部から胴部にかけて、丸みをおびながら立ちあがる。
- S2423(C - 11) 1048 は土師器坏片。外底部はヘラ切り離しのちナデ調整。



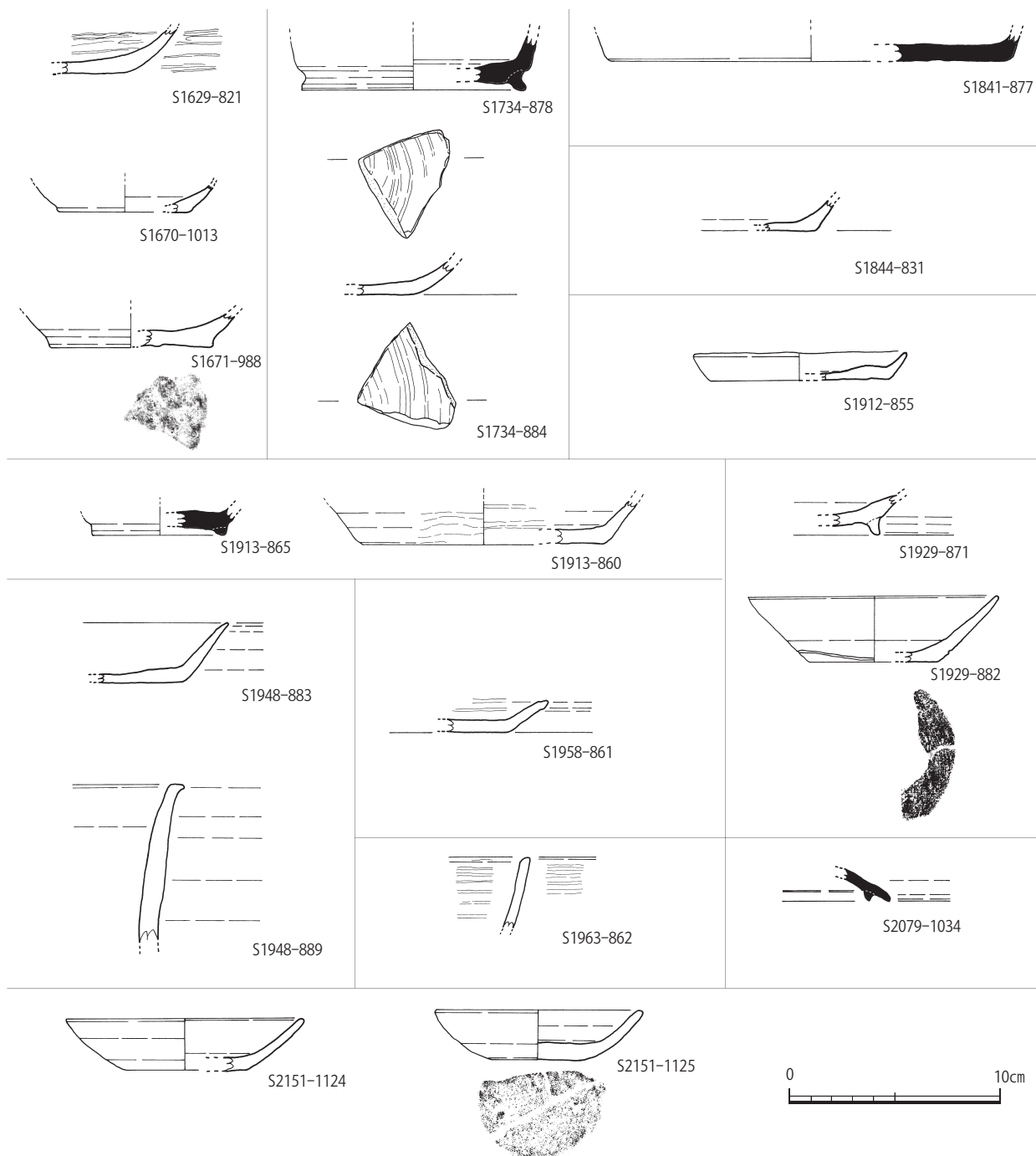
第173図 中世 pit 出土遺物実測図① (1/3・1/2)



第 174 図 中世 pit 出土遺物実測図② (1/3)



第175図 中世 pit 出土遺物実測図③ (1/3)



第 176 図 中世 pit 出土遺物実測図④ (1/3・1/2)

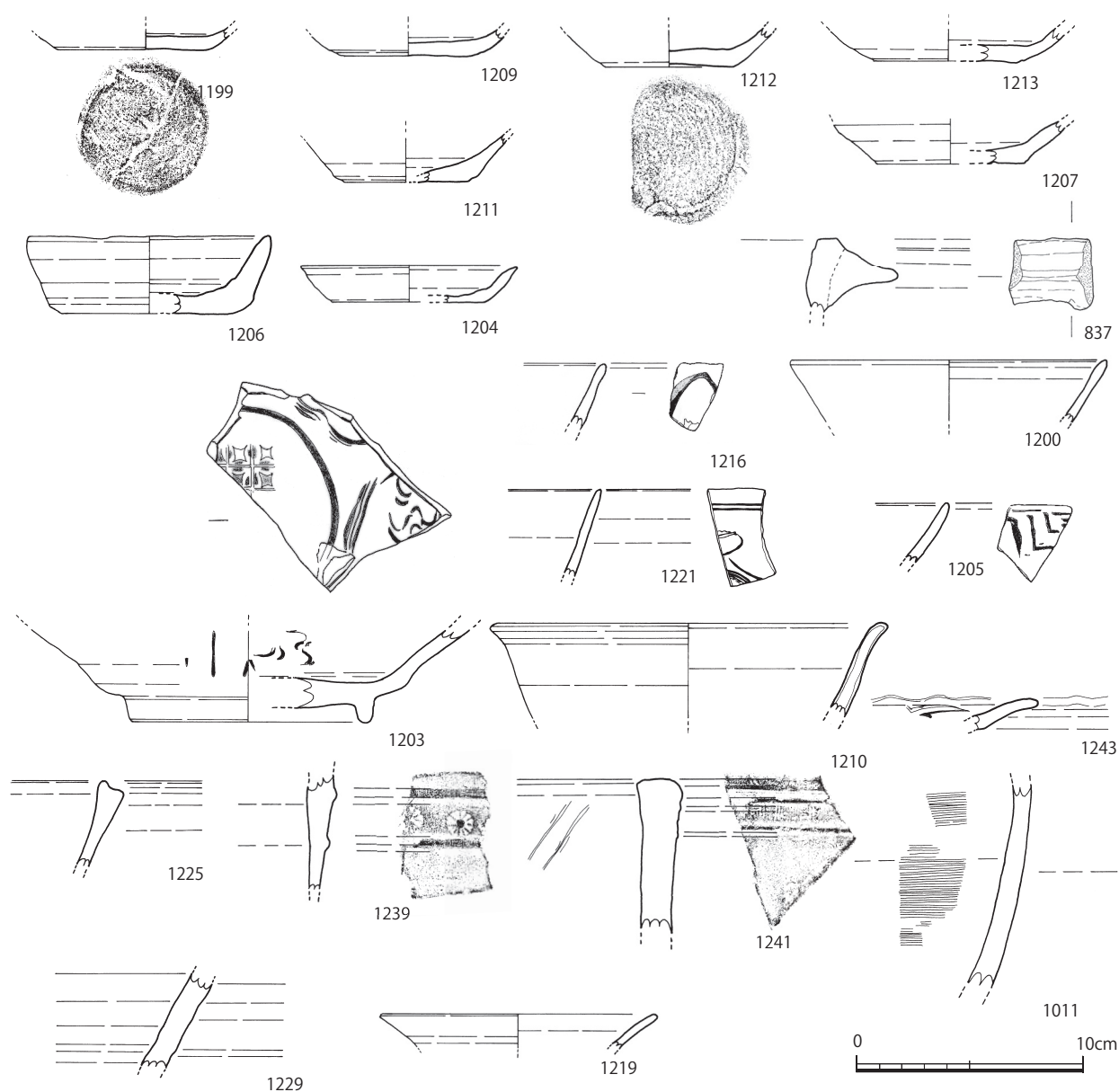
ヘ. 中世造成土 (第 44,106-109 図)

中世の造成土は調査区の東側全体に広がっている。この中世の造成土に切りこむピットが多く。中世造成土を除去後も数はかなり少ないが、中世に帰属するピットが確認でき、同時に古代の遺構も確認できた。11～17 区に堆積する中世造成土に関しては、その下の遺構は保存可能であったため、除去は行っていない。埋土は第 4 図に示している。詳細な範囲は第 44,106-109 図の波線から東側すべてが中世の造成土である。以下、この中世の造成土から出土した遺物を掲載し、述べる。

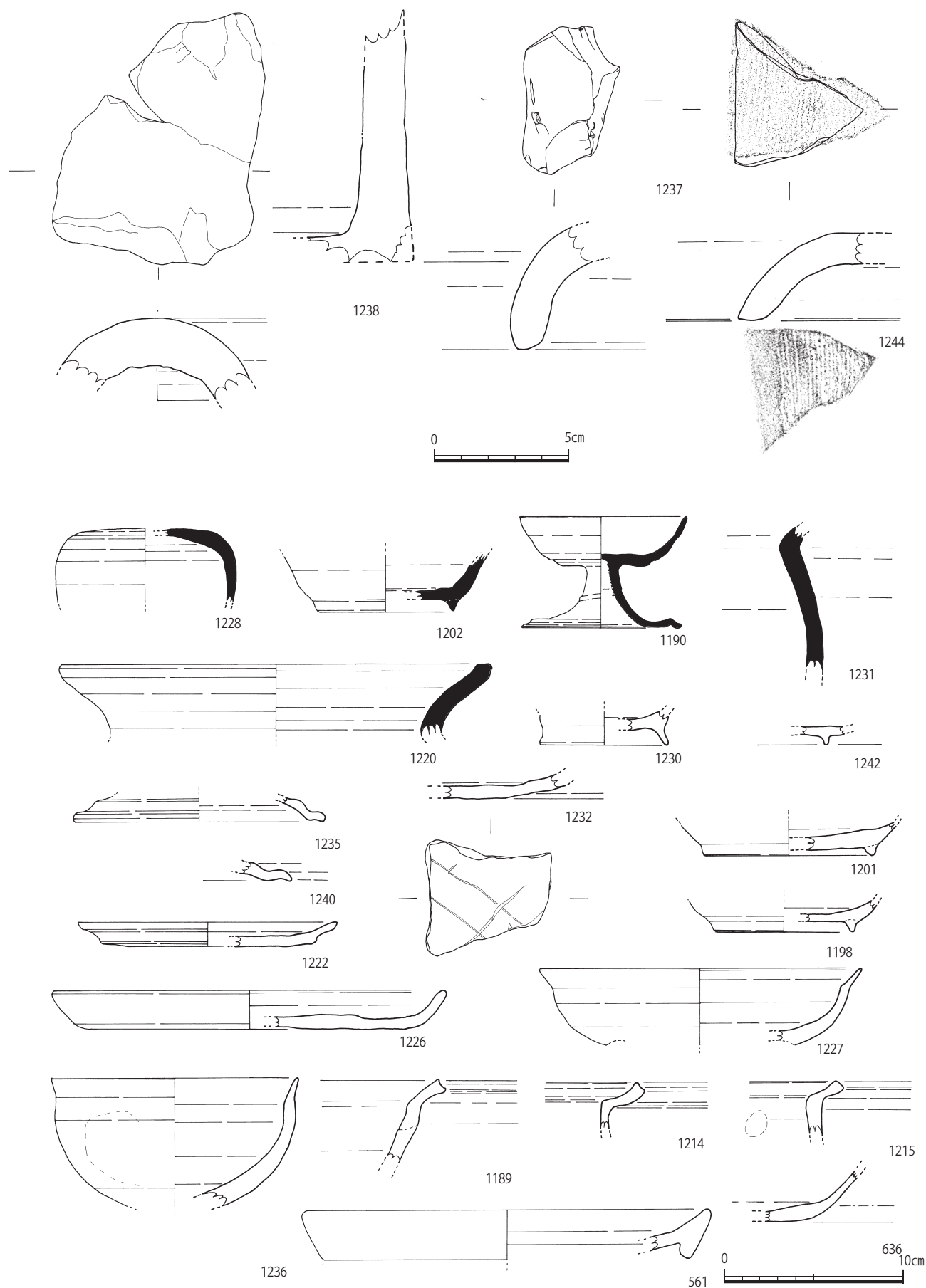
中世造成土出土遺物 (第 177,178 図)

土師質土器は 1199～1204(R 番通しではない)である。1199 は外底部は回転糸切りのちナデ調整。1211・1207 などは胴部は底部から上方に若干のびたあと外反する。1206 は器壁厚く、外底部はナデ調整。

1204 は器高低い。837 は鍋の口縁部。瓦器は 1200 で、椀である。龍泉窯系青磁は 1203 ～ 1210(R 番順ではない) である。1203 は盤。1216 は椀で外面に蓮弁文を施す。1205 も椀で、口縁外面に雷文帯を施す。1221 は椀である。1243 は皿で、口縁端部は波状を呈する。1210 は椀である。白磁は 1219 で皿。瓦質土器は 1011・1225・1239・1241 である。1011 は鍋胴部片。内面に横方向刷毛調整あり。1239 は火鉢口縁部で 2 条の突帯文の間に菊花スタンプ文を施す。1241 は火鉢口縁部で口縁外面に 2 条の突帯とその間に雷文スタンプがある。備前焼は 1229 で播鉢の胴部である。瓦は 1238・1237・1244 である。すべて丸瓦である。1238 は軒先か。内面をへら状工具で面取りする。1244 も端内面を面取りしている。ここからは古代以前の土器。須恵器は 1128 ～ 1220 である。内黒土器は 1230 で椀。緑釉陶器は 1242 で皿片。土師器は 1235 ～ 1215 である。1235・1240 は蓋。1232 は坏の底部にへら記号あり。1201・1198 は椀。1226 は盤。561 は器種不明。



第 177 図 中世造成土出土遺物実測図① (1/3)



第 178 図 中世造成土出土遺物実測図② (1/3)

(5) 近 世 (江戸時代)

近世の遺構は、調査区北側で検出できた。検出遺構は掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 2 条、石敷き遺構 2 か所、ピットなどである。石敷き遺構は方形～長方形で組んでいる。溝跡を切っている。時期としては 17 - 18 世紀の間に考えられ、その後、水田化し、現代に至ると推定される。

イ. 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は 1 棟を検出した。

SB053(第 179 図)

遺構は C・D - 7 区で検出した。規模は梁行 2 間、桁行 2 - 4 間で、身舎面積 26.4 m² である。柱穴平面プランはほぼ円形であり、一部の柱穴を除いて、円形柱痕を確認した。また S1613 からは柱の基礎であろう礫が掘り方に混入している。埋土は灰色粘質土である。遺物 (第 179 図) は、S1585 から出土した 920 は唐津焼系陶器皿片である。

ロ. 溝跡 (SD)

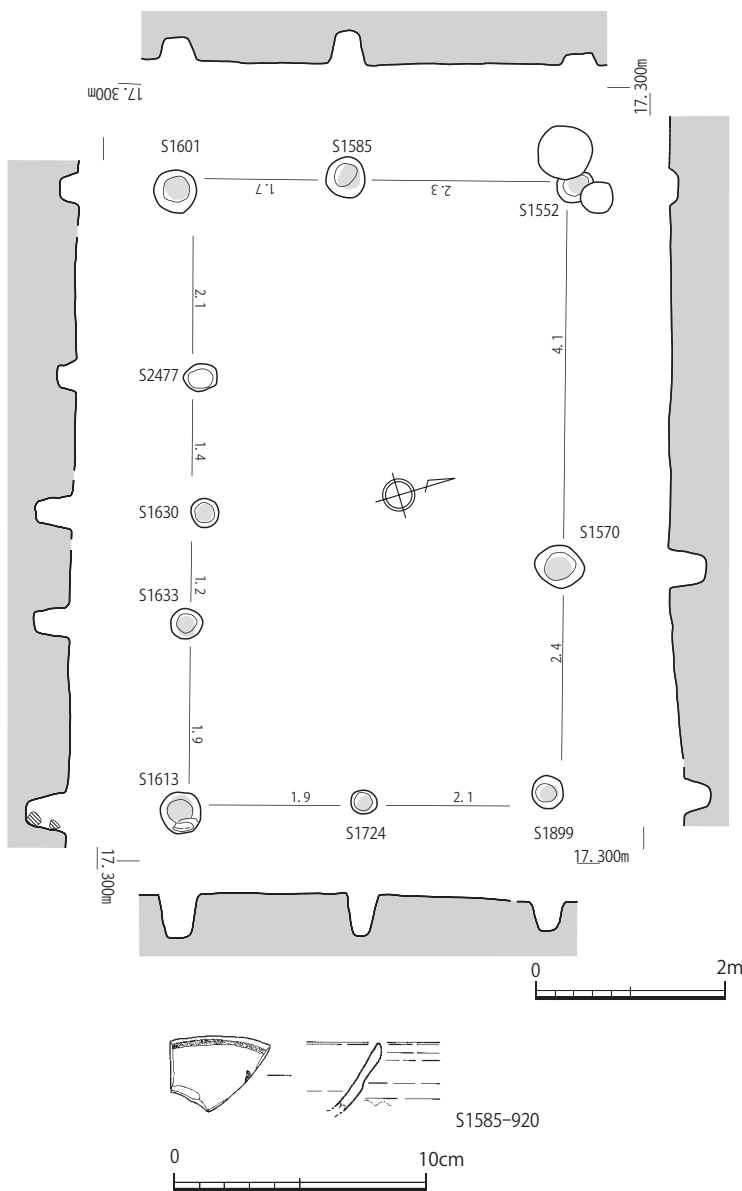
溝跡は調査区北東端で検出した。2 条確認した。埋土の状況から、砂を多く含むことから、2 条とも水路であった可能性が高い。

SD1095(第 180 図)

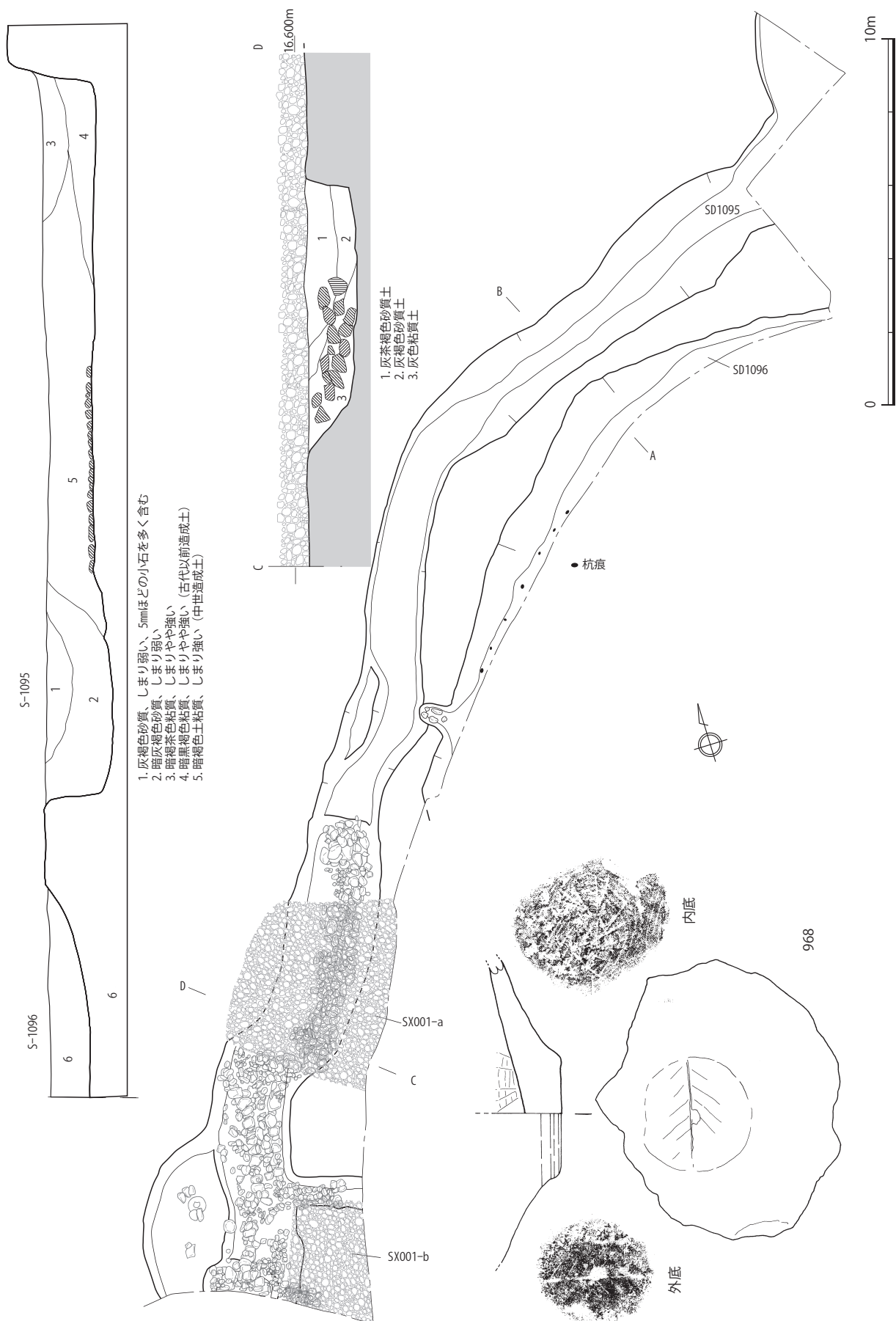
遺構は D・E・F - 6・7・8・9 区で検出した。2 つの石敷き遺構に切られる。プランはやや蛇行ぎみで、規模は長さ約 40 + α m、最大幅は南側で約 4 m を測り、最大深は 0.5 m である。北側の方が底レベルが浅く、南側の方が深いため、水流は北から南に流れていたと考える。また南側は拳大から人頭大の礫を多く含み、一部、人頭大の礫を水路の両側に積んでいる箇所もみられた。またこの溝の南側で東側に幅の狭い水路が分岐しているのも確認した。遺物 (第 181 図) は、京焼風陶器は 610 で椀である。陶胎染付は 697・683・695 で椀である。肥前系磁器は 690 で染付碗。677 は内野山窯系皿である。内底部は円形に釉剥ぎずる。瓦質土器は 673・681・700 で、673 は鍋、681 は羽釜、700 は火鉢片である。土師質は 698 で甕の口縁部。焼締陶器は 693 で播鉢か。口縁部内面に四角形状に張り出し部が付き、その上面を沈線が数条巡る。石製品は 692 で頁岩製の砥石である。

SD1096(第 180 図)

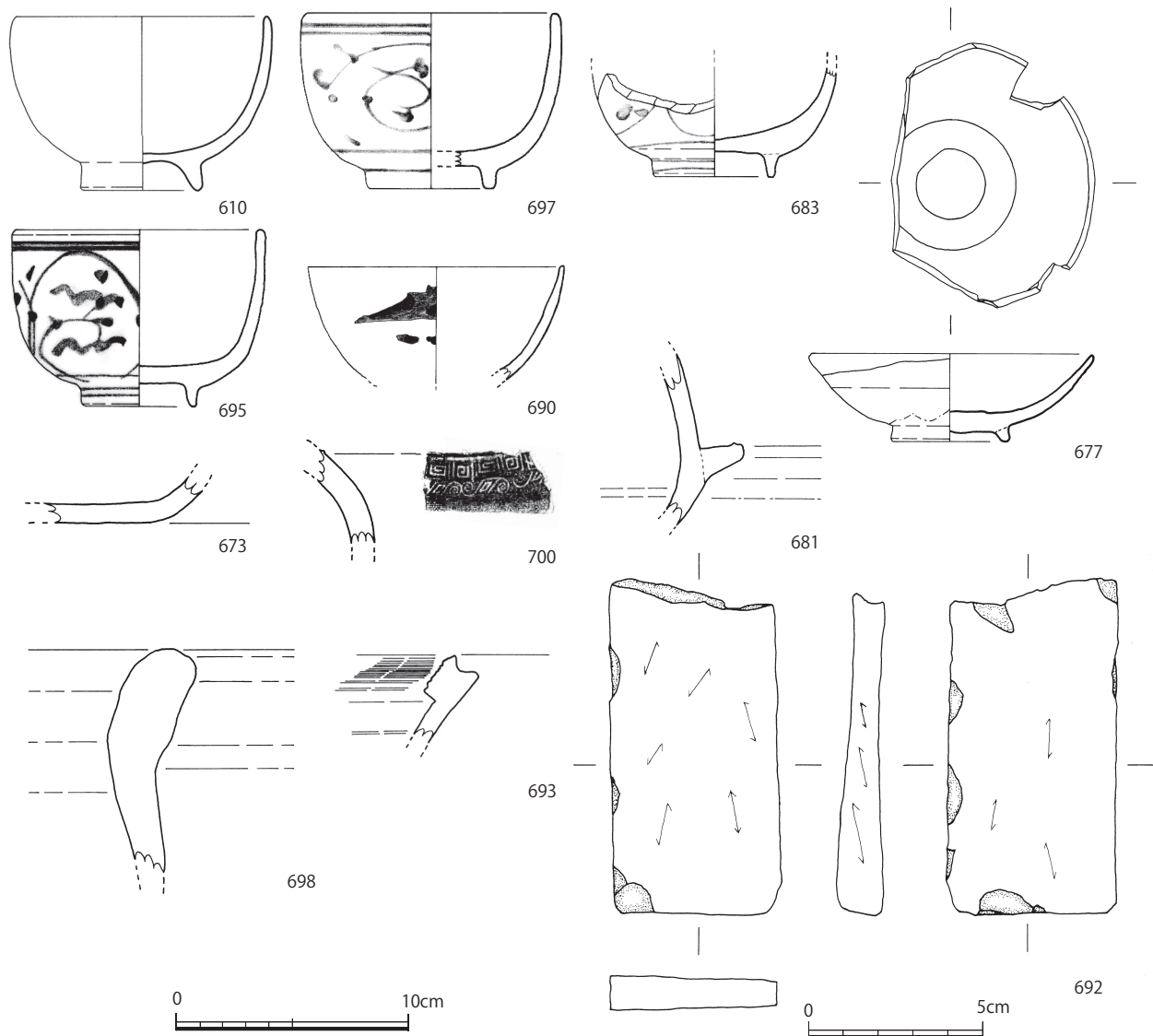
遺構は E・F - 7・8 区で検出した。SD1095 とほぼ平行し、一部南側で SD1095 と接続している箇所もある。規模は長さ 17 + α m、最大幅 1.8 + α m、最大深 0.4 + m 測る。溝の西側壁には杭痕が並んで確認できた。底レベルは SD1095 と同様に北側の方が低い。埋土は図に示した。遺物 (第 180 図) は近世陶磁器の小片が少量出土し、あと 968 の弥生土器が出土した。外底部には木の葉文が残り、1 次焼成前の乾燥させるときに葉の上に置いていたと推定される。内底部には工具による文様がのこる。



第 179 図 SB053 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第180図 SD1095・1096遺構・出土遺物実測図（1/150・1/40・1/3）



第 181 図 S D1096 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

ハ. 石敷き遺構 (SX)

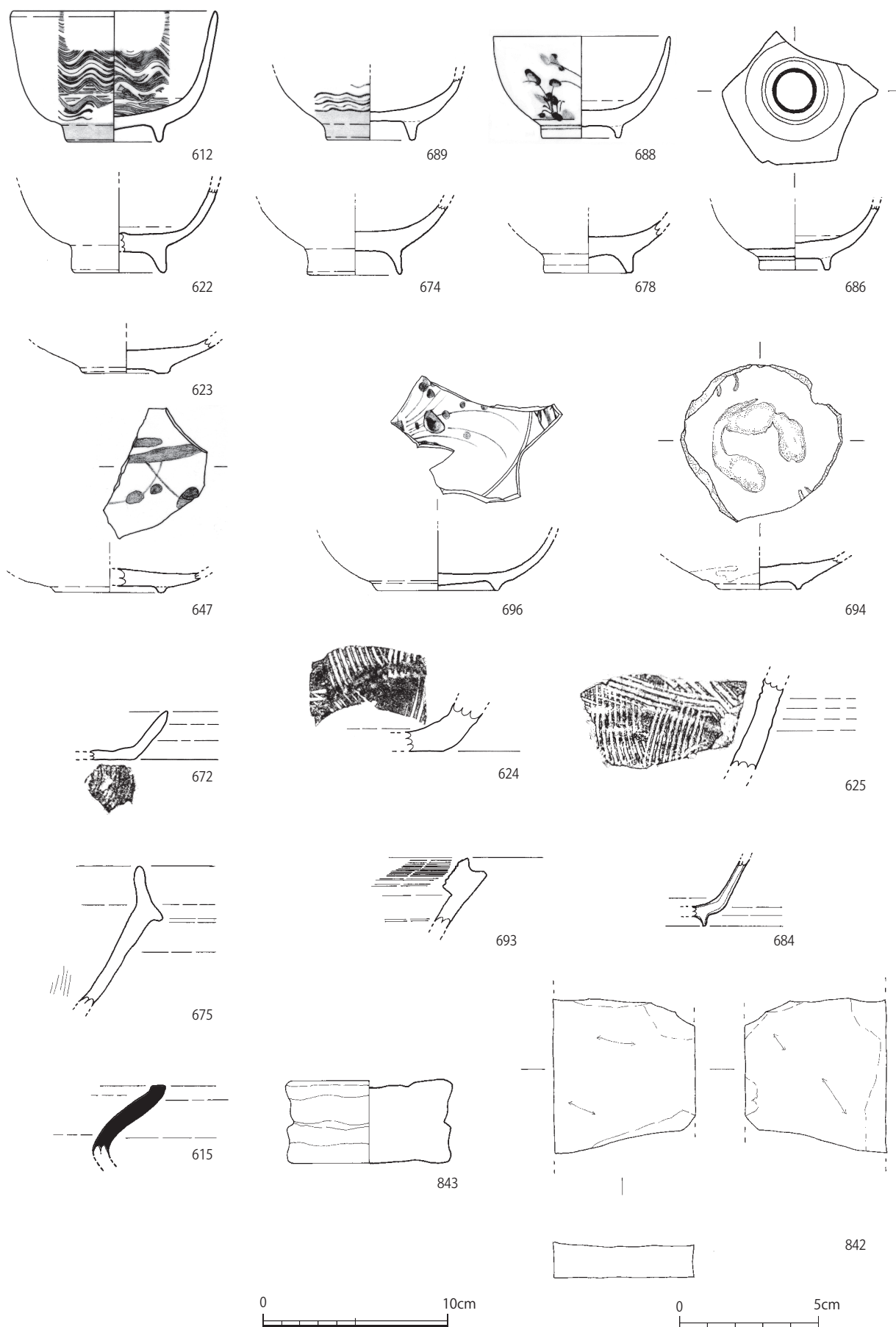
石敷き遺構は、2 か所検出され、SD1095 を切る。生活遺構とは相違する遺構と考える。SX1 - a・b は同時存在している可能性もある。

SX001 - a(第 180 図)

遺構は D・E - 8・9 で検出した。SD1095 を切る。南北方向 4.2 m、東西方向 $4.1 + \alpha$ m を測る。拳大の河原石が 2 - 3 段 (約 0.2 m ほど) で詰めている。その隙間などから近世遺物が出土した。遺物 (第 182 図) は唐津系陶器は 612・689・623・694 である。612・689 は碗である。外面に波状の刷毛目文様がある。623・694 は皿である。694 は内底部に胎土目痕がのこる。京焼風陶器は 674・678 で碗である。肥前系磁器は、686・688 は碗、647・696 は染付皿である。土師質土器は 672 は坏、843 は蜀台か。備前焼は 624・625・675 で播鉢片である。625 は内面交叉揺り目である。須恵器は 615 で甕の口縁部。青磁は 622 は肥前系のもの。畳付以外は全面施釉。684 は中国龍泉窯系か。碗である。石製品は 842 で、頁岩製の砥石である。

SX001-b(第 180 図)

遺構は D - 9 で検出した。SD1095 を切る。規模は東西方向 $2 + \alpha$ m、南北方向 $3.6 + \alpha$ m を測る。拳大の河原石が 2 - 3 段 (約 0.2 m ほど) で詰めている。その隙間から近世陶磁器小片が少量出土している。



第182図 SX001-a 出土遺物実測図① (1/3・1/2)

二. その他柱穴 (SP)(遺構第 106-109 図 , 遺物第 183 図)

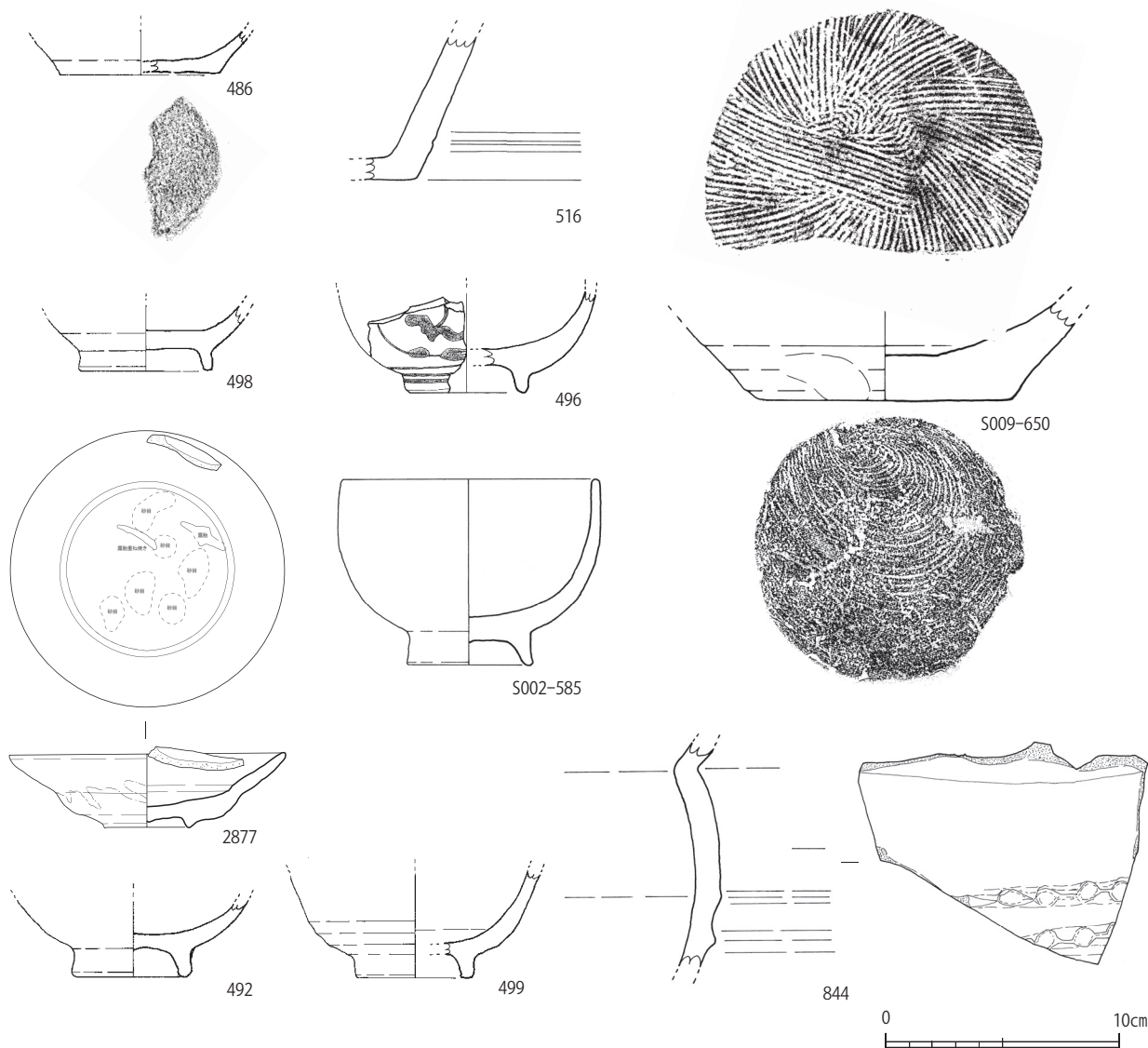
ここでは、個別遺構に掲載することができなかった近世に該当する遺構からの出土遺物 (近世以前の遺物も含む) をまとめて掲載する。中にはこれら柱穴が掘立柱建物跡や柵跡などを構成するものもあると思われるが、遺構配置図で遺構場所と出土遺物の報告にとどめる。S 番号 (検出区) のごとに述べていく。

S002(C-10) 585 は京焼風陶器碗である。この遺構には土師質の甕が埋設してあり、詳細は報告していないが、その甕内部から出土したものである。

S009(D-9) 650 は備前焼?すり鉢。内面は擂り目、外底部は回転糸切りがのこる。

S019(C-16) 496 は陶胎染付碗である。492 は中国龍泉窯系青磁碗。499 は肥前系磁器碗。498 は陶器碗である。土師質は 486 は坏、516 は火鉢片外面下部に沈線が 1 条巡る。844 は備前焼?甕片。

S336(B-8) 2877 は唐津系陶器皿である。内底部には砂目痕がのこり、口縁部内面には重ね焼きしたあとに直下の皿を外し損ねた跡 (直下の皿の口縁部) が残存している。

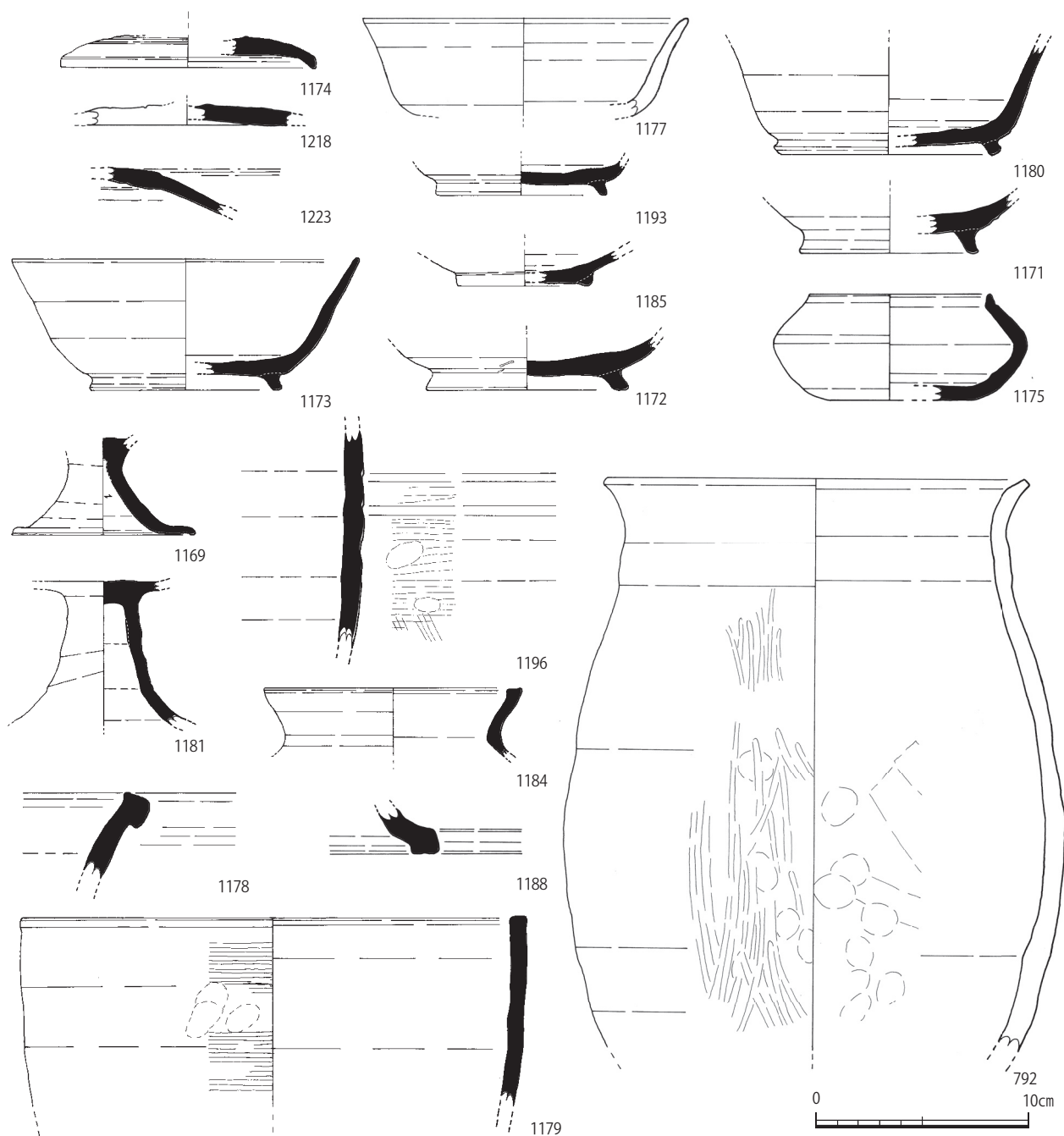


第 183 図 その他柱穴出土遺物実測図 (1/3)

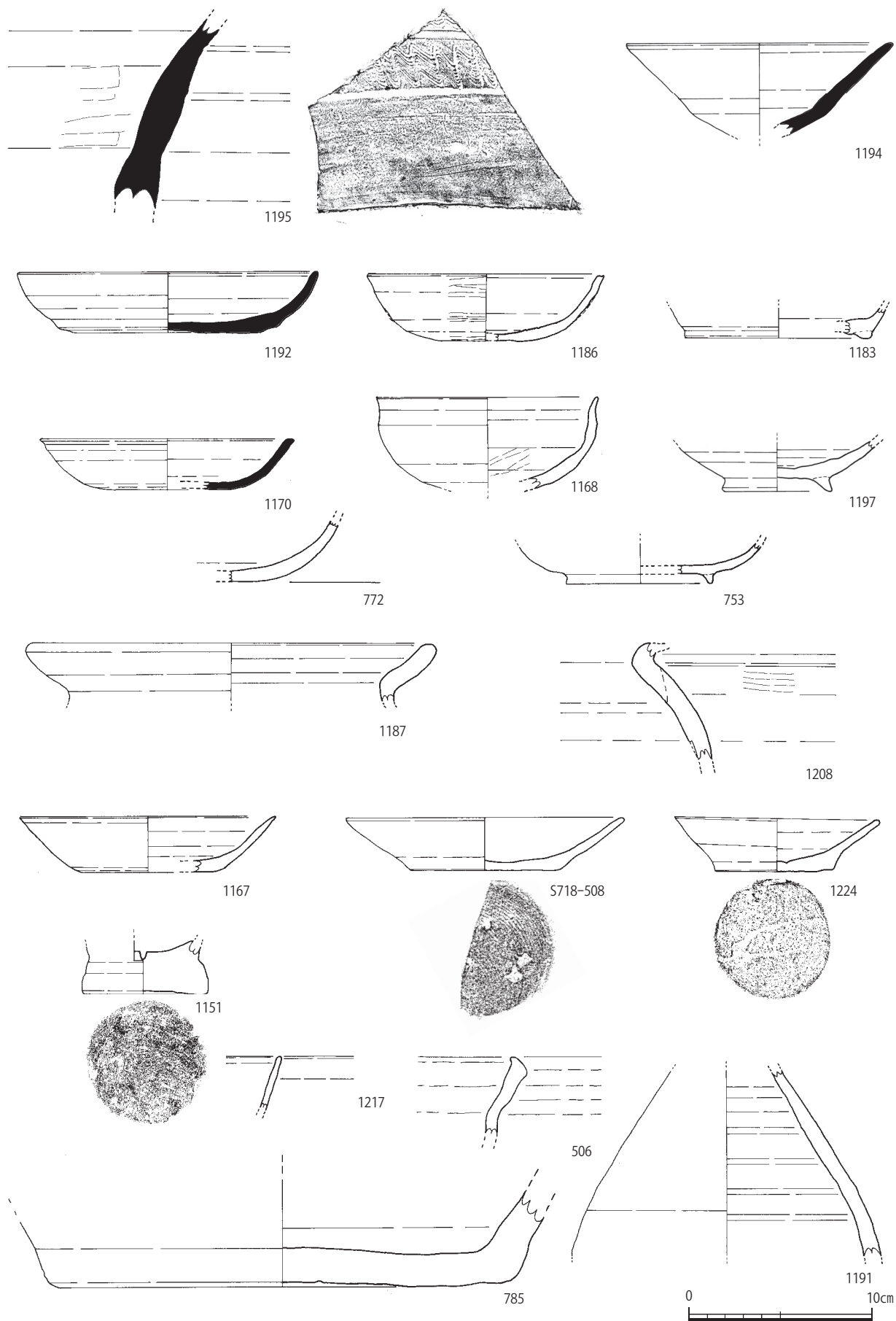
ホ. 包含層出土遺物

ここでは遺構などに該当しない遺物をまとめて報告する。詳細な出土位置などは観察表に記載しているものもある。ほとんどの遺物が重機による表土剥ぎ後の遺構検出面上で出土したものである。

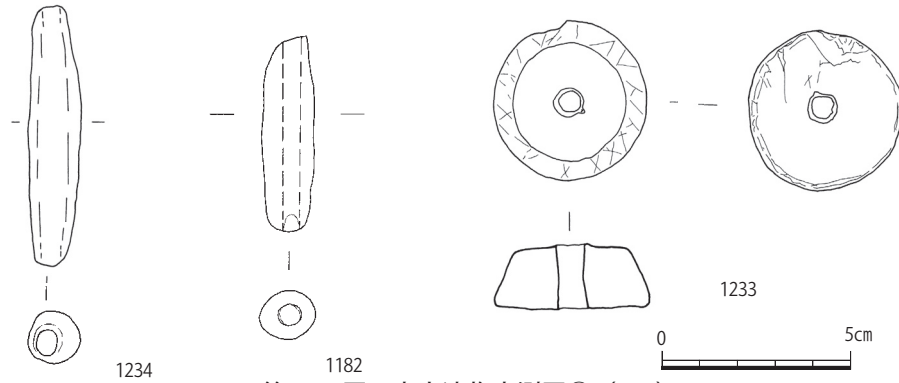
遺物(第184-186図)は、須恵器は1174～1195(R番ランダム)である。蓋・碗・埴・高坏・鉢・甕などが出土した。1179・1196は外面に工具による痕跡がのこる。1195は櫛描波状文を施す。土師器(R番ランダム)は1194～1208で、1194は高坏。1192・1170・1186は坏である。1186はS840出土土器と接合した。1168は碗。1183・1197・753は碗である。1187・1208は甕片。土師質土器は1167～1151(R番ランダム)。1167・508・1224は坏である。1151は内底部に丸い窪みがあり、蜀台と推定される。白磁は1217で碗である。備前焼は1191で徳利である。土師質は785で近世甕である。瓦質土器は506で、鍋片であろう。土製品は1234・1182・1176で管状土鍾である。石製品は1233で紡錘車。結晶片岩製。側面に鋸歯文が巡る。



第184図 表土遺物実測図① (1/3)



第 185 図 表土遺物実測図② (1/3)



第 186 図 表土遺物実測図③ (1/2)

第 3 節 小 結

第 4 地点の調査において検出した遺構は 4 時期ある。

①古墳時代前期中心の竪穴建物跡・丹を貯蔵し、埋設した甕検出。

古墳時代は竪穴建物跡を中心に柱穴・包含層から土師器が多く出土している。竪穴建物跡は 2 棟を確認したが、古代・中世において大きく土地を削平されている可能性が高いため、また当該期のの柱穴がまばらにあるため、竪穴建物跡はもう少し多く展開していたことが想定される。さらに調査区の西側丘陵上には野間古墳群が展開しており、若干の時期差も指摘されると思うが関連が推定される。また時期差のないところで、丹を入れた埋設甕も出土した。丹を分析した結果、ほとんどはベンガラという結果がでている。しかしながら、ここが「丹生」「丹川」の地名で呼ばれているため関連が期待されるところではある。

②古代の奈良・平安時代は 8 世紀～ 10 世紀にかけての掘立柱建物跡・溝跡・土坑など検出。

古代は方形掘り方の柱穴をもつ掘立柱建物跡と円形柱穴で構成する掘立柱建物跡が合計 23 棟検出された。出土遺物は須恵器・土師器・緑釉陶器・越州窯系青磁・灰釉陶器などが出土した。歴史地理学的には当時この周辺が丹生郷とよばれていたと推定され(第 1 章参照)、検出した掘立柱建物跡などは丹生郷に関わる公的施設であろうか。また掘立柱建物跡は切り合い関係などから方形掘り方の柱穴で構成される建物跡から径 0.3 m ほどの円形柱穴で構成される掘立柱建物跡へと変遷することが確認できた。方形掘り方の掘立柱建物跡も最低でも 3 時期は展開していることがわかっている。古代掘立柱建物跡の詳細な変遷過程は第 16 章でまとめている。

また調査区南側(11～17区)にある中世造成土は保存可能であるため、除去していない。もし中世造成土を除去すれば、ほぼ間違いなく古代の遺構は調査区北側と類似するような遺構群が展開している可能性は高い。

③中世は 15～16 世紀を中心に、掘立柱建物跡・土坑・銭貨とかわらけ埋納土坑など検出。中世は掘立柱建物跡 29 棟と銭貨とかわらけ埋納土坑、土坑、溝跡、土壌墓などを確認した。丹生・丹川周辺は中世は「丹生荘」とよばれる地域である。出土遺物はかわらけの坏・皿、中国青磁・白磁・染付、鉄滓碗などである。掘立柱建物跡は 15 世紀前葉～16 世紀前葉の間で 3-4 時期の変遷が想定される。前述したとおり、この第 4 地点の小字名は「福寿庵」であり、大恵寺の塔頭であったといわれる場所である。「福寿庵」は、その遺物の時期からも大友氏 11 代当主の大友親著(?～1436?)と若干重複する時期もあると推定される。実際、検出した遺構が庵としての機能をもっていたかどうかを確かめる根拠は乏しい。また 15-16 世紀の間、建物跡が展開しているが、時期差による建物の機能差も考えておかなければならないだろう。16 世紀の丹生荘は大友氏の加判衆の斎藤氏が当荘を本拠地としており、庵としての機能のほかに斎藤氏との関連も可能性がある。

SK1265 の銭貨とかわらけ埋納土坑は、かわらけ 93 枚、葉や布に巻かれたのを含む銭貨 46 枚、あと推定動物の骨片、分析からイネ科植物が置かれたことがわかった。地鎮関連の遺構であろう。

④近世は掘立柱建物跡・溝跡・石敷き遺構など検出。

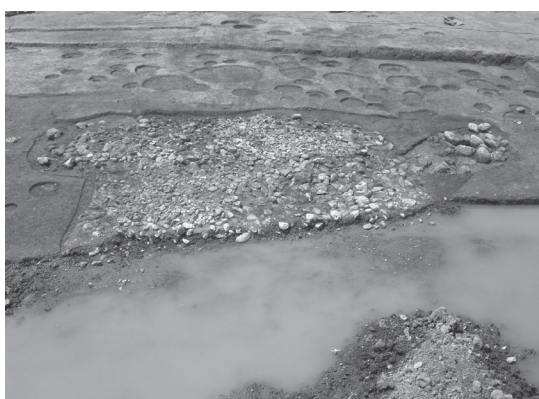
近世は中世の建物跡が展開した 15-16 世紀から断続して、掘立柱建物跡・溝跡・石敷き遺構などを確認した。出土遺物から 17～18 世紀に展開していたと推定される。その後、水田化により現代に至っているであろう。



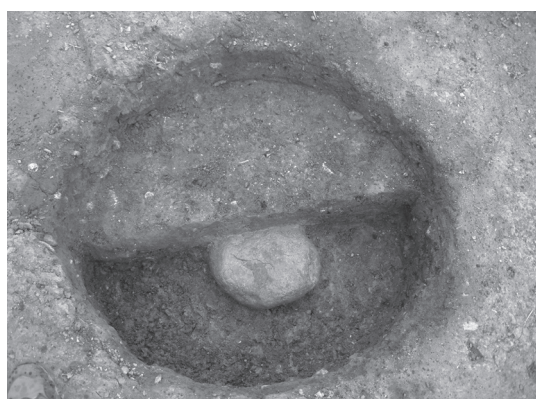
重機使用状況



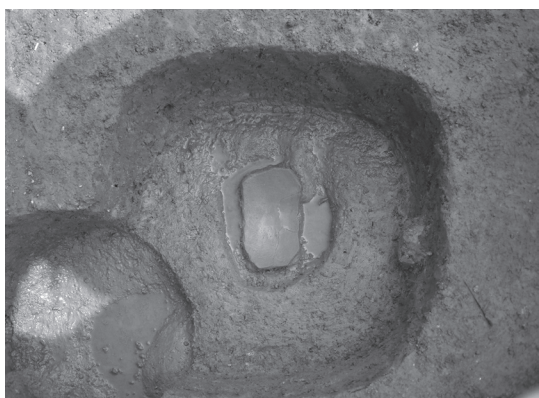
S2519 出土状況



SX001-a 検出状況



SB003-S1547

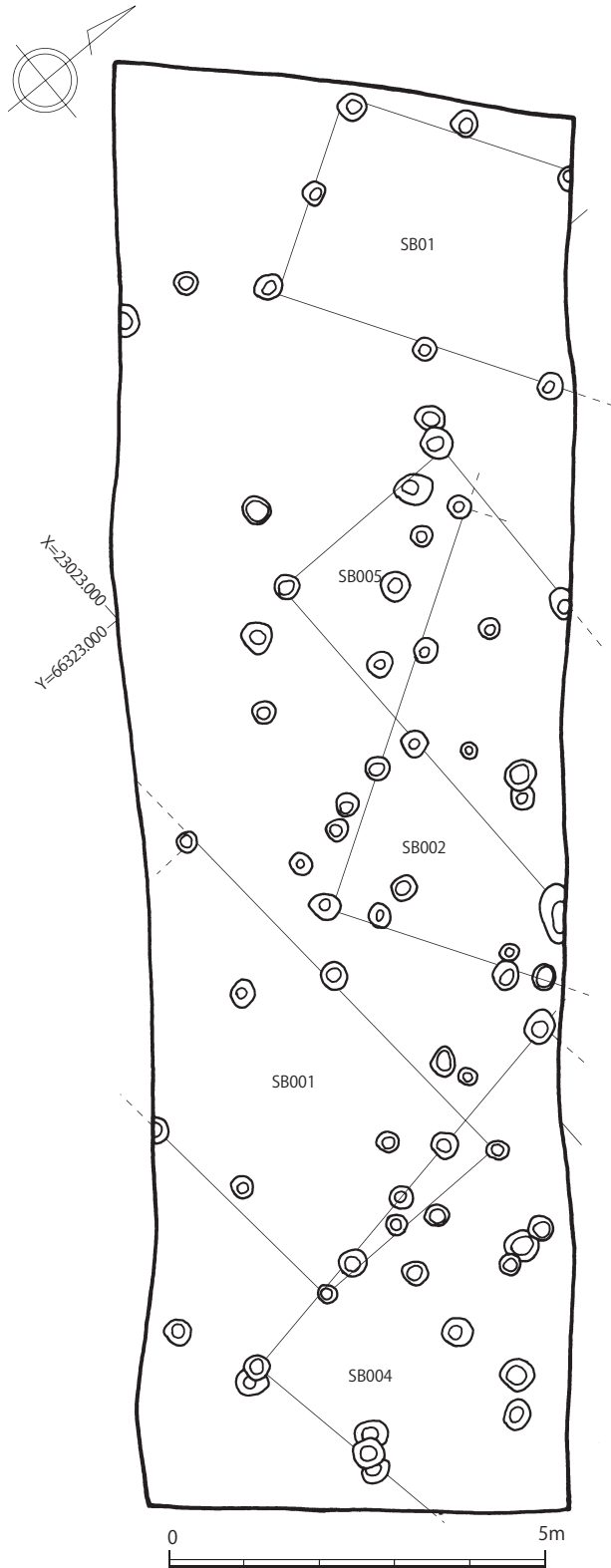


SB002-S907



SB004-S1497

第6章 第5地点の調査



第187図 第5地点 (NSJ-5) 遺構配置図 (1/100)

第1節 調査の内容

第5地点の調査は、丹生川の西岸、比高差15mほどの丹生台地上縁辺部にあたり、大字「丹川」字「宮友」に位置する。現況は水田・畑である。調査面積は120㎡である。遺構検出標高は25.5mほどである。遺構検出地盤は茶褐色粘質土で、小礫を含む。検出した遺構はピットで中世に帰属するものである。

第2節 遺構と遺物

(1) 概要

第5地点で検出した遺構は、掘立柱建物跡5棟である。ただし調査区矮小のため、正確な建物規模が不明である。出土遺物とその埋土の関係から、全ての建物跡および柱跡は中世に属するものと推定できる。また建物方位などから検討すると建物の存続時期は2～3時期に渡って展開すると考えられる。基本層序は検出面より上層は耕作土であり、主に水田であったと考えられ、現地表面から遺構検出面まで0.3mほどなので、水田の開発によって、遺構の上部が削平された可能性が高い。

(2) 中世

中世は、前述のとおり、掘立柱建物跡5棟を検出した。建物時期は2～3時期で展開する。出土遺物は極めて少量で、土師質土器片が出土した。

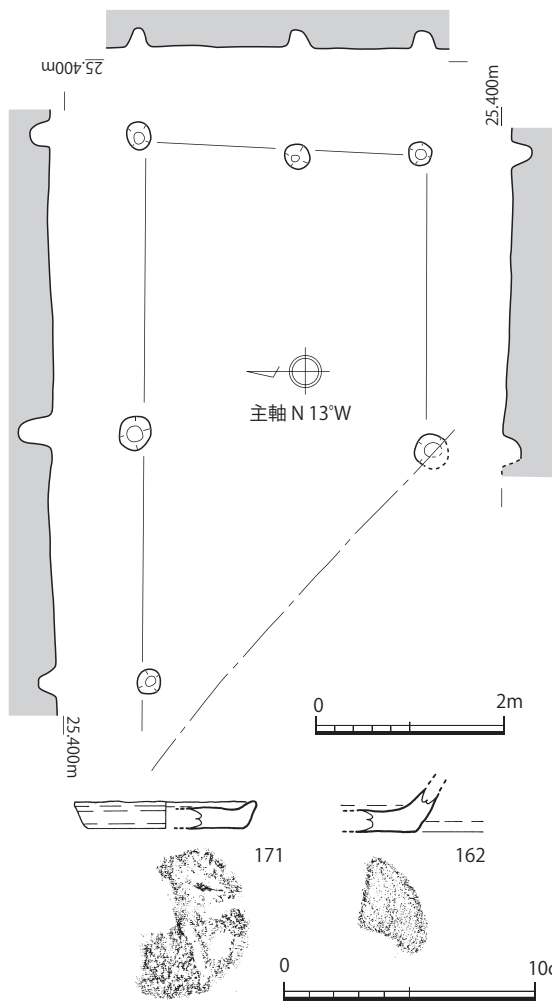
イ. 掘立柱建物跡 (SB)

SB001(第188図)

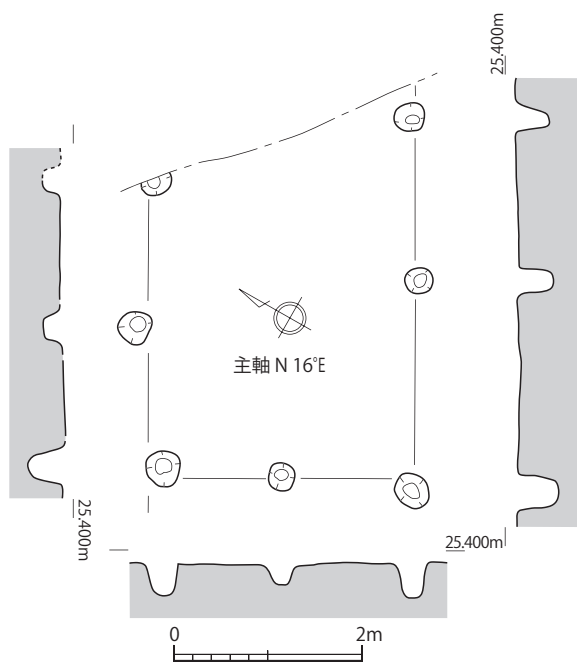
遺構は、調査区の南側で検出した。建物跡西側は調査区外である。建物方位は $N3^{\circ}W$ である。規模は梁行2間×桁行2+ α 間、身舎面積は $20 + \alpha \text{ m}^2$ である。出土遺物(第188図)は、171(S9)は、土師質土器小皿で、外底は回転糸きり後ナデである。162(S15)は、土師質土器坏と考えられる。

SB002(第189図)

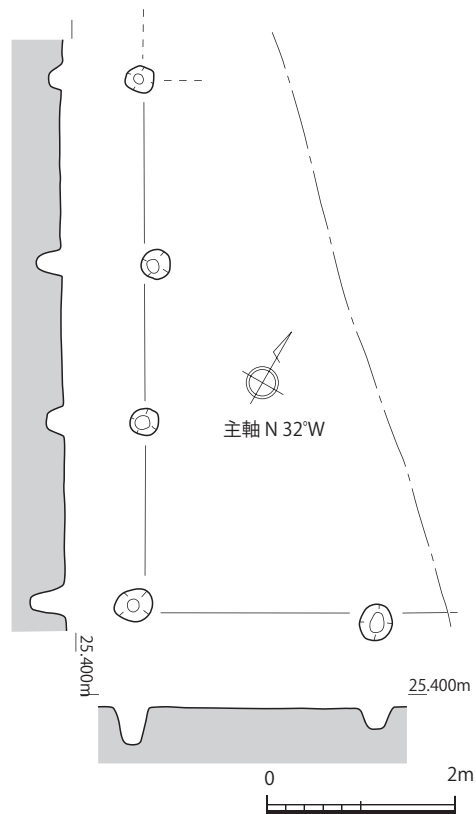
遺構は調査区北側で検出した。建物跡北側は調査区外のため詳細はわからない。SB005と重複する。建物方位は $N32^{\circ}W$ である。規模は梁行2間×桁行3+ α 間、身舎面積は $18 + \alpha \text{ m}^2$ である。出土遺物はなし。



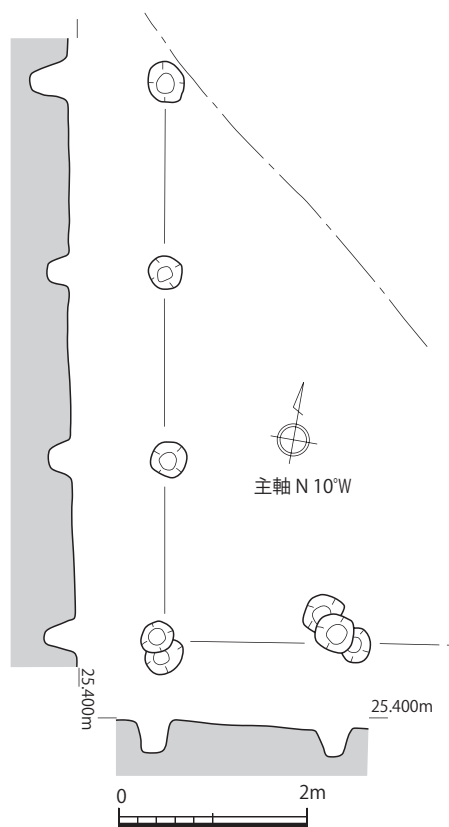
第188図 SB001 遺構実測図 (1/80)・出土遺物実測図 (1/3)



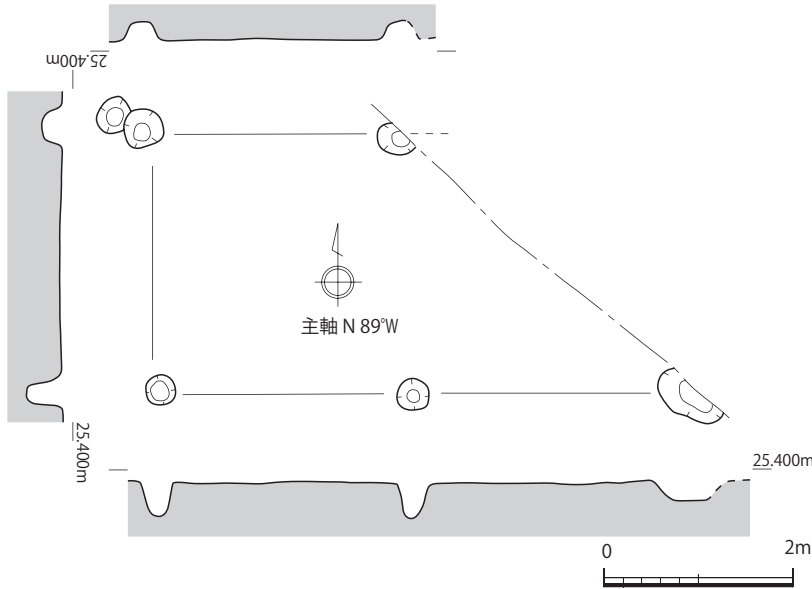
第190図 SB003 遺構実測図 (1/80)



第189図 SB002 遺構実測図 (1/80)



第191図 SB004 遺構実測図 (1/80)



第 192 図 SB005 遺構実測図 (1/80)・出土遺物実測図 (1/3)

SB003(第 190 図)

遺構は調査区北西部で検出した。建物跡東側は調査区外である。SB004 と重複する。建物方位は $N61^{\circ} E$ である。規模は梁行 2 間×桁行 2 + α 間、身舎面積は $11 + \alpha m^2$ である。出土遺物はなし。

SB004(第 191 図)

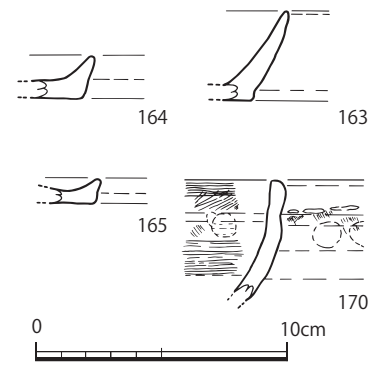
遺構は調査区北東部で検出した。建物跡東側は調査区外である。SB003 と重複する。建物方位は $N10^{\circ} W$ である。規模は梁行 1 + α 間×桁行 3 + α 間、身舎面積は $18 + \alpha m^2$ である。出土遺物はなし。

SB005(第 192 図)

遺構は調査区中央付近で検出した。建物跡東側は調査区外である。SB002 と重複する。建物方位は $N89^{\circ} W$ である。規模は梁行 1 間×桁行 2 + α 間である。身舎面積は $16 + \alpha m^2$ である。出土遺物はなし。

その他の柱穴からの出土遺物 (第 193 図)

S001 からは、164 の土師質土器小皿、163 の土師質土器坏で、外底は回転糸きり後ナデ? である。S014 からは、165 の土師質土器小皿、170 は土師質土器の椀もしくは鉢で、刷毛の調整が目立つ。



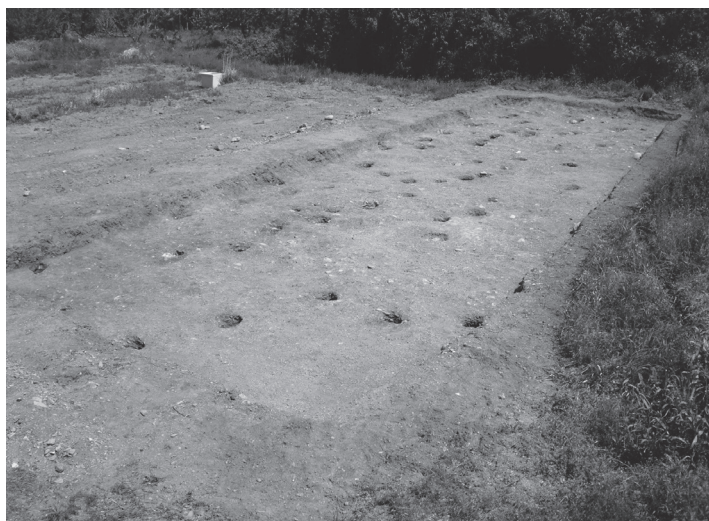
第 193 図 その他ピットからの出土遺物 (1/3)

第 3 節 小 結

第 5 地点は中世の掘立柱建物跡 5 棟を検出した。2 ～ 3 時期にわたって展開していると思われる。SB003・005 は同一方位軸で、SB002 と SB003 は建物軸が直交しそうである。SB004 は他の建物跡の軸と相違する。建物同士の柱穴の切り合い関係はないため、相対的な前後関係は不明であるが、SB003・005 の時期、SB002・003 の時期、SB004 の時期の 3 時期に分けられそうである。また出土遺物から時代幅を考慮すると、14 世紀後半～ 15 世紀代にかけて展開したものと考えられる。



第5地点から見た北側の風景



第5地点完掘状況



第5地点作業風景

第7章 第6地点の調査

第1節 調査の内容

丹生川坂ノ市条里跡第6地点は、大分市大字丹川字古市、奥園にあたり、丹生川に隣接し左岸の微高地に位置している。第6地点北側の沖積地には水田が広がり、丹生川はほぼ直線に海岸へと伸びる。第6地点の南西側は比高差約10mの台地が南北に展開し崖面は急峻である。調査区南側では縄文時代・中世遺跡の第3地点が隣接し、調査区の対岸北東約100m先には、近世段階に造立された大友11代親著の墓が位置している。

調査区は圃場整備事業の水路部分を対象に設定している。調査区の全形は幅約10～20mの変則的なトレンチ形を呈する。調査区面積は2600㎡である。調査区の状況から調査区内をⅠ～Ⅴ区に区割りを設定し調査を進めた(第194図)。本報告の各遺構説明の際には、適宜どの区にあたるかを記す。なお本調査の進展に伴い、第6地点周辺の遺構確認の必要が生じた。このため第6地点周辺に3ヶ所のトレンチを設定し遺構確認を行った。3ヶ所のトレンチはⅥ～Ⅷ区に振り分けている。その調査内容については第2節(6)で後述する。

第6地点の調査概要について触れる。現況は水田で、水田下は複数の旧水田層が認められる。旧水田下は遺物包含層の淡灰褐色土であり、その直下が遺構面にあたる。現況の水田から約50～60cm下に位置している。検出標高はⅡ区から北側は約17m、Ⅰ・Ⅲ区は約18mであり、おおむね地形的に南から北へ緩斜している。第6地点の遺構埋土はおおむね、灰褐色、茶褐色粘質土を基調とする。いずれも粘りはやや強くしまりがよい。地山は黄褐色粘質土で、砂礫を含まない。なおⅣ区では灰白色砂礫層を部分的に確認している。旧河川の氾濫原を示すものであろう。

第6地点の遺構検出の結果、Ⅰ～Ⅴ区全体にわたって遺構の広がりを確認することができた。Ⅱ区では近・現代の攪乱溝・土坑があり遺構の削平が著しい箇所もあるが、その他は良好に遺存している。

遺構はピット多数のほか、おおむね下記の性格をもつものが確認されている(第194～199図)。

掘立柱建物9棟(SB001～009)

柵跡2列(SA001～002)

溝跡4条(SD001、SD500、SD555、SD875)

道路状遺構1条(SF1000)

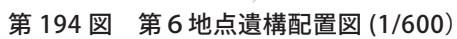
土坑12基(SK010、SK013、SK015、SK029、SK030、SK505、SK510、SK515、SK520、SK525、SK540、SK707)

井戸1基(SE580)

遺構の密度はⅠ・Ⅲ区で多く、Ⅱ区の東西に伸びるSD555より北側は少ない状況である。現況の地割りは、SD555付近が字境で、南は字奥園、北は字古市にあたる。

SD500、SD555は屋敷区画もしくは灌漑に伴う溝と考えられ、SF1000はSD555と並んでいる。土坑は、土師質土器小皿・坏を意図的に配置したSK010や、約500枚をかぞえる個体の土師質土器小皿・坏を廃棄したSK510がみられる。SK510は土層観察から一度に廃棄した良好な一括資料であり、豊後地域の中世土器編年を考えるうえで重要な位置を占めるものと考えられる。その他の土坑としては備前焼埋甕のSK525を検出している。

第6地点の遺構の時期は14～16世紀代であり、そのうち14・15世紀代を中心としている。14・15世紀代の遺構については複数段階の変遷が看取されることから、その土地利用の変遷について留意する必要がある。また文書史料によると、14世紀末～15世紀前半頃の時期は、大友親著がこの地域に深く関わる時期と考えられている。第6地点の対岸に近接する、親著の墓や、親著が造立したとされる大恵寺跡など、その関わりを如実に示している。第6地点は親著の時期と重複する可能性が高く、遺跡の性格が注目されるところである。

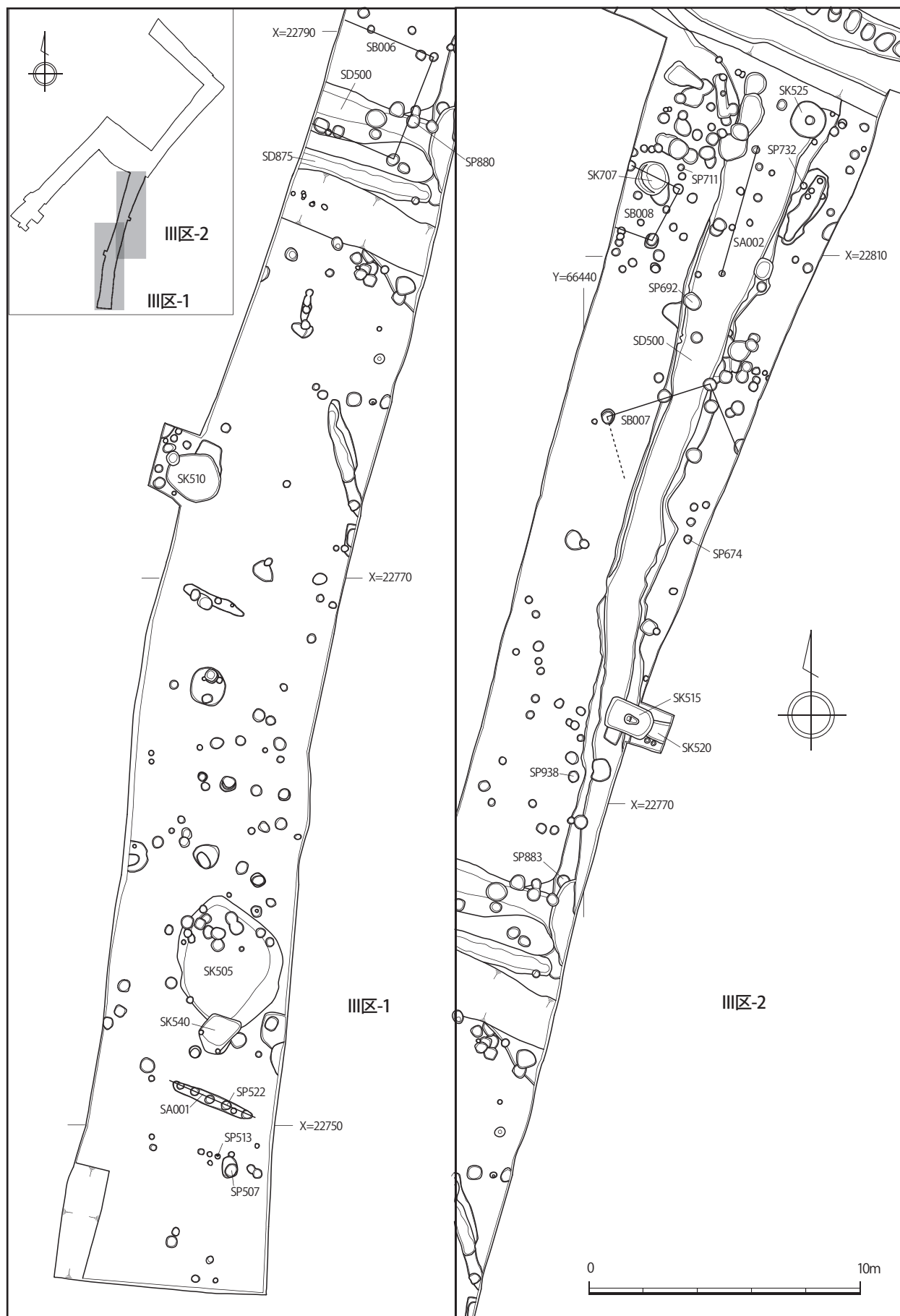




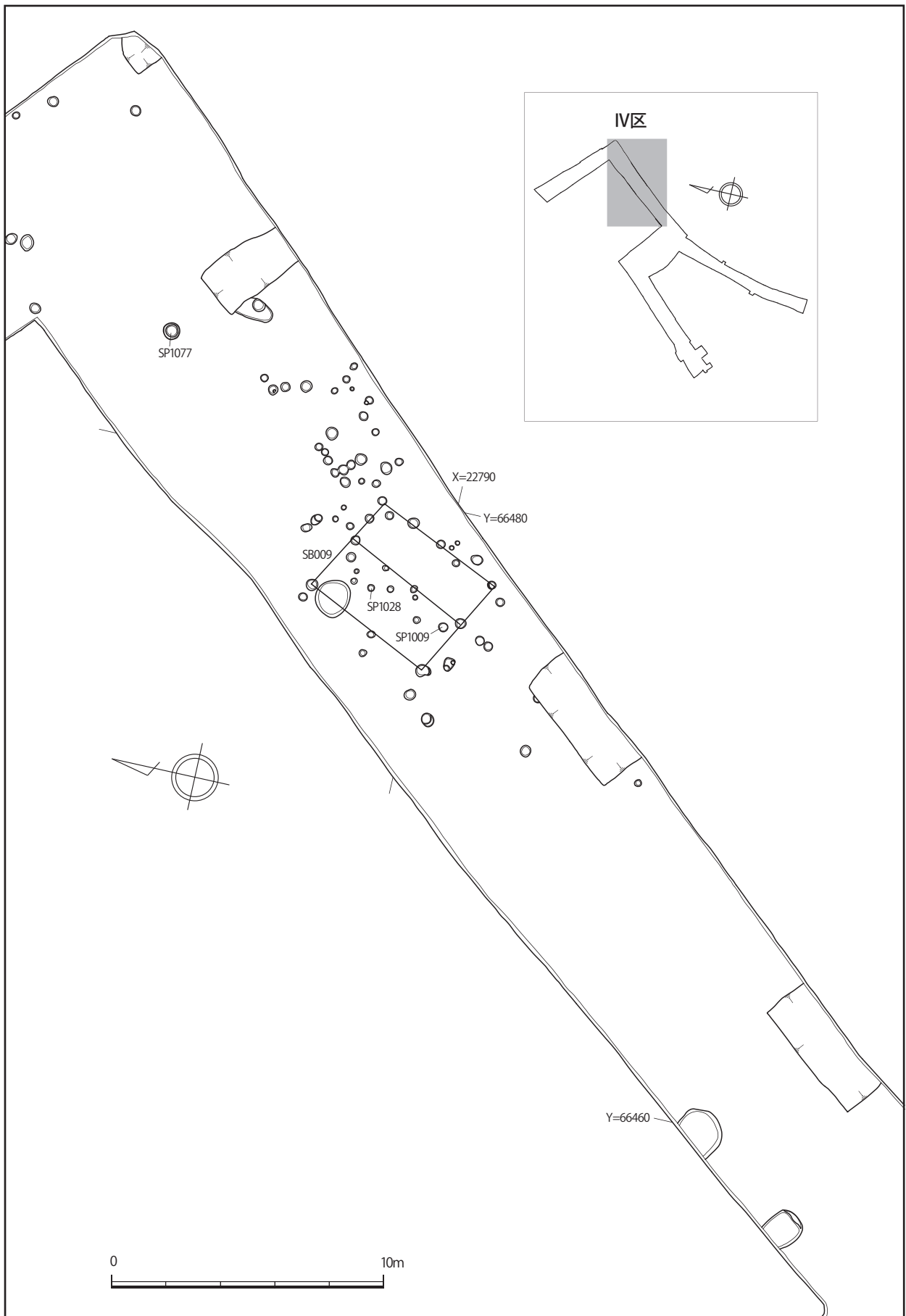
第195図 第6地点 I区全体図 (1/200)



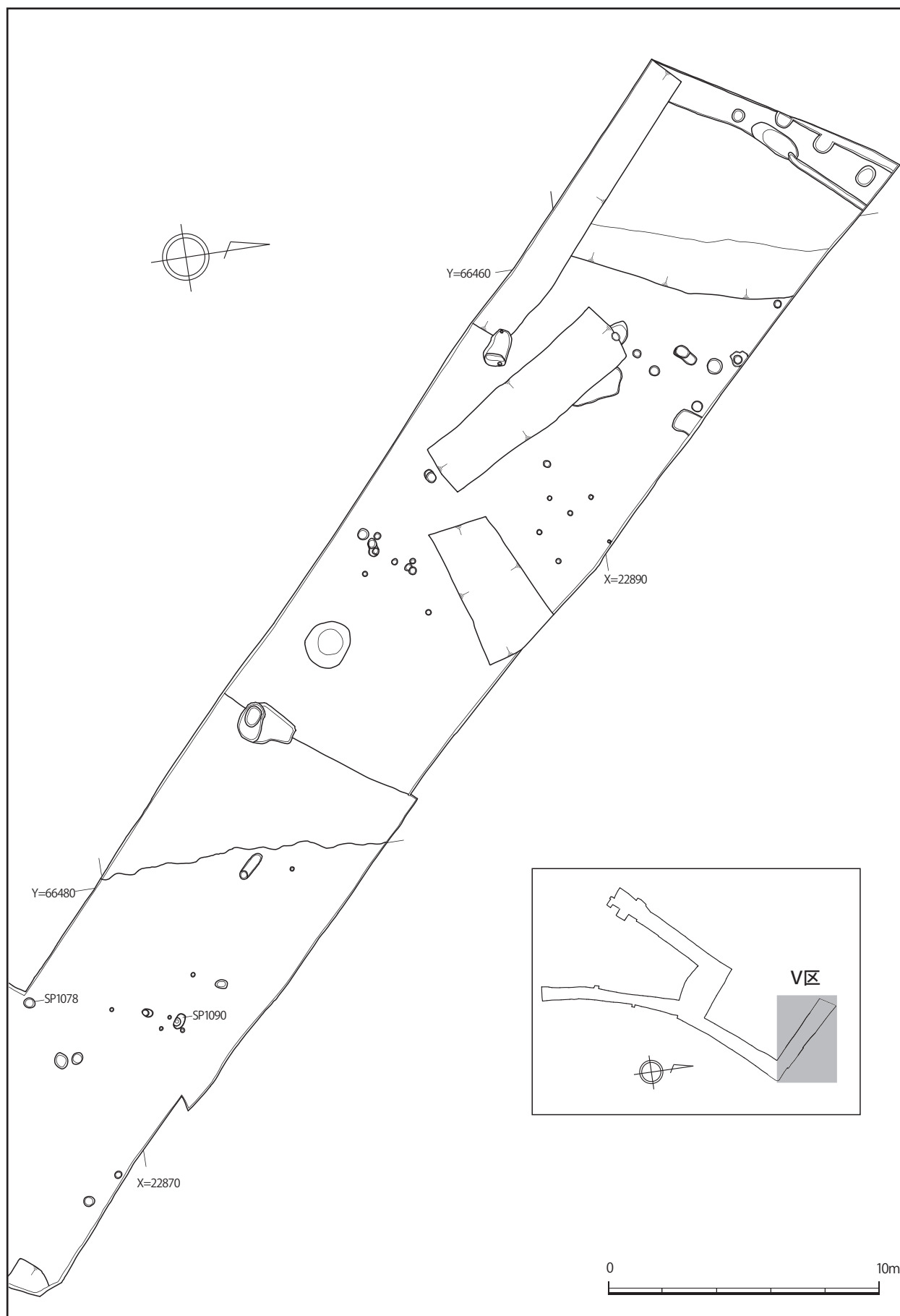
第 196 図 第 6 地点 II 区全体図 (1/200)



第197図 第6地点Ⅲ区全体図 (1/200)



第198図 第6地点IV区全体図(1/200)



第 199 図 第 6 地点 V 区全体図 (1/200)

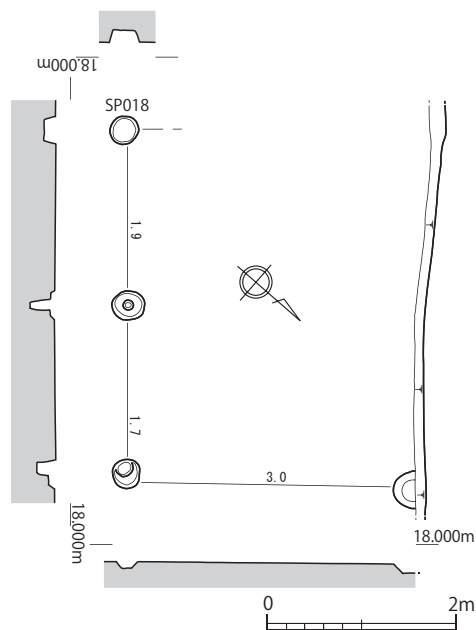


第2節 遺構と遺物

(1) 中世

イ. 掘立柱建物、柵跡、ピット(第200図)

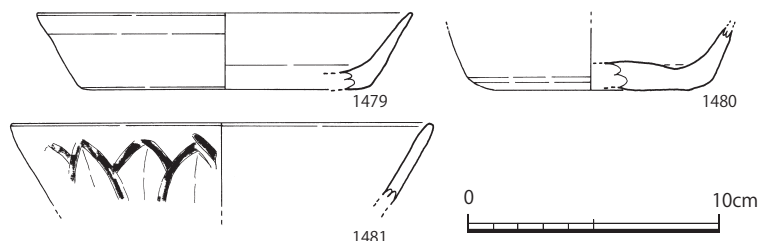
第6地点では掘立柱建物は9棟、柵跡2列が確認できた。掘立柱建物は主にⅠ・Ⅲ区を中心に検出され、その他はⅣ区で1棟検出したのみである。柵跡はⅢ区で検出している。掘立柱建物はその主軸から、東西方向にもつSB001～SB006・SB008と、南北方向にもつSB007・SB009に分かれる。掘立柱建物については東西方向に主軸もつものが主体である。建物の主軸とその規模については、Ⅱ区SD555より北、Ⅳ・Ⅴ区の遺構希薄の状況とあわせて、建物の空間的配置を考えるうえで手掛かりとなるものである。



第 201 図 SB001 遺構実測図 (1/80)

SB001 (第 201・202 図)

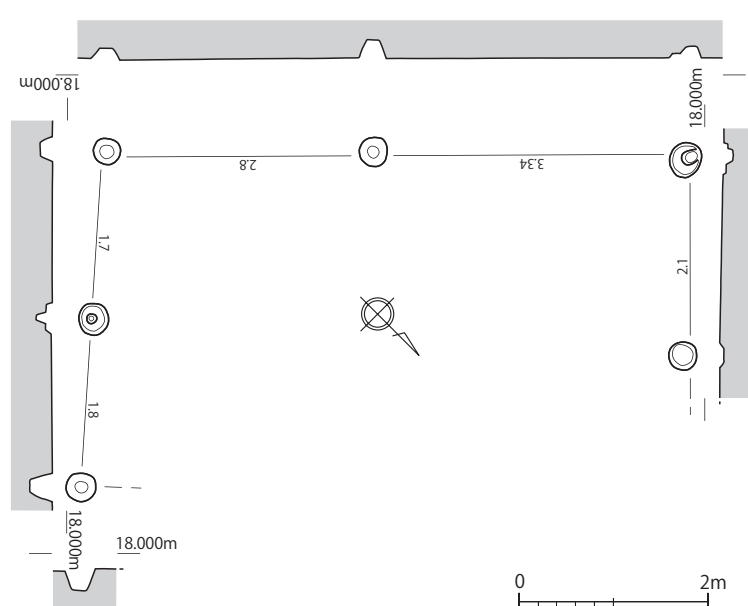
I 区で検出した建物で東西方向に長軸をもつ。建物西側は調査区外に延びる。主軸方位は $N49^{\circ} E$ である。梁行 2 間、桁行 1 間 + α で身舎面積は $5.4 + \alpha \text{ m}^2$ である。出土遺物は SP018 で土師質土器、龍泉窯系青磁がまとまって出土している。1479・1480 (SP018) は土師質土器坏である。1479 は底部から斜上方に直線的に伸びる。1481 (SP018) は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁を施す。



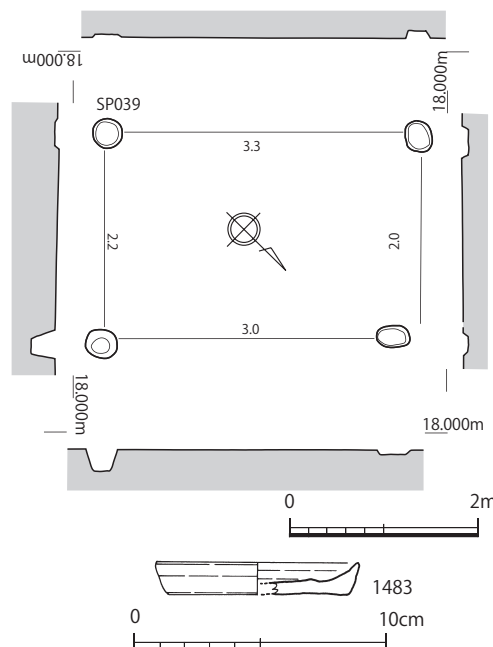
第 202 図 SB001 出土遺物実測図 (1/3)

SB002 (第 203 図)

I 区で検出した建物で、SB001 より北に隣接する。建物は東西方向に長軸をもつ。建物の南側は柱穴を確認することができなかった。主軸方位は $N49^{\circ} W$ である。梁行は 2 間、桁行は 2 間の規模と考えられ、身舎面積 $8.60 + \alpha \text{ m}^2$ である。東側の桁行の柱間距離は西側と比べると短い配置になっていることが分かる。SB002 は、SB001 との位置関係や、その主軸方向が同一であることから、SB001 と関連する建物なのかもしれない。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第 203 図 SB002 遺構実測図 (1/80)



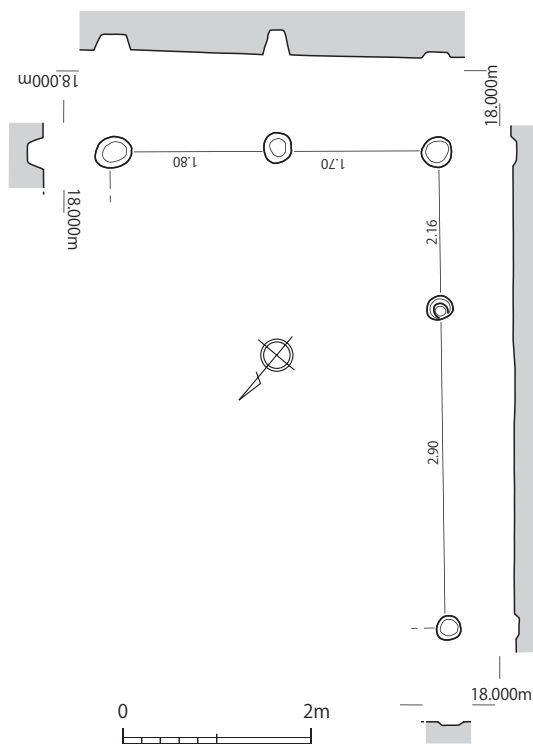
第 204 図 SB003 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB003 (第 204 図)

I 区で検出した建物で、SD555 の南に隣接する。SB004 と重複する。建物は東西方向に長軸をもち、主軸方位は $N47^{\circ} W$ である。梁行 1 間、桁行 1 間の小型建物で身舎面積は 8.02 m^2 である。1483 (SP039) は土師質土器小皿である。

SB004 (第 205 図)

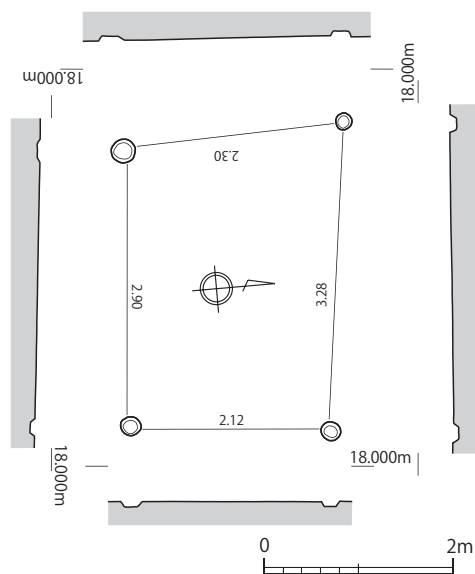
I 区で検出した建物で、SD555 の南に隣接する。SB003 と重複する。建物は SB003 同じく東西方向に長軸をもつ。建物の西側は柱穴を確認することができなかった。主軸方位は $N38^{\circ}W$ である。梁行 2 間、桁行 2 間の規模と考えられ、身舎面積は $8.86 + \alpha \text{ m}^2$ である。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第 205 図 SB004 遺構実測図 (1/80)

SB005 (第 206 図)

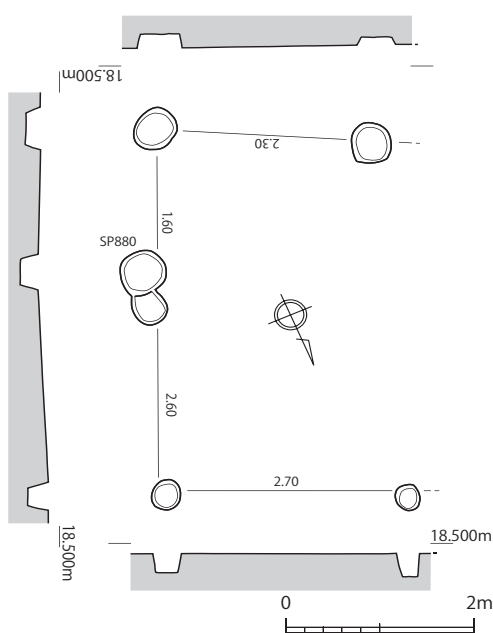
I 区で検出した建物で、SD555 の北側に位置する。建物はおおむね東西方向に長軸をもち、主軸方位は $N85^{\circ}W$ である。梁行 1 間、桁行 1 間の小型建物で身舎面積は 6.83 m^2 である。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



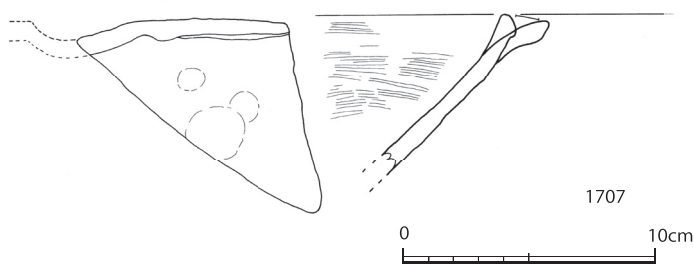
第 206 図 SB005 遺構実測図 (1/80)

SB006 (第 207・208 図)

III 区で検出した建物で、SD874 の北側に位置する。建物西側は調査区外に延びる。SD500 との重複が認められ、SD500 より時期的に新しいものと考えられる。建物は東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N64^{\circ}W$ である。梁行 2 間、桁行 1 間 + α の小型建物で、身舎面積は $7.00 + \alpha \text{ m}^2$ である。1707 (SP880) は瓦質土器鉢で片口をもつものである。体部から口縁部へ内彎気味に開く。口縁部は玉縁状に肥厚する。外面体部はユビオサエ、内面体部はやや雑なハケメ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。



第 207 図 SB006 遺構実測図 (1/80)



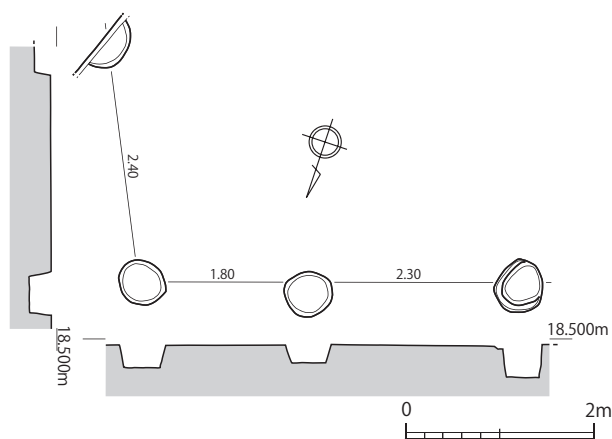
第 208 図 SB006 出土遺物実測図 (1/3)

SB007 (第 209 図)

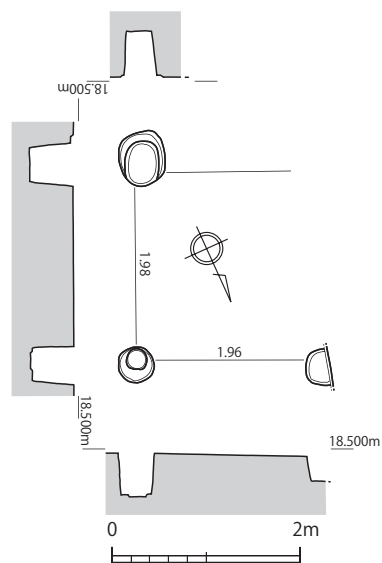
Ⅲ区で検出した建物で、南北方向に長軸をもつものと考えられる。SD500 との重複が認められ、SD500 より時期的に新しいものと考えられる。梁行と桁行は直交しないが、建物東側は調査区外に延びるものと考えられる。主軸方位は $N69^{\circ} E$ である。梁行 1 間 + α 、桁行 2 間 + α であり、身舎面積は $4.92 + \alpha \text{ m}^2$ である。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

SB008 (第 210 図)

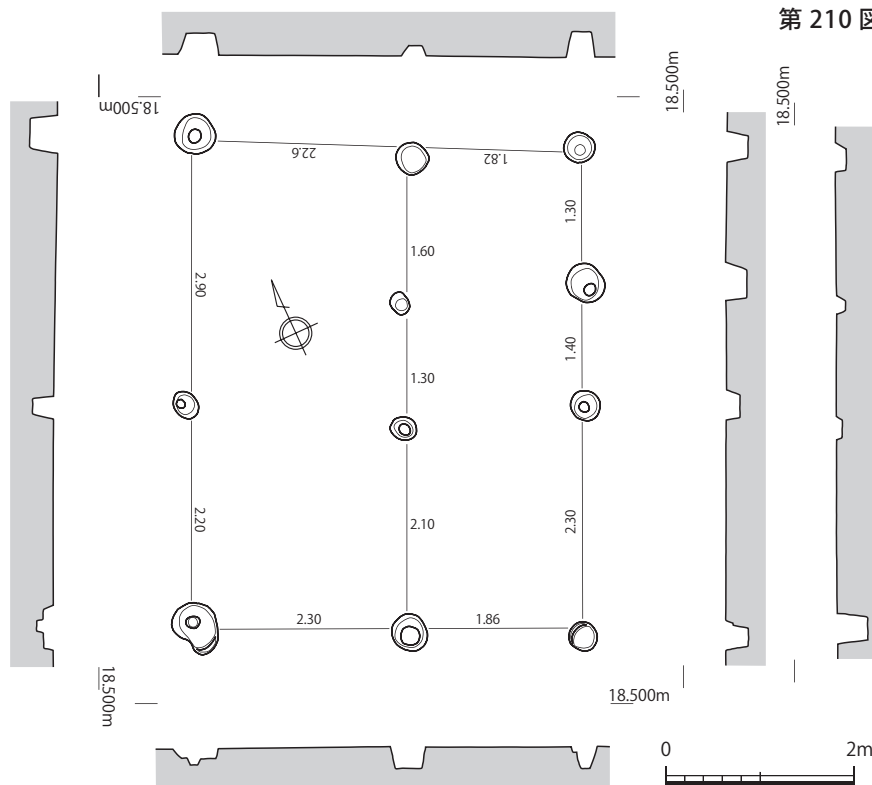
Ⅲ区で検出した建物で、東西方向に長軸をもつ。建物西側は調査区外に延びる。主軸方位は $N64^{\circ} W$ である。梁行 1 間、桁行 1 間 + α の規模をもつものと考えられ、身舎面積は $1.94 + \alpha \text{ m}^2$ である。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第 209 図 SB007 遺構実測図 (1/80)



第 210 図 SB008 遺構実測図 (1/80)



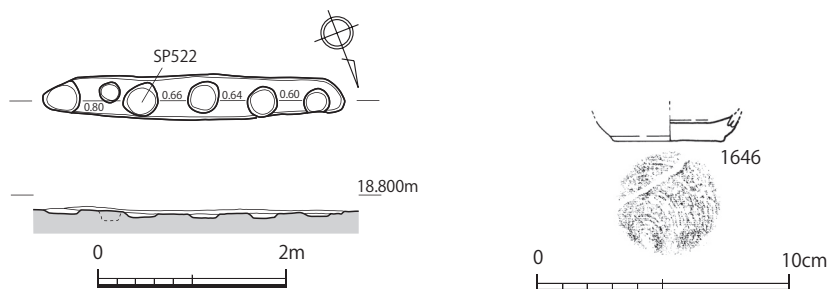
第 211 図 SB009 遺構実測図 (1/80)

SB009 (第 211 図)

Ⅳ区のほぼ中央部で検出した建物で、南北方向に長軸をもつ。主軸方位は $N25^{\circ} E$ である。梁行 2 間、桁行 4 間の総柱的に柱穴を配する建物である。身舎面積は 20.81 m^2 で、第 6 地点で検出した掘立柱建物のなかでは規模の大きい建物である。柱間距離は桁行の中列が 1 間ずつ短い配置になっていることが分かる。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

SA001 (第 212 図)

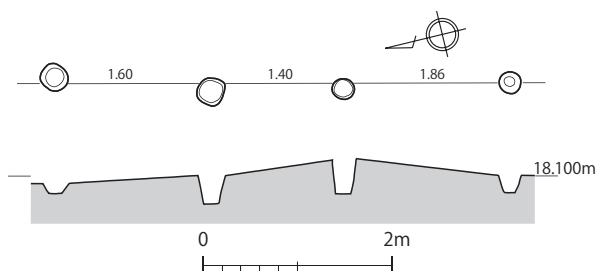
SA001 はⅢ区南端で検出した柵跡で、東西方向に長軸をもつ。SK505 の南に位置する。主軸方位は $N68^{\circ}W$ である。楕円形の掘り方プランのなかに長軸に沿って 5 基のピットを配するものである。楕円形プランの長さは約 3 m、各ピットの径は約 0.4 m を測る。各ピットの深さ約 0.1 m でその上面は削平を受けている。ピット間の距離はおおむね等間隔である。1646 (SP522) は土師質土器小皿の底部である。外面底部に糸切り離しが残る。15 世紀代以降の所産か。



第 212 図 SA001 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SA002 (第 213 図)

SA002 はⅢ区の中央より北、SD500 に位置する。SD500 が埋まったのち掘られたものと考えられる。南北方向に長軸をもつ。主軸方位は $N72^{\circ}W$ である。4 基のピットを配するものである。ピット間の距離はおおむね等間隔である。深さは約 0.4 ~ 0.6 m を測る。各ピットからの出土遺物はみられなかった。



第 213 図 SA002 遺構実測図 (1/80)

その他のピット出土遺物 (第 214 図)

その他のピットから出土した遺物を紹介する。遺物は縄文時代から中世がみられ、そのうち中世が主体を占めている。

1688 (SP674)・1725 (SP1009) は縄文土器深鉢の口縁部である。1688 は口縁部内面に 1 条の沈線を施す。1507 (SP057) は縄文土器の深鉢の底部か。平底で底部外端は張り出す。内外面は工具状のナデを施す。色調は橙茶褐色を呈する。

1724 (SP1078) は土師器坏か。体部は直線的に伸び、口縁部端部はまるくおさまる。1508 (SP067) は土師器坏の底部か。円盤状高台を呈する。1530 (SP079) は土師器甗か。内外面にヘラミガキを施す。1638 (SP507) は土師器甕で、くの字状に外反し、口縁部が肥厚する。口縁部端部はまるみをもつ。

1509 (SP071) は黒色土器 A 類の坏とみられ、底部は円盤状高台をなす。底部外端は外方へ張り出す。外面底部は糸切り離しのちナデである。

1484 (SP041)・1488 (SP041)・1639 (SP513) は土師質土器小皿である。いずれの小皿も底部から斜上方に開く器形を有する。おおむね内外面体部は回転ナデ、内面底部はナデ、外面底部は糸切り離しのちナデ調整

である。1484 は底部の器壁が厚く、口縁部端部はすばまる。

1654 (SP732)・1699 (SP711) は土師質土器環である。いずれも器高は 3.5cm 前後で深い体部を有し、口縁部端部がすばまる。

1655 (SP883) は土師質土器で、底部の器壁が厚いものである。燭台か。上部は欠損して詳細は不明である。外面底部は糸切り離しのちナデ、体部は回転ナデである。色調は橙褐色を呈する。

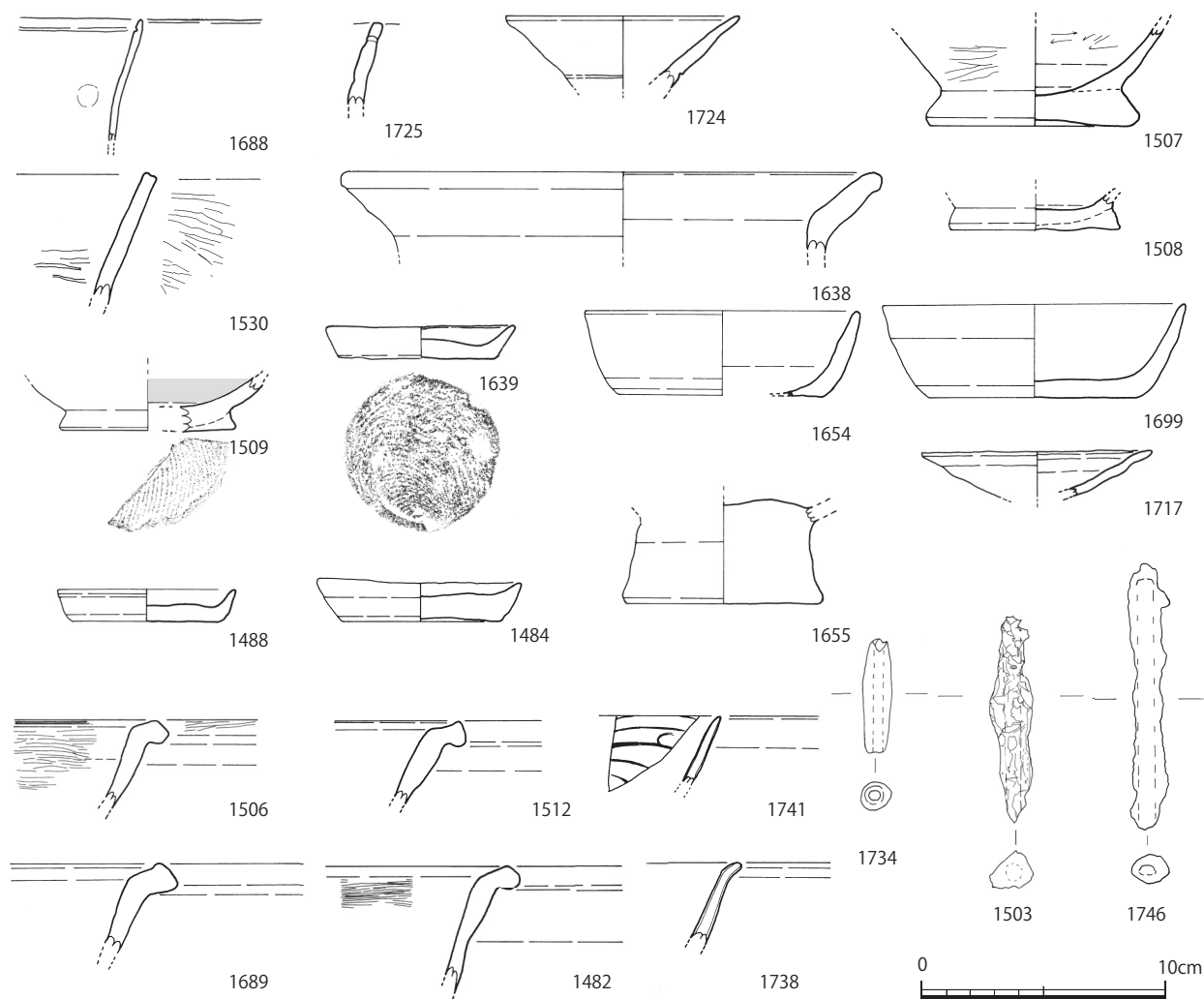
1717 (SP938) は京都系土師器皿である。口縁部は比較的に長く、その下に段を有する。口縁部下はナデ調整である。器壁は薄手のつくりであり、手づくね成形である。復元口径は 9.4cm である。

1482 (SP023)・1506 (SP047)・1512 (SP078)・1689 (SP692) は土師質・瓦質土器鍋である。いずれも口縁部は短く外反し、外面端部はまるい。1512・1689 は口唇部を上方に摘み上げる。1482・1506 は体部に横方向のハケメ調整を施す。

1741 (SP1078)・1738 (SP1090) は龍泉窯系青磁碗である。1741 は内面にへら状工具による花文を施す。1738 (SP1090) は口縁部が短く外反するもので、内外面とも無文である。

1734 (SP1077) は土師質土器の管状土錘で、一部欠損する。

1503 (SP041)・1746 (SP1028) は鉄製品である。1503 は鉄釘で、上端は欠損する。1746 は不明製品で、断面は楕円形を呈する。劣化が著しい。現存長 18cm を測る。束状の製品か。



第 214 図 その他ピット出土遺物実測図 (1/3)

ロ. 溝跡、道路状遺構（第 215 図）

第 6 地点では、I 区に SD001、III 区に SD500・SD875、II 区に SD555・SF1000 を検出している。おおむね SD001・SD500 は南北に伸び、SD875・SD555・SF1000 は東西に伸びる。SD500・SD555 はその形状から屋敷区画もしくは灌漑に伴うものと考えられる。SF1000 は道路状遺構で SD555 とならぶ。以下、各遺構の詳細について触れる。

SD001（第 216～218 図）

I 区の南側で検出し、南北に伸びる。南側は調査区外に延びるため、詳細は不明である。溝の南西側部分は SK015 などの土坑に切られている。幅約 2.5 m、長さ約 11 m + α 、深さ約 0.4～0.5 m である。溝の床面はほぼ平坦で、緩やかに立ち上がる。土層はおおむね 2～3 層に分層が可能であり、とくに上層の 1 層（淡茶褐色土）は土器・炭化物を多く含んでいる。溝の北西部分では約 5～10cm 程度の

小石、炭化物が集中する箇所が認められ、埴と考えられる土製品（1461）が出土している。

出土遺物は、土師質土器、瓦器、須恵質土器、備前焼、中国産白磁・青磁のほか、土製品などがみられる。ここでは上層・中層（1・2 層）と、下層（3 層）に分けて報告する。

（上・中層出土遺物）

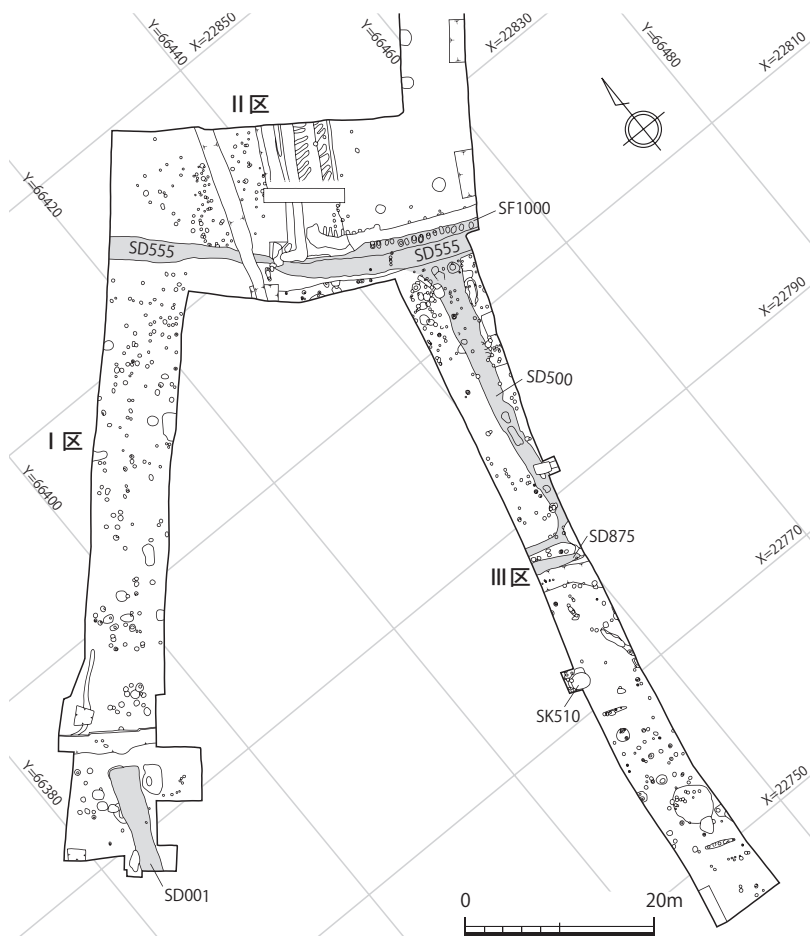
1425・1426・1449 は土師質土器小皿である。いずれも外面底部は糸切り離しのちなデである。1425 は底部から内彎気味に開く器形である。1426・1449 は底部からやや垂直気味に立ち上がる。1433 は土師質土器坏の底部である。1457 は土師質土器で、底部が円盤状高台を呈する。外面底部は糸切り離しが残る。坏か。1441 は瓦器碗で、和泉型とみられる。

1430・1439・1453 は土師質・瓦質土器の鍋である。1430・1453 は口唇部が上方に立ち上がり、外面端部は面取りを施す。1439 は口縁部が短く外反し端部はまるみをもつ。1428 は土師質土器釜で、鰐部が口縁部直下に付く。

1435・1436 は東播系須恵器鉢か。1440 は備前焼播鉢で口唇部はすぼまり、口縁部外端は面取りを施す。体部内面に 4 条単位の播目が認められる。

1454 は白磁碗で、玉縁状口縁をなす。1445 は白磁の口禿げ皿、口縁部内面の釉を掻き取る。1455 は朝鮮産陶器碗で、見込に目跡が 5 ケ所認められる。全面施釉で釉調は白灰色をおびる。16 世紀代か。1455 の資料は他の出土遺物よりも時期的に最も新しい。周辺トレンチ調査において 16 世紀代の遺構が確認されている。このことから 1455 は SD001 を掘りこんだピットの出土遺物と判断している。

1427・1437 は土師質土器の管状土鍾である。いずれも完形品である。

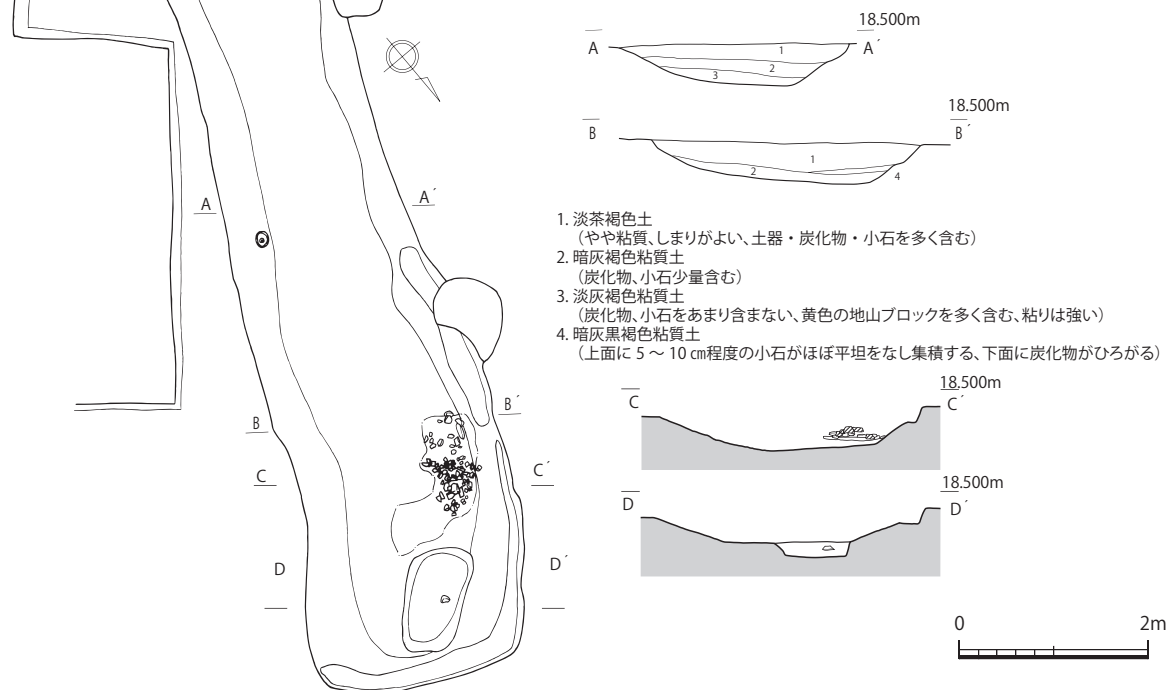


第 215 図 第 6 地点溝・道路状遺構配置図 (1/800)

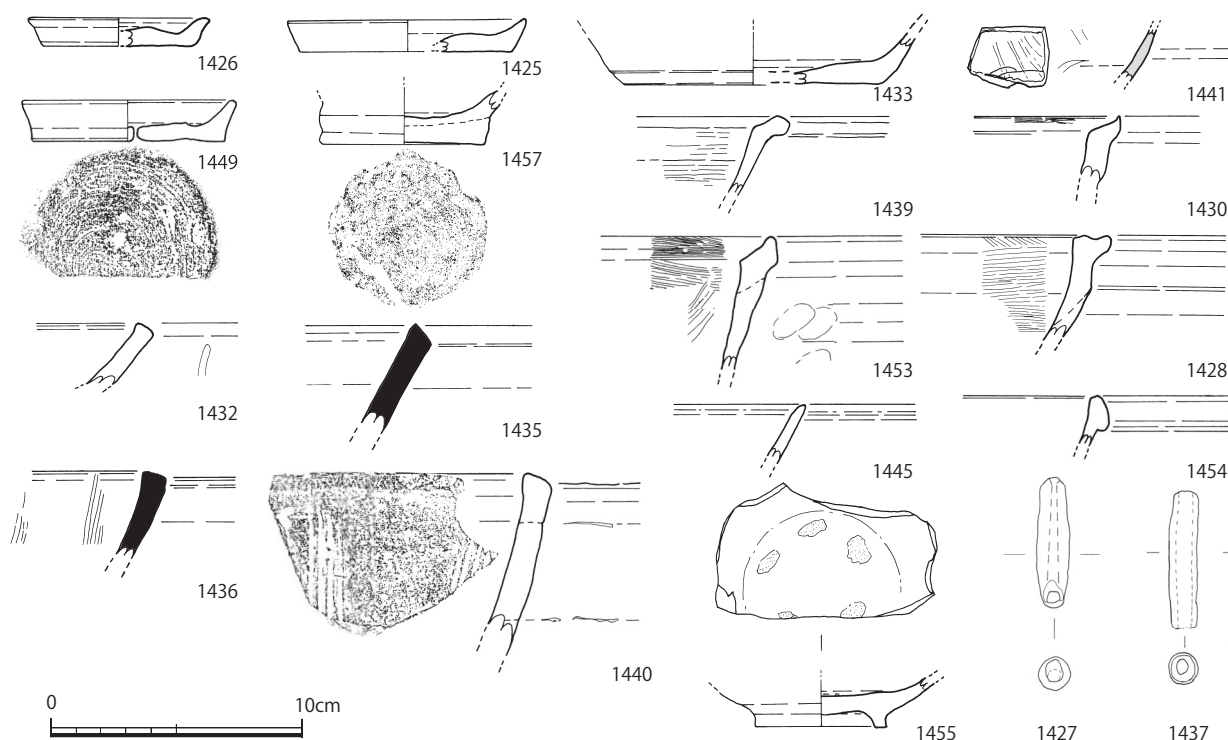
(下層出土遺物)

1444・1447は土師質土器小皿で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部はすばまる。1451・1456・1458は土師質土器坏である。斜上方に開く。1451は口縁部端部がすばまる。1448は円盤状高台をなす。坏か。

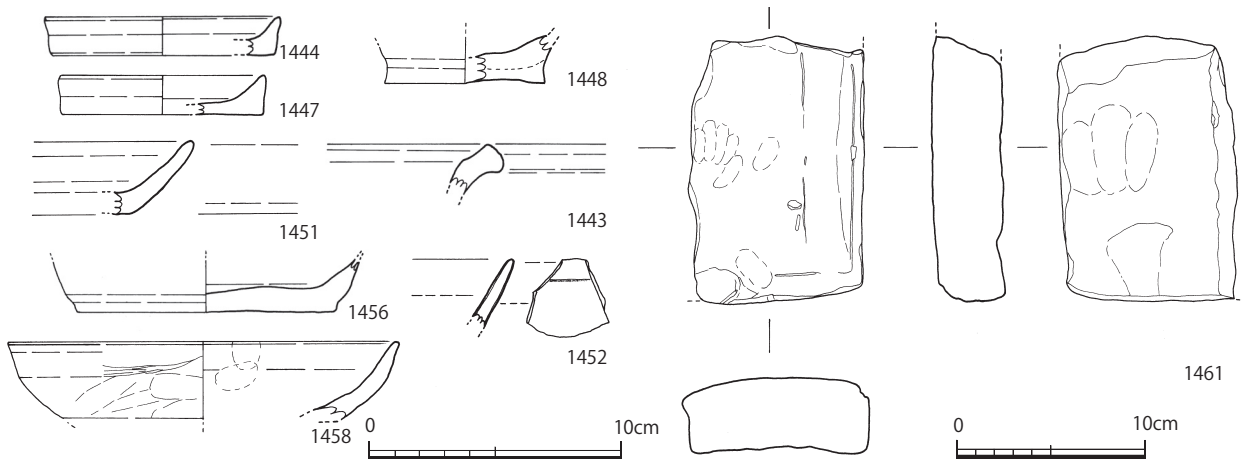
1443は瓦質土器鍋で、口縁部端部はまるみをおびる。外面底部は不定方向のナデ。1452は龍泉窯系青磁碗である。1461は埴か。片側側面は面取りを施す。胎土は結晶片岩、石英、角閃石を含み、色調は淡橙白色をおびる。



第216図 SD001 遺構実測図 (1/100・1/80)



第217図 SD001 (上・中層) 出土遺物実測図 (1/3)



第 218 図 SD001 (下層) 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

SD500 (第 219 ~ 221 図)

Ⅲ区の中央から北側で検出し、おおむね南北に伸びる。溝の南部分はコーナーをもち西側へと延びる。溝の北部分は SD555 と接続するものとみられる。溝は SK520・SK525 など土坑、ピットに切られる。溝の幅は約 3 m、南北部分の長さは約 30 m を測り、深さは 0.4 ~ 0.6 m である。溝の壁面はゆるやかに立ち上がる。溝の土層は、暗灰茶色土 (第 2 層) と暗灰褐色土 (第 3 層) に分層ができ、掘り返しの痕跡が認められる (第 219 図を参照)。いずれの層においても多量の土器、陶磁器、石類が出土したが、とくに溝の北側部分にそのまとまりがみられた。下層は粘性をおび滞水していたものとみられる。溝の形状・土層から屋敷に伴う区画もしくは灌漑水路と考えられる。

SD500 では、縄文土器、土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、常滑焼、瀬戸焼、備前焼、中国産白磁・青磁が出土している。遺物は、暗灰茶色土を上層、暗灰褐色土を下層として取上げた。以下、各層ごとにみていく。

第 220・221 図は SD500 上層から出土した遺物である。1590 は縄文土器深鉢の口縁部である。1620 は土師器壺で、胴部は球形を呈する。内外面はヘラミガキを施しており、古墳時代の所産であろう。土師質土器小皿は、口縁部が斜上方に開くもの (1558・1598・1575) と、口縁部が垂直気味に立ち上がるもの (1566・1596・1604) がみられる。土師質土器杯は、器高が 2.6cm 前後で低いもの (1593・1607) と、器高が 4cm で高いもの (1600) がみられる。1564・1595 は瓦器碗である。1595 は在地産か。1564 は和泉型瓦器であろう。

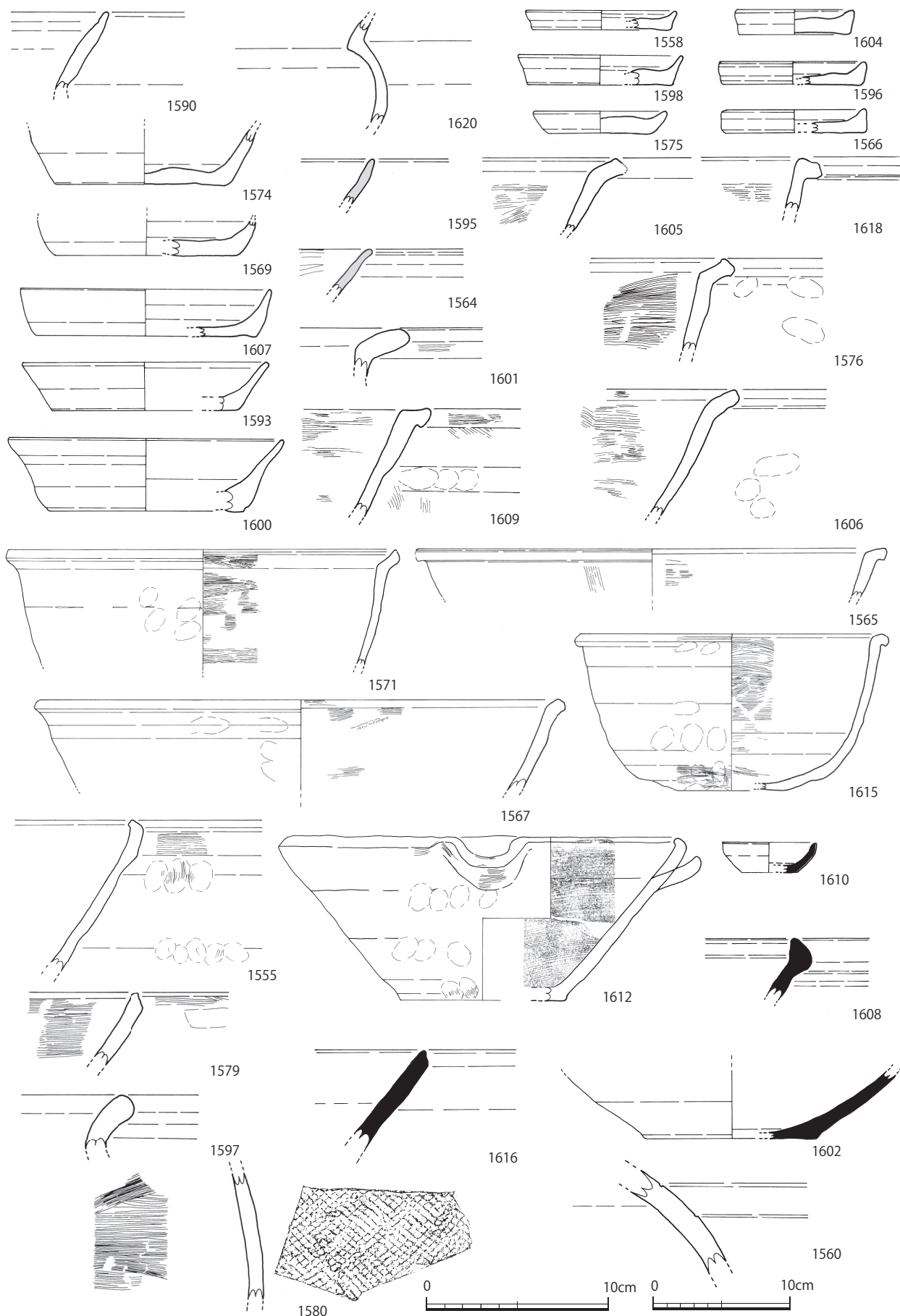
1601 は土師質土器鍋で、体部に比して口縁部は肥厚する。1565・1567・1571・1576・1605・1609・1615 は土師質・瓦質土器鍋で、口縁部が短く外反して端部は上方に立ち上がる。おおむね外面体部はユビオサエ・ナデ、内面体部は横方向のハケメ調整を施す。1615 は土師質土器鍋で、復元口径 22.1cm を測る。体部下半はまるみをおび丸底である。1618 は土師質土器釜で、口縁部直下に断面方形の鐙が付く。1555・1579・1612 は瓦質土器鉢である。1612 は片口が付く。内面体部は横方向の緻密なハケメ調整を施す。

1602・1608・1616 は東播系須恵器鉢である。1610 は須恵質土器の皿で、体部が内彎気味に開く。1560・1580・1597 は瓦質土器甕である。1580 の胴部外面に格子目叩きを施す。1584 は瀬戸焼卸皿である。見込は卸し目、外面底部は糸切り離しが残る。1578・1589 は常滑焼甕である。1585 は白磁碗である。1583 は龍泉窯系青磁碗で、外面体部に鎬蓮弁を施す。

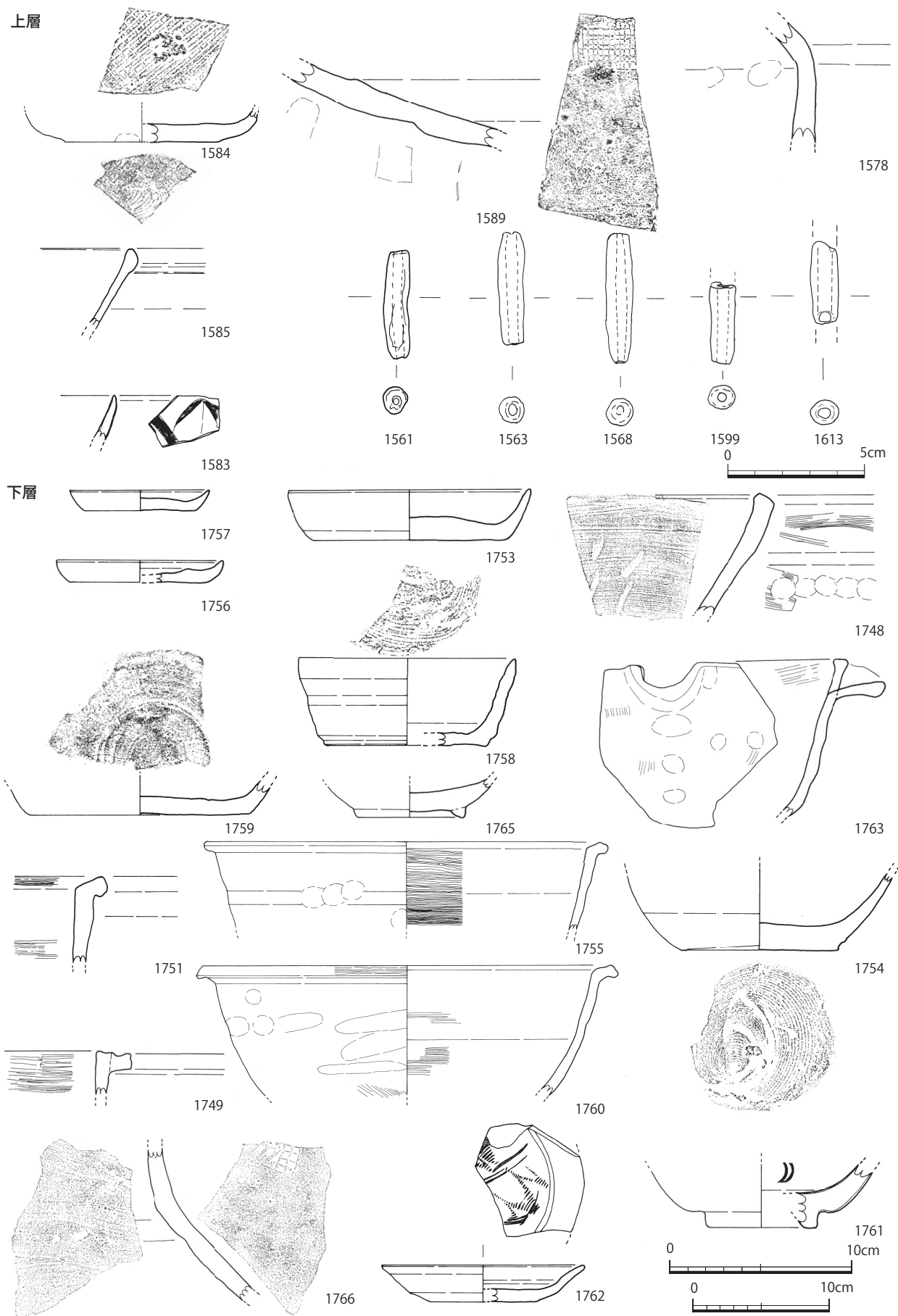
第 221 図は SD500 下層より出土した遺物である。1753・1758・1759 は土師質土器杯である。1759 は見込にロクロ痕が残る。1758 は器高が高く深い体部を有する。1765 は土師質土器碗である。1751・1755・1760 は瓦質土器鍋で、口縁部が短く外反する。1749 は土師質土器釜で、口縁部直下に鐙が付く。1763 は瓦質土器鉢で、体部は直線的に伸び片口が付く。1754 は備前焼の碗か。外面底部は糸切り離しが残る。色調は暗橙茶褐色を呈する。1766 は常滑焼甕である。1762 は同安窯系青磁皿である。見込に幾何学文様を施す。1761 は龍泉窯系青磁碗で、外面は無文、内面は幾何学文を施す。



第 219 図 SD500 遺構実測図 (1/80 • 1/60 • 1/40)



第 220 図 SD500 出土遺物実測図① (1/3・1/4)

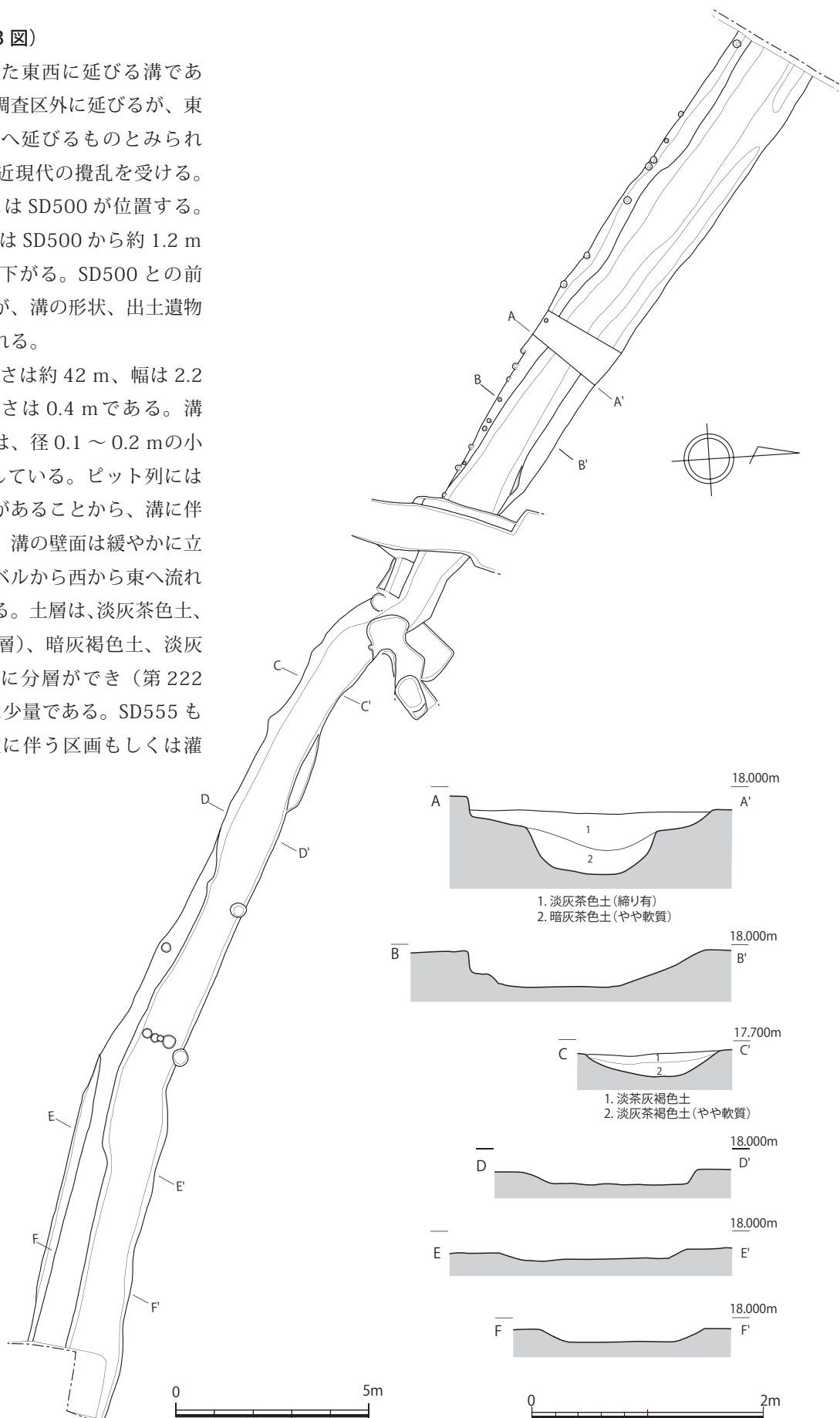


第 221 図 SD500 出土遺物実測図② (1/2・1/3・1/4)

SD555 (第 222・223 図)

Ⅱ区南側で検出した東西に延びる溝である。溝の東西両端は調査区外に延びるが、東側は隣接する丹生川へ延びるものとみられる。溝の中央付近は近現代の攪乱を受ける。SD555 の南東方向には SD500 が位置する。SD555 の検出レベルは SD500 から約 1.2 m 低く、地形的に一段下がる。SD500 との前後関係は不明であるが、溝の形状、出土遺物から同時期と考えられる。

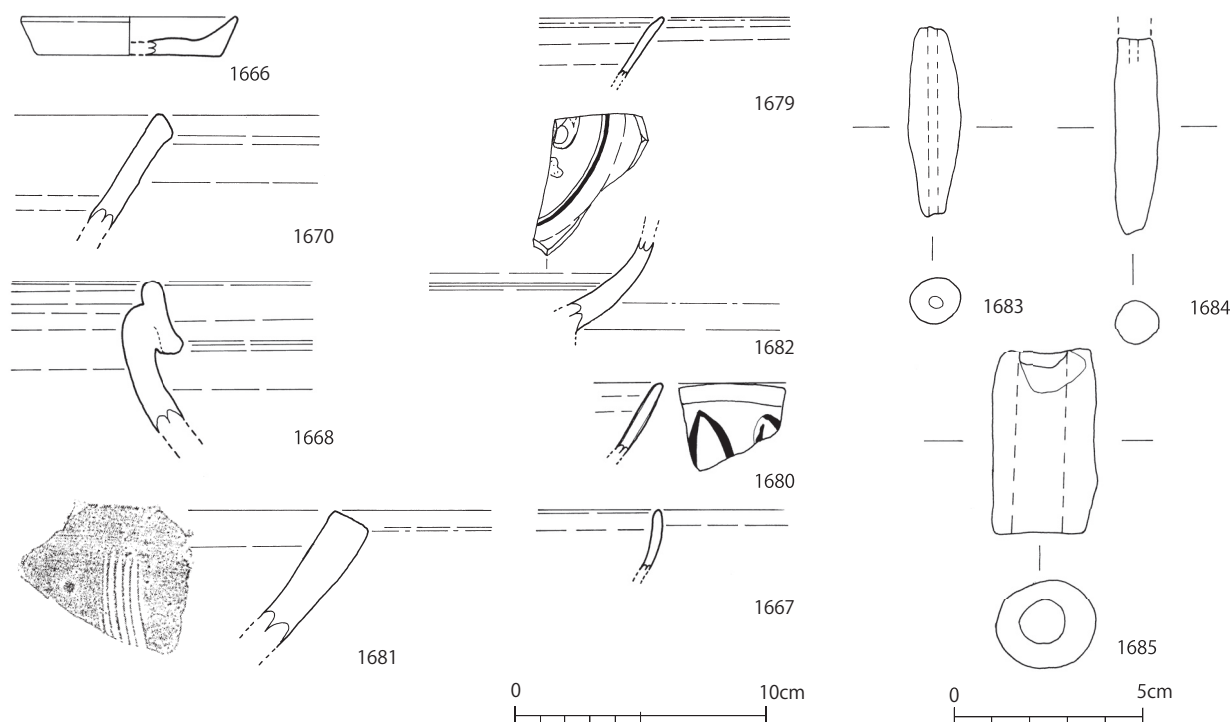
SD555 の東西の長さは約 42 m、幅は 2.2 ～ 1.5 m を測り、深さは 0.4 m である。溝の南西上端ラインでは、径 0.1 ～ 0.2 m の小ピットを 19 基検出している。ピット列には柱根が遺存する箇所があることから、溝に伴う柵列と考えられる。溝の壁面は緩やかに立ち上がる。床面のレベルから西から東へ流れていたものとみられる。土層は、淡灰茶色土、淡茶灰褐色土（第 1 層）、暗灰褐色土、淡灰茶褐色土（第 2 層）に分層ができ（第 222 図）、各層とも遺物は少量である。SD555 も SD500 と同様、屋敷に伴う区画もしくは灌漑水路と考えられる。



第 222 図 SD555 遺構実測図 (1/150・1/40)

SD555 では土師質土器、瓦質土器、常滑焼、備前焼、中国産の白磁・青磁・黒釉陶器、土錘が出土している（第223図）。

1666 は土師質土器小皿である。1670 は瓦質土器鉢で、口縁部は玉縁状に肥厚する。1668 は常滑焼甕で、口縁部がN字状を呈する。1681 は備前焼擂鉢で、断面方形をなす。体部内面に6条単位の擂目を施す。1679 は口禿げの白磁皿である。1682 は白磁碗で、見込に界線を施す。1680 は龍泉窯系青磁碗で、外面体部に蓮弁を施す。1667 は黒釉陶器の天目碗である。体部は内彎気味に開く。建窯産と考えられる。1683～1685 は土師質土器の土錘である。1684 は穿孔が認められないもので、未製品であろう。1685 は大型品で、最大長4.8cm、最大幅2.6cmを測る。

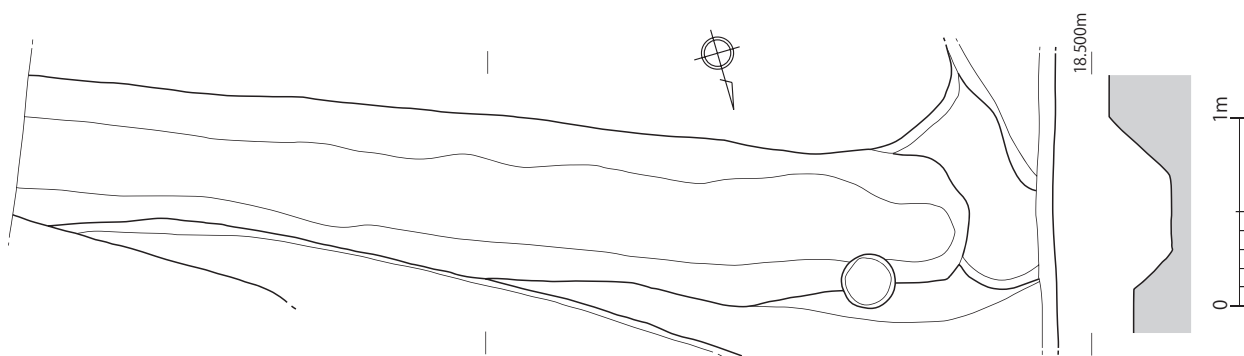


第223図 SD555 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

SD875（第224図）

SD875 はⅢ区のほぼ中央付近に検出した溝で、SD500の南側0.3mに隣接する。SD500の西に屈曲する部分と並列し、東西に延びる。溝の西側は調査区外に延びている。

SD875の東西の長さは $5.6\text{ m} + \alpha$ 、幅は1mを測る。深さは0.7m測る。溝の壁面の立ち上がりはやや強く、床面はほぼ平坦である。溝の埋土は暗灰茶色土の単一層であり、出土遺物はみられなかった。時期は不明であるが、SD875とSD500の軸がほぼ対応することから関連性が示唆される。



第224図 SD875 遺構実測図 (1/40)

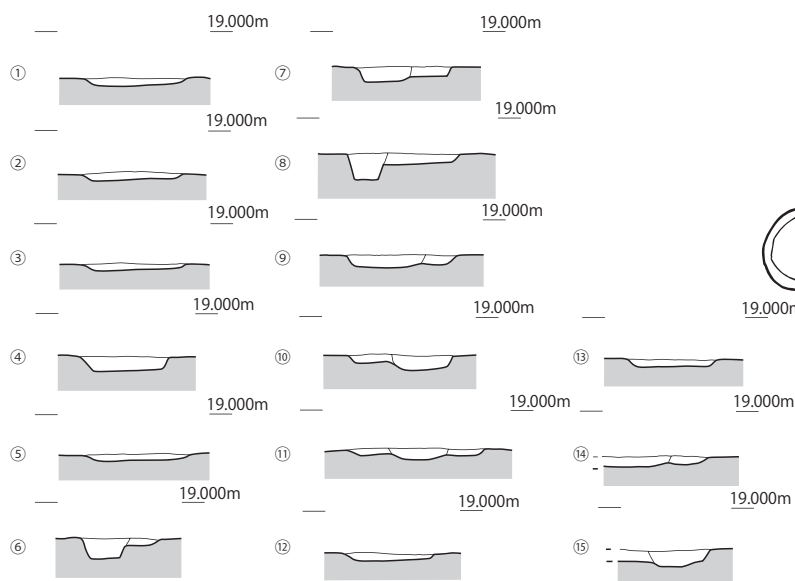
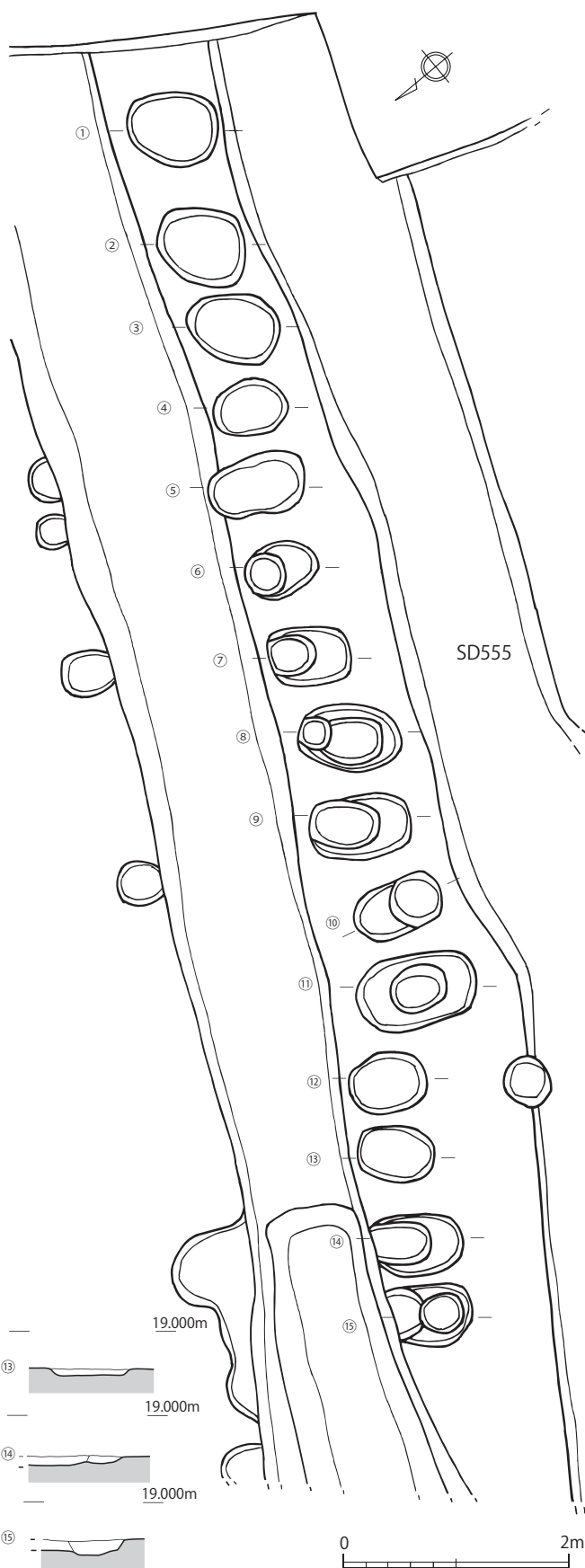
SF1000 (第225図)

SF1000はⅡ区南側で検出したもので、平面プランから道路状遺構と考えられるものである。SF1000は東西に直線に連なる土坑列を有し、SD555の軸とほぼ並列している。SF1000の東側は調査区外に延びるものとみられ、西側は近代攪乱溝により削平を受ける。検出した土坑列の長さは約12mを測る。東西に連続する土坑群は15列を検出している。土坑の長軸方位から1～9・12～15列、10・11列に分けることが可能であるが、長軸方位の違いはSD555の位置関係を意識したものと考えられる。

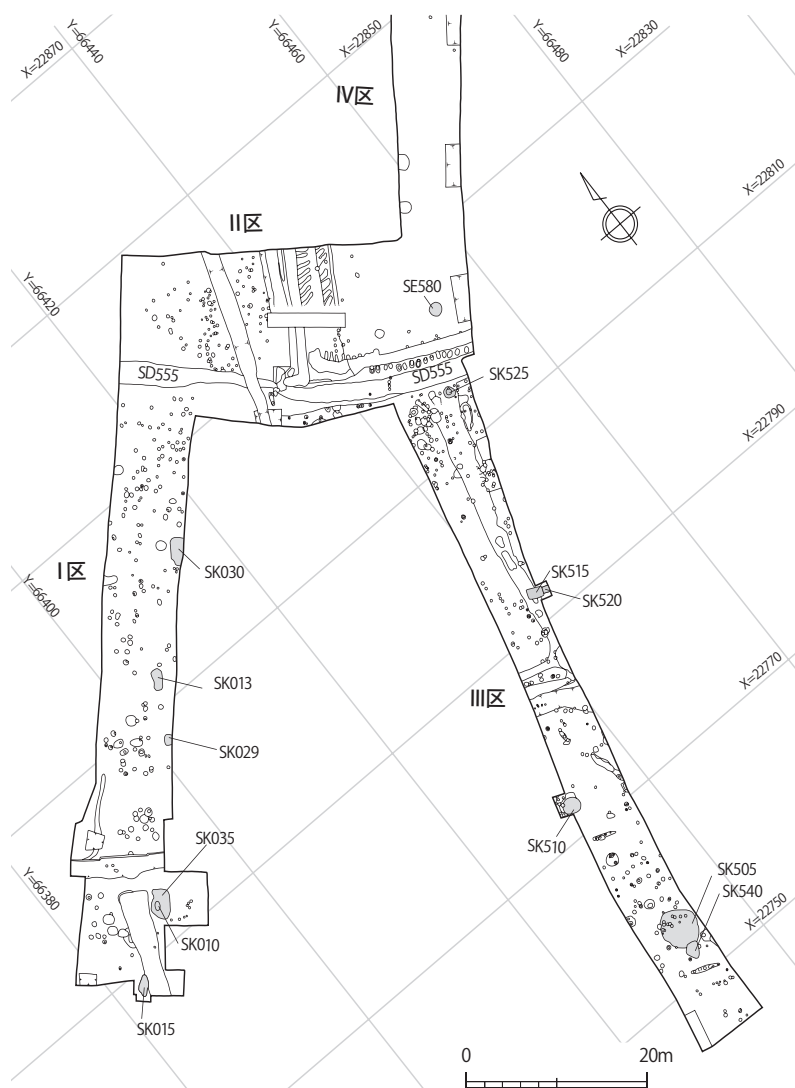
連続する土坑の形状は円形、楕円形を呈する。各土坑の長さは0.6～0.8m、幅0.6～0.9mを測る。深さは後世による削平が著しく、0.1～0.2mを測る。土坑の壁面は斜めに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。

土坑の周囲および、各土坑の上面には硬化が認められた。SF1000の特徴として、土坑列が直線的に連続すること、硬化面の存在などが挙げることができる。各土坑の上面に硬化がみられるのは、なんらかの固い構造物がはめ込まれたものと想定される。

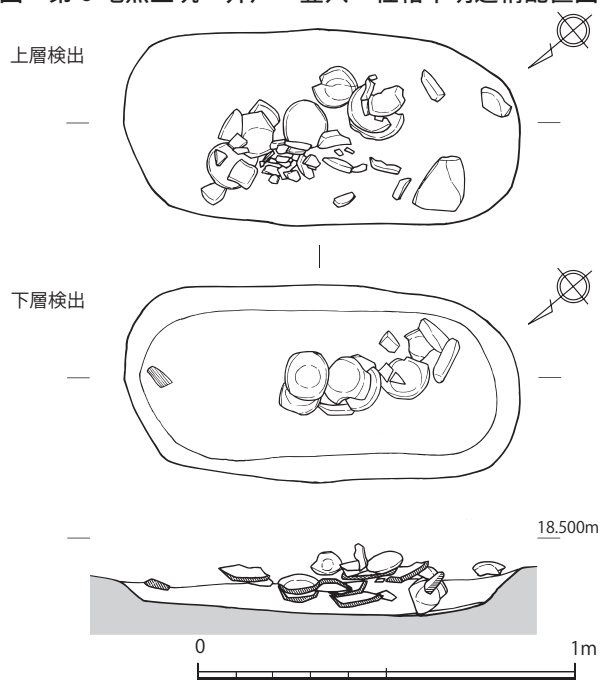
以上からSF1000は、道路面とそれに伴う下部構造をもつものと考えられる。遺物は道路面、各土坑とも確認できなかった。時期は不明であるが、SD555との関連を考慮すると中世の所産と推定される。



第225図 SF1000遺構実測図(1/80)



第226図 第6地点土坑・井戸・竪穴・性格不明遺構配置図(1/800)



第227図 SK010 遺構実測図(1/20)

ハ. 土坑

第6地点ではⅠ・Ⅲ区を中心に中世の土坑が12基検出でき、時期は14～16世紀を中心とする。土坑の位置は、Ⅰ区が6基、Ⅲ区ではSD500・SD874の南側に3基、SD500を切るもの3基を確認している(第226図)。SK510は、約500枚をかぞえる個体の土師質土器小皿・坏を廃棄した土坑であり、出土量・性格についてとくに注目されるものである。以下、Ⅰ・Ⅲ区の順で各土坑の詳細について触れることにする。

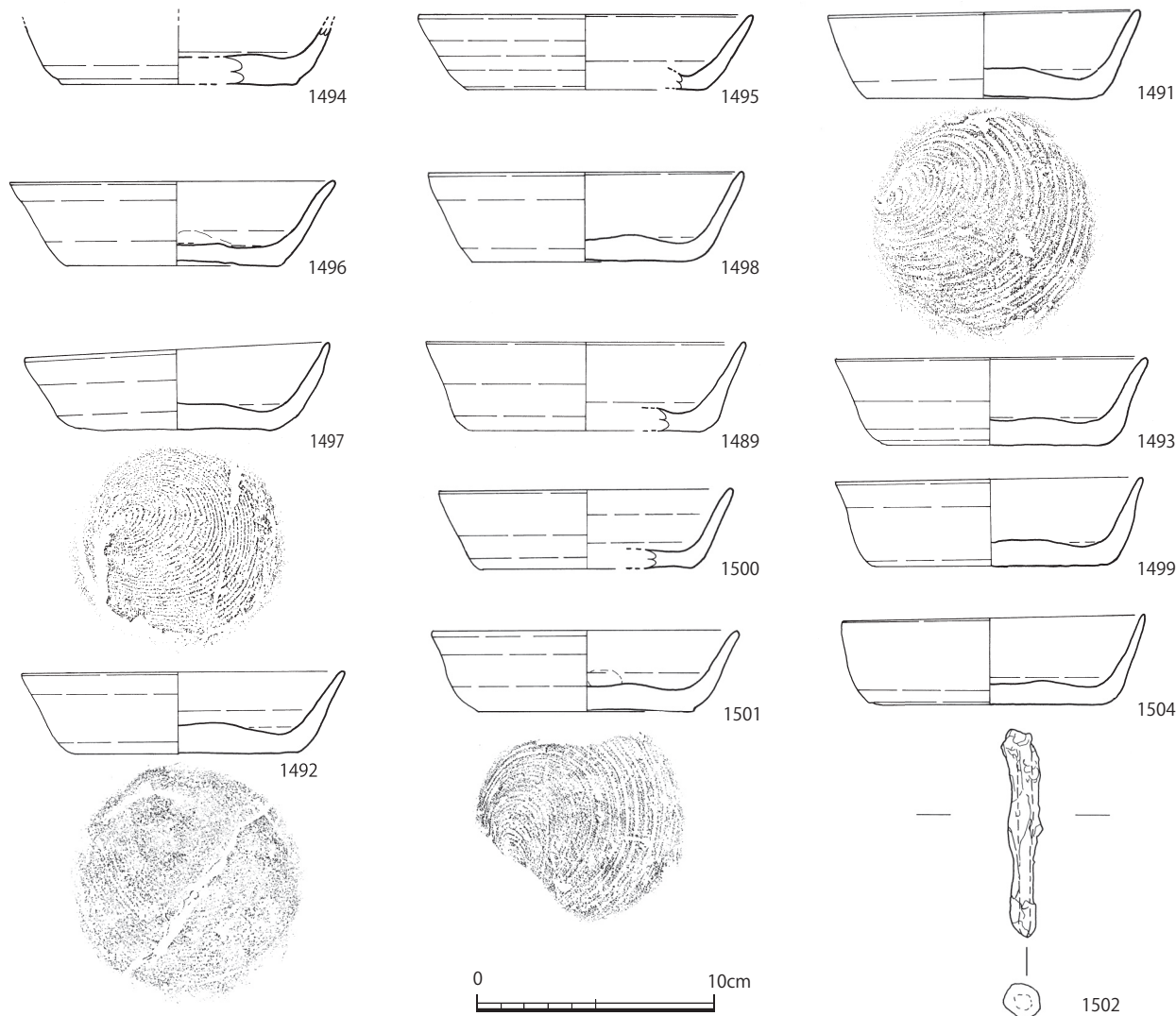
SK010 (第227・228図)

SK010はⅠ区南東で検出したもので、後述するSK035を切る土坑である。

SK010は長軸1.05m、短軸0.55mを測り、平面は楕円形プランを呈する。土坑上面は後世の削平を受けており、深さ0.1mを測る。土坑の壁面は緩やかに立ち上がる。土坑の床面はほぼ平坦であるが、中央から南側に向かって窪んでいる。埋土は淡茶褐色土の単一層である。土坑のほぼ中央付近に土師質土器坏を中心にまとまりをなして、遺構上面からほぼ地山直上にわたって出土している。土器は幾枚かを重ね、土坑の長軸に沿って配している。土器は、口縁部を上にしたものや、斜め方向のものが大半を占める。うつ伏せにしたものは1点確認したのみである。なお土坑北側で長さ3cmの骨片を遺構上面で確認しているが、遺存状態がわるく不明である。

土坑では土器のほか、骨片、鉄釘が出土していることから土壙墓の可能性が考えられるが、土層観察で木棺墓の痕跡が認められなかった。土坑の形状・土器の出土状況から土壙墓とは考えにくく、廃棄土坑として捉えておく。

第228図はSK010出土遺物である。土師質土器坏、鉄釘が出土している。前述した骨片は細片のため図示しえなかつ



第 228 図 SK010 出土遺物実測図 (1/3)

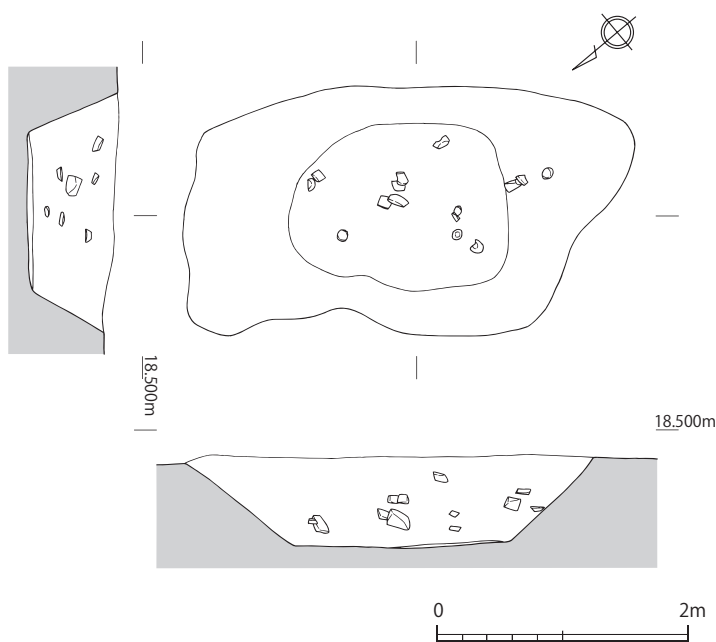
た。土師質土器杯の底部切り離しは糸切り離しである。

土師質土器杯は復元口径をのぞくと、口径 12.6～12.9cm、器高は 3.1～3.7cm であり、おおむね深い体部を有する。杯の器形は底部から斜上方に開き、口縁部端部はすばまる。内面底部はナデにより凹むものが多い。

1502 の鉄釘は現存長 5.9cm を測り、上端は欠損する。

SK035 (第 229・230 図)

SK035 は I 区南東で検出したもので、前述の SK010 に切られる土坑である。調査当初は土坑プランの一部が調査区外に延びて不明であった。状況確認のため周辺を拡張し、



第 229 図 SK035 遺構実測図 (1/60)

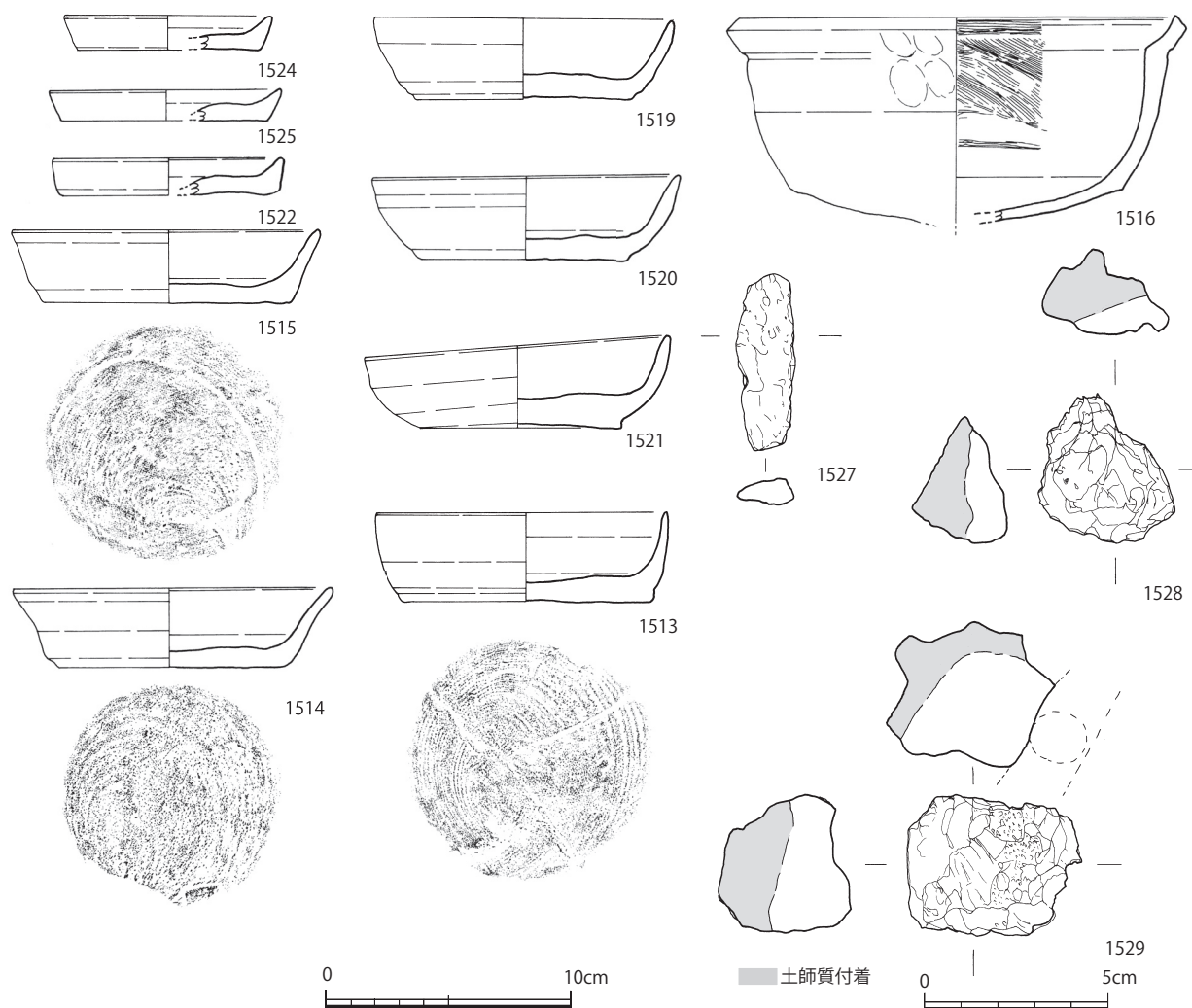
土坑プランの確認、掘下げを行った。

SK035 は長軸 3.6 m、短軸 1.9 m、深さ 0.9 m を測り、平面が楕円形プランを呈する大型土坑である。土坑の壁面の立ち上がりは強く、床面は平坦である。SK010 は SK035 の南西部分で確認している。遺構の埋土は、上層から第 1 層（暗灰褐色粘質土、層厚 0.3 m）、第 2 層（暗灰黄褐色粘質土、層厚 0.4 m）、第 3 層（暗黄褐色粘質土、層厚 0.2 m）の 3 層に分層できる。とくに第 1・2 層に遺物の出土が多く、第 1 層では拳大の礫が多く含んでいる。下層にあたる第 3 層は遺物の出土が少なく、灰色のブロック土が多く混じる。土坑の形状から、廃棄土坑と考えられる。

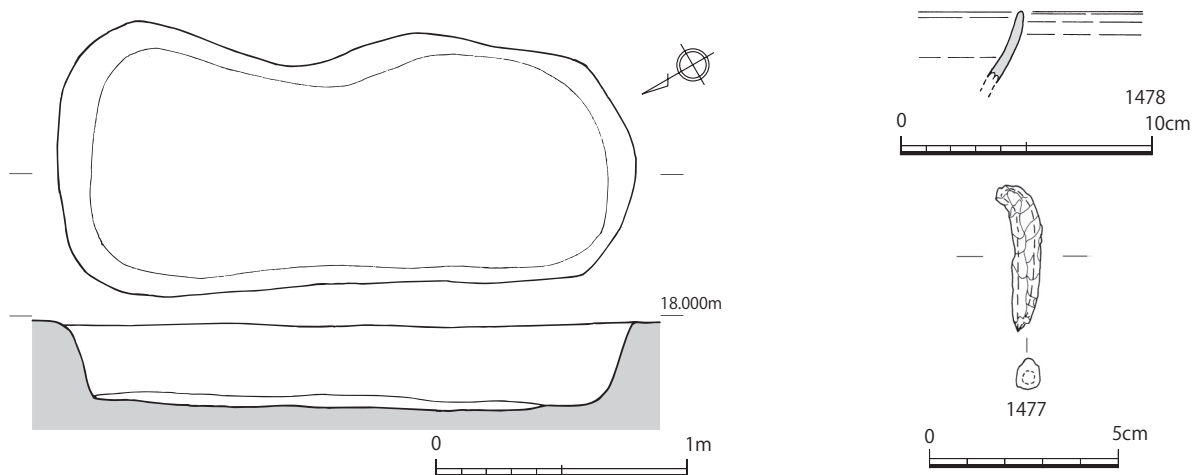
第 230 図は SK035 出土遺物で、土師質土器小皿・坏、瓦質土器鍋などが出土している。土師質土器小皿・坏とも底部切り離しは糸切り離しである。

1522・1524・1525 は土師質土器小皿である。1522 は底部から垂直気味に立ち上がる。1513～1515・1519～1521 は土師質土器坏である。復元口径の坏をのぞくと、口径 12.2～12.5cm、器高 2.9～3.8cm である。おおむね底部から斜上方に開く器形であるが、1513 は垂直気味に立ち上がり、口縁部端部はすばまる。1515 の外面底部は糸切り未調整痕が認められる。

1516 は瓦質土器土鍋である。いわゆる鍋形態をなし、体部下半が屈曲するものである。復元口径 17.6cm を測り、小振りである。口縁部がくの字状に外反し、口唇部を上方に摘み上げる。口縁部内側に受部をつくる。口縁部外面端部は面取りを施す。調整は、外面がナデ・ユビオサエ、内面は緻密なハケメ調整を施す。外面全体に煤が付着する。1527 は鉄釘か。1528・1529 は土師質に鉄滓が付着する。用途は不明である。



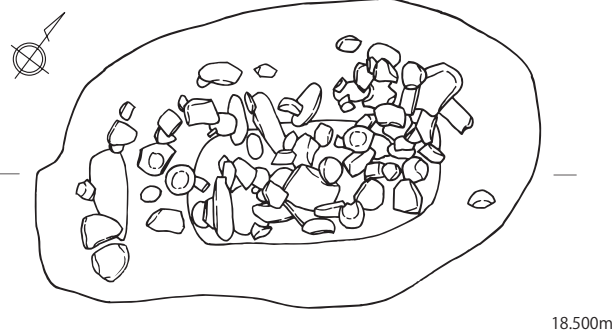
第 230 図 SK035 出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第 231 図 SK013 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/2・1/3)

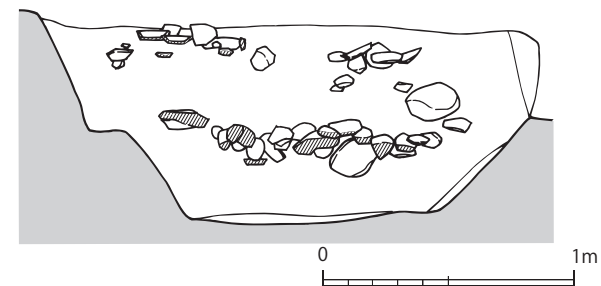
SK013 (第 231 図)

SK013 は I 区中央より南側で検出した土坑である。長軸 2.3 m、短軸 0.9 m、深さ 0.35 m を測り、平面は楕円形プランを呈する。土坑の壁面は立ち上がり強く、床面はほぼ平坦である。出土遺物は少なかった。1478 は瓦器碗で在地産か。1477 は鉄釘である。上・下端が欠損する。



SK015 (第 232・233 図)

SK015 は I 区南端で検出した土坑であり、SD001 を切る。調査当初は土坑プランの一部が調査区外に延びて不明であったため、周辺を拡張し掘下げを行った。土坑の規模は長軸 2 m、短軸 2.1 m、深さ 0.75 m を測り、平面は楕円形プランをなす。土坑の壁面の立ち上がりは強く、土坑南側は幅 0.1 m のテラスが一段付く。土坑の床面はほぼ平坦である。土坑の埋土は、上面から第 1 層（暗茶褐色粘質土、層厚 0.2 m）、第 2 層（淡茶褐色粘質土、層厚 0.5 m）に分層ができる。第 1 層および第 2 層の中位に 5 ～ 15cm 程度の礫および、土器・炭化物・焼土・灰白色粘質ブロック土を含んでいる。



第 232 図 SK015 遺構実測図 (1/30)

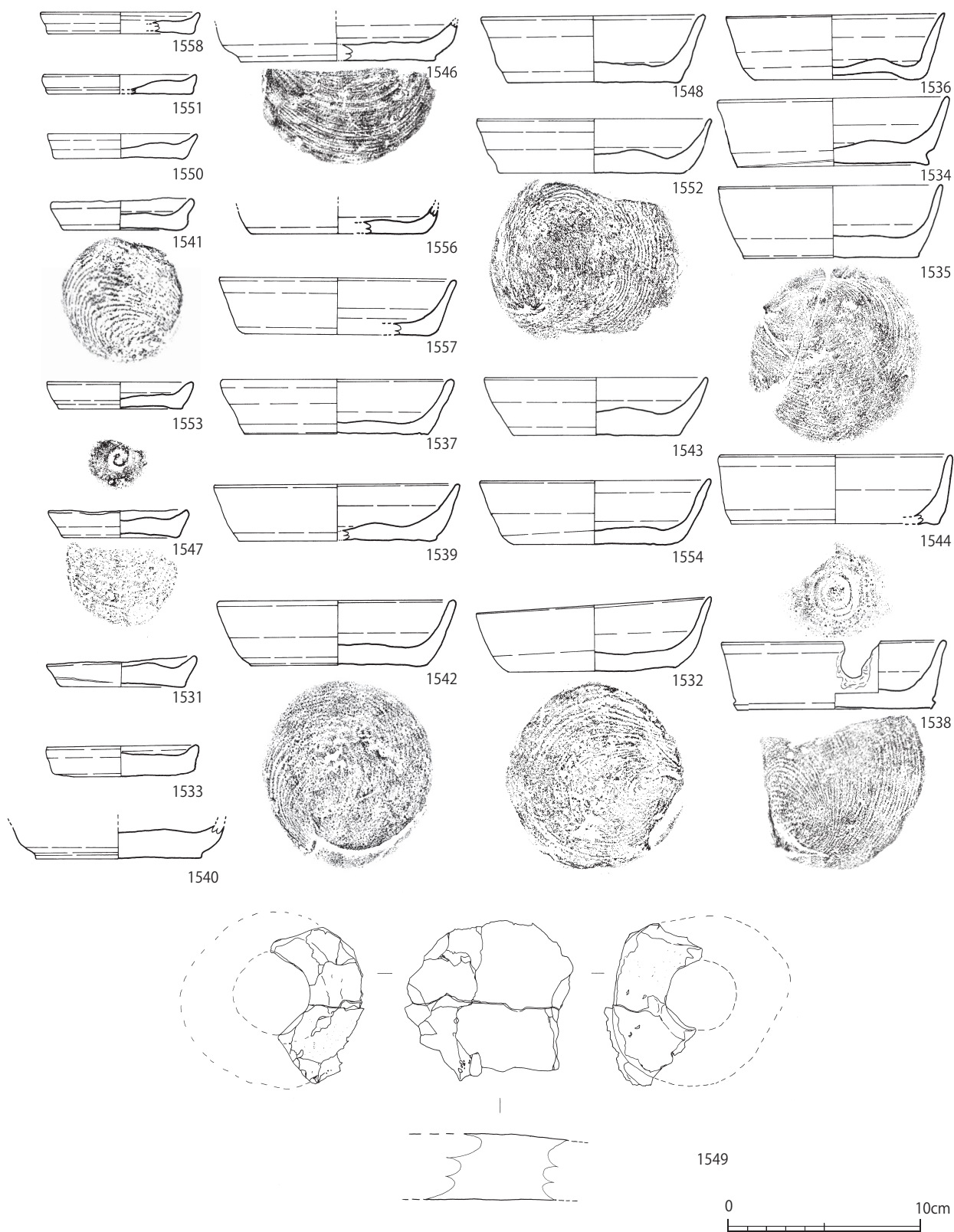
SK015 では土師質土器小皿・坏、ファイゴの羽口などが出土している（第 233 図）。1531・1533・1541・1547・1550・1551・1553・1558 は土師質土器小皿、その他は坏である。小皿・坏とも底部切り離しは糸切り離しである。

土師質土器小皿は、復元口径の小皿をのぞくと、口径 7.3 ～ 7.8cm、器高 0.9 ～ 1.5cm である。小皿の器形は、底部から斜上方に開くもの（1531・1541・1547・1550・1553・1558）と、底部から垂直気味に立ち上がるもの（1533・1551）がみられる。1531・1533・1547 の底部の器壁は厚い。1547 の内面底部にはロクロ痕が明瞭に残る。

土師質土器坏は、復元口径の坏をのぞくと、口径 11.3 ～ 12.0cm、器高 2.7 ～ 3.6cm である。坏の器形は、底部から斜上方に開き、口縁部端部がまるみをもつもの（1532・1537・1539・1542・1543・1548・

1552・1554)と体部が垂直気味に立ち上がり、口縁部端部がまるみをもつもの(1534～1536・1538・1544)がみられる。1538の内面底部はロクロ痕が明瞭に残る。

1549はフィゴの羽口で、円形を呈する。部分的に鉄滓が付着する。

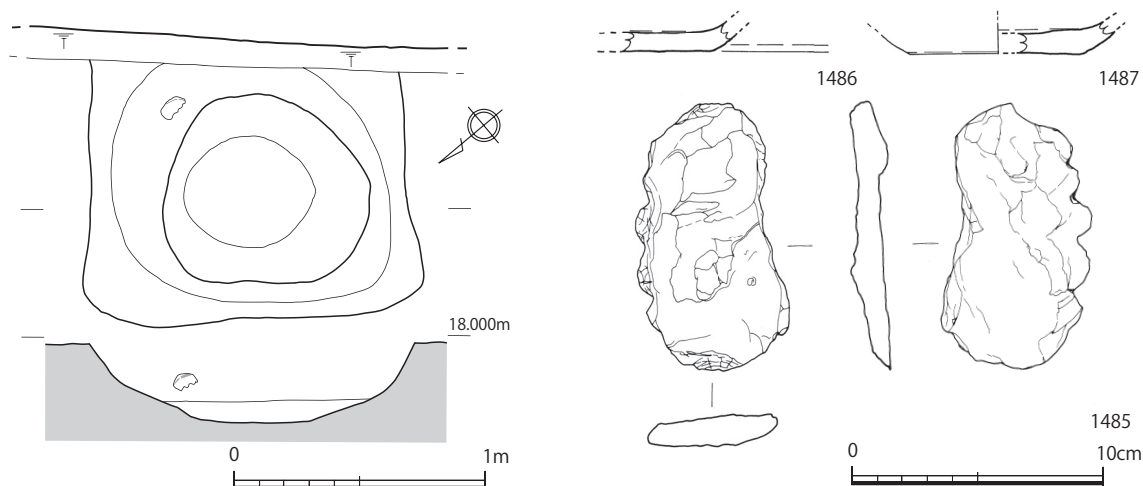


第233図 SK015 出土遺物実測図(1/3)

SK029 (第 234 図)

SK029 は I 区中央より南側で検出した土坑で、その東側は調査区外に延びる。平面は円形を呈し、幅 1.3 m、深さ 0.3 m を測る。土坑の断面形は半円形を呈し、床面は平坦である。土坑の中位ほどの深さから石製品(1485)が出土している。

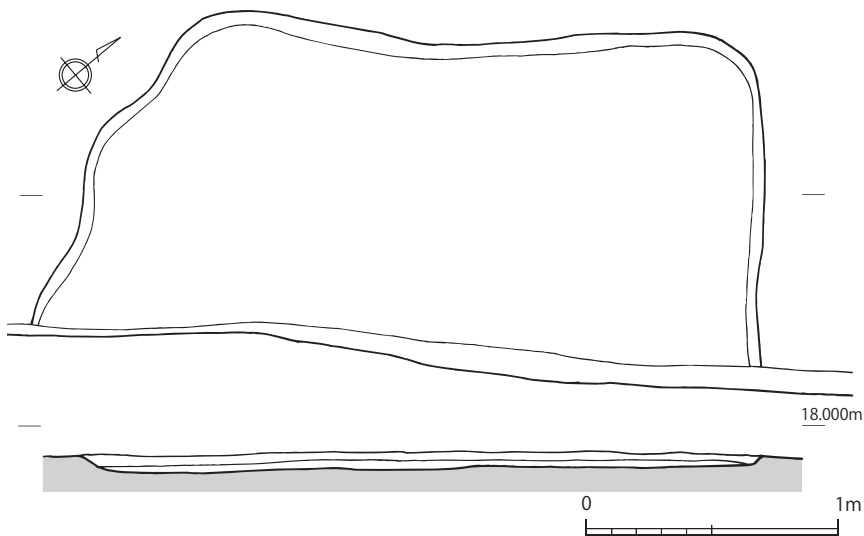
1486・1487 とともに土師質土器の底部である。1485 は結晶片岩製の石製品で、断面形は扁平をなす。片側側面には 4 ケ所の挟りが認められる。用途は不明である。長さ 10.5cm、幅 5cm、厚さ 1.3cm を測る。中世の所産か。



第 234 図 SK029 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK030 (第 235 図)

SK030 は I 区中央より北側で検出した土坑で、その東側は調査区外に延びる。土坑上面は後世の削平を受けている。平面はおおむね方形を呈し、長軸 2.7 m、短軸 1.2 m + α 、深さ 0.1 m である。土坑の壁面は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。竪穴住居の可能性も考えられたが、床面の精査では柱穴を確認することができず、土坑として把握した。出土遺物はみられなかった。

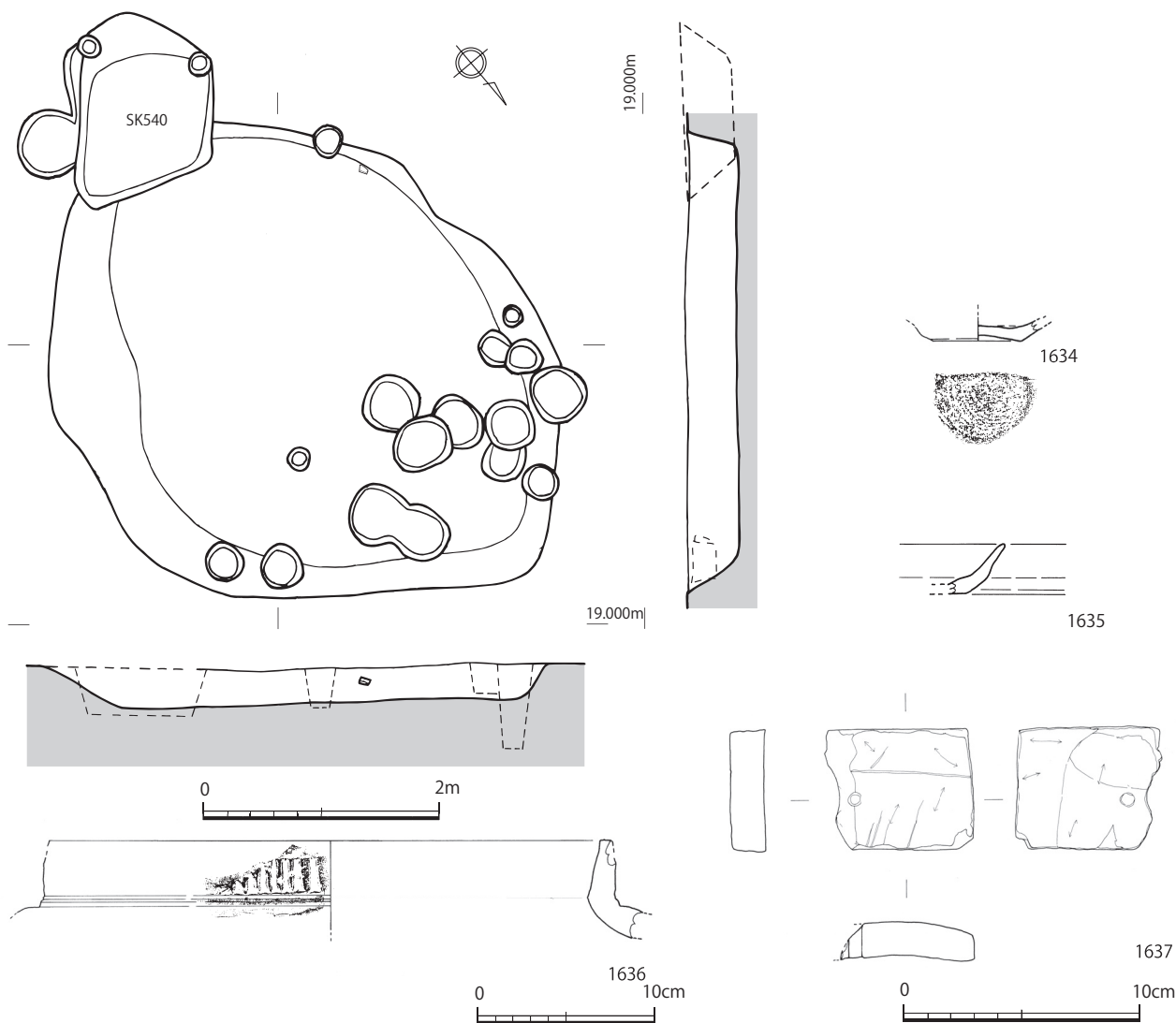


第 235 図 SK030 遺構実測図 (1/30)

SK505 (第 236 図)

SK505 は III 区南端で検出した竪穴状土坑で、後述する SK540 ほか多くのピットに切られる。平面はおおむね円形状を呈し、長軸 4.2 m、短軸 4 m、深さ 0.3 m を測る。土坑の壁面は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。土坑の埋土は暗灰褐色粘質土の単一層である。土師質土器、瓦質土器、石製品が少量出土している。

1634・1635 は土師質土器である。1635 は底部から大きく斜上方に開く。1636 は瓦質土器の風炉と考えられる。口縁部は垂直気味に立ち上がる。口縁部外面端部は一部欠損しているが、口縁部全体に直線のスタンプ文を連続に施す。色調は暗灰色を呈する。1637 は滑石製の石鍋片で再加工したものである。円形の穿孔を一ヶ所施す。携帯用の温石として利用したものであろう。

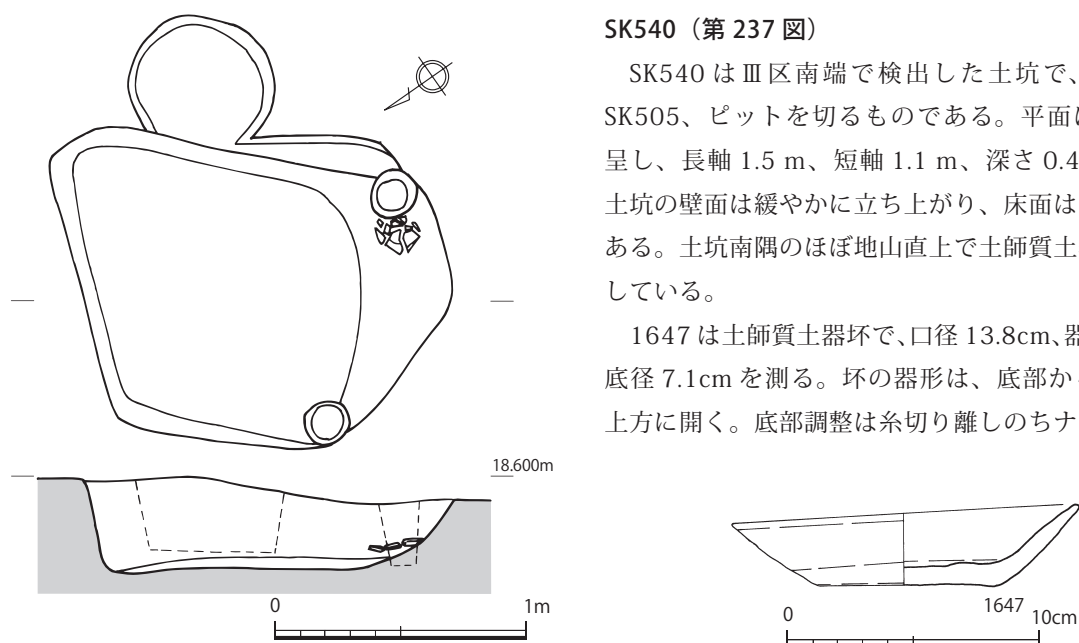


第 236 図 SK505 遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/3・1/4)

SK540 (第 237 図)

SK540 はⅢ区南端で検出した土坑で、前述した SK505、ピットを切るものである。平面は円形状を呈し、長軸 1.5 m、短軸 1.1 m、深さ 0.4 m を測る。土坑の壁面は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。土坑南隅のほぼ地山直上で土師質土器坏が出土している。

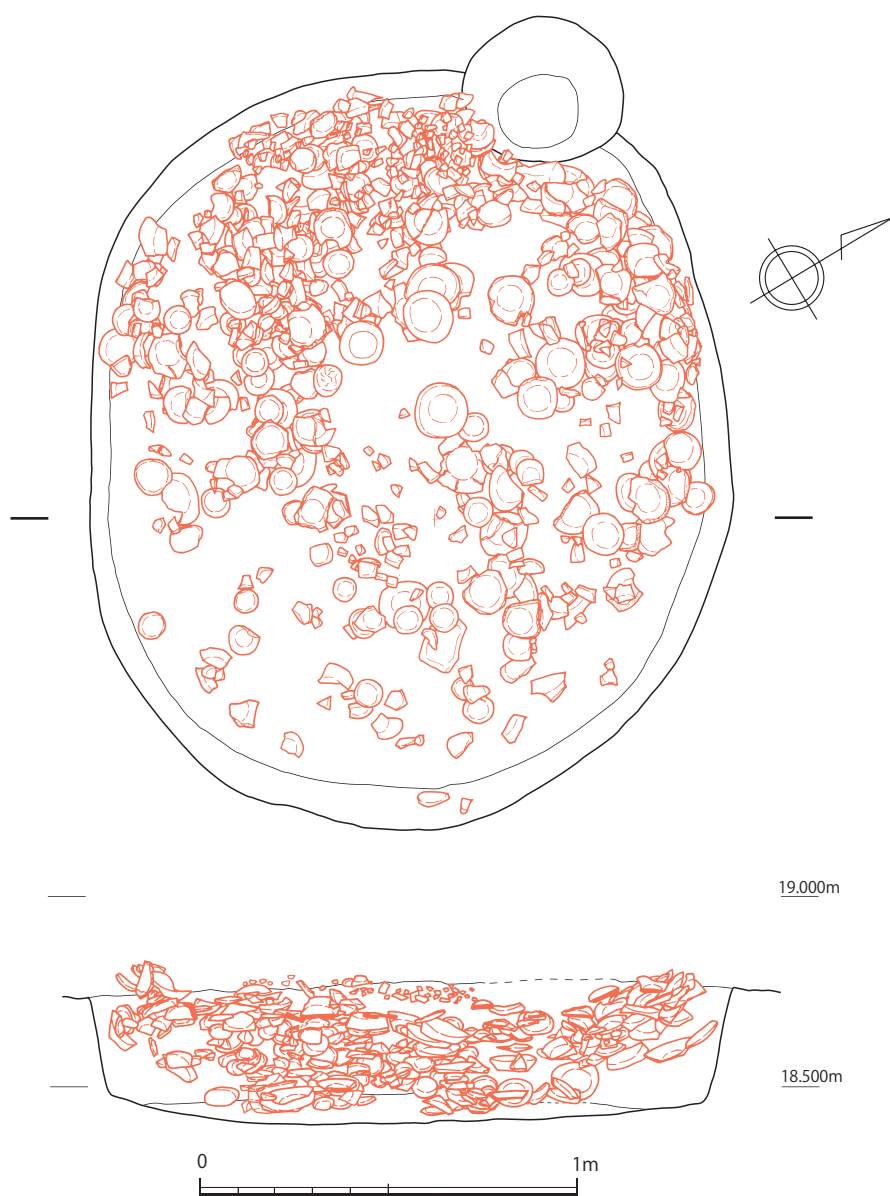
1647 は土師質土器坏で、口径 13.8cm、器高 2.8cm、底径 7.1cm を測る。坏の器形は、底部から大きく斜上方に開く。底部調整は糸切り離しのちナデである。



第 237 図 SK540 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)

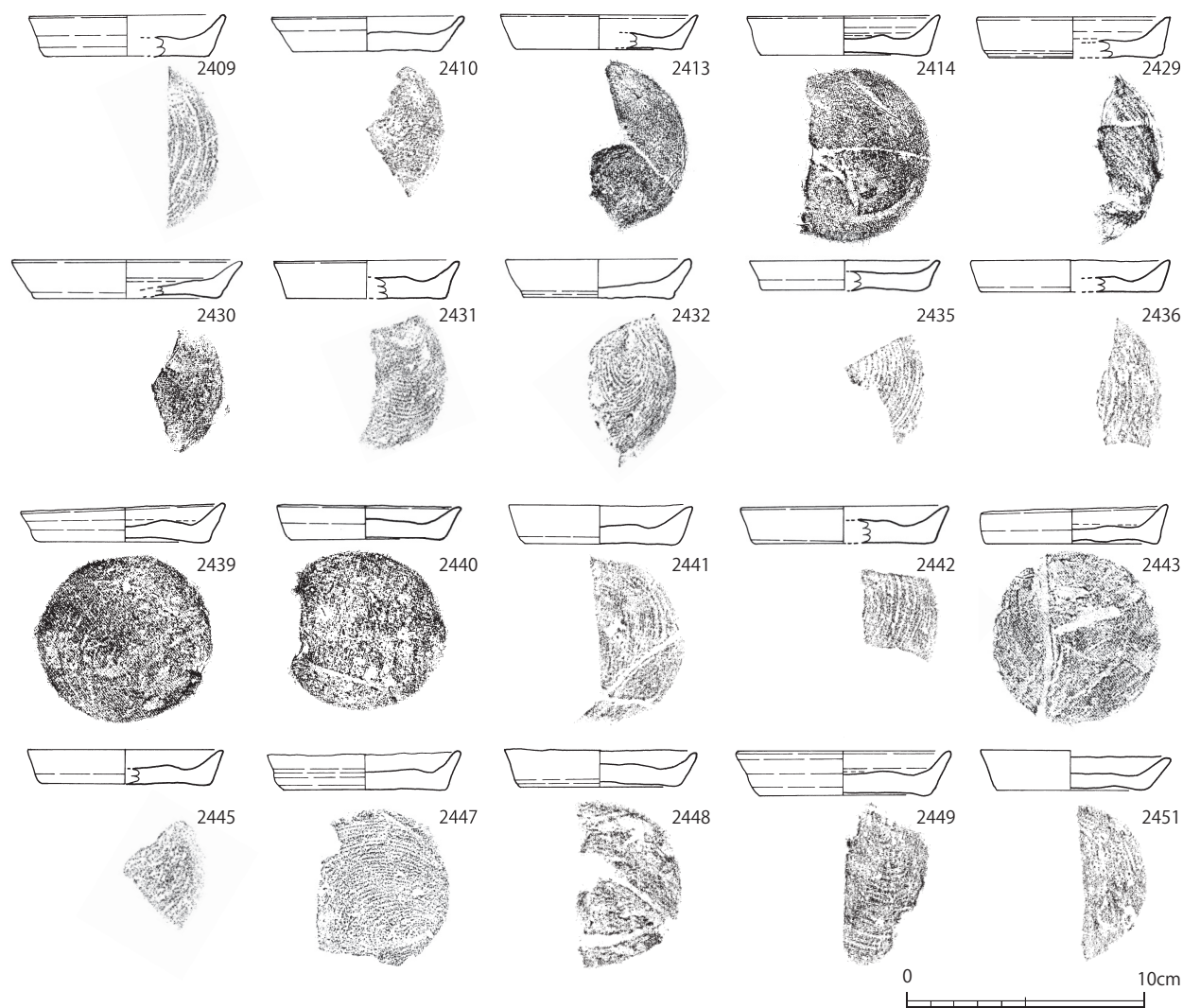
SK510(第 238 ～ 250 図)

遺構はⅢ区で検出した。切り合い関係は複数のピットと切り合いをもつ。平面プランは南北軸 2.1 m、東西軸 1.7 m、最大深 0.38 mを測る。床面はややレンズ状に中央付近周辺に比べ深くなる。埋土は断面観察の結果、1 層の単純層で、暗褐灰粘質土でしまり弱い。数ミリの小石と黄土ブロック土を多く含む。意図的に埋め戻された可能性が高い。またこの埋土は土壌分析を実施し、動物質のものやイネ属などの珪化組織片などが確認された。詳細は第 19 章に記してある。また埋土からは多量のかかわりけも出土している。実測図で掲載したものはすべてではない。破片なども含めると 500 個体は超えるものである。前述したように埋土は 1 層で、埋土に埋め戻された痕跡があるため、かわりけ廃棄後に時間をおかず、土坑は一気に埋められたと考えられる。かわりけは土坑床付近から検出面まで多量に含まれている。またかわりけの多くは土坑北側に集中しており、土坑南側は北側に比べると密度は低い。SK510 の遺構配置が、土坑の北側に集落の中心部があると考えられ、南は区画溝と丹生川があり、他の遺構はほとんど存在しない。よって SK510 は集落の南端に築かれたため、かわりけを土坑北側から廃棄した状況を示しているといえる。遺物 (第 239 ～ 250 図) は、かわりけが大半を占め、土師質土器皿 157 枚、坏 96 枚を数え、ほかに土師質のすり鉢底部片 1 点、鉄製品で釘が 1 本。土製品の管状土錘が 1 点

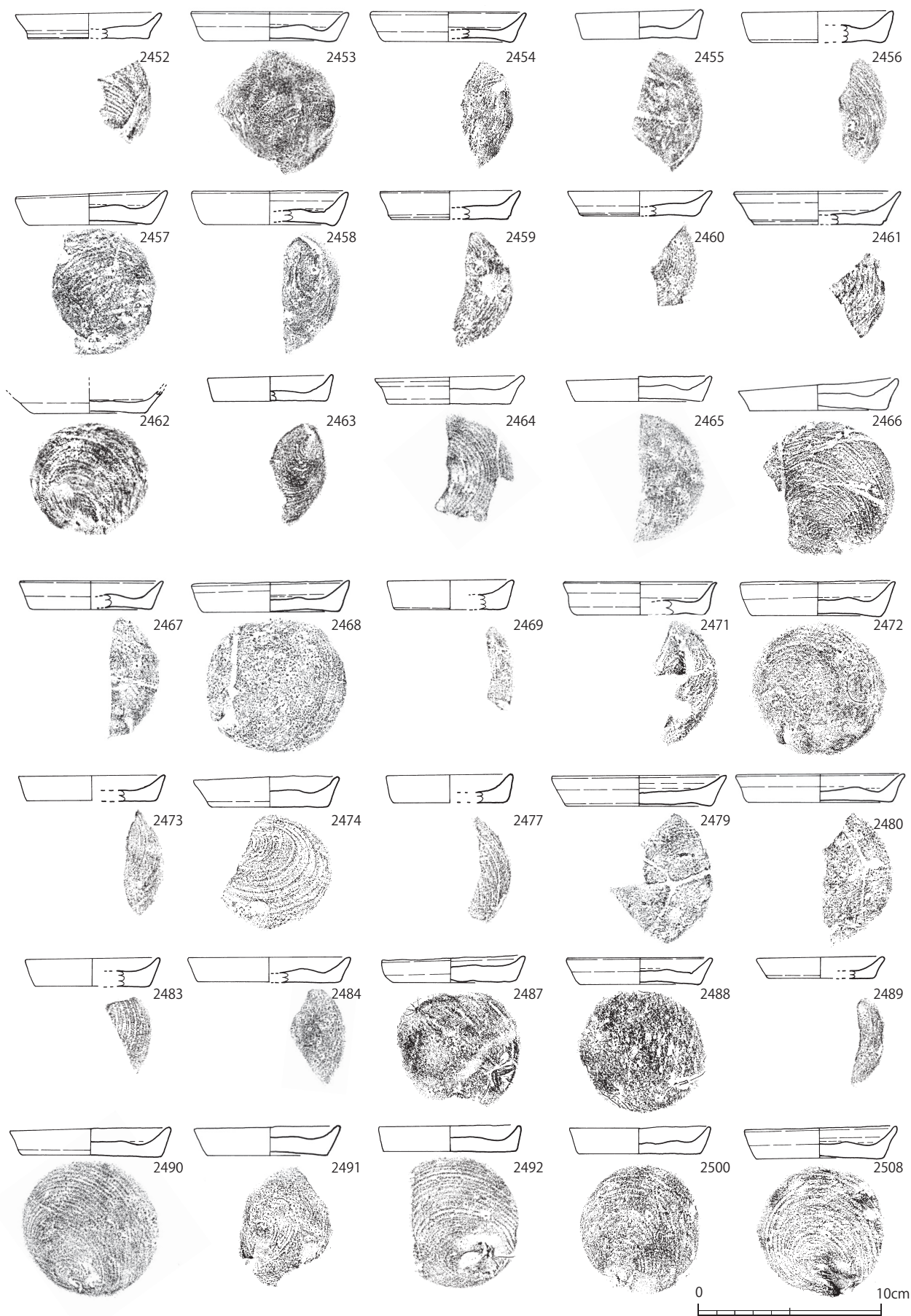


第 238 図 SK510 遺構実測図 (1/20)

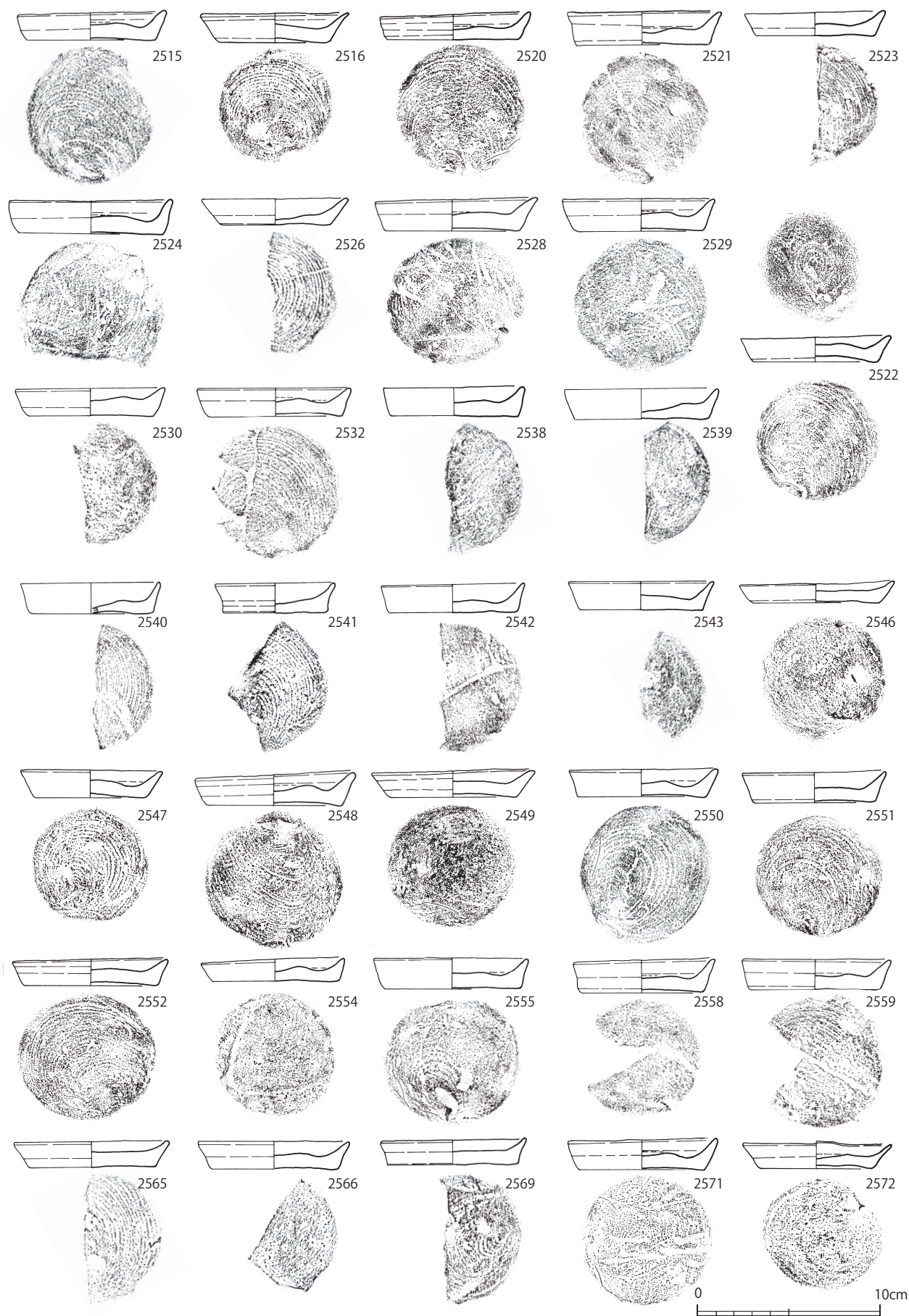
出土した。前述したがこの土坑に関しては、残存率 80% 以上のかわけを基本実測対象とし、そのほかは未実測、未掲載である。したがって、残存率 80 パーセント以下の未実測分を含めると 500 個体は超えるものである。皿の平均法量は口径 8.2cm、底径 6.9cm、器高 1.6cm である。外底部は回転糸切り離しで、大半は後ナデ調整がはいる。また外底部は上げ底になるものもある。胴部は底部からやや外反しながら直線的に延びるが、口縁端部をさらに外反させたり、若干内湾気味に仕上げるものもある。2462 に関しては坏の可能性もある。内底部は胴部との屈曲付近はナデ痕が強く残り、見込み中央付近は不定ナデを行ったりしている。器壁は底部が厚いものが多く、口縁端部にかけてすばまる。2522 は内底部中央に同心円状のナデ痕跡がみえる。坏は 96 枚を掲載した。その平均法量は口径 12.8cm、底径 8.9cm、器高 3.9cm を測る。外底部は回転糸切り離しで、のちナデ調整がはいるものが多い。外底部は 2553 や 2506 のように若干上げ底気味になるものがある。また胴部は底部からやや外反しながら延びるが、底部からシャープに胴部へ屈曲するものと丸みを帯びながら立ち上がるもの、2527・2619 のように底部から上方にのび外反するもの、2481・2498・2659 などのように屈曲外面をヘラ状工具で面取り状にするものなどがある。胴部は直線的に延びるものと丸みをおびるもの。口縁部外面にヨコナデ痕を強くするものなどがある。皿と同様に底部の器壁は厚く、内底部の胴部との屈曲部周辺はナデ痕を強くのこす。また内底部中央付近は不定方向ナデを強く残しているものが多い。その他の遺物は、2643 は土師質のすり鉢底部と思われる。外底部は回転糸切り痕跡をのこす。2426 は鉄製品で、鉄釘。2648 は土製品で管状土鍾である。



第 239 図 SK510 出土遺物実測図① (1/3)



第240図 SK510 出土遺物実測図② (1/3)



第 241 図 SK510 出土遺物実測図③ (1/3)